

---

# 偽りの王

ゆなり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偽りの王

### 【コード】

N0639K

### 【作者名】

ゆなり

### 【あらすじ】

帝国から人質として次期王である若君を要求され、その小国は若君を差し出す代わりに、姉の一の姫を若君と偽って送り出した。弟の振りをして帝国内で生き抜く身代わりとなった彼女の奮闘の物語です。

先頭から順に修正を行っています。修正している場所の境目は多少読みづらくなっております、ご迷惑をお掛けしております。

## 一 始まり

帝都の皇帝の御座おわす宮殿は、大陸中で最も壮麗な建造物といわれていた。

広大な敷地に皇帝の居住である宮を中心に、いくつもの建物が立ち並んでいる。

建物と建物の間には十分な距離が開き、庭師達によって整えられた庭園がその間に配され、建物の中を互いに直接見ることは出来ないようになっていた。

建物と建物を繋ぐ通路には石畳が敷かれ、それ以外には白玉砂利が敷き詰められている。朱塗りの柱に豪華な彫刻の施された雲肘木、軒の下に飾られている地垂木が、建物のもつ壮麗さを際立たせていた。

その建物群は妃達の住む後宮、政の行われる前宮、皇子等皇族の住む中宮で構成されている。

その中宮の最も端にあり皇帝の子息である第五皇子が賜っている紅扇宮こうせんきゅうに、二若ふたわかは忍び込んでいた。

その奥まった部屋の一室で二若ふたわかは目当ての物を発見した。

二若ふたわかは、やはり、という苦い想いを抱いた。

それは家臣の重大な裏切りの証拠だった。

二若ふたわかはその証拠を逆に利用し、裏切った家臣を粛清する心積もりではあったが、だからと言って裏切りの証拠をまざまざと見せ付けられるのは気分がいいものではない。

苦々しい想いとは裏腹に、二若ふたわかの頭は妙に冷めていた。

もう何年もの間頭の片隅にあつて、結局実行されなかったある考えが脳裏をよぎる。

冷たく凝った何かに胸を苛まれながら、静かに決意を固めていた。

私は国許を離れて帝都の中宮内で、七番目の皇子が賜っている宮で暮している。

幼い頃に人質として帝国に送られて以来、第七皇子佑茜ゆうせんの側近として仕え、今でも皇子の宮に部屋を与えられ暮していた。

祖国は帝国に数多存在する属国のうち一国で、父王が治め支配していたのだが、今より十年程前に身罷った。

父王の長子として誕生した私は、祖国が帝国への恭順の意を示すために、人質として帝都へ送られたのだ。

帝国が望んだのは、次代を担う王となる弟の方だった。

しかし弟に万が一の事があっては、王家を存続させる事ができなくなる。

祖国では王位を継げるのは男子のみと決まっていたからだ。例えば長子であるうと、女の私には相続権はない。

だから家臣達は私を弟と偽り、帝都へ送り出したのだ。

以来ずっと弟の二若ふたわかとして私は男の振りをして暮してきた。

事の発端は国元からそんな私の元へ、祖国の政を補佐まごしている家臣が尋ねてきたところから始まった。

本当はもつと前から動いていたのだろうが、私がそれを知覚したのがその時だったというだけだ。

家臣の名は朱晋しゆしんと言ったが、私は彼が上京してくる事など聞かされていないし、それを指示した事もない。つまり無断での行動だ。

数年前、弟の二若ふたわかとして父王亡き後空位となっていた王位につき、祖国を遠く離れたこの帝都で政務を執っている。

帝国にあつたまま国をつつがなく動かすには現状をつぶさに把握し、指示を伝えなければならぬ。

普段は国元で実際の指揮を取っている末子である一姫いちひめという私の名を名乗った妹から、手紙という形での報告を受け、それをまた同じように手紙という形で指示を出している。

だが、込み入った事情がある時など、難しい肌理細やかな指示を

出すには手紙という形式では不足で、だから国から家臣が尋ねてくるのは珍しいことではなく、一姫いちひめへ手紙を出して人を来させることもあったし、逆に一姫いちひめから人が使わされてくることもあった。

朱晋しゆしんが訪ねてきたときも、最初は不信には思わなかったのだ。

有力家臣の一人である朱晋しゆしんは、祖父の代から仕えている実力の伴った野心家で、国元の官吏たちの信も厚く、王であつてもあだや疎かに出来ない相手だった。

その彼を使い走りのような伝令役に使うことなど、まず考えられない。

それほどの大事が起きたのかと、内心では酷く緊張しながら迎えた。

宮に通された彼に直面し、そこにある”色”を目の当たりにし、脱力するほどの失望を味わった。

朱晋しゆしんは強烈な野心の色を纏っていた。つまり私を蹴落としにかかっているという事だ。

何時かは来るだろうと半ば覚悟をしていたことだったが、信じていたかったのだと、それを愕然と思ひ知った。

何度経験しても慣れるという事のない虚無感に、泣きたい気持ちになった。

悲しいことに慣れた事ゆえに、それを表に出さないだけの芸当は朝飯前だった。

朱晋しゆしんは己の抱いている不穏な思惑に気が付かれている事を知らない。

私が、自分に向けられる感情を視覚として認識できるということは、身内しか知らない私の最大の秘密だ。

この伏魔殿のような場所でここまで生き残ってこられたのは、運や偶然の産物などではなく、それが出来るからこそ。

裏切りや陰謀など私にとっては日常茶飯事で身近な物だ。

幼くそして力のない私が、敵だらけのこの宮殿で生きてこられたのは、曲がりなりにも国を動かしてこられたのは、その力があつた

からこそだった。

最大の切り札であり、知りたくもない他人の心を覗き見る厭わしい能力だ。

朱晋しゅしんは吐き気をもよおす程いつも通りのにこやかな笑顔で、朗らかに挨拶を寄越してきた相手に、こちらもまたいつもの様に鷹揚に応えた。

「此度は何があった？」

ひとしきり時候の挨拶だのを繰り広げた後、本題に入った。

「いえ、王が心配めさる事はありませんぞ。ご安心ください」

「ほう。では何ゆえ忙しいそなたが此処へ？」

「知人の結婚式がありましてな、ついででは申し訳ないと思いましたが、お顔を見に寄らせて貰いました。一の姫様から言伝もありますし」

ホツホツホと好々爺然と笑って言う。

あの色さえ見えなければ、私は疑うことなど考えられなかっただろう。それほどまでに自然体であった。

そこまで心を決めているということか。

悲しいと感じる自分と、酷く冷たく観察している自分がいる。

だが、一姫いちひめからの手紙と贈り物を受け取るとき、かすかに見えた別の色。

わずかな憐憫のその色に、少しだけ救われる思いだった。

「わざわざすまないな。ついでで悪いのだが、国元へ帰りしなに寄つてはもらえないか？ 私も一の姫と三の姫に手紙を書きたいのだ」

朱晋しゅしんはそれを快諾し、宮を辞去した。

## 二 騒動

朱晋しゆしんを見送り、今後のことについて考えを巡らした。

よからぬ事を考えている人間については、どことどのような繋がりがあるか、普段の行動特性等の必要な情報を常日頃から集めていて、正直に言えば相手がどのような手を使ってくるかは、既におおよその見当はついている。

問題はこちらの被害をいかに少なくするか、そしてどれだけ秘密裏に行動し先手を打つ事が出来るかだった。

そこに臣下への思いやりというものが、欠片も考慮されることはない。

内心がどうであれ、今までその腕を祖国の為に揮ってくれていたという事実さえ、斟酌する気持ちはない。

なぜならこれはもう取るか取られるかの戦いで、その様な甘い事を言っていては、私が足を掬われる。ひいては他の部下達が危険に晒されるのだ。守るべきは自分自身であり、部下達だ。そこは決して間違つてはいけないのだから。

理性ではそうするべきだと理解し納得していても、己の成すであろう非道に吐き気をこらえることは難しかった。

自室の長椅子にだらしなく体を預け、片手で顔を覆った。

今は一姫いちひめからの手紙に目を通したい気分ではない。

少なくとも、こんなドロドロした気持ちでは読みたくない。

急ぎの用がないとも限らず、それがどれほど愚かなまねか理解はしていたが、感情が理性を凌駕しどうしても読めなかった。

どの位そうしていたのだろうか、扉越しに従者が声をかけてきた。

「若様、よろしいでしょうか」

そのままの体勢で従者の入室を許可する。

入ってきた従者の機先を制するように、それを口にした。

「佑茜様か？」

従者は静かにそれを肯定した。

属国の王であり佑茜<sup>ゆうせん</sup>の側近を勤めている私は、主である佑茜の賜っている宮の一角を佑茜<sup>ゆうせん</sup>よりお預かりし、そこで私と私付きの従者や召使達が暮らし、国元の執務を執り行い、また、主である佑茜<sup>ゆうせん</sup>の執務の補佐を行っている。

気だるげに身を起こすと、従者は苦笑気味に見ていた。

その手にある衣服に目を留め、なるほどその理由を察した。

それは動きやすい儀礼的な衣装で、閱兵式等で着るようなかなり改まった武術着だ。

いかに私が王であろうと、剣術の練習でその様な改まった衣装を身につけることはありえない。

ましてや、今が真昼間の執務を執る時刻となれば、ただ剣術の練習をするなどと言う事は考えられるはずがなかった。

また佑茜<sup>ゆうせん</sup>がなにやら問題行動を起こし始めたようだとすぐさま理解する。

佑茜<sup>ゆうせん</sup>は事あるごとに騒動を引き起こしては周りの者全てを振り回し、その振る舞いゆえに暗愚の名を欲しいままにしていた。

その事で他の兄皇子達には見下げ果て蔑みの目で見られているが、本人はどこ吹く風といった様子で、いつかな気にする事はない。

だが……愚かで気まぐれな行動をとろうと、私は佑茜をただの暗愚とは思えなかった。

人の感情を色として認識できる私にすらその本心や意図を読ませない。どうしてそんな事がただの暗愚に出来るというのか。気まぐれでそして敵となる者には一切の容赦がない佑茜は、私にとっては最も恐ろしくそして油断のならない人間だった。

従者の用意していた衣装に着替え、佑茜<sup>ゆうせん</sup>の部屋へ急ぎ向かった。

宮の中は佑茜<sup>ゆうせん</sup>が余人をおくことを嫌うため、宮の維持管理に必要な最低限の人員しかおらず、酷く静まり返っていた。

そこを足音を立てないよう細心の注意を払って足早に進み、人と



すれ違ふ事もなく目的地へと辿りついた。

だが、佑茜の部屋には呼び出したはずの本人が居らず、彼の乳兄弟の玉祥の姿しかなかった。

私が部屋の中に入っていくと、玉祥は柔らかな暖かい笑みで迎え入れる。

「玉祥、佑茜様はどちらに居られるんだ？」

私が訝しげに尋ねると、玉祥は困ったように眉を下げた。

「克敏様の宮だよ」

その答えに私は絶句してしまった。

克敏とは佑茜の兄皇子の一人で、日ごろから他の兄皇子達に比べ、何かと衝突することの多い相手である。

間の悪い事に、ほんの少し前に争いを起こしたばかりで、酷く怒らせてしまったばかりであった。

佑茜は何故自分を目の敵にしているような人間ばかりがいるであろう場所にあえて乗り込んでいくのか。私にはとても理解できなかった。

私のその様子に玉祥は気持ちは判るといったげに頷いた。

「急ごう。佑茜様は先に行ってお待ちだ」

なんて事だ。佑茜が先に行つて何しているか、考えるだけで恐ろしい！ 今までの経験上、絶対に良からぬ騒動が待ち受けているに決まっている。当然のように、私や玉祥もそれに巻き込まれる事が決定したも同然だ。

その事で目眩がしそうだった。

### 三 騒動

佑茜ゆうせんの兄皇子である克敏こくびんは、現皇帝の第四皇子である。生真面目で優秀な武人である克敏こくびんは、一言で言えば佑茜ゆうせんとはまるつきり正反対の人間だった。

優秀で帝国内でも重要な地位についている克敏皇子こくびんは、母の地位が低く、そのために次期皇帝となることはありえなかった。

そしてそれを理解しているから、あえて中宮の中でも端に位置する宮を皇帝に自ら願ひ出て賜っていた。

対して佑茜ゆうせんの母は正室であり、賜っている宮も皇帝の居住に程近い中央部付近にあった。

克敏こくびんの宮へ向かうとなると、宮殿の端へ移動する事になる。

つまり中央部よりも人の行き来は少なくなっていくのだが、途中から歓声らしき音が聞こえてきた。

前宮と違い、皇族が暮す中宮は歴然と人の行き来は少ない。

しかも立ち働く召使らは住人達である皇族の不興をかわぬよう、どのような時でも静かにそして影のように存在感を希薄にして仕えている。それがあのように歓声が上がるといのは、それだけで非常事態といってよい状況だった。

まず間違いなく、私達の主である佑茜ゆうせんがこの騒動の元なのだ。

私は思わず玉祥たましょうと顔を見合わせた。

お互いと同じ事を考えているのが、手に取るようにわかった。玉祥たましょうとも佑茜ゆうせんと同じだけ長い付き合いだ。互いの性格など知り尽くしているし、どんな事を思うかも判っていた。

「今度は何だろうね」

玉祥たましょうはのほほんとした様子でいった。

なぜ彼はこの状況でのほほんとしていられるのか、私にはその神経がとても信じられない。だが、それが玉祥たましょうなのだ。人が好くてお人よしで、善意の塊。どれほど騙されても、人を信じる事をやめな

い芯の強い人だ。なぜ玉祥たまけいのような乳兄弟ちちあなを持っていて佑茜ゆうせんは一筋縄じなでいかず油断ゆだんのならない人間なのか、むしろそっちの方が私には不思議でならなかった。

「さあ……」

佑茜ゆうせんとは付き合いは長いが、今だにあの思考回路は読めない。

何をしでかすか全く予想がつかないのだ。

「前のようにどちらが女性にもてるか競い合ったりするかな」

クスクスと楽しげに玉祥たまけいは言う。

途端とたん嫌な記憶が甦り、私は渋い表情で言った。

「それは言うな」

少し前の騒動とは、兄皇子と佑茜ゆうせんがどちらが女性にもてるか、競い合ったことだ。あの生真面目なまごころで無骨な克敏くくみんにどうしてそんなことを了承させる事が出来たのか、未だに私には理解できず不思議に思っているのだが、ともあれ馬鹿馬鹿しくも不真面目な競争に私も巻き込まれた。

身分がばれないよう裕福な商人風の変装までして、二人の皇子は部下を引き連れて街へお忍びで出かけたのだ。

そこで通りすがりの女性達に声をかけまくり、どちらがより多くの女性と仲良くできるか競争した。

皇子達だけではなく、その部下も一緒になつての競争に、私も駆り出されたのだった。

しかめつらな私とは対称的に、玉祥たまけいはひどく嬉しそうな表情だ。

「何でさ。君、凄くモテたのに。うれしくないの？」

「あの後私がどれだけ大変だったか！ 玉祥たまけいは参加免除なのに、不公平だ！」

声をかけた女性方にやたらめつたら撫でくりまわされて、恥ずかしいやら、女とばれないかヒヤヒヤするやら大変だった。

事情を知らない玉祥たまけいは、ニコニコとどこ吹く風だ。

「僕は婚約者こんやくしやいるし、浮気は出来ないよ。二若ふたわかにも将来を誓い合う相手がいれば、佑茜ゆうせん様さまだつて無理強いはしないよ」

もつともな台詞だ。

どれほど傍若無人な振る舞いをしようと、佑茜ゆうせんは不思議とそういった気遣いだけはするのだ。

もし私が本当に男なら、いや、本物の二若ふたわかならとうに婚約者はいたに違いなかった。

だけど私は偽物で、性別すら違う。

ここまで長く身代わりを勤めるとは予想外だったのだ。

うちの国は王位を継承出来るのは直系男子のみ。

そして本物の二若ふたわかは、ただひとりの王位継承者。

結婚は早ければ早いほどいいし、子供は可能だけ早く欲しいのが実状だ。

万が一の事態を考えれば、とても切実な事だった。王位継承者が居なければ、国は空中分解し、民の生活に大打撃を受けてしまう。

でも、それは出来ない。本物の二若ふたわかは、私の手に届く場所にはなく、私がどれほどその力を振るおうと、二若ふたわかにそれを強制できないのだ。

黙りこくった私をどうとったのか、

「大丈夫。いつかは必ず好きな人と出会えるよ」

と玉祥たましょうは優しく励ましてくれた。

ちなみに玉祥たましょうは子供の頃から思い合った少女と正式に婚約して、幸せいっぱいの状態だ。

近いうちに婚礼をあげることも決まっている。

私の目の前で友愛の色が玉祥たましょうの身体を覆った。

口さがないものは、彼を八方美人だなんだとけなすが、玉祥たましょうの言葉はいつだって本心だ。

幼い頃より見続けてきた私には判る。

色を見えない人には解らないだろうが、彼の言葉と纏う色が違えた事などなかった。

もつとも、小さいときと違い今の私の力では、いつでもどんな相手でも心が見えるわけではない。

今ではわずかに私に向けられた強い感情を色として認識できるだけ。

その私が判るくらいはつきりとした感情に向けられることは、余り多くはない。

人は様々な事を想うし、いろんな言葉にされる事のない感情を胸に抱えている。

だから特定の個人に強い感情を向けるということは、なかなか難しいことなのだ。

力が減ってしまっただけからは、大概は怒りなり、嫌悪なりの悪意を含んだ感情ばかり目にする。

玉祥たまけいのような、きれいな想いしか含まない感情の色を目にすると、とても心が安らいだ。

これから待ち受ける騒動を思い返しげんなりとした気分が湧き上がるが、それもまあいいかと思う程度には気分がよかった。

## 四 腕比へ

宮に近くにつれ、歓声が大きくなっていく。

いいぞ、やれ、そこだと、誰かを応援するような言葉が聞き取れた。

サーツと私は青ざめた。

まさか、剣の立ち合いをするのか？

私と玉祥は、常日頃から武官として恥ずかしくない程度には腕を磨けと佑茜ゆうせんから言いわれ続けていて、毎日の練習は欠かしていないが、それでも二人掛かりで佑茜ゆうせんに切り掛かって、軽くあしらわれるくらいだ。お世辞にも剣の腕は良くない。

ちなみに克敏こくびんは生真面目で、非常に武勇に優れた皇子だ。当然のようにその側近達も、なかなか腕が立つ人材が揃っている。もし立ち合いとなったら、勝てる可能性はまずない。

そもそも佑茜ゆうせんと事ある毎に衝突するのも克敏こくびんの生真面目さ故で、ちゃらんぼらん佑茜ゆうせんをもう少しまともにさせようとするためだ。第七皇子とはいえ、佑茜は帝位継承順位で言えば、長兄に次ぐ第二位の地位にいた。そんな高位にある人間にフラフラされては、帝国にとつては大打撃だと考えているのだろう。

当人に確認はしていないが、その言動から、おそらくそうなのだろうとは私でも察する事が出来た。

それが騒動になるのは、完璧に佑茜ゆうせんが間違った方へ克敏こくびんを煽るせいだった。

「もつと真剣にならんか！」

克敏こくびんの怒声が響く。

建物を周って声のする方に行くと、佑茜ゆうせんと克敏こくびんが剣を交わしていた。

試合と言うには佑茜ゆうせんの様子は真剣みが足りない。

兄弟のじゃれあいのようなものだ。

切り掛かる克敏の剣を受けずにいなして流し、ちよつとバランスを崩したと見るや冗談のように切り掛かる。かと思いきや、すぐさま剣を引いてまともに立ち会おうとはしない。

克敏がそのふざけた様子に腹を立てるのも当然といえた。ふと剣を切り結んでいた佑茜が私達の方へ目を向けた。

「お前達、遅かったな」

にやりと笑って何事もなかったかのように声をかけてきた。

そこで声をかけるか!?

私はギョツとして皇子達を見つめた。

克敏はちよつど佑茜に切りかかった所だった。相手が受け止めるであろうという信頼があるからこそ、本気で討ちかかれるのだ。

急にやる気をなくされても、勢いに乗った剣をとめることは簡単ではない。

焦った顔の克敏と、それを全く気にも留めていない佑茜。

私は最悪の事態を想像して、顔を強張らせた。

幸い、克敏の剣はわずかに逸れ、佑茜の背後にある木にぶつかり見事に折れた。

よくあのタイミングで佑茜を避けたと、内心で克敏に喝采を送る。さすが武勇に優れている方だ。私や玉祥には同じことをやれと言われても、出来ないと言断言できる程だ。

「若飛（幼名が佑茜）！ 危ないだろうー！」

「もちろん兄上なら剣を止められると信じてのこと」

克敏の怒声にも、佑茜はびくともしない。

若飛とは佑茜の今の名だ。佑茜は私や玉祥を頑なに幼名で呼び続けているため、私達はそれに倣い、私達もまた互いを幼名で呼んでいるのだ。

「そうではない！ 万一の事があつたらどうするつもりだ！ 死にたいのか!？」

「はっ、現に俺はピンピンしてるだろ」

「ああいえばこういう。その減らず口を閉じる」

「それより、剣がだめになってしまった。勝負はここまでだな。ま、今回は俺の負けってことで」

克敏は憮然としてそれを否定する。

「いいや、引き分けだ。勝ってもおらんに勝ちを譲られるわけには行かない。此度は引き分けとする」

克敏らしいといえば克敏らしい潔さだ。

だが私は佑茜の口が微妙にうれしそうに歪むのを見てしまった。

私は己の主の腹黒さに些かげんなりとした。

「しかし、勝敗が決まらないのは面白くない。兄上、配下同士で立ち会って勝敗を決めるといふのはどうだ？」

と、とんでもない提案を佑茜ははじめた。

おい！ お前は負けたくなかったんじゃないのか！？

はつきり言えば私は負ける自信は、かなりある。

佑茜は私たちの腕の程度はよくわかってはいるはずで、9割がた負けるだろう事は予想がつくはずだ。

「なるほど、面白そうだ」

克敏までも、かなり乗り気だ。

前回の騒動では部下も参加してのナンパ合戦だった。

それを考えれば、配下同士を競わせるのもアリなのだろう。

不本意ながらも私の予想通りに立ち合いが始まってしまった。

最初は玉祥から。

相手は克敏の従者。

克敏の従者は私より歳が少なそうな容貌をしていた。

青年と呼ぶべきか少年と呼ぶべきか非常に際どいところだが、背は私よりも高い。

見た目だけで実は年上、なんてこともあるかもしれないが、私や玉祥でも勝機がありそうな相手ではある。

克敏も一応私たちの実力に応じた相手を選んでくれたのだろう。

どこまでも生真面目一直線の皇子だ。



## 五 腕比へ

実際に剣の腕だけを純粹に判断するなら、克敏こくびんの従者じゆうしやよりも玉祥ぎょくしやうのほうが上だった。克敏こくびんの従者じゆうしやは筋は悪くないのだが、剣筋はかなり荒削りで、いまだ発展途上であることが窺えた。

玉祥ぎょくしやうとのやり取りをみて、私はそう判断した。

克敏こくびんの従者じゆうしやは、普段から格上の相手とばかり立会いをしているのだと思う。

周りにいる克敏こくびんの側近達を思えば仕方がないのだろうが、その所為か無謀な打ち込みが多くとも危なっかしい。

玉祥ぎょくしやうがとつさに剣を引かなければ危うい場面が多々見受けられた。克敏こくびんの側近達程腕があれば、それでも十分相手を押さえ込めるのだろうが、玉祥ぎょくしやうや私わたしほどの腕では怪我をさせないためにはどうしても引かざるを得ない。

命の取り合いならば玉祥ぎょくしやうが勝つだろうけれど、今はただの立会いで相手を死に至らしめるわけには行かないので、玉祥ぎょくしやうもそれで攻めあぐねていた。

そのせいで、一見するとい勝負になつてはいた。

長引きそうだと人事のように眺める。

遠巻きに二人を囲んでそれを応援している皇子と側近達に、宮の召使達が飲み物を配って歩く。

私もそれを受け取ったが、のどが渴いてもおらず手に持ったまま見物していた。

次は自分かと思うと、じっとりといやな汗がわいてくる。

佑茜ゆうせんのことだから、たとえ負けても面白がるだけで責められる事はないだろうが……。

その時視界の端をよぎった人影に、一瞬だけ息を詰めた。  
朱晋しゆしんだ。

凝視しそつになる視線を無理やり外して、玉祥達ぎょくしやうの立会いに集中

している振りをする。

動揺を悟られないように、詰めた息をそつと吐き出した。

特に隣に立つ佑茜ゆうせんにそれを気づかれぬように。

少し前まで顔を合わせていた相手だ。見間違えるはずがない。

朱晋しゆじんの個人的に懇意にしている第五皇子の宮は、克敏くくひんの宮とは隣り合っていたと思ひ出す。

おそらく第五皇子と接触を持つだろうから見張らせねばと思つてはいたが、まさかこのタイミングでそれを直に目撃する羽目になるとは予想もしていなかった。

眉を顰めないようにするのに酷く苦勞した。

……本当に単なる偶然だろうか？

「二若ふたわか、あれはお前の所の家臣じゃないのか？」

声が掛かり振り仰ぐと、顎をしゃくつてそれを指し示した。

目を向けるまでもなく、佑茜ゆうせんが顎で指した先には、朱晋しゆじんの後姿がある。

まるで心の中を見透かしたかのような巡りあわせに、ドキリとした。

佑茜ゆうせんは時折こんな風に、肝が冷える事を言い出す。

私の抱えている秘密を忘れるなど言っている様な気にさせる事が多々ある。

意識しての事ではないかもしれないが、もし佑茜ゆうせんがそんな態度をとっていないければ、秘密を抱えているという緊張感を保ち続けるのは難しかっただろうと思う。

未だ回りに私の性別がばれていないのは、彼のおかげと言えるのかもしれなかった。

そもそも佑茜ゆうせんは私が、女だと言う事を知らないのだ。そんな秘密を抱えていると知っているはずがない。だから、何故そんな態度を取るのか私には判らなかつた。

「はい。我が国の家臣である朱晋しゅしんと申すものです」

「ふん。名などどうでもいい。上司の主に挨拶する前に、他の皇子に挨拶するとはあからさまだな。阿呆と名高い皇子よりも、陰険皇子の方がましというわけか。全く家臣の鏡だな」

いやみな口調、猜疑心の籠った眼差し。

だがちらりと滲み出た色は、……心配？ もどかしさ？

よく見ようと目を凝らすですがすぐさま消えてしまつて、判断つかない。

「申し訳ありません。朱晋しゅしんも悪気があつての事ではないのです。決して佑茜ゆうせん様を蔑ろにしているのではありません」

私の言葉に、佑茜ゆうせんはどうだかなと冷たく返した。

わざわざ克敏くくびんの宮で騒ぎをこの時期に起こしたのはなぜだ？

朱晋しゅしんの裏切りを私に見せ付けるためではないだろうか？

何度も家臣たちや召使の裏切りや王宮の様々な人間の思惑に振り回されて来て、こんな風にそれを匂わせるような場面に出くわした事は数限りないが、佑茜ゆうせんからの助力を得た事はない。

わざとなのか、偶然なのか、それとももつと別の思惑があるのか。

言葉よりも態度よりも、私は自分の見た色が一番信じられる。

佑茜ゆうせんは決して私を疑っているわけではない。

そんな事は、色を見れば一目瞭然だ。私に対し嫌悪や疎ましさといった色、警戒や裏切りの色を纏った事はないのだから。

それは判っているのに、どうしても佑茜ゆうせんを信用しきる事が出来なかつた。

付き合いは長いが佑茜ゆうせんが鋭いのか鈍いのか、頭がいいのか悪いのか、それすらも私には未だによくわからない。

全ての感情の色が見えていた子供の頃から、佑茜ゆうせんの纏う色は複雑すぎて何を考へてるのかわからなかつたし、時折見えるだけとなつた今でも、難解すぎて理解不能だ。

判っているのは、私や玉祥たまけいは疎まれてはいないということと、ほんの少しの油断もならないということ。

本物の暗愚かと思わせることもあれば、全部演技なのではないかと思わせることもある。

非常に空恐ろしくなるほど頭が切れるように見える事もあれば、心の底から阿呆だと思つこともある。

底冷えするほどの冷淡さや冷酷さを見せたかと思えば、明るく朗らかな様子になったりと、その時々で印象をガラリと変え、まるで万華鏡を見ているかのような錯覚を与える人間だ。

真剣に見つめれば見つめるほど判らなくなり、果てにはその変幻自在な姿に酔つて眩暈を起こしそうになるほどだ。

これほど判り難い相手は前皇帝以外に見たことがないくらいだった。

全く読めない相手だからこそ、自分の気持ちと信念だけで相対することが出来る。そして自分の信念だけで行動することが、不安にもなる。

全く読めない相手だからこそ、それに応じた対応が出来ない。出来ないからこそその能力を後ろめたくも感じない。

自分の能力でも読めない相手が主で良かったのか悪かったのか、私は未だに結論が出せないでいた。

内心の気まずさを誤魔化すために、手にしていた飲み物をぐつと一気におおった。

!?

てつきり水だと思ったそれは酒だった。

カツと焼け付くような感覚に、私はむせ返った。

「ゴホゴホゴホ」

「……大丈夫か」

呆れながらも佑茜ゆうせんは背をさすってくれた。

「こんな度数の高い酒を一気に飲む奴があるか」

「さ、酒だと、思わ、なかった、ん、です」  
切れ切れに何とか答えた。

普段から私は酒には一切手をつけない。

万が一でも痴態をさらして、性別詐称がばれたら終わりだ。

実際に酒に失敗したという話はどこでも聞く。

私がそうならない保証はどこにもないのだ。

危険は避けるに越したことはなかった。

「普段から少しずつ慣らしていけと言ってるだろうに」

呆れながらも、佑茜の手つきは優しかった。

しかし体がポーッと熱を持ったように火照って来る感覚はよろしくない。

次は私の立会いなのに大丈夫か。

更なる不安が沸き起こる。

長引いていた玉祥と克敏の従者の立会いは、そろそろ決着がつこうとしていた。

攻めあぐねていた玉祥だが、やはり地力は従者より上のようで、へばってしまっている従者に比べてかなり涼しい顔をしている。

体力だけなら玉祥よりも体格のいい従者の方が上なのだろうが、無駄な動きが多すぎて体力をずいぶん消費してしまったようだ。

それでも諦めようとはしないとこころはかなり根性がある。

皇子の従者をやれる身分なのだから、かなりいい家のお坊ちゃんであることは間違いない。

甘やかされ放題のお坊ちゃんにしてはかなり将来有望な人材だ。

さすが皇帝からの信任も厚い皇子だけあって、周りはいいい人材が

豊富だ。

やはり皇子自身の人望が物を言っているのだろうか。

ちなみに佑茜の側近は私と玉祥のみ。

もうちょっと我が主にも頑張って貰いたいところだ。

## 六 腕比べ

玉祥が克敏の従者に勝ってしまったら、どうなるのだろうか？

ふとそれに思い至る。

私の負けは確定したも同然で、結果一勝一敗一分で、やっぱり勝敗が付かなくなるのではないのか。

さらに次に考えられるのは、どんな状況だ。

克敏も佑茜も、引き分けのまま終わらせるなどありえない人間だ。確実に何かやらかすに決まっている。

今の状況で考えられる次なる騒動は、一体どんなものだ。

確かに予測し難いものではあるが、ある程度心の準備があるのと無いのでは雲泥の差がある。

必死になつて考えようとするのだが、酒の所為か普段より思考が覚束なく、どれほど集中しようとしても、考えがうまくまとまらない。い。

酒というものがこれほど厄介なものだとは、生まれて初めて知った。これだけ思考力が低下すれば、いい大人が醜態をさらしてしまうのも納得だ。

飲んだばかりですぐに酔いが回るものではないのだろうが、頭の芯がぼんやりとしてきているのを私は自覚していた。

ただでさえ腕が未熟だというのに、酒が入っているのはまともに相手も出来ないのではないか。負けるのは確実だとしても、あまり無様な真似を晒したくはない。それなのになんて迂闊なんだ。私は己の愚かしさを呪った。

焦りまくっている私を尻目に、玉祥達の勝負が付いてしまった。

次は私の番だ。

「よくやったな」

佑茜は機嫌よく玉祥をねぎらった。

玉祥ははにかみながらそれを受けた。

「ありがとうございます」

視線をずらせば、克敏くくびんやその側近方に励まされている従者の姿もある。

「克敏様、申し訳ありません」

従者は可哀想な位落ち込んでいた。

克敏くくびんはそれに怒ってはいないようだった。

「気にするな。だがもう少し慎重にな。見ていて何度も冷や冷やさせられたぞ」

と、生真面目に注意をしている。

これは従者の無謀な攻めについて言ってるのだろうと当たりをつけた。

「お前は筋は悪くないんだから、無茶な攻めはやめると何度も言ってるだろう？ 相手がお前よりも上手で、上手に相手をしてくれたから怪我をせずに済んだんだ。同程度の腕前ではお互いに無事ではすまない攻撃だ。防御を捨てた攻撃は、本当に必要なときだけにしろよ」

克敏くくびんの側近もそう苦言をこぼしている。

ああ、なぜ彼が選ばれたのか判った。

さして実力差が大きくない相手（玉祥うぎやう）と試合わせることで、彼の剣の足りない部分を自覚させる事だったのだろう。

従者も試合っている間に、何度もひやりとした感覚を味わったはずだ。

克敏くくびんや側近方相手では実力差が大きすぎて、それを上手く自覚させられなかったのだと思われる。

玉祥うぎやうは確かに剣の腕はそこそこだし、その気性から目下の相手に怪我をさせるような無茶な攻撃はしない。否、出来ない。

なにせ毎日相手をしている私にでも、時折手控える事があるくらいだ。

そのせいで私に打ち負かされても、全く気にする事はない。互いに怪我がなくて何よりだと、そう、人の良い柔和な顔で言う程だっ

た。

玉祥ぎょくしょうのそういう部分を知ってるという事は、克敏こくびんは弟のみならず、その周りにもよく目を配ってるということだ。それはなかなか出来る事ではない。この勤勉けんみんさを佑茜ゆうせんにも見習ってもらいたいものだ。勤勉けんみんな佑茜ゆうせんなんて気持ち悪い気がするけれども、つい思わずにはいられなかった。

「ほら、次はお前だ。行つて来い」

佑茜ゆうせんに背を押され送り出された。

ため息混じりに中央に進み出る。

克敏こくびん側はと見れば、側近の一人が自ら名乗り出て来た。

「私がお相手します。克敏こくびん様、よろしいですか？」

「ああ。頑張れよ。っと、怪我はさせないようにな」

克敏こくびんは鷹揚たかように頷き、最後の部分はほんの小声で紡いだ。

私に聞こえないようにという配慮だ。

自慢ではないが、私はかなりの地獄耳だ。しっかり聞き取れてしまった。

克敏こくびんの配慮はわからないでもない。なぜなら私では絶対に勝てないほどの実力者だからだ。むしろ綺麗に負かしてくれて、怪我をする恐れは一切ないと言い切れる位に、実力差のある相手なのだ。

酷く情けない話ではあるが……。

そしてあっさり、本当にあっさりと私は負けた。

一言で済ませられるくらい、あっさりしたものだ。

情けないなど突き抜けて見事な負けっぷりだった。

相対するまではさほど酔っている感じはしなかったのだが、剣を打ち合い始めた途端に足に来て、気が付いたときには勝負がついていた。

実力差がありすぎる相手とはいえ、これはないだろう。

比喩ひよでなく穴があつたら入りたい。

ものすごく居た堪れなかった。

「二若ふたわか、負けるにしたってあまりにも簡単に負けすぎだ。もうちょ



「と粘れよ」

流石に佑茜も苦笑気味だった。

全く反論も出来ない。

ああ、ものすごくまともな台詞だ。

こんなときじゃなければ多少なりとも見直せるというのに、どうしてこんな時ばかりそんな全うな事をいうのか。

「申し訳ありません」

私はひたすら頭を下げた。

佑茜とて私が勝てるとは考えていなかったようで、呆れているのは間違いないが、怒っている様子は全くと言っていいほどなかった。ちらりと視線を流せば、対戦相手も苦笑気味だった。

相手にも大変失礼な真似をした。

「兄上、一勝一敗一分で、これも勝負がつかなかった。河岸を変えて続きをしないか」

「そうだな」

克敏は私の方を意味深に見やってニヤツと笑った。

「飲み比べというのはどうだ。最後までつぶれずに残っていたのが勝者だ。判りやすくいいだろう？」

これは、私に気を使ってくれたのだろうか。

だが……勘弁してください。

酒はコリゴリだ。

「は、なるほど。若干一名ほど一人でやり始めてるし、ちょうどいいな」

佑茜までそんな事を言う。

それは嫌味ですか、それとも私に多少なりとも気を使ってくれたのですか。

貴方の言動はいまいちわかりにくいんですよ。

## 七 酒盛り

「まだ日も高い時刻に、何を仰ってるんですか。執務もおありですよ」

両方の皇子に向けて私は進言した。特に克敏こくびんに向けて。佑茜ゆうせんに訴えても無駄だからだ。

私の言葉に、克敏こくびんは否と首を振った。

「佑茜ゆうせんが来た時から今日は無理だと判っていたからな。危急の物だ。け急ぎ片付けて、残りは明日に回した。問題はない」

克敏こくびんからは、とんでもない台詞が返ってきた。

確かにその通りではあるし、その対応は凄く正しい。だからと言って頷けるものではなかった。

私の頭に手が置かれた。

振り仰ぐと、佑茜ゆうせんは暢気に言った。

「あまり難しく考えるな。禿げるぞ」

克敏こくびんの手回しのよさに比べ、佑茜ゆうせんはあくまでも適当だ。

「佑茜様は溜まった決裁書が残っておいでです。下に示しがつきません」

一応は抵抗を試みるのだが、無理だろうと内心では諦めてもいた。佑茜ゆうせんがこうと決めたら、それを撤回させるのはほぼ不可能だ。

「心配するな。あの連中は俺がいなくとも、きちんとやるさ」

佑茜ゆうせんは王都の警備隊の半分を統括している責任者だ。

そして残りの半分を統括しているのが、兄の第三皇子。

克敏こくびんと違い、第三皇子とはよほど気が合わないのか、同じ立場でありながら殆ど交流がなかった。

逆に職務とは全く関係のないはずの克敏こくびんとは、警備隊員達の訓練と称して克敏こくびん配下の軍と、合同で実戦形式でやりあう事もあるくらいだ。

部下を巻き込んで何をしているのか、そういう批判が来ても良さ

そんな物だが、皇子達は上手く立ち回っているようだった。

佑茜配下の者達は警備隊員のため、模擬戦は市街地制圧戦を想定して行われる。

そしてその戦歴は五分といったところだ。

しかもその相手が優秀と名高い克敏配下の者達だ。

本職の軍人に引けをとらないその戦いぶりから判る様に、佑茜の統括する警備隊は無駄に優秀だった。

おかげで佑茜をはじめ、私たち上官がすべきことは殆どなかった。

せいぜい予算編成をしたりといった書類仕事があるくらい。

あんまり隊員達が優秀なため、佑茜は私と玉祥を鍛えてもらって来いと、そこに放り込むこともあるくらいだ。

余計なお世話だと、何度言いかけたことか。そして警備隊の隊員たちにしてみれば、佑茜やその側付など居ない方が、よほど仕事がやりやすいだろう。

むしろ私や玉祥が居ては、仕事がいなくて仕方が無かったはずだが、私達の目から見ても足手まといが居てすら、立派に仕事をこなしていた。

確かに彼らなら多少書類が滞っていようが上司がいなかるうが、立派に職務を遂行するだろう。そんな事は言われずとも判っている。だが、それとこれとは別の問題だ。部下達の優秀さに胡坐をかいてはならない。

玉祥に目を向けるが、諦めると宥める様に肩を叩かれた。

どうやら明日は普段より早く起きて、書類を片付けねばならないようだ。

がつくりと肩を落としたり。

克敏とその側近方は、私たちのそのやり取りを面白そうに眺めていたが、何も言わなかった。言っても無駄だからだろう。

克敏の宮の中に場所を移す。

運ばれてくる酒や摘まみを、暗澹たる気持ちで見ると。

最初の一杯目を空けたところで止められ、ついほっとしてしまっ  
た。

事もあるうちに、それを佑茜に見咎められた。

「あからさまに顔を出すな。舐められるぞ」

佑茜の言葉は尤もだ。

私は素直に頷いた。

「二若、災難だったね」

隣に座った玉祥が言う。

「いやと私は首を振った。

「あれは私の不注意だ。もう少し慎重に行動していれば防げた事だ。  
衢雲殿には失礼な真似をしてしまうし。衢雲殿と手合わせするよう  
な機会などめつたにないのに、勿体無いことをした」

ため息交じりの言葉に、玉祥は否定も肯定もしない。

たとえ勝てなくても、自分より格上である衢雲と手合わせする事  
は、私には不利益にはならない。不利益どころかとても有益であつ  
たはずだ。とても勉強になったはずなのだ。

その機会をみすみす逃してしまうなんて、かえすがえすも勿体無  
いことをした。

手合わせ直後の居た堪れなさが薄れ、貴重な機会の喪失を惜しむ  
気持ち占めるようになっていた。

## 八 酒盛り

「玉祥は、代英殿との手合わせはどうだった？」

「とても勉強になったよ。佑茜様も僕達との練習ではこんな感じなのかって、少し感慨深かった」

「いつも同じ相手とばかり練習しては、わからないこともあるものだな」

「そうだね。佑茜様の練習相手としては、僕達ももう少し力をつけて、佑茜様と打ち合えるくらいにならないと。今のままでは、ただ練習をつけてもらっているだけだからね」

側近として恥ずかしい状態ではあるが、本当にそうだ。

側近との自負があるのなら、もっと腕を磨き主を護れるようにならないならならぬ。私たちが不甲斐無いと、恥をかくのは佑茜なのだ。まあ、私たちの評価など目ではないくらいすでに、佑茜の評判は悪いから、意味はないかもしれないが。

「稼祥（幼名が玉祥）様、隣をよろしいですか？」

声に振り上げば、克敏の従者だった。

「代英殿」

今日のはじめて会ったばかり。いったい何の用だろうか。

私達は彼の登場を不思議そうに見やりながらも、少し詰めて席を空けた。

そこに腰を落ち着け、代英はやおら口を開いた。

「今日は完敗でした。またお手合わせを願ってもよろしいですか？」

単刀直入なその申し出に、私も玉祥も呆気に取られた。

ずいぶんと負けず嫌いな部類のようだ。

その代英にとっては、私のことなど眼中にはないようで、玉祥だけを食べい入るように見ている。

私であつたらこの申し出は、なんとしても辞退するところだ。

だが玉祥は、人好きのする顔で請け負った。人のよいらしい答え

だ。

「機会があれば、喜んで」

「ありがとうございます」

克敏くくびんの従者は、嬉しそうな様子で礼儀正しく頭を下げる。

「本当は、断られるのではないかと思っただけだったので、とても嬉しいです」

その言い様に、興味が引かれた。

「衢雲くくもん殿や他の側近方に何か？」

玉祥たましょうがそう尋ねていた。

私には聞きたくてもできなかった台詞を、彼は無造作に口にしてしまった。

内心では、不味い事を聞いたのではないかと焦ったが、玉祥たましょうは平然としていた。悪意を持たない人間というのは、こういう時に得だ。

二心がないから人から悪意を向けられても判らない代わりに、玉祥たましょうには悪気がないと相手にだって目に見えて判るから、逆に後ろ暗い気持ちきもちを疑われる事もない。

代英だいえいも玉祥たましょうの言葉に不快を覚えてはいないようだった。それどころか神妙に頷いている。

「はい。あのような無謀な攻めをしては、二度と立ち会いたがらないだろうと、いわれました」

克敏くくびんの側近方もなかなか辛らつな物言いをされるものだ。

間違っではないだろうが、言い方というものがあるだろう。

「ならば早朝練習そうさつれんしゅうに混ぜたらどうだ」

横よこから佑茜ゆうせんが口を出してきた。

先ほどまで克敏くくびんと言いついていたのに、その傍らで私たちの会話にも意識を向けていたらしい。

内心で余計な事をと、舌打ちしてしまった。

「よろしいんですか!？」

喜色きしきを顕にする彼に、今更嫌ですとは言いにくい。

あの猪突猛進な相手と、これから毎日練習れんしゅうしなくてはいけない。

それは非常に御免こうむりたい。

「構わんぞ」

しかし佑茜はあっさりと許可を与えてしまった。

そうなつてしまつては、私には拒否する事も出来ない。

「その練習に参加していい分際で、お前は何を言つてるんだ」

克敏の苦虫を噛んだかのような顔。

早朝練習のことを知っていたのか。しかも、佑茜が殆どそれに参加しない事まで。

佑茜はそれには答えず、しらばっくれた。

酒盛りが終り、早めに自室へ引き上げた。

酒宴の最後の方では死屍累々と言つた有様だったが、私自身は最初に一杯空けただけであつたために、既に酔いは醒めている。

予想より早く終わったために、明日の朝に処理しようと考えていたが、今のうちに片付けてしまおうと、部屋の中にある文机に向かった。

黙々と書類を処理していると気持ちが落ち着いてくる。佑茜に振り回されて散々だったが、沈みがちだつた気分はかなり浮上した。

後回しにしていた妹の手紙を取り出し、封を切つた。

手紙には妹が処理した緊急に裁決すべき事柄の事後報告と、私が裁決すべき懸案事項についてが書かれていた。

それに返事をしたためていく。

手紙の終わりには彼女の近況があり、厳しい顔になるのがとめられなかった。表面的にはただの世間話だが、私達ふたりの間で決めている暗号がその中に含まれている。

芳しい報告ではない。

返事を書き終えて私はある決意をした。

ずっと考え続けていて、実行に移す踏ん切りがつかなくつたもの。だが、心を定めると、思いのほか気分が楽になつた。

醒めたと思つていたがまだ酒が残っていて、その勢いで決意する事が出来たのだらう。そう考えれば、酒というものも悪いばかりではない。

私は一人しのび笑う。

残っていた気がかりである、最後の奸臣朱晋しゅじん。

彼の裏切りで、これで内戦時の負債が一掃することになる。

時期としては是をおいて他にないとも言えた。

出来るだけ多くの良きものを残し、足を引つ張りそうなものを道連れに。

文机の前の窓から望む月夜は、それを祝福してくれているような美しさだった。



## 九

日の昇りきらぬ朝。

いつものように宮の庭園で玉祥たまけいと稽古けいこを始めた。

昨日の酒が残っているのか、玉祥はだるそうにしていた。

かくいう私もあまり万全とは言えない。残務処理だの手勢の者へ渡りをつけたる為の準備をしたりだのと、遅くまで起きていたからだ。

国の王としての家臣とは別にある、私個人で契約を交わした配下の者達に、夜の内に指示は出し終えている。後は私がいくつか確証を取り、彼らが上手くやるのを待つばかりで、私達の行動が早いのか、朱晋達しゅしんたの企みが先に完成するか、正しく時間との勝負だった。

本来ならば私自ら動くなどという危険な真似はしたくないが、人手が足りないのだから致し方がないだろう。

配下の者達よりも、王宮内部に限れば私のほうが事情に通じてもいる。契約している人員は20名ほどで皆信用に足る人物のだが、各地に散って情報を集めたり裏工作を行っていて、緊急に渡りをつけられるのは3人しかいない現状では、王宮内部での情報収集は私が引き受ける他なかった。

そして忍び込む手はずすでに整えてある。

手勢を手に入れてからは久しく私自ら忍び込むと言うことを行っていないかったが、孤立無援の子供時代によく使った手で、その有効性は身をもって実証済みだ。

帝国は強大で、いくつもの小国を従えている。私の国もその中の一つ。

だが、帝国に敵がないわけではない。

テグシカルバという他民族国家がそうだ。

帝国とは全く制度も思想も違うその国とは、長い事敵対している関係だった。

かの国が小さく弱い国ならば、とうに滅ぼされていただろう。力が拮抗した二国間において、どちらも引くに引けない状況となり小競り合いが続いている状態だ。

私の国には内戦時代に帝国を裏切り、テグシカルバ側に付こうとした者がいた。その者は内戦で殺され、すでにこの世にはないが、その時の証拠物品が、未だ国で保管されている。万一その裏切りの事実が帝国の知るところとなれば、私はもちろん国は終わる。

ごく一部の家臣たちしかそれを知らないが、朱晋もそれを知る一人である。そして朱晋の性格を考えれば、それを使って事を起こすのは間違いない。

第五皇子を味方に付けてわが国の裏切りを未然に防いだと喧伝して、帝国内部に高官を得るか私に成り代わって王となるかする目論見だ。

朱晋が頼りとする第五皇子は、佑茜を毛嫌いしている。

克敏が兄としてまた国の中心にいるものとしての責任感で、佑茜と争うのとは根本的に違う。なんとしても佑茜を排除しよう、そしてそれに成り代わろうと虎視眈々と狙っている人間だ。性懲りもなく暗殺者を送り込んでくるのは日常茶飯事だし、無駄な言いがかりをつけては佑茜を追い落とそうと、日夜無意味な努力をしている相手だ。怠惰という点では佑茜とためをはる皇子でもあが、自分が低い地位に甘んじているのは生母の地位が低いせいで、正妃の息子である佑茜が邪魔をしているのだと思いついていた。サボってばかりの佑茜の持っている地位などわざわざ狙わずとも、真面目に執務に当たればそれ以上の地位に着くのも簡単である筈だが、彼の周りにはそれを指摘する人間はいないようだ。

その第五皇子ならば、佑茜の周りを固めている人間（私）を排除するに都合がよいとなれば、朱晋に肩入れもするだろう。

ただ、怠惰な皇子ではあるが猜疑心が強く、何の確証も保証もなく朱晋に力を貸す事はない。

朱晋にとっても危険な賭けではあるが、尤も重要な裏切りの証拠

物件を差し出すことで、その信を得ようとするはず。もとより国と王を裏切るのだ、後はない。そのくらいの賭けに出るのは当然というものだろう。

だが、私はそれを確認したわけではない。

おそらくは是で間違いはないと思いついて動き出しているが、なるべく早い段階でそれを確認し、万が一読みをたがえていた場合はこれからの計画を少し見直さなければならなかった。

寝不足で鈍い働きの頭を振り、玉祥じゆうせうに向き直る。

今日も佑茜ゆうせんは不参加だ。昨日の今日だから、もしかしたら参加するかも知れないと思っていたが、私の思い過ごしだったようだ。

「大丈夫か？」

体をほぐした後に軽い打ち込みをやっているが、玉祥じゆうせうの動きに精彩がなく、私は思わず尋ねていた。

「うん。大丈夫。それよりお願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「無茶目な打ち込みしてくれないか？」

「それは……昨日の？」

「そう。死を覚悟して切りかかってくる相手というのがどれほど厄介か、身をもって実感したんだ。佑茜ゆうせん様をお守りするには、僕は今のままでは足手まといにしかない」

真剣な顔だった。

「無理なお願いだったのは判ってる。君にとっても危険な事だし」  
私達は敵を倒すというよりは退けるといふ護身を基本にした型を取っている。打ち込まれたときの防御はもとより、攻撃する場合でも常に反撃される事を念頭にした動き。

戦時に将として前線で戦うにしろ、自分がやられて軍を指揮出来なくなるのは問題と、攻撃よりも防御を重点的に鍛えられてきたた

めだ。

確かに戦場では指揮官とは目立つものでかなり集中攻撃を受けるし、普段の生活でも佑茜ゆうせんを狙う暗殺者と渡り合って来たが、そのおかげで今でも生きていられる。

反面、暗殺者の場合はかなりの高確率で取り逃がしてしまっているのも、いろいろ問題があるのは確かではあった。

玉祥じゆせうは私にその防御を捨てて打ちかかって来いといっているのははっきり言えば困惑せざるを得なかった。

だが、結局私は頷いた。

「わかった」

もしかしたらこれが何らかの切欠になるかも知れないと考えたのだ。

いつもよりも幾分か緊張した面持ちで向かい合う。

「いくぞ」

私の言葉に玉祥じゆせうは頷いた。

思い切って打ち込んだ。

上段に構え勢いよく振り下ろす。みえみえのその動作はあっさりと避けられてしまう。

そうなる事は判っていたから動揺はない。

振り下ろした勢いを殺さないで切り替えて右肩上がりに斬り付ける。

右わき腹に切っ先が入るかというところで、受け止められそのまま上向きに刃先を流される。

がら空きになった胴体部に袈裟懸けで玉祥じゆせうの剣が振り下ろされた。私は際どい所で体をよじってそれを避けた。

ヒヤリと冷たい汗が落ちた。

足を振り上げ不安定な体勢のまま蹴り付け、距離を取った。

玉祥じゆせうは蹴りが強かに入った大腿部を軽く抑えている。

詰めていた息を吐いた。

たったこれだけの打ち合いで、ドツと汗が噴出す。

「二若、怪我はなかつた？」

「大丈夫。こつちこそ悪い、本気で蹴り付けた」

玉祥は最後の攻防を言っているのだ。

運よく避けられたが、袈裟懸けに振り下ろされたあの一撃は本当に際どかつた。

怪我をしなかつたのは私の技量でも、玉祥の技量でもない。ただ運がよかつただけだ。次も同じようにはいかないだろう。

防御する側も、攻撃をする側も、普段より意識していないと無駄な怪我の元だ。

私達は先程よりもずっと集中させて向き合つた。

それからも攻守を入れ替わりつつ、同じ様な打ち込みを行った。いつもよりギリギリの攻防が続く。

その分消耗が普段と比べ物にならず、早めに切り上げようかという雰囲気になつた頃、克敏の従者がやって来た。

「おはようございます」

礼儀正しく挨拶された。

佑茜の言葉通り、朝稽古に混ざりに来たのだ。

「代英殿、おはようございます」

「おはようございます」

私達も口々に挨拶を返した。

「遅くなりまして申し訳ありませんでした」

真つ赤な顔で息も荒い。

克敏の宮から急いで走つてきたのだろうということが一目瞭然だつた。寝坊してしまつたのだろう。

彼も随分飲まされていたようだし、昨日の酒宴を考えれば無理もない。

「気にする事はありません。それよりも体は大丈夫ですか？」

「そういう訳にはいきません。私から稽古をお願いしたのですから、お二方より先に来ているのが筋というものです」

確かにそうなんだけど……、彼が先に来ていたらそれはそれで結

構困ったような気がする。

「しかも稽古を終わろうとされているところではありませんか？」  
まさしくその通り。私と玉祥は顔を見合わせた。

二人ともかなり疲れ果てていた。  
代英はやっぱりと、項垂れている。

なんとなく気の毒になった。せつかく此処まで朝早く起きて練習  
に来てくれたのに、やっぱり帰れというのは不憫すぎる。

「私達二人で代英殿のお相手を交互に勤める。で、残った一人が見  
ていて気づいたところを注意する。私達もすでに消耗しているし、  
互いの実力を確かめるといふ様子見にはいいんじゃないだろうか？」

「それはいいね」

玉祥は私の提案に賛成した。彼も代英を気の毒に感じていたよう  
だ。

代英はパツと顔を輝かせた。

「よろしく願います！」

代英が疲労困憊で動けなくなるまで、彼の相手を玉祥と私は交互  
に勤めた。昨日の立ち合いほど危なっかしくはなかったし、よほど  
克敏やその側近方から注意されたようでもここまで無謀な攻めはな  
かったから、想像していたほど代英の相手は難しくなかった。その分  
簡単に勝敗が付いてしまって、代英はとても悔しそうにしていた。

その代英は今、地面の上に引っくり返って荒い息をしている。休  
む暇もなく私と玉祥の相手を何度もしたのだから当然だ。

だが、私はその体力に舌を巻いた。

正直もつと早い段階でくたばると思ったのに、彼は想像以上に粘  
った。年は私よりも下だが、力も持久力も完全に彼の方が上だ。今  
のつたない技術がもう少し向上すれば、私では勝負にならなくなる  
だろう。

私がこれ以上成長することは望めない。筋肉もこれ以上増やすの  
は難しい。玉祥は時期が来たら背も高くなるし体だって出来てくる  
と言つが、私にはその時期は未来永劫来る事はない。

今はまだいいが、あと1・2年もすればさすがに不信に思われ、偽りがばれてしまうだろう。

早く手を打たなければならぬ時期に来ていた。

私は一人唇を噛んだ。

代英を宮に送っていく事にした。

少しやりすぎだった。彼は足元がフラフラしていて、一人で帰するのは不安だったのだ。王宮内で何かあるとは思わないが、こんなぼろぼろの状態を衛兵に見咎められて、不審者として牢にぶち込まれかねないという事情もあった。たとえそうなっても克敏がすぐ牢から出してくれるだろう事は知っているが、そんな面倒な事になるくらいなら送っていった方がいいに決まっている。

ちょうどあちらの宮の方に用もあることだし、好都合だった。

埃塗れになったため着替えだけして、代英と共に克敏の宮に向かった。

早朝だが昼間よりもむしろ人通りが多い。それぞれの宮に勤める召使達が慌しげに立ち働いているからだ。

「お二人ともお強いですね。いつごろから剣を始めたのですか？」

代英の言いように苦笑した。私も玉祥も強いと称されるほどではない。

だが、代英は純粋な敬意の色を纏っていた。本心からの言葉だ。

「もう10年になりますよ。代英殿は？」

「わたしは4年です」

成程、道理で技術が拙いわけだ。

「習い始めるのが遅かったのですね。なにか理由でも？」

貴族の子供は、嗜みとして幼い頃から剣を習う事が多い。あくまでもたしなみ程度で、武官にならない限りそこまで腕を磨くというものでもなかった。剣を振り回しても無様にならない程度で、護身

術の代わりにもならない場合が多い。護衛を雇ったりと身を守る術は多々あるし、貴族なら剣の道に進まなくても文官として重用されることが多いので問題にはならないのだ。

それを考えると4年前から始めたというのは随分と遅いと言える。「克敏様のお側にお仕えしたかったからです。お側にお仕えしてお支えしたいと。ですから剣を習い始めたのですが、なかなか思うように上達しません」

克敏は將軍の一人。側に仕えるのもやはり武官が多い。文官が仕えていないわけではないが少数派ではあるし、代英の判断は正しかった。

剣を始めるのが遅かったから、あれほど遮二無二なっているのかと、私は納得していた。

足元の小石に躓き、代英はふらついた。よほど消耗しているようで、どう考えてもやりすぎだった。

私は代英の腕を掴んで支えた。

「ありがとうございます」

「いいえ。お気になさらず。焦らずとも技術はおいおい身に付いていきます。代英殿が技術を身につければ、私など足元にも及ばなくなりますよ」

「焦っているように見えますか？」

「そうですね。お話を伺った限りですと、そのように感じましたが「実は衢雲様にも同じ事を言われました」

これには苦笑するしかなかった。

「あの、早朝練習に混じって本当に迷惑ではないでしょうか？」

「いいえ。とても有意義だと私も玉祥……じゃない稼祥も考えていますよ」

うつかりいつもの呼び名を出しかけてしまった。

疲れて少々注意力が散漫になっているのかもしれない。気を引き締めなければ。

「有意義ですか？」



「私や稼祥は実力が同じくらいですし、剣の型もほぼ同じ。練習内容も毎日似たり寄ったりですからね。それも意味がありますが、代英殿のように私達にない型の相手と練習していると、自分の弱点など今まで気が付かなかつた事に気づけたりしてとても有意義です」

「それを聞いて安心しました」

代英は疲れた表情ながら嬉しそうに顔をほころばせた。

代英がやってくるまで、玉祥と二人で交互に打ち込みをして、強くなるための糸口を感じたのだ。今までは打ち込まれたらそれを確実に受け止めて、隙を見て攻撃するという動作ばかりだった。

だが、あれは根本から違う。

ギリギリまで引き付けてそれをかわしつつ打ち込む。考えた事もない攻撃方法だ。とても危険だが、効果絶大だ。それを身をもって感じた。そしてそれを実現させるためには、まだまだ腕が付いていないということもだ。

代英と玉祥の立ち合いがなければ、気が付きもしなかつただろう。わざわざ告げはしないが、代英には感謝してもいた。

そうこう話すうちに、克敏の宮に到着した。

「送っていただいてありがとうございます」

代英の言葉に、後ろめたい思いを抱きつつもそれに答えた。

「いいえ。また明日もお越しく下さい」

「はい。ありがとうございます！」

宮の入り口で代英と別れ、佑茜の宮に帰ると見せかけ裏に回った。目的は第五皇子の宮だ。

代英を送ってくるのは隣り合つた第五皇子の宮に近づくと口実だった。多少戻りが遅くなっても誰も気にしないし、克敏の宮付近にいても疑われないからだ。

宮の裏手にある木立の影で、手早く薄手の上衣を脱いだ。下に来ているのは下女達が着ているような衣装だ。正確には全く同じものではないが、似た風合いのものを身に着けている。上衣は簡単に丸めて服の合わせに入れる。形を整えて胸のような膨らみにした。後

頭部で高く結っただけの髪は軽く丸めて簪でとめる。簡単な女装の出来上がりだ。

女官に化けるのは無理でも、下女ならば難しい事はない。掃除や下働きをしている下女の全てを把握している貴族などいないからだ。しかも下女達は入れ替わりも激しく、多少見慣れない者がいても気にされることはない。だからわざわざ夜中に危険を冒して忍び込む必要はどこにもない。下女に扮して宮の中に入った方がよほど目立たないし、掃除をしている振りをしていればどこにいても怪しまれる事はないからだ。特に朝などは食事の支度やら身の回りの私宅のお世話等があつて、下女達自身もとても忙しくしている。そこに紛れ込むのは簡単な事だった。

第五皇子が皇帝より賜っている宮の名は紅扇宮<sup>こうせんきゅう</sup>。私はそこに裏口より侵入した。

いかにも外に用事があつてたつた今帰つてきたところですが、そんな振りをしている。ちょうど裏手は竹林となつていて、その更に向こうは下働きらの詰め所やら塵の捨て場所などがある区域だ。そこから王宮外に搬出されるし、食料なども運び込まれる。そんな外部から割合近い場所にあるというのが第五皇子の宮だ。

第五皇子はあまりにも何もしないがために、そこに追いやられたのだつた。克敏皇子<sup>くくびん</sup>が母の身分の低さを理由にわざわざ外縁部の宮を望んだのとは真逆の理由だ。

王宮に詰める貴族にとつて、第五皇子が皇帝より冷遇されているのは周知の事実。

むしろ自業自得だと私などは思うのだが、第五皇子の僻みや妬みは頭の痛い事に弟皇子の佑茜<sup>ゆうせん</sup>に向かう。

とはいえ、下働きらにしてみれば第五皇子の宮ほど利便性の高い宮はなく、かなり人気があるのだがそれはまた別の話。

竹林をわざわざ遠回りして道を通ってくるよりも、中を突っ切つていった方が早い。宮の周りの庭園を掃き清めていた園丁も、竹林から出てきた私の姿を見咎める事はなかった。軽く会釈して通り過ぎる。別の宮だつたらもうちよつと侵入が難しいのだが、ここほど楽な場所はないとほくそ笑んだ。

裏口から入ると直に厨で、忙しげに召使と下女が立ち働いていた。朝餉の準備中だ。私は下女に扮する事が出来ても、料理は全く出来ない。手伝えといわれる前にさつさとそこを通り過ぎた。

手ごろな掃除道具を拝借して、屋敷内を観察しつつ掃除を始めた。手桶に浸した雑巾を絞って床を拭き、棚の上や置物を叩きで埃を払つてから綺麗な布で丁寧<sup>ていねい</sup>に磨いていく。そんな姿はいたるところに

見受けられて、誰一人として私を不信な目で見るものはいなかった。今よりも幼く下女に扮する事が出来なかった頃は、童の格好をしているんなところに忍び込んだ。

童とは2種類あつて、貴族の子弟が皇子皇女方の遊び相手として連れてこられる場合と、下女や召使の見習いとして下働きをする場合がある。本来の私が前者に当たり、佑茜ゆうせきのお供に選ばれて以来早10年、童から側付、側付から武官と成長してきたのだ。そして忍び込んでいるときは後者の姿で、その童姿での潜入時に、潜入先の下女や召使達から掃除のイロハを仕込まれたものだった。

下働き童なのだから、掃除が出来て当たり前。潜入しているだけだからそんな技術は不要だ、とは口が裂けても言えない。結果私は鬼教官となつた下女や召使達から泣きながらそれを身につけさせられた。

現在、その時の技術が役に立っているので、人生つて何が起こるか分からないなとしみじみ思う。あの時の怖い下女と召使達よ、当時はとてつもなく辛かったが、今はものすごく感謝している。

宮の中の人間観察をしながらも、身を入れて掃除に励んでいた。下女達も召使達も、私の存在を不審に思っている節はない。私は掃除をしながら、少しづつ宮の奥と向かう。

内通の証拠品、そんな物騒なものを保管しておきそうな場所など限られている。適当にあたりをつけながらそれらしい部屋の中をのぞいていく。いくつ目かの部屋で、とうとうそれを見つけた。

国許にあつたときのままの入れ物で、おそらくその中に入っているとされた。

私はそれを手に取りそつと開けた。中には燻し銀で出来た極印と黄ばんだ書状。間違いがなかった。

ミシリと床が軋む音を拾った。誰かがこの部屋の方へ向かっている。私は手早くそれを片付けて、部屋の掃除をする。

通り過ぎるかと思われた足音は部屋の前で止まる。カラリと扉が開かれた時には、私は床を拭いていた。

耳がよくて良かったと安堵した。

だが、

「ここで何をしている」

低く問われた。

ギクリとしたが、不思議そうな様子を装っていった。

「掃除をしております」

訳：見てわかりませんか？

「この部屋は立ち入り禁止と申し伝えてあったはず。何をしていた」  
チツと内心で舌打ちをした。

なんて用心深いんだ。

「申し訳ありません。別室の方と勘違いをいたしております」  
床に伏して申し開きをした。

視線だけ男に向けるが、床と男の足先が僅かに見えるばかり。

だがそれで十分だった。不信の色は私に向けられていない。まだ疑われていないという事だ。

私は男の反応を待った。

「……もうよい。さっさと出てゆけ」

忌々しげな様子ながら、男はそういった。

「ありがとうございます」

今一度頭を下げて、掃除道具を手早く片付ける。

男の目はジツと私の一挙手一投足を観察していた。

入り口は一つだけ。そこをふさぐようにして男が立っているため、  
節目がちにして横を通り過ぎようとした。

だが急に腕が伸びてきて私の手首を掴んだ。

男の目は私の手に注がれていた。

サアツとその身を不信の色が纏っていく。気が付かれた。ギユツ  
と握られている手首に力が籠る。

「お前……」

みなまで言わせず、私は手にしていた掃除道具を男に向かってぶちまけた。

不意を突かれた男の手が緩み、私はそれを振り切って駆け出した。

駆け出した私の背に向かって男は怒鳴った。

「その女を捕らえよ！」

一瞬だけ、男を完璧に伸してから逃げ出せばよかったかと言う考えがよぎるが、だが武器を手にしていただけでもなく、人を呼ばれる前に無力化する事は現実的ではないと思ひ直した。

私はわざわざ建物の中を回って行くことはせずに、中庭を横断していった。このまま裏手に抜けて脱出するつもりだった。

中庭を掃除中だった庭師らが何事かと、ワラワラと集まってくる。そしてその背後から、宮の警備の人間も駆けて来ようとしていた。掃除道具をぶちまけたり、男の金切り声に人が集まらない方がおかしい。

「あなた、一体何事だ？」

庭師は困惑して尋ねてきたが、問答無用で殴り倒した。

「うっ」

強かに殴りつけた鳩尾を押さえて庭師はうづくまる。私は彼の手にしていた竹箒を奪った。

その間に私の周りには半径10メートル程の円を描いて人垣が出来ていた。走り寄って来ていた庭師や召使達は私が道具を奪うのを見て、それだけで気後れしたように私と距離をとってしまう。だが警備の者達はますます目を吊り上げた。

私は彼らの様子を冷静に観察した。

奴らのまとう色は警戒と……侮りだ。だれも女に対して本気で向かってきている様子はない。

それを見て取った私は、あえて一番人間の密集しているところに突入した。そこは警備の人間もいるが、同じくらい素人の庭師や召使もいる。私が彼らの間に乱入した事によって、軽く混乱が発生した。特に庭師や召使達は、人間の集中している自分達の方にわざわざ

ざ逃げ込んでくる事は無いと安心しきっていた為に、そのうるたえ方はかなりのものだった。

うるたえ混乱した彼らの中にあつて、警備の人間はとも動きにくそうにしている。当然それを狙っていた私は手にした竹箒を振り回しつつ、庭師や召使を盾に警備の者達の手をかくぐり、時には逃げ惑う庭師や召使を警備の者たちの方へ突き飛ばしたりと、あくどい手段さえ用いて人垣をすり抜けた。

人垣を抜けると、こちらにあわてて駆けつけてくる姿はいくつか見えるが、かなり疎らといつてよかつた。

その事に油断してしまつたのか、すり抜けたばかりの人垣から追いかけてきた者に背後から衣服を掴まれ、後ろ向きに転倒しかけた。あわてて足を踏ん張り転倒はこらえた。

「大人しくしろ！」

振り返るまでもなく、衣服を捕まえた者だ。

「よくやつた！」

「そのまま押さえてろ！」

側にいた警備の者達が口々に言い、加勢すべく動いていた。

私は手にしていた竹箒を柄のほうを後ろにして、背後に向かって勢いよく突き出した。

「ぐほっ」

狙い通り竹箒は男の腹部に突き刺さる。掴んでいた手を離し、前屈みになつたところを渾身の力で蹴り飛ばして、駆け寄ってくる男達に叩き付けた。それに数人が巻き込まれてもんどりうって倒れる。その隙に今度こそ囲みを脱出した。

囲みを抜けたものの、依然として危機を脱したわけではなかつた。裏手の竹林に向かつてひた走る。

後ろから追つ手は来るし、バラバラと遅れて駆けつけてきた者たちに遭遇したりと、一筋縄ではいかない。

例えば私の腕があまりよくななくても、本格的な訓練と日ごろの努力の成果によつて、1対1ならばその警備の者達のあいては難しくは



なかつた。逆に言えば、彼らはその程度の腕前であつたという事だ。これが克敏こくびんやその側近方こくびんだつたらこんなにすんなり逃げ出せなかつた。いや、彼らではなくともこの警備の者達こくびんが克敏こくびんの宮の警備の者達と同程度の錬度であつたら、囲みを脱出する事は不可能だつただろう。

心底冷や汗ものだつた。

取り押さえられる事無く裏手の竹林にたどり着いたは良いが、追つ手をまくには至らなかつた。竹林に入つて姿は一旦見えなくなつたものの、追つ手の気配はしつこいほどに付いて来る。彼らもまたこの竹林の向こうにある、下働きの詰め所そして王宮外への出入り口が存在している事を知っているからだ。

私の向かう予定の場所はそこではないが、そこに逃げたと見せかけるつもりだつた。そしてそのまま姿をくらまして、何食わぬ顔で佑茜ゆうせんの宮に戻る心積もりで、こちらへ逃げてきたわけだ。だが、ほんの少しでいいから彼らをまかない事には、変装を解く事も佑茜ゆうせんの宮に戻る事もできない。下働きの詰め所に紛れ込んで、そこで彼らをまくしかないと腹を括つた。

庭師から奪つた竹箒は竹林に入る手前で投げ捨てている。こんな物を手にしては目立ってしまったて紛れ込むどころではないと判断したためだ。たとえ追つ手をまけても、変装をといたそのすぐ側に竹箒が落ちていては、正体を見破られてしまうからだ。

後ろばかり気にして、前方への注意がおろそかになっていた。そんな事は言い訳にもならないが、その人影に気が付いたのは随分近づいてからだつた。人影に私はギクリと体を強張らせた。相手は私よりも大分先に気が付いていたようで、私が目を向けるなり挨拶してきた。

「よう。朝から随分と賑やかだな」

ニヤリと人の悪い笑みで言うその人物は、本来ならここにはならない相手だ。

そこに立っていたのは、佑茜ゆうせんだつた。

「なぜ、ここに？」

そう口にしてからすぐに気が付く。もちろんその理由は明白だ。

朝帰りしたところだ。この先には王宮外への出入り口がある。そして佑茜ゆうせんはそこから度々街に出て、朝帰りする事は珍しくなかった。今日もその口なのだろう。

そう、思ったかった。

「なにも昨日の今日で忍び込むことは無いだろうに。仕事熱心なのも大概にしとけよ」

はっはっはと声を潜めつつも佑茜ゆうせんは笑い飛ばした。

佑茜ゆうせんは忠誠心から調査に行ったといいたいらしい。

「返す言葉もございません」

事実とは違うが、それに乗らせてもらう事にした。忠誠心からではないが、朱晋しゆしんと第五皇子の繋がりを探るのは、佑茜ゆうせんの為にものだからあながち間違いででもない。

「さてあの追っ手をまかなければな」

近づいてきている気配に、佑茜ゆうせんは楽しげに呟いた。

追っ手をまくと言う事に関しては佑茜ゆうせんは天才的な冴えを見せる。

王宮を抜け出して街に繰り出すのをとどめる為に、衛兵や護衛がどれだけ苦労してきたか。その都度綺麗に出し抜いて、好き勝手遊び歩いている。かく言う私もそうやってまかれた事のある人間の一人だ。最近ではどうにかこうにか巻かれずについていく事が出来るようになったが、気を抜くとすぐさま姿を見失ってしまう。

佑茜ゆうせんに見つかったのは大きな誤算だったが、追っ手をまくにはこれほど頼りがいのある人間もない。

「と、いうわけだ。脱げ」

「……は？」

唐突なそれに私は固まった。

「こつという場合は古典的に、『こんな朝早くからお盛んね大作戦』に決まってるだろう」

さっぱりその思考回路がわからなかった。戸惑っていると佑茜の腕が伸びてきて、胸の詰め物（薄い上着）を抜き取られ地面の上に放り出された。抵抗する間も無いあつという間の早業だった。

「色気の無い詰め物だな」

「申し訳ありません」

面白くもなさそうな口調に、なぜだか謝ってしまった。

色気のある詰め物ってなんだろう？と内心で首をかしげた。

啞然とする私を無視して帯に手をかけてきた。

「な、何をするんですか!？」

「だから脱げと言ってるだろう」

すると解かれてこれも投げ捨てられる。

佑茜の意図はわかる。男女が睦みあっているように見せかけようと言う魂胆だ。そんな事判っていたとしても、その作戦に乗るわけには行かない。私が女役をやって、万が一本当の性別が佑茜にばれたら洒落にならないのだ。

「無理ですよ！絶対に見破られます」

特に私の手を見ただけで下働きではないと見破るような油断なら無い相手がいるのだ。こんな竹林で、朝から睦みあっているなんて不自然な状況に、騙されてくれるとは到底思えない。さつさと逃走した方が絶対にいいはずだ。

だが佑茜は全くそれに頓着していない。髪にさしていた安物の女の簪を抜き、髪を結び上げていた紐を解いていく。

宮廷では男も女も髪を伸ばすのが普通で、それを結いもせずにしたままにするのは酷くだらしない事だと言われている。もちろん私も髪を下ろして人前に出た事は無く、それどころか病気や体調不良以外で佑茜に下ろし髪をさらした事すらない。その常識を破って髪を解くのだから私は目をむいた。

グツと腕を掴まれて引き寄せられる。

「騒ぐなよ」

耳元で低くささやかれた。

息が耳に当たって酷くむずがゆい。思わず体を揺る。

追っ手はすぐ近くどころか姿を確認できるほど近くにあつて、今更逃げ出す事もできず佑茜の言いなりだ。

腰に腕を回され、グツと抱き寄せられる。

内心で悲鳴を上げた。

「ほら、俺の体に腕を回して抱きつけ」

耳に当たる息がくすぐつたくて、変な奇声を上げてしまいそうだった。

迷っている暇は無いと佑茜の背に腕を回した。

小さい頃はよく抱きついてた。一緒に遊んだ時や、剣の稽古や対術の稽古で触れ合う事も珍しくなかったが、初陣を経験する頃にはそんな事も無くなって、随分久しぶりの感覚だった。懐かしいと言つよりは困惑と言つのがピッタリだった。私の記憶の中ではあまり体格差がなかったのに、今の佑茜は私などより随分がっしりとしていて、私の体はその腕の中にすっぽりと包まれてしまう。隠しようにも無い程の体格差が出来てしまっている。

すでに男として押し通すのは限界を超えていたのだと、私は理解した。気が付くのが遅いくらいだ。

背中にあつた佑茜の手が後頭部に回る。柔らかな手つきで髪を梳かれた。

追っ手達は私達の姿を視認しているだろうに、この怪しい雰囲気  
に気後れして近づいてこないようだ。

佑茜はクククと楽しげに忍び笑っている。密着しているのでその息遣いがはっきり感じられた。私をからかって楽しんでいるのか、追っ手達を惑わしている事に楽しんでいるのか、真意はわからないが、酷く楽しんでいると言う事は間違いが無かった。

後頭部にある手に力が籠り、上向かされる。

えっ、と佑茜を見上げると佑茜の顔が間近にあつて、口付けられ

ていた。

私は驚きに目を見開いた。

佑茜ゆうせんの眼差しに甘い色は全く無く、油断無く辺りをうかがっている。

腰に回っていた腕が徐々に上がってきて、背中の中を彷徨っている。ゾワゾワした感覚を必死に耐えていると、ムギユツとわき腹をつねられた。

わき腹は私の弱点の一つだ。其処を軽くとはいえ抓られて耐えられなかった。

「ンムっ!？」

奇声は口がふさがれていたせいで、くぐもったものになってしまった。

佑茜ゆうせんの手はそれだけでは収まらずに、サワサワと抓った辺りを撫ですさっている。

「ン、ふ……ンム、ンンン」

くすぐったさに笑いがこみ上げてきて、堪え様とは思っているのだが、おかしな奇声が出るのを止められなかった。

足に力が入らず、佑茜ゆうせんの背に回した手に力を込めてしがみついた。口をふさぐくらいなら笑わせなければいいと思うのだが、佑茜ゆうせんは全くくすぐるのを止めようとはしない。

すると、背後で私達の様子を伺っていた追っ手達は気配を殺して立ち去っていくではないか。

こんな無様な逢引の振りくらいで簡単に騙せるなんてと、私は呆気にとられていた。

「佑茜様、何をするんですか！」

追っ手の気配が完全に消えるのを待って、頭を振ってその口付けからのがれ、抗議の声を上げた。

「匿ってやったんだろう」

佑茜は真意のわからない笑みを浮かべていた。

腕を突っ張って佑茜の腕の中から苦勞して身をもぎ離れた。佑茜に比べれば、私はかなり華奢な体格をしている。佑茜が本気で力を入れていたら、私では敵わず、その私程度の腕力で抗えるということとは、彼は本気ではないということだ。

からかわれたのかと、私は微妙な気になった。

「そんなことは判っています。そのことには感謝していますけど、ここまですることはないじゃないですか」

私は顔をしかめながら、乱れてしまった衣装を手早く調える。きちんと結ってあった髪は解かれ、しどけなく肩や背に垂れかかっている。上着と帯は引っぺがされ、地面に落ちていているし、上衣も腕にかかっているだけの状態で、後姿だけを見れば、あられもない女官の姿に見えなくもないかもしれない。

睦言の真っ只中のその女官が、まさか男とは思わないだろう。

そういう意味では佑茜の判断は正しかったし、不埒な真似を働こうとしていたわけでもなかった。

その証拠に、下穿きどころか上衣の下の衣装には一切手を触れていないからだ。

私は佑茜に男色の趣味がないことも知っている。

けれど大きな秘密を抱えている身としては、確実に寿命が縮まった。

佑茜は腕を伸ばして私の顎をつかみ、強引に振り向かせ言った。「それとも、突き出してやればよかったか？」

本気とも冗談ともつかない口調。

だが心のうちを見透かすような眼差しは、一切の甘さはない。

私はその物言いよりも何よりも、その眼差しにヒヤリとした思いを抱いた。

昔から佑茜は私を試すような物言いをすることがある。単なる戯言だったり、暗に圧力をかけてくるだけの時もある。今のような思わせぶりの態度やほのめかしに、私はいつだって平静ではいられなかった。まるでお前の秘密を知っているぞといわれているようで、一時たりともそれを忘れることが出来なかった。そういう思わせぶりの態度を、佑茜が人目がある場所で取るような真似をしたことは無かったが、他の人間に対してもそうなのか、その意図がどこにあるのか、付き合いの長い私にもいまだわからない。佑茜が私にするような試すような真似を、他にしているのかどうかすら知らないのだ。

私は動揺を押し殺し、見かけは平然として答えた。

「そんなことは言ってます。匿ってくださいったことは感謝していると申し上げたじゃないですか」

私の答えに満足したのか、それともその反応に望みのものを見つけたためか、佑茜は張り詰めていた気を緩め、にやりと面白そうに笑った。

「なら、感謝を行動であらわしてもらおうか」

私の顎にかかっていた指にグツと力がこもり、力任せに引き上げられた。顎で吊り上げられる形になった私は爪先立ちとなり、よるめいて反射的に佑茜にしがみついた。佑茜の顔が間近に被さってくるのに、ようやく状況を把握した私は、ぎよっと目を見開き、悲鳴のような声を上げた。

「佑茜様、私は男です！」

そのとたん、パツと顎をつかんでいた手を離した。

私は勢いあまってドサリと地面にしりもちをついた。

呆然とする私の前で、佑茜は肩をふるわせて笑っていた。

「ゆ、佑茜様……?」

「安心しろ。俺は男と寝る趣味はない」

笑いを含んだその声に、私の顔に朱がのぼった。

「からかったんですね!」

佑茜は私の抗議などどこ吹く風で、足元に落ちている衣装を拾い上げ、私にほつり投げた。

「ぶわっ」

頭から衣装を被ってしまい、じたばたと腕を振ってそれを剥ぎ取る。

私はその衣装が、引つpegがされた自分の上着であることに、ようやく気がついた。帯や髪紐が次々と投げつけられる。

「佑茜様に街で撒かれた時に、度々路上の片隅で抱き合う男女を見ましたが、よもや通りすがりの女性に恋人役を無理やりさせていたのではありませんね?」

私の言葉に、佑茜はニヤツと笑う。

「無理強いはしていない。ちゃんとお願いして快諾してもらった相手に頼んでいる。その後も恋人らしくしっかり付き合ってやっているしな」

つまり、その日の夜のお相手まで勤めてもらってるという事か。

果てしなくどうしようもないその言い草に、脱力のあまりため息を付きそうになってしまった。

「さっさと宮にもどれ。人に見られたくはないだろ」

不真面目な態度を消して、真面目な顔で忠告してくる。あんまりにも尤もすぎて反論できなかった。衣装や小物を抱え上げ、頷いた。「佑茜様、かくまってくださって、ありがとうございます」

照れているのか、そっぽを向いたままの佑茜に小さく頭を下げると、私は人目を避けるようにして去っていく。

私は警戒の眼差しで木々の間から振り返った。

追われていた理由を聞かれなかったな……。単に興味がないだけかもしれないし、考えすぎなのかもしれない。なぜあの時あの場所



にいたのか？

すでにその理由に気がついていられるのかもしれなかった。

その場にとどまった<sup>ゆうせん</sup>佑茜は、さわさわとゆれる枝葉をじっと見上げていた。

二若<sup>ふたわか</sup>には見せることのなかった冷酷な眼差しをしていた。

## 十四

誰にも見つかることなく自室に戻った私は、ホッと安堵の息をついた。

手にしていた衣装は一まとめにして卓の上に放り出し、椅子に深く身を沈める。放り出された勢いで、小さな紐や金具等の小物がばらばらと零れ落ちた。

無意識に胸元に手をやり、私は顔色を変えた。

がばつと身を起こし、胸元を除き見る。いつも上着の下に身に付けていた首飾りが、いつの間にかなくなっていた。

放り出していた衣装を取り上げ、紛れ込んでいないか調べはじめた。あわてている為か、乱雑な手つきで衣装をひっくり返している。ぼろぼろと落ちる小物達。肝心の首飾りだけは見当たらなかった。丹念に一つ一つ調べていくが、どこにもなかった。

他のものは一つとしてかけることなくあったというのに、首飾りだけがない。

私は窓の外を仰ぎ見た。ついさつき入ってきた場所だ。そこを唇をかんで見つめる。苦々しい表情になってしまつのが押さえられなかった。

この部屋を出る前は確かにあった。

「佑茜様とあった場所か、紅扇宮か……」

前者ならいい。あとで見つからないようこっそり回収すればいいだけだ。佑茜とあった場所でも、紅扇宮でも、そのどちらでもない場合は、多少厄介ではあっても、自分の通った場所をさらえばいずれ出てくるはずだ。

問題は紅扇宮であった場合だ。

私を特定する上で重要な手がかりを与えてしまったようなものだ。無論、回収することなど不可能だ。

どちらにしろ、今すぐ動くわけにはいかない。さっきの今で、警

戒されていないはずがない。ほとぼりが冷めるのを待つか、人氣がなくなるまで待つしかなかった。

やるせないため息一つで、自身の拘泥を振り切り、椅子に腰掛けた。

私は自分のうかつさが、たまらなく呪わしかった。

だらしなく背もたれにもたれ掛かり、一方の腕で目元を覆った。

いまさら身支度を整える気もおきなかった。どのみち昼食まで予定はないのだからと、暫らくそのままにしていることにした。

そう判断して、ぼんやりしていると、パサツと軽い小さな物音がした。

ごくごく小さな空耳かと思うほどの音量。あんなことがあったばかりだ。空いているほうの手で、服の中に隠し持った短刀をそつと抜き出し、あげていた腕を下げ音のしたほうをうかがう。

誰も何もいない。

細心の注意を払ってゆつくり身を起こした。部屋の中はもちろん、周囲にも怪しい気配はない。

気のせいなのか……？

そう思いかけたとき、窓の近くに落ちている小さな布の塊に目をとめた。

今まで存在しなかったものだ。

先ほどの音は、おそらくこれが放り込まれた音だったのだろう。

普段以上に気を張って神経を尖らせていたのに、まったくその存在を気取らせなかった。

ゾクリと背筋に悪寒が走る。

私も自分が鈍い方だとは思っていない。つまり、それだけ相手が上手だったということだ。

隠し持っていた短刀を鞘に収め、窓辺に寄った。

窓枠に身を隠しながら、外を窺った。

だが、やはり、どこにも人影はない。

今の奴に狙われたら、私ではひとたまりもないな……。

苦笑を浮かべて、私は投げ込まれた布の塊を手にした。

半ば予想してはいたが、布の中から失くした首飾りが出てきたときは、目を見張った。

おそらく警告か脅迫の類で、首飾りか何かを匂わすものだろうとは思っていた。だが、首飾りそのものを投げ込まれるとは、思っても見なかったのだ。

首飾りを包んでいた布を、穴が開くほど眺めた。華やかで美しい仕立てだった。最近城下ではやっているという飾り布の一種だった。意中の女性に送る贈り物としても人気がある。

実際にそれを街で女性らに買い与えた事があった。佑茜ゆうせんと克敏こくびんの張り合いで知り合ったというか、声をかけた女性にせがまれて、よくわからないうちにそれを贈らされる羽目になっていた。

高級な絹ではないが、上品で値の張りそうな一品だ。

首飾りを落としてまだ間もなく、よもや私に脅しをかけるために準備したのではないはずだったが、それともその様な馬鹿騒ぎをしていた事すら匂わせているのだろうか、と考えた。もし脅しの意味がないのであれば、普段からこういうものを身に付けているという事だろう。

相手は女か、よほどの洒落者か、抜け目のない女好きか、よほど執念深く私を付けねらっている暗殺者か。

誰が何の目的でこんなものを投げ込んだのか、色々ややこしい裏があるのは間違いないし、状況は一層悪くなっている。

それでも私は、首飾りが戻ってきたことが、純粹にうれしかった。首飾りは首にかける紐が切れてしまっていたが、取り付けてある女物の髪飾りには、一つの傷もついていない。

紐を付け直せば大丈夫。

ぎゅっと首飾りを握り締めた。

## 十五

昼食後におこなわれた佑茜配下の警備隊隊長達との会合中、皇帝より呼び出しを受けた。

皇帝の執務室に急ぎ参上すると、皇帝本人とその側近、そして佑茜の弟である第八皇子の凛翔がいた。

私は内心で首をひねった。

私とは全くと言っていいほど係わり合いのない人間ばかりである上に、凛翔は本来なら王都には居ないはずの人間ですらあった。

凛翔はつい先日か先々に地方へ視察に出かけたはず。

一応佑茜の副官としてはその兄弟達の動向くらいは掴んでいたから間違いはない。

王都に居ないはずの人間がなぜここに？私は無表情ながら必死に考えをめぐらした。

「呼び立ててすまないな」

皇帝の言葉に、私はとんでもないと返す。

形式ばったやりとりの末、皇帝は本題を切り出した。

「凛翔の視察に同行して欲しい」

意外なその台詞に、私はわずかに目を見張った。

動揺をそれだけでなんとか治め、答えた。

「佑茜様のご許可がなければ私からはなんとも申し上げられません」

「そのことであれば問題ない。あれには先に許可を取ったゆえ」

「そうでございましたか。であれば謹んで拝命いたします」

いつのまにそんな許可を取ったのかとか、佑茜はいつたいなにを考えて許可したのか、朝の今で行動が早すぎるとか、凛翔皇子はとうに出発したはずではないのかなど、色々問い詰めたいことは山ほどあったが、ぐっとそれをこらえて頭を下げた。

皇帝に訊ねていいような内容ではないし、いちから全部人に聞くのではなく自分で調べ類推する方が重要だ。

用はそれだけだとの事で、凜翔と供に皇帝の執務室を辞した。

凜翔の宮の執務室で今後の予定等を話しあう事になるだろうと、私は佑茜の宮には戻らずに、凜翔の後に付いていった。

だが、凜翔の足は彼の宮の方とは別に向かつていく。

私は無礼かと思いつつも訊ねた。

「どちらへ行かれるのですか？」

「ああ、先にご説明せず申し訳ありません。これからすぐに戻らねばならないのです」

すぐに戻る、の台詞で、視察に出発後、身一つで舞い戻って来たのだらう事が推察された。

わざわざ私を伴うためだけに？

不可解な理由に内心でますます首をひねった。

「他のご同行の方々は先行されておられるのですか？」

「そうです。昨夜遅くに、陛下より若飛兄上が絃菫殿（私のことだ）をお貸しくださる事を許可下さったと連絡を受け、私1人急ぎ戻って参ったのです」

「日時と場所をご指定下されば私から参りましたものを。殿下が自ら来られる必要はありませんまい」

「皆にもそう言われました」

「ではなぜ？」

不敬であるとは思いつつも、好奇心が押さええられずに聞き返してしまつた。

「前々から絃菫殿をお貸しく下さいと何度もお願ひしていたのですが、なかなか色よい返事を貰えず、ようやく若飛兄上から許可を頂けたのですから、若飛兄上のお気が変わる前に絃菫殿を連れ出してしまおうと思つたのです。……気分を害されましたか？」

その台詞に今度こそ本当に苦笑した。

「そのようなことはありません。若飛様（佑茜のこと）は気分屋にみえて、一度こうとお決めになられたらそれを違える事はない方ですよ」

「そうなのですか」

凜翔は素直な驚きの表情を浮かべていた。

実の兄弟さえもそうやって錯覚させる事ができる程うまく佑茜は振舞っている。

どこまでが知略の一端で、どこまでが本気でふざけているのか、私にも判らない時がままあるくらいだ。

気分屋だと周りに思わせる位は簡単だろう。

さすがに克敏は佑茜が気分屋ではないことは気が付いている節があるが、あれだけなんやかやと衝突していればそれも不思議はない。「はい。お疑いでしたら、克敏様にもお聞きください。私と同じことを仰ると思います」

凜翔と克敏とは母を同じくする兄弟。

凜翔とは初めてまともに会話したが、くそ真面目で真つ直ぐな処はさすが克敏の弟と思わせる。

文華妃のご教育の賜物であろう。

お会いしたことはないが文華妃の人柄が惚ばれる二人だ。

それにしても昨夜の内ということ、佑茜は一体なにを考えているのか。

今朝ならばまだしも、行動が早すぎるし、ただの思いつきで行動しているようにも見えるが、そんな可愛らしいたまじやないことは私が一番よく知っている。

だからこそ判らなくてより一層謎が深まったような気がした。

「申し訳ありませんが、紘菫殿も一緒に来て頂けますか？」

凜翔を見送ったら荷物を纏めて追いかけるつもりであったから、その台詞に面喰らった。

「お急ぎになられていることは重々承知しておりますが、私の方も用意がありますので」

「それでしたら、陛下の方より指示がいつているはずですが。後から紘菫殿の荷物や従者が追っ付け届く手配になっています」

「それでしたら……」

と消極的に頷いた。

ここまでお膳立てされていて、嫌ですなんて言える身分じゃないよもやこの様な執務着で旅に出る破目になるとは。

外套もない、普段持ち歩いている武器もない。

なによりも着替え等を手伝うはずの従者もない。

秘密を抱えている身としてはとんでもなくまずい状況だが、凜翔りんしょうに従うより他になかった。

用意されていた馬車の側には凜翔りんしょうの従者とその護衛が数人待ち受けていた。

その用意されていた馬車に乗り込み出発する寸前、私の従者の1人が駆けつけてきた。

皇帝よりの使いに話を聞き、取り急ぎ駆けつけたそうだと。

残った二人が荷物を調べ後から追いかけて来るとの事だった。

従者は着替えなど持つ余裕もなく、私の外套と普段身につけている武器だけを手に、この広い皇宮を走ってきた。

宮の中や渡り廊下などを通り抜ける許可のある私と違い、ただの従者である彼には立ち入りの許可されない場所の方が多い。

佑茜ゆうせんの宮からこの場までかなり距離がある上に、重要な建物等が犇ひしめいていることもあり、とんでもなく遠回りしてこなければならぬはずだった。

必死になって駆けつけてくれたようで、ゼイゼイと荒い息をついていた。

「凜翔様、この者は私の従者の伶れいです。同行させる事をお許し下さいますか」

「ええ。さすが絃菖殿しんしょうの従者ですね。すばらしい行動力です」  
凜翔は従者を誉めていた。

私もよくやったと誉めてやりたいくらいだった。

従者の伶れいは凜翔りんしょうの従者と共に御者台に座り、私達は慌しく出発した。

翌日の夜には先行していた者達に追いつき、さらに翌日は私の荷



物を持った従者達も追いついて、漸く視察の体裁が調ったのだが、後から合流した従者達から驚くべき報告を受けた。

「克敏さまが負傷された!?」

私の従者達もたらした情報に一行は騒然となった。

従者達はしつかり頷いた。

「紅扇宮に侵入した賊と打ち合つて、その際に怪我をされたようです」

「兄上の怪我は酷いのか!？」

凜翔は勢いこんで訊ねた。

「いえ。お怪我自体は大した事がなく、お命に別状はないとのことです」

「そうか」

凜翔は目に見えてほつとした様子を浮かべた。

「それで、賊は?」

私は一番重要な部分に言及した。

「それが取り逃がしたそうです」

克敏が出張つてなお取り逃がすとはものすごく意外な結果だ。

「1人も捕縛出来なかつたのか?」

「それが、賊はたった1人。白牙と名乗っていたそうなのです」

耀は重々しく告げた。

本当なのかと條に目で問えば、頷きが返された。

「その者は兵に幾重にも取り囲まれ、なおも不適に笑い小ぶりな箱を掲げてこう言ったそうです。『第五皇子書琴の大逆の証、テグシカルバの極印を頂いていく。皇子でありながら敵国と通じ、国と民を裏切った世紀の逆賊。王家に組するのは本意ではないが、破壊と恐怖を巻き起こすを見過ごすことも出来ず参上した』と」

極印の件に冷や水を浴びせられた様な心持になった。

間違いない、あれだ。

白牙は第五皇子への切り札を手に入れたと同時に、私と私の国を

滅ぼすに足る証を手に入れたことになる。

無意識の内に服の下に下げている首飾りに服の上から触れていた。私は周りに気が付かれない様、さりげなく手をどかした。

「佑茜様からは……」

「耀、若飛様だ」

私は従者の言葉を遮り訂正した。

「失礼しました。若飛様はこちらのことは気にせず、そのまま視察を遂行するようにとのお言葉でした」

「そうか。ご苦労だった」

従者達を下がらせた。

不味い事になったと思う。

少なくとも早めに指示を出しなおして、第五皇子と朱晋を嵌めるための罠に変更を加えなければこちらが窮地に陥る羽目になるだろう。

顔色に出したはずはないのだが、思わず考え込んだ私に不審に思ったのか、凜翔は尋ねてきた。

「どうされました。賊がそれほど気がかりですか？」

誤魔化すのも限界があるので、私の知っている情報を教えることにした。

「白牙と名乗っていた事が気にかかります。凜翔様は白牙について何かご存知ですか？」

「いえ」

凜翔は知らないと言を振る。

まあそうだろう。

あまり上層部に回ってくるような話ではないからしょうがない。私知っていたのはそういった情報を個人的に集める必要があったためと、佑茜が警備隊を統括しているという立場にあるという2点のためだ。

「白牙は所謂義賊と目されている存在です」

「義賊？」

凜翔は怪訝な顔だ。

「法の下で権力を不当に振るう官吏、財を片手に悪辣な取引を行う商人、例を上げればキリがありませんが、白牙はそれらを法に悖る行いで誅しております。時には財産を強奪し、時には悪行の証拠を衆目に晒して処罰させる。それらの行為によって一般の民からは白牙は絶大な信を受けています。そこらの貴族など太刀打ちできないほどに、です。ともすれば皇帝陛下よりも、民は白牙の言葉を信じるやも知れません」

「つまり、書琴兄上に大逆の疑いありと、皇帝陛下は調査せざるを得ない事になると仰るのですか。例えハッキリした証拠を見つけれずとも、大逆を企てたと処分せねばならぬような事態になる可能性がある、そういうことですね？」

凜翔は神童といわれるだけの事はあつた。

私の言いたい事をすぐさま飲み込んでいた。

「そうです。白牙を捕らえ、その『大逆の証』とやらを白日の下に晒し、明らかに捏造であると断言できねば、そうなるでしょうね。

先代皇帝の御世の大粛清から幾ばくも経っておらず、未だ帝国は不安定な情勢にある。その中で民の反乱が起こっては、テグシカルバの対応どころではなくなってしまう。下手をすれば帝国が割れますよ」

私の見解に、凜翔までもが難しい顔になる。

「その白牙という者は何者なのですか」

「わかりません」

「判らない？」

私は頷いた。

「白牙というのはかなり大きな組織です。中には貴族がその資金源になっている場合もあるようです。それなのに、肝心の白牙という組織、その人間がどういふ存在なのか、未だつかめません。通常、関わる人間が多くなれば成程、その全体像や中心人物の情報など流出し易くなります。ですが白牙にはそれが無い」

事実、私も自身の手のものを潜入させようとした事があったが、失敗に終わっている。

白牙の人間に接触させても、誰一人裏切ろうとしたものもなかった。

「では、賊が白牙の名をかたっているという可能性は？」

「それでしたらありえるでしょう。しかし、今までもそういった存在は居りましたが、その場合は白牙がその偽者を倒して衆目の元に晒し、自身の潔白を証明するのが常です。続報を待たねばなんとも言えませんが、それがなければやはり白牙本人の仕業であると見るのが自然だと思います」

だからこそ不味いのだ。

皇帝は間違いなく第五皇子の周辺を調査するはず。

そして私が指示してでつち上げさせた『謀反の証拠』を見つける。朱晋しゅうしんを嵌めるためのものでもあったので、その繋がりも見えてくるはずだ。

そうなれば自然と私にも疑いが及ぶ。

本来ならここまで大事にならない予定だった。

第五皇子が皇帝に私の反逆を言い立てて、実際に調べればそれは全くの出鱈目で、私の用意した罫で第五皇子と朱晋しゅうしんが謀ったということになる目論見であった。

皇子という身分ある人間の仕業を皇帝とその近辺が公表するとは思えず、内々に処分する事になるはずであったが、白牙という存在が絡んできてはそうもいけなくなっていた。

王都に残してきた繋ぎ役に指示内容の変更を送った。

今はそれ以外に打てる手立てはない。

私が何か指示を出さずとも、彼ならば状況の変化を的確に対処してくれるだろうと信頼はしているが、念のためだ。

そもそも事件から大分たった今頃指示を出したって遅いのだし、まさに気休め以外の何物でもなかった。

様子を見に凜翔の泊まっている部屋に顔を出すと、凜翔はボンヤリと窓の外を眺めていた。

「克敏様が気になられますか？」

凜翔は自嘲気味に頷いた。

「若飛兄上の言葉を信じていないわけではありませんが、やはり不安にも感じます」

佑茜が信じられないというのは私には心から理解できたのでそれには何も言わずに、

「克敏様は無謀な真似をなさる方ではありません。例え手傷を負わされたとしても、そこまで酷い怪我をなさった可能性は低いと思います」

ガラス玉のような濁りのないまなざしを向けられた。

「衢雲殿をはじめ優秀な側近方もおられます。あの方々がついておられて、克敏様が酷い目にあわれるということはまず有り得ません。また、克敏様が酷い怪我をされたのなら、若飛様はすぐさま戻ってくるよう伝言なさります。視察を続けよと仰ったからには、怪我の程度は軽いと決まったようなものですね」

「若飛兄上を信じておられるのですね」

それには苦笑した。

「信じている、というよりも、知っている」と申し上げるべきだと思います。あの方の噂は大半は事実ですし、色々難しい方ですが、人としての優先すべき事柄を間違えるような方ではありません。ご安心ください」

凜翔や克敏などは皇族としては非常識なほど常識人でまともだが、そんなのは貴族も含めごく少数派だ。

事実、他の皇子方は、そういう”人としての常識”が欠如していたりする。

その中で、佑茜は最も欠如していそうな人間なのに、意外と常識を弁えていたりする。

本当に不思議な話ではあるが、それは事実だった。

気に入らない相手に、佑茜がとてつもなく冷酷であるのは間違いない。

気分屋であることも間違いがない。

だが、私や玉祥に対して、そういう普通の配慮は何故か普通に出て来たりする。

克敏に対しても、同じだった。

將軍職としての面子をつぶすような真似はしないし、克敏の周りで大事件が起きているときにわざわざちよっかいをかけたかもしれない。

地位や立場を危うくするような、”悪質”な嫌がらせなどもしない。

克敏が他の兄達に追い落とされそうになっていた時も、特に手を貸したりはしなかったが、足を引っ張るような真似もしていなかった。

その間は妙なちよっかいすらかけなかったのだ。

その問題が解決したとたんまたちよっかいをかけたので、判っていてそれをやっているのは間違いない。

どれだけの人間がそれに気が付いているのか未知数だが……

「絃菫（私）殿はなぜ白牙の事をご存知なのですか？」

単刀直入な答えにくい質問だ。

「若飛様が王都の警備隊の半分を統括されている事はご存知でしょうか？」

「はい」

「白牙と警備隊はなにかと係わり合いになる事があるのですよ」

凜翔は訝しげに首を傾げる。

「最近では少なくなりましたが、警備隊が賄賂を貰って不正を見逃したりということがありました。それを白牙によって衆目に晒されるという事件があったのです」

「そのようなことが……」

凜翔が絶句していた。

役人の不正など珍しくもなんともないだろうに。

これは紛れもない事実だ。

救いなのは、その被害（？）にあったのは第三皇子が統括している部隊の人間だった事だ。

警備隊自体の評価は地に落ちたけれど、佑茜の統括している部隊についてはそれほど民から白い目で見られることはなかった。

「他にも、警備対象にある商家や貴族の邸が襲撃される事もあり、その取締りもまた我らの責務ですから、自然と情報は集まります」

「若飛兄上にとっては厄介な相手という事ですね」  
まさしくその通りだ。

「困った事は、白牙に対する調査もですが、彼が、彼の組織が襲った相手までもが、警備隊の調査対象となってしまうことです。その所為で、警備隊員達の仕事が増えているんですよ」

おかげで佑茜配下の警備隊はここ暫くはずっと過密勤務状態にちかい。

腹立たしいのは、第三皇子が統括している部隊は以前と変わらず勤務していて、その不公平感が尋常ではない事だ。

第三皇子に直談判しに行けば、白牙なぞほうっておけばよいだろ



うとのたまわれた。

そもそも不正を発見するための監査というものが、全く機能していないのが問題なのだ。

おかげであつちに不正、こつちに不正。

そいつらを取り締まるには関係各所に根回しして、警備隊員の集めた証拠品を突きつけて法務官を強引に動かして、ようやく逮捕。

民の官や貴族への信用が全く存在しないものも無理がないし、白牙が絶大な信頼と人気を得ているのも最もな話なのだ。

「私からもお聞きしてよろしいですか？」

「なんでしよう？」

「なぜ私をご指名下さったのでしょうか？凜翔様の配下にも優秀な人材ならば幾らでも居られるでしょう。凜翔様配下に居られずとも、克敏様にご相談なされば、すぐにでも手配くださったはずです」

「確かにその通りです」

凜翔は頷いた。

「兄上から、稼祥殿（玉祥のことだ）や紘菴殿とお近づきになっておいた方がよいと助言を頂きましたからです」

凜翔は真つ直ぐ私の目を見てそう言い切った。

「若飛兄上は私のことなど眼中にありません。若飛兄上だけではありません。他の兄上方もです。ですが私自身は、若飛兄上をはじめとする他の兄上方と家族らしく近い関係を築きたいと思っています。そう兄上に相談申し上げたら、若飛兄上と良い関係を築くのであれば、稼祥殿や紘菴殿と良好な関係を築く事が近道だと教えていただいたのです」

なるほど、将を射んとすれば馬を射よの精神なのだな。

理解はしたが、それが上手く行くとは思えなかった。

私や玉祥が誰と親しくなろうと、佑茜は興味のない相手にはとことん冷淡な態度を取るのです、その考えは少々どころかかなり甘い。

それ以上に凜翔の語る理由は胡散臭いが、彼の表情はとても真剣なもので、何よりも纏っている色からも嘘をついているとは思えな

かった。

こんなにも明け透けで真つ直ぐな性格をしていては、王宮で生きていくのは難しいのではないかと、老婆心ながらそう思ってしまう。

まともに会話をしたのは今回の件が初めてだが、できれば権力を巡る陰謀などに巻き込まれずに平和に暮らしてもらいたいと願う程度には凛翔りんしょうに好感をもった。

さらに二日ほどかかって視察地に到着した。

「ようこそお出で下さいました」

頭髪が薄く非常に恰幅のいい男が出迎えてくれた。

都督自らが出迎えに立っていたのだ。

「ようこそお出で下さいました。長旅でお疲れでしょう。部屋を用意しておりますので、そちらでご休憩ください」

ひとしきり挨拶が終わると、そういつて先頭に立って案内をしようとした。

私はそれを止める。

「まずは税込と収支報告書を見せてください」

都督は不快そうに顔をしかめた。

「まずは殿下に旅の疲れを落とさせていただく方が先決ではないでしょうか？」

「休憩ならば、報告書を見ながらでもできます。それとも、それらの資料も用意されていないのですか？」

視察なのだから、当然それらの品は用意されていなければならない。

「だが、都督の周りの官僚達は困惑気に顔を見合わせていて、それらが用意されている雰囲気ではない。」

なるほど、そういうつもりか、と内心でため息をついた。

「君、各庁を回って資料をかき集めてくるように」

都督の側の文官に、強引に命じてしまう。

「は。ですが」

私に命じられた彼は、チラチラと都督をうかがう。

「その様な勝手な真似をされては困ります」

都督は非難の声を上げた。

「何が困るのですか？」

冷静に指摘すれば、

「彼等は私の部下です。勝手に人員を使われるのは、困るのですよ」  
「それは失礼した。では、命じてください。今、すぐ」

冷徹に告げれば、都督は僅かにムツとした様子を浮かべた。

「判りました。今から資料を集めてまいります。私の代わりにお前は殿下方を部屋へご案内しなさい」

「資料を集めてくるのはその者に任せ、貴殿にはその間に今後の予定について教えていただきたい」

「しかし、」

「それとも、そのものは各庁を回って資料を集める事すら出来ない  
とでも？ここはその様な役立たずを雇用しているのですか？」

「いいえ。そのようなことはありません」

「では構いませんね？一刻もあれば十分でしょう。その間に今後の予定について詰める事にしましょう」

「それではお疲れの殿下をおやすめすることが出来ません」

凜翔の側近方も、私を苦々しく見ている。

「身体を休めるだけであれば、貴殿の話聞きながらでも十分です。

第一、視察にかけられる日数は限られているのですよ」

私の言葉に皆は不満そうな様子であったが、他でもない凜翔がそれに同意した。

「絃菫殿の仰るとおりです。都督、私のことならば気にせず、彼の言うとおりにしてください」

この場で私よりも位が上なのは、凜翔のみだ。

属国とはいえ、王としての地位は決して低いものではないし、実際に佑茜の配下として、帝国内部での地位も持っている。

だからこそ私の言葉に誰一人逆らう事はできない。

そして凜翔がそれに同意してしまえば、決定事項となるのだ。

「御意」

都督はそう答えた。

その全身を怒りの色が覆う。

それだけ強引に事を進めたのだから、当然の反応だった。

「……の七施設となります」

都督は言葉を切って顔を上げた。

「二日目に回る施設と三日目に回る施設ですが、なぜこのような順番なのですか？最初に東の方にある施設を視察後、南部地方の視察、そしてまた東、次に北。移動距離を考えると、無駄が多いのでは？」この近辺の地図を前に、私は疑問をぶつけた。

「それは、ですな。それぞれの施設をご理解いただくには、その順番が一番なのですよ」

苦しい説明だった。

つまり、そうやって時間を稼いで、視察を有耶無耶にしてしまおうという目論見だ。

私の国で視察した時も、同じ様な手を使ってきた官僚がいた。どこも似たようなことを考えるものだと感心するな。

よもや上司の査察を交わす手本本が出回っているのだろうか。

「そうですね」

「ご理解いただけ何よりです」

「では、この地方で抱えている問題点についてお聞きします」

「問題点、ですか……」

都督の顔色は変わらないが、焦っているのが丸判りだった。

こういうとき、自分の能力がとても便利だ。

身に纏っている色がパツと変わって、疎ましげなものになった。

随分と都督にとつと拙い事があるらしい。

「視察先の施設はどれも成功例ばかりで、この地方における問題点が全く見えてきません。例えどれほど国が富もうとも、何らかの問題が出てくるものです。それらについて教えていただきたい」

「しかし、その様な事は、視察とは無関係では？」

都督は無駄な抵抗をする。

「よもや問題点を把握しておられない、と仰るのか？」

「滅相ありません」

管理能力を問うような事を言われると、権力を放したくないと考えるのならば、都督としても否定しなければならぬだろう。

意地の悪い質問だ。

「では、教えていただけますね？」

凜翔<sup>りんしょう</sup>がハラハラしながら私達のやり取りを見ていたのが、とても印象的だった。

「では、都督よりお教えいただいた問題地点のうち、先程上げた四地点を視察先に追加します。そのかわり当初の視察先予定であった樹丞の視察は中止とし、それに伴い大幅な視察順の変更を行う事でよろしいですね？」

私の言葉に都督は苦々しく頷く。

もう少し感情を隠す努力をすればいいのにと余計な事ではあるが思った。

凜翔<sup>りんしょう</sup>は困ったように私と都督のやり取りを見守っているだけだ。

特に私に注意を促したりはしないということは、彼も私の主張に理があると多少なりとも考えているからだろう。

話に一段落が着き、出されたお茶を啜りながら体を休める事ができた。

一応私とて凜翔<sup>りんしょう</sup>やその配下の人間が多少なりとも疲弊している事は判っている。

無茶を通したのは間違いなく私なのだ。

部屋を辞去しようとする都督を引き留め、軽い雑談をしていた。

お互いに忌々しく思っている間柄で、顔を合わせているなど苦痛でしかないが、あえてそれを選択したのは都督に資料集めに手を加えさせない為だ。

折角無理を押しして資料集めを下っ端に命じさせたのに、都督を簡単に開放しては無意味になってしまふ。

白々しい会話を続けていると、さほど時を置かずに資料集めを命じていた官僚が戻ってきた。

手には紙束が。

「殿下にお見せする前に一度私が確認いたします。もう少しだけお待ちいただけますか？」

ははは、そんな馬鹿なことを許すはずなからうて。

「いいえ。それには及びません。結構です」

「ですが、万一足りない物や、写しも必要でしょう」

「足りない資料があればまたお願いしますし、その様なお手数をかけずとも、写しは自分達の手で行いますのでご案内なさらずとも結構です」

「その様な事をご一行にさせるわけには……」

「お気遣いはありがたく頂戴しますが、そこまで固辞するとは、なにか理由でもお有りですか？」

そりゃあるだろう。

迷惑そうに見ていた凜翔りんしょうの配下も、私と都督のやり取りに不信なもの感じたのか、困惑している”色”を僅かに見せているが、さすが凜翔配下りんしょうだけあって、顔色でそれと悟らせない。

「とんでもありません。資料を用意していなかったのはこちらの失態ですので、これ以上無様なところをお見せするわけにも参りません」

「確かに今回の事はそちらの落ち度ですが、それを咎め立てする心算はありません。また通常業務に加えて、私達の訪れに対応するための業務などがあり、こなさねばならない執務も普段より多くなっているはずです。その上に資料の写しなどの仕事を官僚達に割り振るのは得策ではないと思っています。都督のお気持ちは有難いですが、配下の者達の健康管理も重要な職務ではありませんか？」

「仰るとおりです」

「ならば写しは私どもで取ると言うことでよろしいですね？」

強引じょうしんに頷かせ、書類を手に入れた。

「條じょう。どの位写しに時間が掛かる？」

私の従者の1人に手渡す。

「夕方までには終わります」

ペラペラと受け取った紙を確認し、従者は答えた。

都督の纏う色が悪巧みをする時のものになった。

……本当に判り易い。



「凜翔様、写しが出来上がるまで時間もありませんので、ご休憩されますか？それとも庁舎内の視察を致しますか？」

最初の畏は張り終えた。

だから凜翔がどちらを選んで構わない。

私の希望としては庁舎内の視察をしたいのだが、さすがにそろそろ休憩に入らないと気の毒なのも判っている。

今回に限らず、視察の時間がないのは紛れもない現実だ。

その限られた時間に問題を洗い出し、可能な限り対処し、検討に回すなどしなければいけない。

明日以降は各地の視察に出かけなければならぬ。

庁舎内の人間関係、特に権力バランスなどの調査は今日しか出来ない。

表面的なことしか判らずとも、実際に見て観察する事で察する事はいくつもあるのだ。

「視察を致しましょう。庁舎内を視察できるのは今日を置いておりませんから」

凜翔はあっさり言う。

克敏と同様随分と生真面目な皇子なのだ。

少しだけ見直した。

都督の先導の元庁舎内を練り歩く。

凜翔の配下の人員は荷物の整理などで先に今日の宿へ移動している。

護衛が数人いるだけだった。

庁舎内を回って可能な限り官吏達に声をかけていった。

都督には随分と後ろ暗いところがあるということと、もう一つ、この庁舎内にはそれに反発する相手が少なからずいた。

それもかなり高位に食い込んでいる。

話しかけた官僚達の反応でおおよその事は見て取れた。

こういう時に自分の能力が非常に便利だと思う。

都督に推薦された視察先の話振ると、大概は殆ど反応がないのだが、中には侮りや警戒が見えた。

そして反発。

侮りは私が都督の言いなりとなるしかないだろうと言う事だし、

警戒は私の派手な行動が呼び込んだもの。

だけど反発は違う。

都督側の人間だと思っっているから、だ。

ここには随分と色々込み入った事情がありそうだ。

慎重に行動しなければ、どんな状況になるか、下手をすれば状況を悪化させかねない。

民からすれば為政者側がバタバタしていて良い事は一つもなく、そしてただでさえ色々困った事になっているだろうから、民のためにも絶対に悪化などさせるわけにはいかない。

それを考えると調査に割ける時間も人手も何もかもが足りなかった。

「お手伝いいただきありがとうございます」

條は手伝つてくれている相手に礼を言った。

「いや。それほど急がなくても、まだ時間はあるだろう？」

相手は手を止めることなく困惑した様子で言った。

凛翔の護衛の1人だった。

「凛翔殿下にお渡しする分と、ウチの若様にお渡しする分の2部作らなければなりませんから」

條はにこやかに答えた。

手伝つていた護衛は首をかしげた。

「しかし、先程一度に2枚を……」

條は人差し指を立ててシツと合図した。

意味深な目配せを受けて、手伝いをしていた彼は黙る。

既に1部を写し終えていて、今は2部目に入っていた。

1部目を写す時に、紙を2重にして行っていたのだから、十分なものではないかと護衛は思ったのだ。

最初に写した分のそれは、片割れは條の懐の中に、もう片割れは机の上でひとまとめにしてある。

手伝いをしていた護衛は、その机のうえにあるほうの紙の内容を精査しているところだった。

暫くもくもくと作業をしていると、女官がやってきた。

「お茶をお持ちしました。少しご休憩されてはいかがでしょう？」

條はにこやかに迎え入れた。

「お気遣いありがとうございます」

根をつめて疲れていたので護衛も一も二もなくそれに賛成する。

護衛の男と共に手早く机の上を片して書類を脇に積み上げる。

女官はその開いた場所に茶器を並べていった。

2人とも席についてそれを見守っていた。

「あー！」

ガチャン！と女官が手を滑らせて急須を取り落とした。

机の上で無残に割れて、中に入っていた茶が豪快に撒き散らされる。

そしてその茶は一気に机の上を広がり、脇に片してあつた書類が水浸しとなつてしまった。

護衛はすばやくその紙を抱え上げたが、既に使い物にならなくなつていた。

墨が滲み判読不可能な状態となつていたので。

写している最中の紙も、写し終えた紙も、原紙となる紙も、どれもが判読不可能。

作業を継続する事はできない。

「申し訳ございません！」

女官は床の上にひれ伏した。

條は苦笑つて女官を立たせる。

「殿下方に報告して、指示を仰ぎましょう」

女官は知らせてきますと慌てて走つていった。

それを見送り、條は人の悪い笑みを浮かべた。

護衛は厳しい顔つきのままだ。

「困りましたな」

「大丈夫。予定通りですよ」

訝しげな顔を向けてくる相手に、條は説明した。

「都督はなんとしてもこの報告書を凜翔殿下に渡したくなかつたのですよ。妨害が入る事は予測の範囲内です。最悪、実力行使に出る事も考えられました。だからこそ若様はあなたを私の手伝いに貸して欲しいと凜翔殿下に頼まれたのです」

と、自分の懐を指し示す。

啞然としつつも、彼は成程と頷いた。

「そこにあるものは、ないものとして振舞う、そういうことだな？」

「ご慧眼御見それいたします。それから、何も説明せず危険な事に

巻き込んで申し訳ありません」

「なんの。凜翔様をお守りする事も、その懐の中身を守ることも、どちらも我の使命。もとより護衛は側に控え万難を排すが使命で、主は態々護衛にこのような危険があるぞと一々伝えるなどありえん。そのときその状況に応じて柔軟に対処する事が求められるもの。むしろ実力行使に出られる可能性を考慮したうえでの指名とあれば、我の腕を信用しての事。誇りこそすれ責める言葉などあるはずがない」

條が頭を下げると、護衛は渋く告げた。

「都督はまた資料を用意する事になるだろう？」

「ええ。恐らくそうなるかと」

「その都督の出してきた資料と、どれだけ違うものか見ものであるのだな？」

ニヤツと條は笑みを浮かべることでそれに答えた。

「楽しみな事だ」

男達はしてやったりと満足げに頷きあった。

随分と順調に事が運ぶ。

怖いくらいだ。

今日の宿舎に向かいながら、そう考えていた。

都督から書類を駄目にしてしまったので、明日の朝に届けると確約を受けたのだが、よもや無事な書類が存在しているとは思っても見ない様子だった。

女官の粗相を装って書類を駄目にしようと言うのは、平和的でも現実的だ。

それは評価してもいい。

今までには事故を装って従者達に直接的な危害を加えようとする馬鹿や、暴漢を嚇けるなんてとんでもない阿呆もいたから、それらに比べれば非常にまともな神経をしている。

もっとも庁舎内でその様な事をすれば即首が飛ぶ。

むしろ首謀者が誰かなど聞かなくてもわかる時点で能力の無さが窺い知れると言うものだ。

前記の二タイプはまともに視察をする前に即刻処分をしてやったからある意味手間が省けてよかったが、さすがにそこまでの頓馬ではなかったようだ。

都督の見ていない場所で、従者の條からこっそりと書き写した書類を受け取った。

明日の馬車の中でも凜翔と共に、都督の出してきた書類もあわせて精査するとしてよう。

大人しいと評してもよい凜翔を思い、つい苦笑した。

佑茜が視察に行く場合は、絶対にこんな風に事は運ばない。

例えば今後の予定をつめて都督と話し合っていたときに、佑茜ならばつまらんとか言って1人で護衛もつけずにフラフラと席を外すくらいはする。

庁舎内を視察するときだつて案内をする役人達をからかったり、わざとませつかえしたりと、普通に終わる事はない。

話し合いで決まった視察先も、まるで思いつきのように変更されるし、予定通りに事が運んだ事はない。

苛立たしいのは滅茶苦茶にしているだけに見えて、その実酷く効率が良いものになる事だ。

佑茜ゆうせんが見たいと言い出した視察先ではまず大きな問題を発見するは、無理難題を述べているようで、ウツカリ役人達がボ口を出すように誘導している。

どこまで判つていやつていて、どこまでが偶然なのか。

暗愚の振りをして行われるそれに、私はただ踊らされるばかりだ。それが途轍もなく悔しい。

責任ある地位が面倒でわざと暗愚の振りをしている阿呆か、そういう振りをする事で何かを狙っている野心家か、それとも本当に偶々上手く行っているだけで真性の愚者なのか、判然としないのだ。

凜翔りんしょうは非常に真面目で善良な皇子だがいかんせん素直すぎで、頭は良い様だが、人を疑うと言う事ができない性質で、簡単に騙されてしまいそうだ。

そういう部分を補える側近がいなければ、王宮内でやっていくのは難しいかもしれない人だ。

今までは兄の克敏こくびんがそういう分野を補っていたのだろうが、いつまでもそのままでは済むはずがない。

だからこそ私や玉祥たましょうと知己ちきを結ぶよう進言したのだらう。

私は必要以上に人の裏を見ようとするし、玉祥は逆に人が良すぎりんしょうて凜翔りんしょうにその”人の良さ”がもつ危うさを教えることになるはずだ。

案内された宿舍の貴賓室に入る時だった。

目の前に男が現れた。

後姿だからはっきりとは判別できないが、見たことのない男だと

思う。

官服とは違い、私服を緩く着崩し、だが粗野な雰囲気のない男だ。男の背に金属のきらめきが走り、直後赤い線が背中に真つ直ぐ浮かび上がる。

切られたのだと私が認識すると同時に、男は消えてなくなった。ほんの瞬きほどの短い幻視。

この部屋で、先程の男が誰かに切りつけられると言う情報しかわからない。

私自身に関係があるかどうかすら不明だ。

これは近い将来確実に起こる現実だ。

この未来視もまた、私の能力の一つだった。

だが、感情の色を見ることと違い、いつ起きるのか、どういう切欠で起こるのか、それらはさっぱり判らない。

しかも見ることでできるのは、極めて断片的な情報。

それがどの位先の事かさえわからず、かつ、どれほど努力しても変えることの出来ないもの。

私にとってはなんら意味のない能力だった。

この能力は、父から継いだ力だ。

様々なものを見て聞く。

それが一族の能力。

この力があつたからこそ、一族は王族として君臨し続けてきた。

この力があつたからこそ、今まで帝国に飲み込まれず国を維持し続けてこられたのだ。

もちろん、私だけではなく、弟も妹も似たような能力を持っている。

似て非なる忌々しい能力だ。

私の能力は、感情を色として見、時折未来を垣間見るものだ。

弟の能力は、怒りや嫌悪など負の感情を、その思念を、言葉として聞き、今の世界を遠見するもの。

妹の能力は、悲しみや嘆きを聞き、過去の世界を見通すもの。



三つ子とはいえ、それぞれの見るもの聞くものは違う。

過去現在未来の世界を見通す力は共通して不安定で、いつ起きるのか、どうして起きるのか、わかっていない。

そして重要な点は、この一族の力は、男子にしか受け継がれないということ。

私や妹は父の娘だから能力があつたが、それもじき消える。

年々能力は弱まる一方で、月の物が始まってからはそれはより一層顕著になった。

だからこそ男子のみに王位継承権が存在する。

子をなさねばならない重圧も、国を継がなければならぬ重圧も、全て弟に押し付けなければならぬ。

それが哀れで、姉として居た堪れない思いをも抱いている。

だからこそ、私はそれを終わらせる事にしたのだ。

早く視察を終えて王都に戻り、山積みとなつている問題を片付けなければと、重いため息をついた。

馬車に揺られながらペラリペラリと紙を繰って中身を精査していく。

出発前に都督から渡された書類だ。

「随分と綺麗な帳簿ですね」

凛翔は表情を消していた。

従者が写し取った修正前の資料と都督から渡された修正後の資料が両方とも握られている。

私は既に中身には目を通してある。

何を思ったのか手に取るように判る気がした。

都督から渡された資料と、昨日入手した資料は驚くほど違う。

準備された資料を初めから目にしていけば、帳簿に関しては問題ないと勘違いしてしまったかもしれないほど、都督の資料は良くできていた。

よくぞ一晩でこれだけの物を仕上げたものだ。

これだけ違うものが出てきていけば、それだけである程度は問題が判るものだった。

見事なものだった。

不正な増税、申告のない夫役、その他諸々。

この帳簿内に顕れていない問題、例えば賄賂だの談合だのはわからないが、本腰入れて取り組まなければならぬのは事実だ。

本来ならある程度以上の不正や利権構造などの調査を行ってから視察に来るもの。

こんな風に何も調べずに来たのは初めてだ。

視察ですべての問題を裁可する事は不可能だ。

たとえ都督1人罷免したところで何の問題解決にもならない。

庁舎内の力関係が崩れて現状が悪化する可能性も高い。

可能な限りの問題の把握と事後の対策、それぐらいが関の山だろ

うか。

こんな好条件（皇帝の子息が同行している）というのに、まともな対処が殆ど出来ないだろうことがひどくもどかしい。

私にもつと実務能力があればと悔やまれてならなかった。

この視察を元に監査や恐らくは頂点の人間が挿げ替わる。

その新たな人材が、どこまできちんとして解決させられるか、大いに不安だ。

下手をすればその人材が取り込まれて、問題をより大きくしかねない。

人は誘惑に弱い生き物だから。

何度もそういつた事例を見ていけば人間不信にだつてなる。

だけど時折ひどく清廉な人物がいて、また人を信じてみたいと思つたりもする。

小さくため息をついて拘泥を振り払った。

「ご不快ですか？」

表情のない凜翔りんしょうに声をかけた。

人の良い笑顔を消し、無表情を貫いていると、どこと無く佑茜ゆうせんに似ている。

やはり兄弟なのだと妙なところで感心した。

「そうですね。あまり好ましいとはいえませんが」

凜翔りんしょうは頷く。

チラリと後悔が罪悪感のこもった色が浮かぶ。

「先日はお一人だけにいやな役をさせてしまい申し訳ありません。

本来ならば私が気づきなすべき事ですが」

強引に報告書を出させてそれを写させた件だろう。

あれだけ強引に出れば都督どころかその配下の官吏達すべてから悪感情を持たれたはずだ。

そして都督の反対勢力には余計な警戒心を植えつけた。

だがそれでいい。

私は今現在は凜翔りんしょうの補佐であつて、代表としてここに居るわけで

はないのだ。

代表が私ならばもう少し手段を考えたが、今回はこれで良いのだ。むしろあえて私に対して悪感情を集中させるという意味ではこれ以上ないほどの大成功だ。

凜翔りんしょうに対する印象は悪くなっていないはず。

部下（私）の手綱さえ満足に握れない皇子だと侮らせる事にも成功したはず。

取り込みは容易になるだろう。

実際はこうしてちよつとヒントを出すだけで、それなり以上に察する事のできる優秀な皇子であるという事は伝わっていない。

そんな素振りは見せなかった。

「お気になさらず」

「ですが」

「これが私に求められる役割だと考えています」

「……それでいけば、私の役割は間抜け皇子といったところでしょうか？」

凜翔りんしょうに皮肉気な笑みが浮かんだ。

これだから頭のいい人間は扱いにくい。

「判っておられるのですか？ご自身を危険に追い込んでいるのだという事を」

都督からは目障りに思われ、場合によっては消される。

それを指しての言葉だ。

「存じ上げております」

「あなたがそのような危険を冒す必要は無いはずですよ。もとよりこの任務は私が陛下より賜ったものなのですから」

「必要ならあります。この地に生きる多くの民のためです」

私は断言した。

「私は関わったからには全力で取り組みます。時間も限られている上に、問題も山積みです。それらの何もかも良くする事は出来ません。ですが今よりもほんの少しでもましな状況になって欲しい。私

はそのために官吏になったのであり、それが私が生きる事の意味です」

それ以外に何も持たない。

名も地位も何もかも私の握っているものは本来は弟のもの。

そして私の本来持っているはずの物は、すべて人に渡してしまっ  
た。

この矜持だけは誰にも譲る事は出来ないのだ。

そのためならば例え皇子殿下であろうと、皇帝陛下であろうと、  
誰にも邪魔はさせない。

「判りました。ですが、今後このような真似は控えてください。経  
験の浅い私は色々気が付かぬ点もある。それでもこの一行の責任者  
は私です。貴方を無事若飛兄上（じやくひ）にお返しする義務もあります。何か  
考えがあるのであれば、私に必ず報告し、その上で行動してください。  
い。宜しいですね？」

「善処します」

是とは言えなかった。

互いに無言で睨みあう。

先に根負けしたのは凜翔（りんせう）だった。

「若飛兄上（じやくひ）のお気持ちかわかった」

苦笑気味にいう。

いきなりの話の変化に私は戸惑った。

「貴方は見かけ以上にとても強情だ。これ程危なっかしく感じる人  
間は滅多に居りません」

危なっかしいとの評にかなり意外な念を抱いた。

その様に言われたのは生まれて初めてだ。

「真面目で誠実。官吏としては理想的な資質です。それゆえに敵を  
多く作ってしまう。それでは周りの人間は気の休まる暇は無いでし  
よう。若飛兄上（じやくひ）が可能な限り任務を拒否されるのは、貴方の為なの  
かもしれませんね。若飛兄上（じやくひ）が多く任を抱えていては、側近の貴方  
は必要以上に我武者羅に働いてしまう。民のために、部下のために、

国の為に。そうやって無理を押ししていずれば身体を壊してしまうのが目に見えるようです」

確かに玉祥たまけいからは無理をするなど口癖くひくせのように言われる。

それは凜翔りんしょうと同じ様に感じていたからなのだろうか。

だが、と思い直す。

凜翔りんしょうは佑茜ゆうせんをある意味買いかぶりすぎだ。

あのクソボケは仕事よりも自分の興味あることをしただけだ。

そんな深遠な気遣いなどあるはずは無い。

そうでなければわざわざ人の仕事を増やすような厄介やくがいことを次から次へと作り出すものか。

そこだけは、どうあっても領けなかった。

通りの向こうから歩いてくる姿に、彼は喜色を浮かべた。

二階の窓から通りを見下ろしていた彼は、すぐさま階下に走り建物に入り口へ移動した。

勢いよく店から飛び出すと、逆に入ろうとしたその人物とぶつかりかけてしまった。

「何だ。危ないだろ」

「いたって普通に苦情を申し立ててくる。」

「お前！どこほつつき歩いてたんだよ！」

華麗に苦情を無視して彼はその人物を怒鳴りつけた。

「別に」

「気のない返事であしらい、店の奥に向かっていく。」

「イチ！こつちがどんだけ気をもんだか判ってるのか！？」

「彼はその後を追いながら詰る。」

「いつもの事だろ」

「いつもって、おいこら、ちょっと待ってって！」

「イチと呼ばれた男はどンドン奥に向かって進む。」

「彼は仕方なしにその後をついていった。」

店の中には他に耳目もあり、彼のしたい話には憚りがあるのも事実だった。

従業員専用で、他に人に聞かれる心配のない小部屋に入り、彼は切り出した。

「ちゃんと説明しろよ」

「だから何をだ」

「王宮に忍び込んだんだろ！？んでなんだか凄い財宝を盗んだんだって、街中もちきりなんだぞ！」

「いつもの事だって言ってるだろうが」

「イチはウンザリといった様子を崩さない。」

「王宮なんだぞ！？どこがいつもと一緒だ！そこらの貴族の屋敷とは違うだろう！！」

彼は怒鳴り、大きく息をついた。

「頭はお前だ。お前の決めた事なら俺たちは従うだけだ。けど何も言ってくれなきゃ手伝いようもないだろ」

イチは気だるげに見返す。

無気力なその様子に彼はいい募る。

「お前が詮索されるのが嫌いな事は知っている。徒党を組む事を好まない事も。けど俺たちは、俺は、そんなお前だからこそ力になりたいと思っっているんだ。足手まといな事も知っている。けど王宮だなんて危険な場所に1人乗り込むのを見過ごせるほど俺は人が出来ていないぞ」

イチはガリガリと頭をかいた。

「だから、そんな大した事はない。王宮に入る事自体初めてでもないんだ」

「今までにも？1人でか？」

「ああ」

「何しに」

「……」

答えないイチに、彼はハッと気がついた。

「悪い。聞かない約束だった」

「いいさ」

事も無げにイチは言う。

「王宮に入ったのは、本当なんだな？」

「ああ」

「大逆の証を盗んだって」

「そんな大それた物じゃない」

彼はそれを信じなかった。

「それを隠すために今日までほつつき歩いていたんじゃないのか？王宮からここまで数刻もかからない。なのにこの二日というもの全



く音沙汰なしと来た。そうなんだろう？」

イチはニヤツと笑うだけで明言はしなかった。だが、彼にとつてはそれで充分だった。

「どなんだった？ やっぱ相当なお宝なんだろう？」

「さて、どうだったか」

イチは頭の後ろで腕を組んで空惚ける。

ふと袖口から包帯が覗いているのを発見した。

「怪我しているのか？」

腕を見、イチは苦笑した。

「手当ては」

「したさ」

「第四皇子はそれほど手練なのか」

「違う。第七皇子だ」

イチは珍しく真面目な顔をしていた。

「はあ？ あの馬鹿皇子？」

ギロツとイチは睨む。

彼はその迫力に口をつぐんだ。

「馬鹿は馬鹿でも、ただの馬鹿じゃない。俺の逃走経路を先回りして、たった一人で待ち伏せしてやがった」

「1人？ お前が、一対一で手傷を負わされたのか？」

愕然として彼はきいた。

「そんなところはどうでもいいんだよ！」

珍しくイライラとした様子を顕にしていた。

「じゃあ何だつて言うんだ」

彼は内心で驚きながら聞いた。

普段のイチは、例えば腹を立てていてもそれと見せないような所がある。

あまりにもらしくない態度だった。

「俺の行動を先回りしていたって事だ」

「あ？……もしかして、顔見られたのか？」

「見られたが、そうじゃないっての。人員配置や抜け道を全部把握  
していて、それらと王宮の動きを鑑みて俺の逃走経路を割り出し、  
先にそこへ回りこんでいたって事だ。ただの馬鹿に出来る芸当じゃ  
ないだろう！」

「中に詳しい皇子なら簡単だろ」

「あのな、優秀だつて噂の第四皇子なら、それもまあ納得したさ」

「ああ……あ！？だからただの馬鹿じゃない、と」

尋ねたがイチは答えなかった。

イチは既に心ここにあらずの状態だった。

何時もの様に何事かを無心に考え込んでいた。

そうなるかどうかどうしようもない。

食事の時間になっても気が済むまでは何も答えなくなるのだ。

やれやれと立ち上がり、仕事の続きに戻ろうとした時、それが耳  
を打った。

「あいつは、邪魔だ」

ぼそりと独り言のようなそれ。

暗く陰鬱な響を伴ったそれは、普段のいい加減なイチとはまるで  
別人のようであった。

彼は振り返ったが、イチはあさつてを見て深く思考の中をたゆた  
っていた。

見て回った施設は、都督の子飼いの部下が管理している物ばかり。成果だけを見れば素晴らしいが、周辺住民の疲弊振りを見ると誉められない。

そして問題があるといって案内された中には、税金を投入していながらなかなか成果の上げられない施設なども含まれていた。

それらの報告書と共に凜翔と事後の対策などを検討した結果を皇帝陛下に上奏すべく纏めてある。

「今後の体制についてですが」

「都督は残ってもらうわけには行きませんか」

「はい」

「問題は、後任ですか……」

凜翔は難しげな顔でうなった。

いかにして州内の権力バランスを取るかということに尽きる。

見て回った施設などからも、都督の影響力は小さくない。

都督を排除した場合、それらの子飼いの部下達がどのような行動に出るか。

例えこれぞと思う人物をすえたとしても、都督の配下だった者達が大人しく従うとは思えない。

それこそよほど権力を持った人間だとか、州内での影響力が大きい人物でない限り無理だろう。

「崔芝貴が無難なところかと思っではいるのですが」

凜翔は難しげな顔のままその名を口にした。

「問題は、彼の実績が少ない事ですね」

私の言葉に、凜翔は頷く。

崔芝貴とは、見て回った施設の中の長の一人だ。

その施設は未だ成果が上げられないと問題になっているうちの一つだった。

とは言え、周辺住民などは非常に上手くやれており、成果となって現れてくるのもあとわずかだろうというのが凜翔りんしょうと私の見立てだった。

政とはすぐさま成果として現れるような性質のものではない。

目に見える形でそれが出てくるにはとても長い時間が掛かるのだ。逆に性急に事を動かせば、確実に周囲との軋轢けんりくが出てきて上手くいくものもいなくなる。

見て回った成功した施設の殆どがそれに該当した。

農業技術研究所と言う施設では、素晴らしい成果で食物がたわわに実っていたが、農業指導という名目で労働力を搾取された周辺住民達の困窮は深刻であった。

そんなどうしようもない問題点すら隠すことなく披露するような人間達に政権を委ねるわけにはいかない。

その点崔芝貴さいしきはとても実直な手腕を発揮していた。

何よりも施設に振り分けられたお金などを私物化せずに、非常に真面目に仕事に取り組んでいるところが良い。

様々な誘惑があるだろうが、それを跳ね除けて真面目に職務に取り組んでいる。

これならば都督に据えても権力を私物化したりはしないだろうと思わせた。

しかしいきなり州の頂点に立つても、現在の都督にしたがっている人間がその意を聞くかといったら、確実に造反して潰されるのが目に見えている。

折角の有望そうな人材なのだから、じっくり力をためてもらって活躍してもらいたい。

こんな事で潰れてもらっては困るのだ。

「崔芝貴さいしきについては、現在調査中なのですが、師と仰ぐ人物がいるようなのです」

凜翔りんしょうは目線だけで先を促した。

最初に派手な動きをして都督から目をつけられた私に代わり、視

察中は凜翔が矢面に立っていた。

のらりくらりと間抜け皇子を演じながらも、色々な情報を都督から引き出している。

つついポロリと拙い事を口走り、それで実態がつかめたところも多々あった。

そういう抜け目ないところは、兄の克敏皇子や我が主である佑茜と似ている。

そうやって都督の相手を凜翔が務めている間、私は影に控えて背後で色々と調査を行っていた。

どこまで秘密裏に動いているかはかなり微妙ではある。

使える手の内は限られている上に、ここは奴らの本拠地。

ほぼ確実に私の動きは都督に筒抜けと見て間違いなかるう。

現在は大人しくしているが、私が目の上のたんこぶであると都督も充分認識しているはずだ。

上申書や報告書などを都督が目にしたら、私は即効で消されかねない。

それらの報告書などは私と凜翔がそれぞれ一部づつ持ち歩いている。

例えば私を排除してもその処分が替わる事はないとどれほど認識しているだろうか。

凜翔もまた、私が裏方に徹しているからと、その危険性が減じられたわけではないのだという事に、どれほど気がついているのだろうか。

「その師と言うのが既に引退した身なのですが、かつてはかなりの辣腕をふるっていた人物のようです」

「人柄の方はどうなのですか」

「まだそこまでは」

「引退、というくらいですから、随分とお年を召した方なのでしょうね？」

含まれた言葉は、本当に年を取って引退したのかということだ。

「都督よりは年配であるようですが、本来ならばまだ現役で通用する方です」

「師と言う方が引退され、その地位を今の都督が引き継いだと、そういう事ですか」

つまり何らかの権力闘争があり、敗北した師という人物がその地位を追われ、現在の都督がそれに乗っ取ったということだ。

官庁舎の中でははっきりと反都督派の存在を感じた。

確証は何もないが、恐らくそれらはその師という人物に連なっているのだろう。

未だ重要な地位にその反都督派の人間が幾人も占めているところからも、その師という人物の影響力はかなりのものであると推察できる。

「その方の人物に問題がなければ」

濁したその言葉に、私は頷いた。

「鋭意調査いたします」

凜翔<sup>りんしょう</sup>は都督に招待されて宴に出席している。

私も誘われたがあまり日がなくやる事があるからと、辞退させてもらった。

宿舎の自室に籠り資料を作成・整理していた。

カタリと微かな音と共に従者の耀<sup>よう</sup>が入ってくる。

「若様、お客人が参られています」

身に覚えのないその客人。

誰とも合う約束はしていない。

訝しい思いを抱えながら居間に行くと椅子に座っている人間がいた。

見覚えのある人間だ。

庁舎内で何度か顔を見た。

そして庁舎内での反都督派筆頭。

そしてもう一つ。

始めてこの部屋に入ったときに幻視した背後から切られた人物。

あれは、これから起こる事なのか。

半ば確信を持って思う。

「一体何の用だろうか？」

正面に座り切り出した。

まどろっこしく遠回りになどしない。

そして意識を周囲に巡らせる。

あれをする何者かが潜んでいるはずだ。

ほぼ、確実に。

おかしな気配がないか、それこそ最大限に意識を凝らせた。

「お知らせする事がありました」

「知らせ、と？」

「はい。都督が殿下方を排除すべく、人を雇った模様です」

なんとも安直に手がかりが飛び込んできたものだ。

逆に罫ではないかと思ってしまう。

真祥しんしょうといったそいつは頭を下げる。

「お疑いはご尤もと。ですが偽りを述べているわけではありません」  
真摯な目つき。

そして深い察する色。

なるほど嘘についてはいないと言う事か。

「信じよう」

言う。

「ありがとございます」

「何を見た。いや、聞いたのか」

真祥は頷いた。

「先程、何者かと話しているのを耳に致しました」

「何者かとな。姿をはつきりと見たわけではないのか」

「その通りです。申し訳ありません。姿を確認しようとした所、一足遅く逃げられました」

「逃げられた？お前が潜んでいる事に、話を聞いていることに気づ

かれたのか」

真祥の頷きに私は考え込んだ。

「耀」

控えていた従者に声をかける。

今現在、私の側にいる従者は彼だけだ。

残る2人、條と伶は私の命で出ている。

「凜翔りんしょう様に、危険を耳打ちしてくるんだ。無理であれば側近の方々でも構わない。護衛達をそろえ防備を固めさせよ」

「それでは若様が」

「よい。急げ」

渋る耀うらに重ねて命じれば、渋々とした様子ながら出て行った。

「他におられないのですか」

真祥はいう。



「見ての通りだ。とりあえず礼を言って置こう。よくぞ知らせてくれた」

暗に戻るようにと促す。

それを受けていいのだろうかと真祥は躊躇しながら部屋を後にして戻っていった。

ふむ、とりあえずは真祥が切られる事はなかった。

あれはもつとずっと先の未来のことなのか。

それともあの出来事は回避できたと言う事か。

一体どつちなのだろうかと思うながらも、書斎代わりにしている部屋で作業の続きに戻った。

姿の見えない暗殺者がどこかにいると言う事実は決して忘れない。周りの様子に神経を尖らせながら書類に目を走らせ、必要な事柄を書き付けていく。

緊張状態というのは私にとってはなじみの感覚だ。

意識しすぎて作業効率が極端に落ちると言う事はなかった。

微かな物音が響いたような気がし、私は手元から顔をあげた。

息を潜めて耳を澄ませる。

やはり僅かに聞こえる。

なんだろうかと脇においてあった剣を手にした。

「絃菖様！」

先程出て行ったばかりの真祥の声がして、私は部屋の入り口のほうへ向う。

続き部屋となっている居間に入ると、緊迫した様子で真祥が飛び込んできた。

「火事です！急いでお逃げください！」

私は警戒しつつも窓に寄って慎重に外をうかがう。

窓の外すぐに人の気配はない。

僅かに顔を出して見ると、赤い火が壁を侵食しようとしていた。

火元は私の居所から離れているとはいえ、危険である事に変わりはない。

火事に気がついた数人が水をかけて消火しようとしているが効果はあまりなさそうだった。

「絃菖様、お急ぎください！」

真祥は荒い息をつきながら重ねて促してくる。

よほど急いで来たのだろう、流れる汗がそれを物語っていた。

私はそれに頷き入り口へと向った。

真祥は私の背後につき従いついてくる。

「宿舎にいた他の者たちの避難はどうなっている」

「もともとこちらへは殆ど人員が配置されておりません。本日の宴に出席される殿下に付き従い、その者達も空けている筈です」

はっ、成程な。

始めから謀られていたということか。

よくぞ人のことを虚仮にしてくれた、と私は冷たく思う。

この礼は他の方法でたつぷりとして貰うとしようと思心に誓った。

「危ない！」

といきなり背後から強く突き飛ばされ、私は前に投げ出された。

身体を捻って後ろを確認すると、真祥が私に腕を突き出すような

形でのけぞっていた。

きらめく白い輝きを確認するまでもない。

あれはこの瞬間の出来事だったのか。

真祥の更に向こう側には黒く人影があった。

前方の部屋の入り口には注意を払っていた。

そこから人が入ってきていけないのは間違いない。

そしてこの居間の窓の外には怪しい人員は何もなかった。

ではどこから入ってきたのか。

先程まで作業をしていた部屋、そのどこかに潜んでいたか、その窓から入ってきたかしたのだろうか。

ここまで私個人を狙うというのは、少し違和感を感じた。

これほどあからさまな暗殺を実行しては、ただ疑いを深くするだけで益はないはず。

都督自身もここまで大掛かりにする予定などなかっただろうし、都督だけの思惑とは思いにくい。

つまり、私を狙う勢力が都督と組んで、もしくは都督を唆して動かしたかしたのではないか。

やってくれるじゃないかと、暗殺者を前にして私は皮肉な笑みを刷いた。

黒尽くめの男は白刃をきらめかせながら踏み込んできた。床に身を投げ出す事でそれを避ける。

床の上を転がり距離を取って身を起こし、剣を抜いた。すぐさま黒尽くめも追ってくる。

立ち上がりながら、私は手にしていた剣でそれを受け止める。重く鋭いそれ。

力では敵わないので切り結んだまま押し合いをする事は避ける。身体を引いて剣をひねり、男の剣をいなした。

そのままバランスを崩してくれればいいのだが、そう上手くはいかない。

すぐさま体勢を整え打ちかかってくる。

障害物がいくつもある室内で、足場を細かく移動させながら打ち合っていた。

この期に及んでも黒尽くめは何の色も浮かばない。

本職の暗殺者だ。

私（標的）を殺める事に何の躊躇も持たない相手。

ただ淡々と命を取る事だけに集中している。

手ごわい相手だ。

確実に私では敵わない。

だからと言ってむざむざやられる訳にも行かない。

今の私に取れる手段は一つしかなかった。

勝てないまでも負けることのないそれ。

防御に専念して相手の疲労を待つて諦めてもらう。

こつちの体力は温存しつつも、相手に大振りさせるよう仕向けたり、わざと小さい隙を見せて踏み込ませて疲れさせるとか。

しょぼくて作戦ともいえないそれは、ゆうせん佑茜との練習で磨きに磨かれたものだ。

時折思いついたかのように佑茜は私や玉祥を相手に特訓と称して暴れ回る。

2人がかりで簡単にあしらわれるのだからまともに付き合えるはずもなく、佑茜の体力を削らせつつも自分は体力温存してなんとか凌いできた。

おかげで磨かれたこのセコイ技の数々。

これまで打ち合った感覚からして、この暗殺者は私以上なのは間違いないが、佑茜程の腕はない。

ならば凌ぐだけならばそのセコイ手が充分通用する。

問題は、こちらにあまり時間がないことだ。

あまり時間をかけすぎても火が回りきって逃げられなくなる。

そして真祥の怪我。

様子を見る余裕などないのでどの程度か判らないが、あまり長い間放置していいものでもない。

なんとかコイツにお引取り願うまで耐えてくれよと心の中で祈る。

どの位の時間が経ったのか。

実際にはそれほどかかっていたのだとは思うが、私には果てしなく長く感じた。

凌いでいるだけの私も息が上がり、集中力が切れかけていた。

苦しいのは相手も同じと剣を構えるが、正直その体力には舌を巻いていた。

流石本職の暗殺者だと妙なところで納得する。

私も死に物狂いなら、相手だってそう簡単に諦める事などできないだろう。

特に実力的にははつきりと下の人間を相手にしているからには。

肩で息をしながら相手をしていると、突然黒尽くめはバランスを崩した。

いっそ不自然なまでのそれに僅かに躊躇が生まれるが、私は下か

ら斜めに搦り上げるようにして切り上げた。

バランスを崩したそいつは不安定な体勢ながら後ろに背をそらし、紙一重で避ける。

そしてそのまま一步二歩後方へと退いた。

僅かにふらつくその足元に、私は目を見張った。

黒い布地が切り裂かれ、地肌が見えている。

チラツと視線を下げれば、真祥まゆみが刃物やいばを手に身を起こそうとして  
いるところだった。

無事とは言いがたいが、動けないほどではないらしい。

そしてやられた振りをして絶好の機会をつかがっていた。

少しづつ場所を移しながら切り合いを続ける私達が近づくの息をひそめて待ち、私にだけに集中しているそいつの足元を手にしている剣やいばでないで傷つけた。

出来たその隙を突いて止めをさせなかったのは私だ。

2度同じ様な機会が巡ってくるとは思えない。

苦く思った。

黒尽くめの暗殺者は不利を悟ったのか、懐から何物かを取り出し、それを床に叩き付けた。

そして手早く火を放ち後方にあつた窓から身を躍らせる。

あつという間の早業であつた。

火は一気に燃え広がり、後を追う事は出来なくなつた。

押し寄せる熱気に顔を背ける。

「立てるか？」

真祥まゆみの傍らに膝を付き様子を見る。

彼はふら付きながらもゆっくり身を起こしていく。

歯を食いしばり、軽い怪我ではない事は明白であつたが、命に關わるほどではなさそうだ。

肩を貸し立ち上がらせる。

「ここを出たら手当てするから、少し我慢しろよ」

「申し訳ありません」

脂汗を流しながら真祥は言った。

こいつの怪我は私を庇つてのもの。  
むしろこっちの台詞だ。

背負つて行つてやりたいところだが、私にはそれだけの力はない。  
負担になるとは思うができるだけ自分で歩いてもらわなければならなかった。

廊下に出て階段を目指すが、既に火が回っていた。

ここは3階で窓から飛び降りられない事もないが、足の一本二本は覚悟せねばならず危険極まりない。

臍をかんだ。

「あちらに」

真祥がまだ燃えていない廊下の奥をさした。

「あちらに飛び降りられる場所があります。そこから  
どついつぶうに飛び降りられるのか。」

とても気にはなつたが私は頷いた。

藁に縋るような気持ちだつた。

廊下の端のほうに來ると、熱気は大分ましになつた。

どつやら反対側の方が火勢は強いようだ。

窓から下を見下ろすと、黒々としたものが見えた。

そして時折何かを反射してキラリキラリと輝く。

道理で火の勢いが弱いわけだと納得した。

こちら側は川の上に張り出すようにして建物建っていた。

「水深もそれなりにありますし、ここなら飛び降りるのに問題はあり  
りません」

と真祥は言う。

だが。

「お前1人で行くがいい。私は別の場所を探すとする」

私は拒否した。

訝しげな目を向けられた。

それはそつだろつ。

「だがしかし！  
私は、……泳げん」



泳ぐ練習をする機会がなかったわけじゃない。

だが、そんな事をすれば一発で性別がばれてしまう。

そのため私は風呂以外の水につかったことはない。

佑茜ゆうせんや玉祥たまけい、他に貴族の子弟達うぢらが川で水遊びしているのを、いつも横目で眺めている事しかできなかった。

こればかりはどうにもならない。

そして私は泳ぐ事が出来ないまま成長してしまった。

その泳げない私が深い川に飛び込んだら確実に死ぬ。

まだ地面の上に飛び降りて足を骨折したほうがいくらかました。

真祥まゆゆの腕を外し、彼を窓へ押しやるうとした。

だが、逆に肩布を強くつかまれてそれを阻止された。

なんだ？と見返せば、

「大丈夫です。私が必ず岸までお連れします。お任せください」

力強く何かを決意したような声音。

「ま、」

待てという前に、そいつは私を荷物のように小脇に抱え、窓から飛び出した。

真つ暗な中をまっさかさまに落下していく。

視覚的な恐怖はないのだが、その風きり音が水面に向って落下しているのを私に教えた。

数瞬の浮遊感の後の凄まじい衝撃に、私は意識を失った。

手足にガツガツと何かがぶつかる感覚に意識が浮上する。

体の腰から下はまだ水の中で、足先が川底で引きずられているようだった。

水から上がったかと思うとドサツと投げ出され、本格的に意識が

覚めた。

とたんひどくむせて盛大に咳き込んだ。

すぐ横に別の人間が倒れてくる。

ゼイゼイと荒い息をついて息も絶え絶えと言った様子だった。

空を見上げると己から見て右手前方が赤く光を放っている。

視界を妨げる木々の上に赤く照らされた空の様子から、火勢は衰えることなく燃え続けている事がわかる。

大分遠くに見えることから随分と流されたらしい。

真祥は力尽きたようにグツタリとして目を閉じた。

怪我をした状態で私を抱えて泳ぎきつたのだから当然だろう。

むしろよくぞ泳ぎ切ったものだと感じするほどだ。

川原に横たわっていた身体を起こし、真祥の怪我を見た。

ぱっくりと開いた傷跡は綺麗なものだが未だ血がタラタラと流れ出ている。

斬られてからそれなりに時間が経っている事、今まで水の中にいたことも考えると血がかなり出てしまっていることが予想できた。

これ以上血を失うのは拙いだろうと、私は上着を脱ぎそれで患部を縛った。

とはいえ患部が背中であるため、布地を当ててきつめに胴体を締め付ける事ぐらいしかできない。

早く医者に見せてやる必要があった。

火事場にそのまま素直に戻るのは身の危険が高い。

民家のありそうな方角はどちらだろうかと空を見上げる。

近くの民家を見つけて医者を呼んでもらい、そこを拠点にしつつこっそり凜翔に繋ぎをつけるのがいいか。

宿舎消失という失態に、都督がどんな言い訳をしているか見ものだと思う。

皇帝への報告書の類は凜翔も持っているので、その点については心配はしていない。

予定とは違ったが、今ここで“私”という存在を殺してしまって

もいような気はする。

このまま姿をくらしこつそり国に戻って、本来の私の居場所に  
戻る。

火事で死んだということにしておけば遺体が見つからずとも多少  
の疑惑程度で収まるだろう。

そういう選択肢だつてある。

あるにはあるのだが……今それをするのは問題があつた。

第五皇子の宮から盗まれた極印の事だ。

少なくともあれに決着がつくまでは姿をくらしこつそりするのは得策では  
ない。

万一の場合は国に累が及ばないよう、私一人の首で済ませられる  
ようにしておく必要がある。

例え私が身代わりでしなくても、いや、身代わりだからこそそ  
れが出来るのは私しかない。

身代わりを降りるには千載一遇の機会なのは間違いないが、やは  
りそれは出来そうにない。

いつまでもボンヤリしているわけにも行かず、今回の件をそれな  
りの形に治めるべく地面から立ち上がった。

真祥はかなり大柄で、とても背負つては歩けない。

両腕を掴み意識のない真祥を背負つような形で担ぎ、ズリズリと  
引きずつていく。

少しでも油断すると真祥の膝が地面につきそうだった。

幾らも進まないうちに全身から汗が噴出し、息が上がっていく。

近くの民家を見つけたら体力が持つかかなり不安だ。

身長だけで見れば佑茜よりも真祥の方が大きいだろう。

無理をすれば玉祥程度の体格をした人間ならば背負えなくはない。  
しかしこれが佑茜になると更に頭一個分背が高くなり、とても背  
負えたものではないのだ。

その佑茜よりも更に背が高いとなれば引きずるのさえ一苦勞だつ  
た。

体格は佑茜ゆうせんの方が多少筋肉質に思えるから体重は恐らく変わらな  
いはずだが、縦に長い分バランスも取りにくい。

文官ならもつとなよなよとして背も低くあるものだろうと、内心  
で悪態をつく。

ただでさえ衣服が濡れて張り付き動きにくく、牛歩のような歩み  
とならざるをえず、酷くもどかしかった。

ずしゃ、ずりっ、ずしゃ、ずりっ。

川原の石を踏みしめる音と重いものを引きずる音が暗闇の中文互  
に響く。

命を狙われている人間としてはもつと静かにひっそり行きたいと  
ころだ。

これではここにいますよと喧伝しているも同じだ。

都督派と反都督派という、敵対する二つの組織。  
宿舎消失。

そして私の暗殺。

ここにそんな大勢の人間が送り込まれたとは考えにくい。  
作業員は一人ないし二人程度だろう。

と考えると、あの火の回り方は異常だ。

もつと内部に詳しい人間がいなければおかしい。

だが都督があればどこからさまに暗殺をするだろうか。

疑われるのは自分だと判るはずだ。

ならば都督が疑われて得をする人間の仕業と見るのが良い。

真祥しんしょうが聞いたという密談もおかしい。

あれほど簡単に聞かれるというのは、わざとそうしたという可能性が高い。

都督と会話していたというもう一人の人物がそれを狙っていたとしたら。

そいつが反都督側の人間とも通じ合っていたら。

畏おそいかけられたのは私であり都督であり、そして囿こまに使われたのが真祥しんしょうということだ。

敵を騙すにはまず味方から。

反都督派の頭である祭伯さいはく達の企てだろう。

政治というものはそういうもので、私が非難するには当たらない。

むしろ犠牲者の数は最小限で効率の良い手だと誉めてもいい。

だが、この真っ直ぐな男はどう思うか。

真祥しんしょうは重要な証人でもある。

危険な橋を渡らせる意味などどこにもないのだ。

恐らくは火事だと知ってこの男が引き返すとは予想していなかったのではないか。

それはつまり真祥しんしょうという人間の性格を読み誤ったという事に他ならないだろう。

少し祭伯達さいはくたうの評価を考えねばならない。人物を見極めるのは頂点に立つものにとつては必須技能だ。

それが出来ているからこそ、そしてかなり有能な人物であるからこそ、地位を追われた今でもかなりの影響力を持つていられる。

私はそう判断していたのだが、他に優秀な人材がいてその人物が祭伯達さいはくたうを補佐しているのだろうか。

そうでなければこのちぐはぐさが説明つかない。

調査する時間が少なくて、いまだ祭伯達さいはくたうの人物像が見えてこない。能力値の評価について多少再考の余地があるとはいえ、人物さえ悪くなければかなり有力候補である事には代わりがない。

畏に嵌められたのが自分だと判っているし、そのことについては思わぬところがないでもないが、私が同じ立場であつたら同じ事を考えなかったとは言えず、そこまで責めようとも思わない。

むしろこの思い切りの良さはある意味とても好ましく感じてもらう。

政は綺麗ごとだけでは動かない。

もちろん綺麗である事は好ましいが、それに固執して民を悪戯に危険に晒したり苦勞させるのであれば、後ろ指を差されるような行為として私は決して躊躇しない。

だから祭伯達さいはくたうの判断には共感を覚える部分もあるのだ。

今の状態では会うとか言う以前に消される可能性が大だが、機会があれば一度会って見たいものだ。

これを凌げばまた別の芽が出る可能性があるが、はっきり敵対する構図となつてしまった今となつては中々難しいだろう。

少なくとも、これを生き残つても私はその責任の所在を追及しなければならぬ立場にある。

もちろんその槍玉に上がるのは都督だが、証拠の内容によっては祭伯達さいはくたうとて追求しないわけにも行かない。

その時にどんな反応が返ってくるかと考えると少し楽しみではあった。

もしここに現れる暗殺者がいるとしたら、考えられるのは、先程の者か、都督の手の者か、祭伯達さいはくたうの手の者か、まったくの第三者だ。だが、先ほどの者は、本職であるがゆえに不確定な行動は取るとはあまり思えず、かなり可能性は低いだろう。

次に第三者だが、これも居るか居ないかわからない状態で可能性は低く、とりあえず考慮外としておく。

残ったのが都督と祭伯達さいはくたうの手の者。

宿舎消失の件から鑑みて、あんなあからさまな真似は都督の本意ではないだろうし、あの暗殺者と手を組むぐらいだから余計な人員を周りに配置しているとはあまり思えない。

何より消火活動をしようという人員が見つけれなかったぐらいだから、大規模な人員を動員はしておらず、むしろ人を遠ざける可能性の方が高い。

つまり可能性としてはなくもないだろうが、都督の手の者が襲ってくると言う可能性もまたかなり低い。

残ったのは祭伯達さいはくたうの手の者。

出来るだけ確実に命を取ろうと考えていたら、そういう人員を密かに回りに固めてあったはずだ。

襲ってくる可能性としてはかなり高い。

これだけ派手な音を立てているのだから、幾ばくもしないうちに見つかってもおかしくない。

ならばどうするか。

そんなものは決まっている。

逃げるだけだ。

相手によつては1人2人ならばなんとかなるかもしれないが、集団で襲われたらどれほど腕の悪い相手でも難しいだろう。

真祥しんしょうが邪魔じまだが、一応そいつらと仲間同士の間柄であるはずだから、奴らの間に捨て置いていく事にする。

万一都督の手の者だった場合、真祥しんしょうの命はないだろうし、祭伯達さいはくたつの手の者でも邪魔だといわれて消される可能性はあるのだが……そこは賭けだな。

上手く行けばそいつらに真祥しんしょうの怪我の手当てをしてもらえ、私は無事に逃げおおせる。

次善の策を脳裏に浮かべながら真つ暗闇の中を進んでいた。最善は、今すぐにでも真祥しんしょうを放り出して1人行動する事。

人目を避けて密やかに移動すれば凜翔と合流する事もさほど難しくはない。

頭では理解しているし、そうすべき事だとも思っている。

一国の王として、どれほど唾棄すべき手段をとろうとも生き延びる事を考えなければならぬ事がある。

今回のように感情のままに自身を危険に晒すなど、王として許されることではない。

だが、恩人たる真祥しんしょうを見捨てるという選択は出来なかった。

自分の甘さに反吐が出そうだ。



背中に背負っている真祥まんしょうが身みじろぎをする。

「どうやら気がつき始めているようだ。」

これで肩を貸すだけで自力で歩いてもらえるようになれば大分楽になる。

「う……」

うめき声が上がリ、力なく垂れていた頭が持ち上がった。

「気分はどうだ」

そのまま引きずりつつ訊ねた。

頭を軽く振り、ようやく状況が把握できたのか、真祥まんしょうはギョツとしたように体を強張らせた。

変に力が入ってしまったようで、上手く引きずれなくなる。

仕方無しに立ち止まり肩越しに見やる。

「申し訳ありません！」

そういつて真祥まんしょうは身体を離そうとしたが、傷が痛んだのかふらつき、バランスを崩してしまった。

いまだ肩越しに両腕を掴んでいた私も引きずられ、片足を突いてしまった。

「大変失礼しました！すぐ……」

両膝をついた真祥まんしょうは自力で立ち上がるうとするが、力なくうずくまってしまう。

「大丈夫か？無理はするな」

と肩を貸そうとするのだが、

「いえ。大丈夫です。お気遣いくださいませな」

真祥まんしょうは妙に固辞する。

宿舎では素直に肩を借りていたのにおかしな奴だと思ったが、あの時は火事場で今とは緊急度が違う所為だろうかと思ひ直す。

「遠慮はいらん。元はといえば、お前の怪我は私を庇ってついたも

ので、私が責任を取るべきだ。わかつたらさつさと腕を貸せ」

ほら、と手を伸ばすと、真祥は躊躇いがちに応じた。

真祥の腕を肩にまわし、慎重に立ち上がらせる。

なるべく私に体重をかけないようにしている所為で、どうしてもバランスが悪い。

思わずふらついてしまうと、

「やはり自分で歩きます」

とこの期に及んで遠慮しようとする。

全く面倒な奴だ。

「つべこべ言うな。私は一刻も早く着替えたいのだからな」

問答無用で黙らせた。

暫し無言で夜の森を進む。

「あの、申し訳ありません」

何がだ？と見上げる。

「助けに行つたつもりが足手まといとなつて、申し訳なく思つています」

真祥は真摯に言う。

纏う色がつつすらと見えて、本気でそれを言っているのだとわかつた。

「お前がいなければ、私は今頃生きていない」

全く律儀というかしょうのない奴だなと呆れつつも、その真つ直ぐさが私には痛かった。

「例えそつであつたとしても、川原で私を捨て置いても良かったはずです」

「ありえんな。誰が盾を手放すものか。まだ安全地帯に出たわけではなく、いつ何時刺客が現れるとも知れない。そのときは充分に盾となつてもらつつもりであつた。ただそれだけだ」

「……」

肩を貸して並んで歩いていると、背中がスースーした。

先程までの背負っていた熱がなくなつた所為だ。

水に濡れた衣服が体温を奪って寒いくらい。  
早く着替えて温まらなければ風邪を引くなと漠然と思う。

ひづめの音が響き、木の陰から姿を現す。

騎馬の男が3人。

どいつも武装している。

暗すぎて顔立ちはよくわからないが、まとう色は明確な殺意。

予想通りの展開だ。

真祥を振り払い腰に差している剣を構えるべく動き出した。

しゃらんという音が立ち、腰元に伸ばした手が空をつかむ。

何故!?!と見ると、真祥が私の剣を構えているではないか。

振りほどこうとしていた肩に回された腕に押され、手近な木に押し付けられる。

顔面と上半身を強かに打ちつけた。

腕をつかんだ手は逆につかまれ、後ろ手に捻りあげられる。

あっという間の早業で、まともに抵抗一つ出来なかった。

刺客に気を取られたホンの瞬きほどの隙を疲れた。

ガキンとすぐ側で金属のぶつかり合う音がする。

空いているほうの手を木に付き身体を支えながら頭だけをねじって見やる。

私を押さえつけている真祥が、現れた刺客の剣を受け止めていた。

「何故邪魔をする!?!」

切りつけてきた刺客が怒鳴る。

残りの2人は馬から下りて、私達を逃がさないよう取り囲もうとしている。

ギリツと奥歯をかみ締めた。

後ろ手に捻りあげられた拳句、木などに押さえつけられるなど、屈辱以外の何物でもない。

ガン、ギン、ギン、と金属音が続く。

背中に暖かいものがあり、恐らくは私の背後に真祥まじょうがいるのだ。木に押し付けたのは背後から切られないようにするためか。不本意ながら真祥まじょうに庇たもわれているらしいと察せられた。

私は大人しく守られているような人間ではないから、真祥まじょうはあえてこのように強引に押さえ込むほうを選んだのだろう。

確かにあの時、私は盾にするといったが、言葉のあやだ。そんな面倒な事はしない。

しかも……どう考えても同じ陣営にいる者同士で剣を交わしているというのに、真祥まじょうに動揺は全くない。

伯達はくたつの思惑しごくなど真祥まじょうは知らなかったはずだ。なのに何故だ。

考え込み、すぐにその理由に思い至った。

そうか、私が“盾にする”といったからか。

真祥まじょうを“盾”と使って有効な相手が刺客としてくるといったも同然だ。

あれだけの僅かなヒントでおおよその構図を見抜いたと見える。

失言しつごんだったな。

「お前、伯達はくたつ様を裏切るのか」

三人からの攻撃を防いでいる真祥まじょうは静かに答えた。

「裏切っていない」

「だったら、そいつを寄越せ」

「俺は、この方を見捨てる事もしない」

ギイインと一際高い音が鳴る。

「伯達はくたつ様の元へ案内しろ。俺はこの方をお引き合わせしたい」

堂々と真祥まじょうは要求を突きつけた。

3人は戸惑っている。

馬に乗せられ連れて行かれる。

縛られてはいないが腰に差していた剣は取り上げられたままだ。

後ろにまたがるのは真祥まじょうなのだが、手綱は彼がつかんでいてどうにも逃げられそうにない。

真祥まじょうを殴り倒して逃げると言う選択肢はある。

が、そんな事をすればすぐに追いつかれてしまう。

武器もなしに無茶をすれば確実に殺される。

不本意だ。

途轍もなく不本意だが、今は従っているしかない。

どうせ逃げられないのであれば、伯達はくたうをしつかり観察させてもらうとしよう。

危険は承知しているが、伯達はくたうを取り込む絶好の機会でもある。

虎穴に入らずんば虎児を得ずだ。

予想通りの人物であればこちらの提案に乗ってくることも充分考

えられる。

それとも伯達はくたうは私の予想外の取引を持ちかけてくるだろうか。

上手く切り抜けなければ、そうではない場合は……私の命はない。

もしそうであってもむざむざ殺されるつもりはない。

せめてなりとも一矢報いてやるつもりだ。

静かに覚悟を決めた。

馬に乗せられたまま連れて行かれたのは、州を代表する官吏のす

む屋敷いせとしてはかなり質素なたたずまいだ。

伯達はくたう配下の人間3人の内、1人が先に中に入っていった。

残った2人に監視されながら、ゆっくりと馬上から降りる。

私の後に続いて真祥まじょうも降りてくる。

程なくして屋敷の中から数人が飛び出してきた。

その大勢に確保されて屋敷の中に誘われた。ずぶ濡れのままは何かと問題あるらしく、入り口から程近いところで服を着替えさせられた。

乾いた衣装を渡されて衝立の影で着替えた。

衝立の向こう側では私が逃げ出せないように伯達の部下が待ち構えている。

着替えの手伝いを申し出てくる輩がいなかったことは幸いだった。着替えが終わると、奥まった場所にある部屋に通される。

そこには伯達が待ち構えていた。

武器は取り上げられたままだが縄を打たれたりはしていないので、伯達がいることに少し意外な念を抱いた。

しかも他に伯達の部下達は誰一人入ってこなかった。

真祥を囷に使った上で、他の部下達に私の殺害を命じた本人。

少なくとも真祥の人物像を見誤る程度の人間で、よもやこれほど堂々と現れるとは思わなかった。

武器は無くとも動きを制限させられていない殺そうとした相手を、こつもあつさり目の前に連れ出すというのはよほど武芸の腕に自信があるのか。

それとも私の人物像を把握しているために害はないと判断したか。先行した人間から真祥の行動は聞いているはずで、あつさりと取り押さえられたという報告を受けて侮っているのか。

もつとも私の考えすぎで、全く何も考えていない可能性もある。

大人物振りを印象付けるにはある意味効果的ではあるが……。

さて、どういふつもりだろうな。

無表情で伯達の前に腰掛ける。

用意されていたのは上座の席だ。

伯達の意図が読めない。

纏う色にも敵意はない上に、表情からも何一つ読み取れなかった。

「お伺いしたい事がございます」

単刀直入だ。

「紘菖様は民をどちらへ導かれるおつもりか」  
面白い質問だ。

権力闘争云々でも、利権云々でもない。

今回の事件に対する扱いについてでもない。

伯達の人間と言う物が判ろうものだ。

かなり好感を抱いた。

この質問に対する私の答えなど、考えるまでもないことだ。

一瞬だけ答えるべきか否か迷ったが、素直にそれを口にする  
ことにした。

「より良い未来」

何をもって良しとするか、どうすればそれが実現できるか、其処  
に苦心する事はあれど根本の想いはその一言に尽きる。

そのためならば私の地位や権力などどうでもいい。

都督が頂点に立っていようと伯達が頂点でいようと、もっとどう  
でもいいことで斟酌するべきことではない。

そういう意味を込めて答えたが、伯達に動揺はない。半ば予想し  
ていたのだろう。

この質問が真つ先に来ると言う事は、信念を持って政に取り組ん  
でいる人間であると言う証左に思える。

自身の権力を強化し、私腹を肥やす事を考えていれば、もっと別  
の話を持つてくるはずだからだ。

そしてそれ以上に覚悟がなければあの質問は危険すぎて出来ない。  
少なくとも今の伯達の立場に私がいるとして、同じ事が聞けるか  
と云えば無理だと言いつ切る。

穿った見方をすれば、暗殺騒ぎの裏に自分があるが、民のために  
ならないのではと判断し実行したのだと暗に仄めかしているとも取  
れた。

伯達の纏う色は例えそうとられても良いという覚悟さえ見える。

私への敵意殺意というものは綺麗さっぱり消えうせている。

何らかの賭けでもしていたのだろうか。

部下達に私の始末を命じた時点では確実に生かして返す予定はなかったはずだ。

この短い時間の間にどういった心情の変化があったのか。

私は伯達はくたつの次の言葉を待った。

自分から言葉を発するつもりはない。

出来る限り相手の手札を晒させて、自分の手の内を読ませないと  
言うのは基本中の基本だ。

私にしてみれば敵陣にいて不利極まりない状況なのだから、守勢  
に回ってしまうのも致し方がないだろう。



酒と摘まみが運ばれてきた。

これで手打ちにしようという意味合いだ。

謝罪も言い訳もしないし、私もそれを望んでいない。

伯達は覚悟を、私は信念を見せた。

ただそれだけだ。

これから奴らが何をするのか私は関知しないし、事後の操作で手心を加えるなどの一切の手抜きもしない。

そういう意思確認だ。

ただし、これだけは言っておかなければならない。

「私はここには来なかった。忠告を受けた後真祥にもあつていない。

火事の中自力で脱出した、とそういうことにしておく」

伯達達がそれにどう乗っかるかと私の知ったことではない。

後は自分達だけの力で乗り切って見せろとそういう意味合いを込

め私はいった。

「真祥のこと、お任せしても構いませんでしょうか」

「万一の場合はな」

行く末を気にするくらいなら最初から囿にしなければいいものを。

呆れながらもそう答えると、伯達は丁寧はくたつに頭を下げた。

所詮私は部外者だ。

彼らが何を思っているか等何もかもわかるはずもない。

あれだけ切れる頭脳を持っているのだから見殺しにするなどもっ

たいない。

仮にも恩人ということもある。

伯達はくたつに言われなくともこっそり手を回して匿う位するつもりだ。

私の手など必要なくすめば越した事はないが、それも虫のいい願

い。  
恐らくは無理だろう。

再び濡れた衣装を身につけ夜の森の中に舞い戻った。

短い会見だった。

伯達配下の者の微妙な視線を受けながら送り出された。

宿舎から程近い川沿いまでは馬で送って行ってもらおう。

夜風の冷たさが身にしみるようだった。

空の明かりは随分収まってきていて、火勢は大分小さくなっていくらしい。

川に沿って遡って宿舎に近づいていくと、幾人もの人が行きかかっていて。

川から桶で水を汲みそれで必死の消火活動に励んでいる。

「森に類焼せぬよう隣接する木を切り倒せ！そこっ、あまり火に近づきすぎな」

凜翔が先頭に立って消火活動を指揮している。

自身も工具類を手にして煤だらけになって作業をしながらだ。

生真面目で立派な皇子だとしみじみと思う。

都督の姿もあるが、なにやら自分の側近に色々指示を出しているようだが、どうも雰囲気はばたついている。

さて、奴らはどういふ反応をしてくれるだろうか。

意地悪く思いながら私は近づいていった。

最初に気がついたのは、凜翔の側仕えの人間だ。

凜翔と共に作業していた彼と目が合った。

呆気にとられたかのように目を丸くしたと思ったら、弾かれたように皇子を振り仰ぎ声をかける。

凜翔は振り返り、私は目があったので挨拶をしようと手を上げかけた。

パツと身を翻し、手にしていた道具類を放り出して駆け出してくる。

「絃萱殿！」

「心配をお掛けしたようですね」

その血相を変えた様子に思わず苦笑してしまった。  
宿舎の近くは火勢が強いただけあってかなり暖かい。

濡れた衣装に体温が奪われきっていた私には、その暖かさがあり  
がたかった。

「ご無事でよかったです。ずぶ濡れで……川に飛び込まれたのですか」

「気がついたら火に囲まれ、逃げ遅れておりましたので。一か八か  
で川に飛び込み事なきを得ましたが、かなり流されてしまいました  
戻ってくるのに手間取りましたよ」

「なんにせよ、無事でよかったです。お姿も見えず火に巻かれたのだろ  
うとは思えども、この通り火勢が凄くてとても中に入ることが出来  
ません。もうだめかと、内心思っております」

「私でもそう判断するところです。ですが凜翔様はお諦めになって  
おられなかった、だからこそこうして消火活動をなさっておられた  
のですよね。そのお心遣い有難く思います」

「いいえ。今回は私の失策です。絃菖殿が危険であると判っていない  
から護衛の1人も残さなかった。もっと警戒してしかるべきだった  
のです」

チラリと都督へと視線が向く。

「正直に言えば、都督がこれほどあからさまな手を使ってくるとは  
思えなかった。侮っていたのでしょうか」

実際この火事は都督の手によるものではないのだから、凜翔の言  
葉はわからなくもない。

だがそんな事はいえないので私は黙っていた。

近くにある街の宿屋を貸しきり、そこで滞在する事となった。  
ぬれて冷え切った身体を温めるため風呂に押し込まれた。

その間に従者達はけなげな奮闘を見せ、湯から上がるまでには着替えなどが揃っていた。

衣装など荷物は全て焼失したため、急遽揃えさせた衣装を身に纏う。

私はまだしも、凜翔にはあまり相応しい衣装とはいえない。

妾妃であろうとも凜翔は皇子で、そこらの貴族が着るような服など身につけたことはないだろう。

凜翔は火事の後始末を言うと、いまだ宿舎跡で指揮を取っている。

風邪を引かぬようと私だけ先に宿屋へ向うよう指示されたのだ。自分は大勢入り乱れる現場に留まりながら、護衛の半分を私に割いた。

克敏皇子の弟君で剣の腕に自身がお有りかもしれないが、無用心だと思つ。

今回危ない目にあつたのは私だが、凜翔が危険と言つ事もまた儼然たる現実として立ちはだかつている。

皇子なのだから自分の身を最優先にして守るべきなのだ。ただの一臣下の事などにそこまで気を回すべきではない。

兄弟、なのだなあ。  
すぐ上の兄とまるで同じ様なことをする。

佑茜は今頃どうしているだろうか、そんなことを思った。

風呂から上がり耀に着替えを手伝わせている間、従者達の様子を観察した。

程度の差はあれど、3人供一様に私に対し腹を立てている。さて、一体なんだろうか。

十中八九は先程の襲撃の件だとは思うが、正直面倒にも思う。

「どうしてですか!」

長椅子に腰掛けると、條じょうがさっそく食って掛かってきた。

「何がだ」

「何故私が戻るのを待つてくださらなかったのですか!凜翔りんせう殿下は確かに大切です。でも、」

「條、止める!」

耀ようが声を上げた。

「だけど!」

「俺に任せて欲しい」

條は耀の押し殺した声に口をつぐんだ。

耀がこうして怒りを見せるのはかなり珍しい。

怒りを感じていてもそれを見せないだけの自制心があり、それは

3人の中で一番上手だった。

私自身も片手に数えられるくらいしか見た事がない。

伶れいが條の肩をたたいた。

諦める、という意味だろう。

「若様は、ご自分が狙われると判っていて私を凜翔りんせう様の下へ遣いに  
出されたのですか」

耀は確信を込めた声で言う。

私は肘掛に腕を乗せ頼杖をついた。

「可能性はあると思っではいた」

「もし、万一の事があつたら、どうするおつもりでしたか」

「私のしぶとさはお前達も知っているだろう」

「泳げもしないのに川になど飛び込まれて、運が良かったではすみ  
ません」

「実際に私はこうして生きている。なにが不満だ?」

ため息混じりに言えば耀はギリッと奥歯をかみ締めた。

「若様に万一の事があれば国は立ち行かなくなりませす」

「それは違つ」

私は耀の言葉を即座に否定した。

「10年前とは事情が違う。今”私”がいなくなったとしても多少の混乱はあれど、何も変わらない。”一姫”がお前達の誰かと結婚し、子をなして継いで行くだろう。なべて世は事もなし、だ。それに万一の場合は、以前話したとおりに処理してくれる、とお前達の事を信用しているしな」

だからこそ最悪の事態になったとしてもなんら心配をせずに行われるのだ。

バンツと耀は目の前の机に手を叩き付けた。

「いい加減にしてください！」

耀が私に向って言葉を荒げたのは初めてだ。

「なぜそこまでご自分を粗末に扱われるのですか！若様に何かあったら姫様がどう思われるか！！」

「知っている。それに、お前達もだ。泣いてくれる人間がいるというのは幸せなことだ。そうだろうか？」

「そんなことを言っているではありません！」

「違うないさ。お前達は”私”を知っている。そしてそれを悲しいと思い助けようとしてくれている。どれほどそれが私の力となっているか判らないか？国の為に、民の為に、その他大勢の為に、私は自分の命を使うことに疑問は無い。それが私の生かされている意味で理由だからだ。それでも何もかもが馬鹿馬鹿しくなって生くる事に厭くこともある。私がそこで踏みとどまってこられたのは、お前達のような者がずっと側で支え続けてくれたからだ。感謝もしているし、幸せなことだと思っている」

「若様にご自分を犠牲になさる事を厭われない。その事に憤っているんです。はぐらかさないで下さい」

ため息をついた。

「私とて命を粗末に扱おうなどと思ってはいない」

「でしたら、なぜ私を凜翔殿下の下へ遣わされたのです。危険だと判っておられたのでしょうか」

話が元の位置に戻ってしまった。  
苦々しくそれに答える。

「護衛を数人残してもらえばその者に連絡を頼めたのだが、あの時は他に手段がなかった。残していつてもらおうよう凜翔様に頼まなかった私の失態だ。予備知識なく襲撃されると、そうでないのでは危険度は全く違う。凜翔様の安全を確保する為にも、私が多少危険になるのはやむを得なかった。條か伶が戻るまでに襲撃が無いと限らない。どちらかが戻ってくるのを悠長に待てなかった」  
フウツと息をつき、耀は怒りを飲み込んだ。

「あの時危険を報せに来た方は、若様を一人にするための罠だったようにも見えますね」

耀はそういった。  
ある意味そうだろう。

私の側にそこまで人がいないとは予想していなかったのではないか。

真祥は私に危険を知らせた後、人目のある場所にいる予定だったと思われる。

そして実際に襲撃され、それを知らせた真祥は目撃者として有効な証人となる。

だが真祥は私に火事を知らせに戻った為に、襲撃時に姿が見え無いという事になった。

犯人かその一味だと都督から責められることになるだろう。

何せ私は、『襲撃時は忠告をしに来た真祥にはあつていないし、火事の中自力で脱出した』ということになる予定だからだ。

真祥にはなんとか切り抜けて欲しいとは思うが……。

これから待ち受けているだろう彼の苦難を思った。

「それで、頼んだ事はどうだったんだ？」

3人は目配せしあい、最初に伶れいが口を開いた。

「前任者の都督ですが、既に亡くなっておりました」

祭伯達さいはくたつが前任者だろうと思っていたが、違うのか？

私の心の疑問に答えるかのように一度大きく頷き、続ける。

「当時祭伯達さいはくたつは、都督の側近として州政に携わっていたようです。

ですが前都督殺害の嫌疑をかけられ、その地位を追われたとの事です」

「病死ではないと言う事か」

「はい。表向きは事故死と言う事になってはいるようですが、色々不審な点があるそうです。ただ決定的な証拠が出てこなかったために伯達はくたつは地位を追われるのみで済んだようですね」

解せない話だと思う。

証拠がないのに地位を追われた？あの祭伯達さいはくたつに、そんな事があるのだろうか。少なくとも現都督に証拠もなく祭伯達さいはくたつを排除するほどの力があるようには思えない。私にその実力を測らせないようにならざるに間抜けの振りをしている可能性はあるが、正直違うような気がする。

「前都督の近親者はどうだ」

「細君と一緒に事故に巻き込まれなくなったとか。ですが息子と娘が生きています。息子の方は、この官庁で働いているそうです。若様もお会いになっっているかもしれませぬ。名前は傳真祥はくしんしょう」

「あいつか……」

意外な名が出てきた。

という事は、色々な点に納得がいく。

「逆だ」

「なにがですか？」



「前都督を殺した者が、だ」

「では、」

「現都督側だ。その責任を祭伯達さいはくたうに被せようとして、失敗した。だから伯達はくたうは生きている。もしかしたら何らかの取引があったのかもしれない。そうでなければ大人しく伯達はくたうが引っ込んでいるはずがない」

「……前都督の子供達は事故後暫くの間、現都督に保護されていました。祭伯達さいはくたうが失脚し、安全が確保されたと言って、漸く表に出られるようになったとか」

「人質、か」

都督は随分と露骨な手段をとったものだ。さぞかし反発も大きかった事だろう。

よくぞその反発を抑えきれたものだと感じるが、きっとその反発を押さえ込んだのは伯達はくたうだろう。

かなりの高位官職に伯達派はくたうの人間が食い込んできているのがいい証拠だ。

つまりそこまでして伯達はくたうは真祥しんしょうとその妹を助けようとした。

どういふ関係かはわからないが、伯達はくたうにとってそれだけ重要な人間である事は間違いない。

真祥しんしょう自身現在には力のない子供ではなく、重要な役職を持った男でその発言力うたひちからだつて無視できない。

そして真祥しんしょうはある意味、反都督派の御旗でもある。それを使い捨てるような用もちになど使う意味はない。

伯達はくたうにとって真祥しんしょうの行動は本当に想定外で、普段とは違う行動を真祥しんしょうが取ったと言う事ではないのか。それでは真祥しんしょうはなぜそんな行動をとったのかということが問題になる。

……判らないな。正直、判らない。

考えていても仕方がないことは、後回しだ。気持ちを切り替え話題を変えた。

「例の方はどうだった」

條が口を開いた。

「はい。ようやく連絡が取れました。すべて若様の指示通り動いているそうです。白牙の捜査も難航しているとの事です。その関係から第五皇子は皇帝陛下直屬の配下より、厳しく取調べを受けているとの事です。今のところ若様との関係を類推する証拠物件などは出ていないそうです」

「そうか」

大丈夫だろうとは思っていたが、少しだけ安堵した。

まだ朱晋という繋がりがある以上、油断が出来ないのが難点だ。

第五皇子は慎重であるから、朱晋との関係を匂わす証拠となる物品は残していないはずだ。

だからこそ朱晋に罪を着せる事もできないし、その関係で私になすりつけようというのも難しい事になる。

私が紅扇宮から脱出する時、唯一それを目撃者した佑茜がどういう行動を取るかにもよるが、あの皇子は私を売るような真似はしないと半ば確信している。その程度には佑茜を信頼している。

そもそも第五皇子の力になる理由など祐茜にはないし、腹心の部下を差し出したら佑茜自身も類を免れない。

どれほど阿呆といわれていようと、佑茜がそのくらいの計算を働かせないはずもない。

故にあり得ない。

が、逆に私の想像を超えてそれを遣りかねないのも佑茜である。

普通に考えれば何も心配がいらなのだが、あの皇子は普通じゃないから油断ならない。

明けて翌朝。

「紘菖殿は、真祥より忠告を受け、それを報せに私へ使者を出したのでしたね」

「その通りです」

凜翔の言葉に私は頷く。

「これはあやつの罫です。私はその様なことは決してしておりません」

唾を飛ばさんばかりの勢いで都督は否定した。

「その使者を出したことで、紘菖殿はただの一人となってしまうた。そして言葉通り襲撃された。それで間違いありませんね？」

凜翔は都督を無視して話を続けた。

「あやつが私に罪を擦り付けるために仕組んだことです。紘菖様をお一人にし、その機会を作り出したのです」

私が答える前に都督は主張した。

「今は紘菖殿に話を伺っています。黙っているように」  
凜翔は煩げに言う。

「いかがですか？」

「凜翔様の仰るとおりです」

「よくご無事でしたね。怪我をされてはおられないのでしょうか？」

「ご心配をお掛けして申し訳ありません。擦り傷程度のかすり傷です。相手は手強くありましたが、どうにか撃退する事ができました。仕留めるまではいかず、みすみす逃がしてしまいました事お詫び申し上げます。ですがそのやり取りをしていた為に、すっかり逃げ遅れまして、火に巻かれてしまいました。他に逃げ道はなく、川に飛び込まざるを得なかったのです」

「その最中、真祥を見かけましたか？」

「いいえ。忠告を受けた後すぐに返し、それ以降一度も顔を合わせ

ては降りません」

私は全てを話しているわけではない。凜翔はそれを敏感に感じ取っているのだろう。

不信とまではいかないが、不可解そうな様子だ。

その真祥が呼ばれて部屋に入ってきた。

都督は険しい表情を崩さない。

凜翔は目撃したものについて詳しく聞きだしていく。

それは私の聞いたものとはぼ代わりのないものだ。

所々都督が嘘だ何だと合いの手を入れていくが、凜翔は意に介さなかった。

私に忠告をした後の行動は、自宅に帰ったと言っていた。火事には気が付かなかったという。私が伯達に真祥にはあっていないと宣言したとおりの発言だ。

当然だが目撃者も、他にそれを証言する事が出来る者もおらず、

都督がお前がやったのだろうと畳み掛けていく。

凜翔がそれを止める。

この皇子がどう判断し、どうこの事態に收拾を付けるか見ものだとも思う。

私は他人事のようにそれを眺めていた。

「凜翔様、よもやこのような者の申すことをお信じになられるのですか!？」

「それをお前に話す必要はない」

「あの火事にしろ、全部こやつの仕事です」

流石に聞き苦しく感じる。

あの火事は確かに都督にとっては想定外だったろうが、もう少し知恵を回らせて、真祥が犯人の証拠でも作ればよいものを。ここでただ声高に主張するより、よほど説得力があるというものだ。

「都督はこう申しておるが、紘菖殿が一人となる事を狙い忠告に来たのか」

「護衛の一人もなく、側仕え一人しか置いておられないとは、考え

でもおりませんでした」

眞祥は頷いた。

「お前の言う通りだ。護衛を相応の数残すべきだったのだ。私の見通しの甘さゆえだな」

「火が出たとき、私にそれを教えにくる者はおりませんでした。宿舎に人が全くいなかった証です。召使も下働きも、宿舎にいたべきその者達が、全くいなかったと言うのはおかしい話ではありませんか？」

「絃菖殿の言われる事も最もだ。人払いがなされていたと言う事だ。都督、これはどういうことだ？」

都督はしどろもどろに言い訳をする。

「宴のための人手が足りず、宿舎の方の人間を呼び寄せていたので。他意はありません」

「絃菖殿が欠席される事は早くから通達してあった。その絃菖殿の食事等はどうするつもりであったのだ？」

「それは……」

都督の意図はあまりにも明白だ。

だが、それをする動機もまた、存在しない。

宿舎焼失となれば明らかに都督の失態で、私が暗殺されかけたと言う事実が無くとも、その責は負わねばならない。

確かに私は都督にとってすれば、明らかに邪魔な存在ではあるが、自身の地位を賭けてまで害そうとすると言うのは、動機としては少し弱い。

「火の回りも早く、一人二人の仕業とは考えにくい。もし宿舎に火を放つのであれば、そのための人員が複数必要です」

「成程……」

凜翔は都督への疑いを捨てたわけではなさそうだが、下働きなど一切を排除したと言うことは、逆に火を放つための人員を別に用意しなければならなかったという事に思い至ったようだ。

「状況はよくわかった。今後はそれらの証言をもとに調査をしてい

く。都督と真祥は戻ってよい」

真祥はすんなりと、都督は未練たつぷりな様子ながら、部屋を辞  
していった。

二人が出て行くのを確認し、チラリと意味ありげな一瞥を寄越す。

「今回の件については、私が調査します」

「それは私へ手出しは無用である、という意味でしょうか」

言葉の形は質問ではあったが、ほぼ確認の意味しかなかった。

「絃菫殿は陛下に提出する資料の作成をお願いします。私が持っ  
ていた資料だけでは、如何にも足りません。時間も無いことですし、  
分業と行きましょう」

判りましたと私はただ頷いた。

凜翔は一通り事情聴取をした後、今回の件の対応のために、護衛の半数を残し庁舎へ出かけていった。同時に都督や真祥も連れて行ってしまう。

私は借り上げた宿屋で引きこもる事になった。

暗殺騒ぎについては、完全に蚊帳の外に置かれるということだ。皇帝への報告書作成を指示されている。

先の騒ぎで焼失したり、判読できなくなったりと、作成してあった報告書がかけてしまったせいだ。

高みの見物と言うのはまだしも、このまま一人取り残されると言うのも面白くはない。

残された護衛は私に対する警護であると同時に、監視の目でもある。あまり派手な事はできない。

「どうなさいますか？」

耀が尋ねてきた。

「都督の動きを監視する。が、それ以上に、真祥の妹を注視しておく」

「三人で二方向を監視する事は……」

「都督の方は、お前達の手が空いているときだけでよい。私が探らずとも、凜翔様も警戒されているはずだからな。妹の方は、都督が以前と同じ手を使ってくる可能性が高い。その時への方が一の場合への保険だ」

「いざと言う時はお助けせよ、ということですね」

「そうだ。ただし、その命が危険に晒されるなど、緊急の事態になるまで、介入はギリギリまで控えよ」

「承知いたしました」

もっと探りたい人物や場所はあるが、今は動かせるのが彼らしかない。今回の視察があまりに唐突で、準備が全く出来なかった。

こういつた非常時にも動かせる人員を、帝都に戻ったらもつと確保せねばならない。

胸中に重要課題として書き込んだ。

従者達は私の命を忠実に実行した。

妹の方に動きは全くなく、ほぼ都督の行動に対する報告ばかりだ。食事時になると凜翔は宿屋に戻ってきて、捜査の進展を教えられてくる。同時にもの問いた気な様子だった。

恐らく従者達の行動を把握していて、それらに対する疑問を口にしたいのだと思う。

事実私にはいくつも報告すべき事がある。

宿舎消失は祭伯達の手によるものだし、その後の密談、前都督から現都督への権力委譲についての疑惑など、それをあえて黙っている。

知らなければ処罰の判断を間違う可能性の高い要素ばかりだ。

凜翔が尋ねてこないことをいい事に、それを伏せていたのだ。

それどころか、訊ねられても正直に答えたかかなり微妙だ。むしろすつ呆けた可能性の方が高い。

全部、話の流れや凜翔の出方次第だ。

私は未だ凜翔の本質を掴み切れていない。

例えば私が祭伯達のことを話したとする。しかし何も証拠などはないが、私のその不確かな証言だけで処分をしないと限定らない。凜翔にはその権限があるのだ。

私はそれを好ましいとは思わない。権限があるからこそ、そのような刑法にもとる様なまねをして欲しくないし、法は率先して守ってもらいたい。それがこの地に順法への意義を植えつけることにも繋がるはずだからだ。

他にも潔癖すぎてそういつた後ろ暗い治世手法があることを良しとせず、法で処罰はせずとも州政から遠ざけようとしないと限定らない。

勿論、祭伯達への捜査に手心を加える等論外だが、その追求をか



わしきつて州政に自力で戻ってきて欲しいとは願っている。

だから凜翔<sup>りんしょう</sup>へすべてを話すのは人物を見極めてからでなければ出来ない。

これが兄の克敏<sup>こくびん</sup>皇子ならばそういった心配をせずに済んだが、ただ付き合いが殆どないハツキリと言えばその性格等を捉えきれない相手だからこそ、そういう配慮も必要だった。

何事もなければ……とは思っていた。

だが、本当に何かあると思っていたわけでもない。万が一の場合の保険でしかなかった。正直な所、そこまで愚かな手に出るとは、考えていなかった。

むしろこんな真似をすれば確実に今の地位を追われるのは確実に、その地位を維持しようと考えたら、絶対にとらない手段だからだ。

都督の動き自体は予想を超える物ではなかった。

真祥を糾弾し、潔白を声高に叫び、そして対抗するように真祥の証言を覆すような証人を作り出している。

どう考えても定石通りだ。

だがそれではまだ甘い。

都督に有利な証言をする者は、どれも都督と関係の深いものばかりで、口裏を合わせているといわれても仕方がないものだ。

その証言者達について、当日にどういう行動をとっていたか、下働き達に証言を求めたところ、矛盾する証言がボロボロ出てきて、信用性に揺らぎが出ている。

正直ここまで穴のある対応するとは思っていなかった。

伯達派の人間が都督に有利になる証言をするはずがなく、それも見越して証言を捏造するべきだろうに、おかげで都督はかなりの窮地に追い込まれている。

凜翔は未だ調査を粘っているが、これ以上の証拠は出てこないだろうと思っている。後は皇帝がそれらをどう判断するかだ。

都督と真祥の主張が平行線で、その証人となりそうな者はない。

法の範囲において現状でとりうる手段は、都督の権限を一部凍結し皇帝や司法の裁可を仰ぐことだ。凜翔でも皇子としての強権で都督を捌く事はできるが、凜翔自身はそれを是とすることはないようだ

った。

この分なら私の危惧したとおりの展開にはならないかもしれない  
と思い始めていた矢先だった。真祥の処遇に問題ないと。

「若様、美齡の近辺を、不審な人物がうろついております」

真祥の妹の近くに張り込ませている従者達から不穏な報告が入  
った。

はじめはまさかと思った。そんな事をすれば、都督は自らの首を  
絞めることが目に見えていた。

だが従者達は真剣で真実だと判断せざるを得なかった。

今現在、私のとれる手など本当に限られている。凜翔からはこの  
件から外されている上に、護衛という名の監視が付けられている以  
上、私がいかに手出しする事はできない。かといって従者達を危険  
に晒す事もしたくない。不本意ながら消極的な手段をとらざるを得  
ず、非常にもどかしくあった。

「お前達の存在を気取られぬよう気をつける」

「対処は不要ということですね？」

「最初に申し渡したとおり、ギリギリまで泳がせておけ」

「判りました」

部屋で一人軟禁状態で、自由に動き回れないのがかなりもどかし  
い。

従者達の報告と、凜翔のもたらす情報だけが頼りだった。

都督は真祥を合法的に追い落とし、その地位に固執するのではな  
いかと私は思っていた。真祥を排除しなければ、確実に都督は終わ  
りだからだ。

捏造などで犯罪の証拠を集めることを合法というかは別として、  
そついった穏便な手を使うだろうというのが私の予想だったのだ。

妹に従者達を張り付かせたのは、単に保険のつもりでしかなかった。

事実、都督は当初はそついった行動に出ていた。だが、度重なる  
不首尾で、それらは水泡に帰した。

前都督を排除し、祭伯達を失脚させたように、今回もまた直接的

な手段に出たのだろう。二度同じ手が通じると思うなど浅はかにも程がある。

従者達の報告から祭伯達さいはくたうは人質をとられることをとても恐れている節があった。屋敷内には屈強な人間が幾人もつめているし、外出の際には護衛だつてついでる。

襲撃などしようものならかなり大事になるのは間違いない。

そこまで大事になつてもみ消せるほど都督は有能ではなく、例え真祥しんしょうを力づくで排除出来たとしても、待っているのは破滅だけだ。

そのぐらいの判断も出来ないほど思考が停止しているという事か。

「美齡びれいの外出に、ずっと張り付いていました」

「潜む人員が増えていきます。およそ5名といったところですよ」

「屋敷の人員の動向を見えています。襲撃する時期を窺っていると思われまます」

刻一刻と従者達の報告は厳しい内容となつていった。

今は都督を監視するのを中断させ、三人とも揃つてそちらにかかりきりにさせている。

「襲撃！拉致されました」

一報が飛び込んでくる。

とうとうやつたかといった感じだった。

「被害状況は？」

「屋敷の人員は多少の怪我人程度で、ほとんど被害はありません。物的被害については外から観察した程度では判りかねます」

「美齡びれいの様子はどうか」

「比較的落ち着いている様子です。見たところ大きな怪我も無く、隠れ家に連れて行かれた後は、縛られ部屋に閉じ込められております。また、犯人の中に1人冷静な人間がいるようで、そこまで手荒な真似はされていません。犯人達の中にはそれに不満を持つ者がおり、内部分裂しかかっています」

「判った。引き続き監視を頼む」

一人報告に来た伶はすぐさま踵を返し部屋を出て行った。

緊迫した状況ながら、冷徹に事後の事を予想する。

少なくとも、この状況ではたとえ証拠がなくとも、都督を無罪放免とする事はありえない。恐らく都督の更迭については避けられないだろう。誘拐犯を確保できれば確実に処断する事ができる。

残るは二つの陣営の権力の綱引きだ。

外部の人間である私の口出す事ではないし、その権限もない。あるとしたら今現在のところ凜翔<sup>りんしょう</sup>だけだ。

もともと凜翔<sup>りんしょう</sup>とは都督は排除する方向で話し合っていた。

都督という頭を失って、どんな暴走をするかが最も気にかかるところだった。

今のところそういつた暴走をしそうな人間は皆無ではないが、祭<sup>さい</sup>伯達<sup>はくたつ</sup>らの手で十分抑えることができそうな者ばかり。その点についてはあまり心配は要らないと思う。

この騒動の結末如何によるが、犠牲者は出さずに済ませたい。可能ならば現場に駆けつけ指揮を取りたいくらいだ。

凜翔<sup>りんしょう</sup>は恐らく私の従者達の動きを把握している。凜翔<sup>りんしょう</sup>がどう行動するか読みきれないが、みすみす見逃すとも思えない。人に期待するしかないというのは情けないが、上手く収めるだろう。

暫くすると凜翔が部屋にやってきた。

「襲撃を予測されていたのに、なんら策を講じないとは、どういうおつもりか」

開口一番そう抗議してきた。

用件はそれしかないだろうと思っていたが、これほどまで単刀直入に切り出してくるとは思わなかった。

「どうぞお座りください」

「絃萱殿！」

「はぐらかす心算はありません。まずは腰を落ち着け、話はそこからです」

渋々と凜翔は椅子に腰を下ろした。

「策を講じないのか、というお話でしたね」

「そうです」

私は真つ直ぐ凜翔を見ていった。

「それをする必要性がないからです」

「あの娘を見殺しにすると仰るのか」

「見殺しにする気があれば、そもそも従者達を潜ませてはおりません」

「助ける気はある、ということですか？」

訝しげな声だった。

「命の危険に晒される場合に限り、介入せよと申し付けてあります。凜翔は暫し目を瞑り、私の返答を咀嚼している。

「積極的に救いの手を差し伸べる意思はなし、と言う事ですね。都督の犯罪と決定付けるためですか……」

「違います。我々が、彼らを裁く側の人間だからです」

非難の色を帯びた凜翔の言葉に、キツパリとそう反論した。

「彼女を保護する事は容易い。ですが、それをする理由は今のとこ

る存在しなかった。その状況の中で保護を優先すれば、真祥側マサキに肩入れしたと評されても反論できません。また、逆に真祥側マサキへの圧力のために、人質に取ったとみなされる可能性もあります。それは裁きへの公平性に対する重要な懸念となります。故に我々はあくまでも中立足りえなければなりません」

「言葉が過ぎました。紘菖殿フユキの仰るとおりです。ですがあなたは今回の襲撃を予期しておられた。ならば必ず根拠となる理由があるはずです。それらを明らかにし、保護を優先しなかった理由にはなりません」

凜翔リンショウの言葉は最もだった。

だが……。

「根拠などありません」

「では、何故監視を？」

「幾つかの事実から導き出される推察によります。私とて確実に事が起こると、考えていたわけではありません。ですがその可能性は無視できないほど大きいと判断しました。だからこそ保険の意味を兼ねて従者達を動かしたのです」

「その推察及び事実という物をお話願いたい。無論、それを私に伏せていた理由もあわせて」

凜翔リンショウは強い口調で言う。

その身に纏う色から、腹立たしく思っておられるのだろうか、私に対し不信を抱いているわけではないらしい。

根が素直というか真っ直ぐというか、こういう人物は個人的には好きだが、政治家としてはもう少し人を疑わないとやっていけないだろう。

「前都督から、現都督への政権移譲についてです」

私はそれを話し始めた。

「現都督がその地位に着いたのは、前都督が不慮の事故でなくなつたためです。それはご存知ですね？」

凜翔リンショウは黙って頷いた。

「その時、事故死を装って殺害を計画したとの疑惑により、祭伯達は失脚しました。ですが肝心の証拠らしい物は出てきておりません。それゆえに祭伯達は命拾いしました。これが第一の事実です」

「祭伯達がその様な事をするわけが無いと仰るのですか？真犯人は別にいると？」

「そこまでは申しません。次に、現都督は、それらの騒動が収束するまで、前都督の残された子供達を”保護”しておりました。祭伯達に殺害される危険性があるという名分です。これが第二の事実です」

「妥当な線といえますね」

凜翔は頷く。

「最後に第三の事実です。その残された子供というのが、真祥であり、その妹だと申し上げたら、どう致しますか？」

凜翔は大きく目を見開いた。

「まさか……」

「これらにより、私はひとつの仮説を立てました。無論何一つとして証拠はありません。そしてそれは凜翔様へ、余計な先入観を与え結果になりかねません。故にお話いたしませんでした」

凜翔はため息をついた。

「”恩人”であるはずの人間を窮地に陥れる可能性の高い証言、そして祭伯達への心酔ぶり。……事実は反対、と言う事ですね。汚名を着せられながら表舞台から去った伯達への、二人は人質であったというわけですか。確かに、真祥が復讐に駆られて証言したのではないか、都督はそういった事をするのだから、今回のような事をしてでも不思議ではない、といった思いは抱いたでしょうね。貴方はだからこそ、同じ手段を使うのではないかと、従者達に見晴らせていたのですね。言い分はわかりました」

「ご理解いただけ幸いです」

「他に、私に対し伏せている事はありますか？」

「これまた直球だ。」



「勿論あります」

しれつと私は答えた。

凜翔はキョトンとした顔になった。

「面と向かって尋ねられることも大事でしょうが、あまり好ましい手とも申せません。カマをかけるなり、裏を探るなり、相手の言葉を鵜呑みにする事ほど危険はありませんよ」

「駆け引きというものですな」

微妙な苦笑が帰ってきた。

「絃菖殿じゆしやうにそれをする必要性を感じないのですが……ご指摘の通り、私は人の裏を見抜くというのが苦手なのです」

私に必要がないというのは、それをしなければならぬほど手強い相手ではないという意味だろうか。それとも、政治という問題において、彼を騙して利を得ようとすることは無いと信じ、確信しているという事だろうか。

とつさに判断に困る返答だ。

前者ならば侮ってもらえるのなら、幾らでも言いたいのだが、後者であった場合、そんな風にかぶられるのはあまりよろしくない。

「無理に変える必要はないでしょう。凜翔様りんしやうは凜翔様りんしやうです。ですが、そのままというのも危なっかしいのも事実です。宮殿には貴方の権力を利用し、果てには奪おうという輩は掃いて捨てるほどいるのですから。一人そいつた方面に強い者を傍に置かれれば良いでしょう」

「検討してみます。それで、絃菖殿じゆしやうの隠しておられる事はなんですよ」

神妙に頷き、訊ねてきた。

やはりはぐらかせなかつたか。

「……これは事実ではなく、私の推察または想像になります」

それでも良いと凜翔は先を促してくる。

あまり話したくはないが、凜翔にも関係する話だ。

自衛を促すという意味でも必要だが、進んで口にしたいことでもなかった。

「今回の暗殺の首謀者は、都督であり、祭伯達であり、また別の人間でもあります」

「都督……ではないと?」

「正確には、都督も、と申し上げるべきでしょう」

「では真祥が見たという都督と暗殺者の会話というのは、でっち上げですか」

「いいえ、事実でしょう。そもそも始まりは、帝都にあります」

「つまり、私が標的であった、という事ですか」

「私がおこへ来る事になったのは、直前に決まった事です。本来ならば凜翔様のみ。ですが何らかの事情があり、その標的を私に切り替えた。その暗殺者は都督側、祭伯達側の双方に接触を図ったことでしょう。祭伯達は真祥にその暗殺者との会話を漏れ聞くよう手配し、都督を陥れようとした。だからこそ都督は宿舎の人員を遠ざけ、そして火事になるとは考えてもみなかった」

「それでいくと、真祥がその後大勢の中で、きちんと所在を目撃されていなければ、話が破綻してしまいます。都督を嵌めるための証人になりえないではありませんか」

「祭伯達にとつては、不測の事態です。そもそも真祥が私の元に忠告に走るとも考えていなかったのではないでしょうが」

「暗殺者がいると思われたのは、なぜです」

「口を封じに来たからです。私であっても、凜翔様であっても、殺されれば州政が立ち行かなくなるほどの大問題となります。それら

の危険を冒す理由は、上からそうはならないと保証を受けたか、それを上回るほどの益がある場合です」

「つまり……その首謀者というのは、帝都にいる、兄上達だと、そう仰るのですね」

歯を食いしばるように凜翔は言った。

私がおここに来たことを知りえたのは、そして凜翔か私を暗殺したいと願うのは、どう考えてもそれ以外にない。

よく判りましたといい、凜翔は部屋をあとにした。

その背中が悄然としているように見えたのは見間違いなどではないのだから。

暫くして伶が再び報告にやってくる。

「美齡を連れて移動を開始しました」

事態が動き出した事を私は悟った。

「凜翔様の手のものはどうなっている」

「私共の側に、やはり同じ様に潜んでおります」

「その者達の監視から逃れる事は可能か？」

「彼らの注意自体は美齡に向いていますので、問題ありません」

私は頷く。

地図を取り出し広げた。

「今日は真祥が欧小台へ向かうこととなっている」

伶は私の言わんとすることを、真剣に検討していた。

そしてある一点を指し示す。

「この、川沿いは、地図ではがけ崩れが発生し易くなっています。

そこで……」

私はその通りだと頷く。

「恐らくはその可能性が高い。真祥側も警戒しているはずだが、事態がどう動くか判らん」

「その襲撃に割り込みますか？」

「いいや、その様な事はしない。だが……」被害者”を掻っ攫うくらいは許されるだろう」

あくまでも万が一の場合にしか動かないという事だ。手当てが間に合わず命を落とす可能性もあるが、そこは運任せだ。

「では、潜んで事を待ち、混乱に乗じて秘密裏に保護する、という事ですね」

「そのまま怪我の手当てをし、帝都に運べ。くれぐれも凜翔様や都督らに気が付かれるな」

「判りました」

「手段は問わないが、真祥を帝都に運ぶのは耀に任せる。お前と條は送り出した後は戻ってくるように。私が帰都する前にもし佑茜様に見つかった場合、この書状をお渡しせよ」

用意していた書簡を取り出し、それを手渡す。

「美齡の方はいかが致します」

「そちらから全員手を引くわけにも行かない。凜翔様の配下の者もついていることもある。一人残しておけばよいだろう」

「了解しました。若様のお言葉を二人にも伝えます」

伶はあわただしく部屋を出て行った。

私の護衛という名の監視は大分少なくなつたとはいえ、それらを巻いて外出するには難しい事は変わりない。

凜翔はよほど私が無茶をすると考えているらしい。

それともあの話をするのが早すぎたか。

あれで凜翔は警戒心を随分上げた。

私への暗殺の手も、そして凜翔自身への攻撃も、どちらも想定して動いている。監視の厳しさはそのせいもあった。

暫くした後、凜翔が部屋に入ってきた。

「美齡を保護しましたよ」

疲れた様子ながら、僅かながら晴れ晴れとした口調でそういう。

凜翔が保護というのだから、間違いなく安全な場所にいるのだろ  
う。

その事実には少しだけホツとした。

後は真祥の方だけが気がかりだ。

恐らくはまだ現場で奮闘している従者達を思う。無事に保護できればいいのだが、従者達ならば上手くやってくれと信じていてもやはり心配は心配だ。殊に美齡の嘆きを思えば、なんとしても無事  
でいて欲しい。身内が死ぬ、それも己のせいで死ぬというのが、どれほどその心を傷付け苛むか知っているだけに、そう思わずにいら  
れなかった。

「怪我などはしていませんか？」

と凜翔に尋ねると、意外そうな顔をされた。

「まだお聞きではない？」

「ええ」

「大きな怪我はありません。ただ精神的に不安定になっているため、暫くは私が保護し、状態が安定して後帰そうと考えています」

「ならば、伯達にお預けになるといいでしょう」

「そう、ですね。私が保護するより、そちらの方が幾分気持ちも楽  
でしょうね」

「都督の方はいかがでしょうか」

「これから追求します」

「犯人は捕らえられたのですか？」

「無論です」

「では、その犯人たちはどこに？」

「既に収監されていますよ」  
顔を顰めそうになってしまった。収監という事は、都督の手の中  
ということではないか。

「でしたら、可及的速やかに、その犯人を保護してください」

「どづいづい……まさか！」

凜翔は言いかけ、すぐに思い至ったように目を見開いた。

察しのいい人だ。

だが私が指摘する前に、それに気が付いて欲しかった。

「忠告ありがとうございます！」

凜翔は部屋を飛び出していった。

手遅れかもしれない、そう思いながらも私はそれを見送った。

夜半になって、條と伶が戻ってきた。耀の姿がないことから、真  
祥は無事保護でき、そして帝都へと送られたのだろう。

「ご苦労だったな」

二人とも酷く薄汚れ、苦労した事が偲ばれた。

「真祥殿は無事帝都に送り出しました」

條が報告すると、伶も頷く。

「怪我が酷く、今までかかってしまいました。ご報告遅れまして申  
し訳ありません」

二人の報告に私は答える。

「問題がなかったのなら言い。私はこの通り実際に動くわけにも行  
かない立場だ。現場を見聞きしているお前達の方が、私よりよほど  
正確な判断を下せるだろう」

ここ数年、私の従者として色々な事に携わらせてきた。三人で力  
を合わせ相談して物事に当れば、私などいなくとも、なんら問題な  
い程度には鍛えてきたつもりだ。だからこそあまり心配せずに送り  
出せる。

今後の事を考えると、逆にそうなってくれなければ、私が困るの  
だ。

「美齡は凜翔様の手のものに保護された後、安全な場所へ移送されました」

「美齡の方に残ったのは、伶か？」

「そうです」

「今頃は祭伯達の元にいるはずだ」

「お聞き及びでしたか」

「ああ。凜翔様が報せに来てくださった。読みどおり襲撃があったのだな」

私のその言葉に答えたのは條だ。

「犯人は捕まらなかった様子です。他に真祥殿の仲間と思しき者が数人負傷しましたが、どれも命に別状はありません」

「どんな様子だった？」

「真祥殿が一人で居る所をまず襲われました。ですが、すぐさま助つ人が現れ、加勢し出したのですが、人質の存在を仄めかされ、真祥は動けなくなりました」

「まあ順当な脅し文句だ」

私は頷いた。

「実際のところ、これを見ていたのは耀なので、私はあまり詳しくは判りません。ただ、その後の幾つかのやり取りの後、真祥殿が斬られ、崖下へと突き落とされたのです」

「凜翔様の手の者に美齡を任せ、私が駆けつけたとき、ちょうど崖下へと落ちていくところで、私と條とで川から引き上げました」

「耀曰く、襲撃者は真祥殿を突き落とした後、すぐさま蜘蛛の子を散らす勢いで現場を去ったそうで、真祥殿の仲間達が崖に落ちた彼を助けようと、犯人を追うのを断念し、崖下に向かいました」

條と伶はかわるがわる報告していく。おおよそ想定内の出来事と見ていいだろう。

「お前達自身は、誰にも見つからなかったんだな？」

最も気がかりな事を確認した。

「気が付かれてはいないはずですよ」

條が断言し、それに伶も頷く。

「そうか。よく判った。他に急ぎの報告が無ければ、お前達も今日  
はもう休むと言い」

「都督の動向を調べなくとも良いのですか」

「そちらは凜翔様が探っておいでだろう。問題ない。それに、それ  
ほどまでに疲労困憊するお前達を使うほど、私は考えなしではない」  
二人は目を見交わし、苦笑した。



翌朝になりつて、凜翔と共に庁舎へと出向いた。

随分久しぶりのような気がした。

凜翔をはじめ幾人かの顔色はあまり良くない。

凜翔の臨時の執務室に案内され、二人きりで向かい合う。

「ある程度は把握されているとは思いますが……現在の状況をお知らせします」

随分と買いかぶられているらしい。私は仙人ではないのだから、何もかもを見通せる目など持っていないというのに。

「昨日捕らえた誘拐犯たちですが、全員処刑されました」

凜翔は重々しく告げる。

「口封じですね」

「ええ。紘菖殿のご忠告を受け、急ぎ戻ってきましたが、ほんの一足遅かった」

「私の失態です。その可能性を事前にお知らせするか、誰かに伝言を持たせるべきでした」

凜翔からは微苦笑が帰ってきた。

「この程度のことは、私が初めに気がつかなければならぬ事です。紘菖殿は私に向かい、配慮が足らないと叱って下さらなければならぬ位です」

叱るだ等と、そんな事出切る筈がないというのに無茶な事を言う皇子だ。

「それで、今度の件はどのようになさいますか」

「都督は凶悪犯を処分したと言いつ張っています。自分はそれに一切関知していません。証拠がない以上、私にはそれ以上追求は出来ません」

「それで私をお呼びになったのですか？」

「いいえ。もう一つ、お知らせする事があります。傳真祥のことで

す。ご存知でしょうが、昨日、誰かの手のものに襲撃され、行方が  
知れません」

「まるで私がその行方を知っていると仰りたい口ぶりですね」

「ご存知でしょう」

凜翔はそう断じた。

「真祥の妹君を保護して以来、貴方の従者達の動向がわかりません。  
それどころか、その前から一部姿を見かけていません」

従者達が何か工作をしていたのだらうと推察したわけだ。

的を射た指摘だ。だがそれではまだ足りない。私に真実を話させ  
るほどではない。

「残念ながら存じ上げません」

ジツと私を見つめてくる。

この程度で動揺するなどということはありえない。私は負けじと  
見つめ返す。

ため息をつき、凜翔は話し出した。

「共にその襲撃を受けた人間の証言によりますと、襲撃者は誘拐し  
た妹君を引き合いに、抵抗を封じたそうです。一方的に攻撃を受け、  
崖下に放り出された。彼等はすぐさま搜索しましたが、その姿を  
見つけることは出来ませんでした。報せを受け、私も救助の人員を  
派遣しましたが、こちらも同様です。崖下には川が流れていました  
ので、流されたのではないかと、川を下りましたが無理でした」

「犯人は捕まらなかったわけですね」

「その通りです」

「凜翔様はこの件について、どのようにご沙汰なさいますか」

「……正直、考えあぐんでおります。都督が裏で糸を弾いているの  
は間違いありませんが、証拠がない。私の地位ならば、例え証拠が  
なくとも、都督を罷免する事は容易いですが、法に悖る行動はした  
くありません。かといって無罪放免というのも問題かと」

苦悩が滲み出た声音だった。

言いがかりのような難癖をつけて、法を恣意的に運用する輩が多

い事を、この方はどれほど理解されているのか。

全ての官が凜翔のように公正明大であつたら、人々の暮らしは格段に暮らし易い事だろう。

だが、凜翔程の身分になると、それは逆に足枷になりかねない。国の頂点付近に立つという事は、決して綺麗事だけではすまない。全ての泥を被る覚悟が居る。

凜翔の真っ直ぐさにまぶしさを感じながらも、そんなことを考えてしまった。

「少なくとも、今回の件の失態に対する責任は取らせられます。宿舍焼失、宿舍へ人員を配置しておかなかつた事、また初期動作の不備に対して、次に誘拐事件についても、口封じと見られてもおかしくない行動を取つた事への非難、正当な裁判を経ずに処刑した事への不法行為、真祥への襲撃を未然に防げず、部下の安全を護れなかつた事、上げ出せば切がありませんが、充分更迭する根拠になりません」

「証拠が何もありません」

「都督自身の証言などもありますよ。それに上記に挙げた理由は、厳然たる事実です。都督を犯罪者として処刑はできずとも、その任を解くのにならんら問題ありません」

「その通りですね。……判りました。その様に取り計らいます」

不本意だろうが、凜翔はそう請け負つた。

凜翔りんしょうが今回の件について最終決定を各員に通知するための書物をしたためる間、私は1人庁舎内を見て回った。

付き従うのは條じょうだけだ。

護衛は断つてある。

一部を凜翔りんしょうの下に残して、残りは庁舎の建物全体を警備している。安全は十分確保でき、私に対する護衛は不要だろうと、凜翔りんしょうは判断したようだ。

やはり人が良い皇子だと思ってしまう。

私に対する監視を解いたも同然だった。

前方から祭伯達さいはくたうがやってくる。

無視して通り過ぎようとしたが、彼は私の前で立ち止まり貴人に対する礼をとってきたので、通り過ぎる事ができなくなった。

「お初にお目にかかります。私は祭伯達さいはくたうと申します」

「……ああ」

私と彼はここで初めてあった。……少なくとも、公式には。だからこそその台詞だ。

「此度の視察は、紘ひろ菖しょう様にはご不快な点が多かった事と思います。

州の人民を代表し、お詫び申し上げます」

「州を代表するのであれば、都督が申すのが相応しいのではないかと？」

「都督は既にその任を解かれ、更迭されてございます。後任として私がお挨拶に参りました」

確かに、伯達はくたうの言う通りの展開にはなるが、それはまだ実行されていない。

現在進行形で凜翔りんしょうが奮闘しているところなのだから。

伯達はくたうもそれを知っているだろうに、こんな危険を冒してまで私に話しかけてきた。

事件が起きたあの沢を下っても、真祥の姿を見つけられなかった。だから凜翔と同じく、私が行方を知っているはずとやってきた。それだけ真祥の行方が気がかりなのだろう。

「そうか」

私はまだ都督が任を解かれていない事実を知りつつ頷いた。

「私共はできる限り凜翔様や紘菴様には気分良く帝都へお戻りになつて頂きたいと考えております。私共で出来る事でしたらなんでも申し付けてください」

下手をしたら賄賂だと言われかねない台詞だ。

何でも聞く。だから（真祥を）返してはくれないか。

そんな心の声が聞こえてきそうだ。

「なに。今の私は気分が悪くはない」

「と言いますと？」

「主への良き土産が手に入った。あんな騒ぎがあつたのもいい土産話だ」

土産（真祥）は帝都に送った。

そういつた意味を込めたものだ。

少なくとも都督の手の届くところにはない。

これで十分通じたはず。

伯達はジツと私の顔を見つめてきた。

フツと相好を崩し、頷く。

「それはようございました。私も胸の痞えが下りたような心持です。頷く事でそれにかえし、その場を離れた。

今度は伯達も追っては来なかった。

「紘菴殿、従者の1人をここ暫く見かけないようですね」  
探るように凜翔は言う。

「予定よりこちらでの滞在日数が増えてしまいましたので、それら

の顛末を記した報告書を持たせ帝都へ送りました」

その問いは十分予測していたために私はサラリと答える。

「一言陛下へ連絡をいれるように私に忠告して下されば良かったのではないのでしょうか」

「申し訳ありません。とてもお忙しそうに見受けられましたので、この程度凜翔様の手を煩わせるほどの事でもないと、出過ぎた真似を致しました」

「今の今までそれらに思い至らなかった私の不明です。礼を言いこそすれ、責めるつもりはありません」

「お言葉ありがたく」

「一体いつ報告を出されたのですか」

「美齡が襲撃された直後です。彼女が襲われるまででしたら、帝都到着は天候不順などの誤差の範囲内で収める事ができましたが、彼女への襲撃などの処理をしていては、各人への処分など発生しますし、到底誤差と主張する事はできません。ですので、その時に」

本当はもう少し後の真祥の襲われたときだが、そんな細かい事まではわからないだろう。

先に帝都に向かわせた耀に簡易報告書を持たせたのも事実。

「道理で貴方にしては真祥襲撃に何も手出しされないし、美齡保護の報を聞いていなかったりなさっていたわけですね」

「随分と、買収されているようです。私はそこまでできた人間ではありません」

「いいえ。私がつと注意深く行動していれば、絃菖殿の手を煩わせる事などありませんでした。そうすれば貴方はもつと民の為に辣腕を揮えたでしょう。私の至らなさです」

「それは違います。此度の視察は、全面的に私の至らなさゆえに、このような騒動となったのです。副官としてきちんと補佐できていれば、問題など起きず済ませる事が出来たでしょう。全て私の責任です」

凜翔にとっては初任務でありながら、私が襲われた事に単を発し

たこの一連の騒動は、その経歴に傷をつけるような結果となつてしまつた。

伯達はくたつとの密談を伏せたり、それらが凜翔りんしょうの足を引つ張つていないとはとても言えない。

そもそも私の油断があつたために襲われる破目になつたのだ。

見通しが甘いと叱責を受けなければならぬ程なのに、凜翔りんしょうはそれについては何も言わない。

私はそれが酷く気詰まりであつた。

確実な証拠という物が皆無の中、それぞれの処分の決定にはかなりの紆余曲折があつたものの、ようやく全てを処理し終え、帝都への帰都についた。

”真祥”という証拠がなくなってしまった上に、襲撃者が確定できなかつた。

そのため都督は私への暗殺については不問となったが、しかし今回の引責として、更送された。

罪人としてではなく更送人事として、都督は凜翔一行と共に帝都へ移送される。

都督について皇帝がどう判断し、そして処罰を行うかはわからないが、凜翔の報告のまま他州へ飛ばされる事になるのではないかと思われる。

州政の実権は祭伯達が獲得した。

真祥の妹美齡を誘拐した犯人が口を封じられなければ、もつと別の処分となつただろう。だがそうではなかつた。この状態では真祥がいようとまいと、都督の処分内容は変わらない。凜翔は証拠品もなく裁くような人間ではないし、裁けるような人間でもないのだ。予想していた通りの展開だ。

私が真祥ならば、その様なおためごかしを納得はしない。両親を殺されたのだから、都督へは完璧なまでの引導を渡したいと願うだろうし、そもそも他人にそれをして貰う事も良しとはせずに、可能ならば自分の手で決着をつけたいと望むだろう。

だが実際問題としてそんな事にはならない。

真祥が私と同じ様に考えるとに限らないが、そうである可能性は高いように見受けられた。

もし復讐などどうでも良いと言うのであれば、とつくに州を出て他州で官吏になっているはず。しかしそうしなかつた。

それは都督を追い落とすその時を虎視眈々と狙っていたからではないのか。

真祥が都督の下で決して居心地が良くない中、踏みとどまってい



たのは何故だ。

親の敵であり、その地位を乗っ取った人間に頭を下げ続けねばならない生活を甘んじて受け入れていたのは何故だ。

官吏としての志があったというのは確かだろう。

州に生まれた者として民の生活を良くしたいと思ったのも確かだろう。

だがそれ以上に都督への復讐心がなかったとはとても思えない。

他州へ行ってそこで官吏になる、帝都へ出て官吏になって力を付けて戻ってくる、そのどちらもしなかった。

だから私はそうだと思った。

今後の事も、更迭された都督を真祥が自らの力で破滅させようとしても、次に都督がどこに飛ばされるか誰にも皆目検討もつかない。あのまま州に留まっていたは、決してその身に真祥の刃が届く事は未来永劫ありはしないのだ。

後見人たる伯達の力が及ぶのは州内においてのみで、真祥は都督を追いかけていく事さえ出来ない。

帝都に連れ帰らずあのまま州においておいても、妹共々今後その身が危険に晒される事はない。

家族や仲間と暮らすことが出来る。

都督と言う邪魔者がいなくなった今、思う存分その力を振るえるだろう。

だがそれだけだ。

復讐だけは叶わない。

安定した暮らしや安寧より、そちらを優先するだろうと判断したからこそ、凜翔には知らせず真祥を帝都へ運ぶよう従者に命じたのだ。

こんな事で助けてもらった恩義を返せるとは思えないが、望みをかなえる一助になりたいと思ったのだ。

私のやっていることはただの自己満足で、その事は疑いようもないし、否定する事もできない。

本人の意思を何も聞かず、それ以外選択の余地がない状況に追い込む事に他ならなかった。だが、あの機会を置いてそれを成す事はできなかったし、本人の意思を確認する暇などもなかった。

そこまでしなれば、ただの属国の王でしかない私には真祥しんしょうに都督と張り合うだけの力を与える事はできないのだ。

真祥しんしょうの意思は帝都に戻ってから確認する。

もし故郷に戻る事を希望したら、それを叶える用意はあるし、妹と他州で過去を忘れ暮りたいというのならばそれもいいだろうと思う。帝国内での権力はないに等しいが、財力だけならばある程度は自由に出来るのだ。

そうでなく帝都に残り力を得る事を希望すれば、佑茜ゆうせんに面通ししその力を借りようと考えている。

凜翔りんしょうは真面目すぎてそういった裏取引など出来そうにはないが、佑茜ゆうせんはちゃらんぼらんでいい加減ではあってもこういったことには非常に柔軟に対応することが出来る。そのくらいには私とて佑茜ゆうせんの事を理解している。

だから凜翔りんしょうではなく佑茜ゆうせんを選んだのだ。

人手不足である事も確かなので、重用されるかは別としてそれなりに仕事はくれるだろう。

後はそれを足がかりにのし上がるのも、脱落していくのも真祥しんしょう次第。

都督を追い落とすまでのし上がる事が出来るかまで私が関知する物ではない。関知する物ではないが……願わくば、彼の思いが遂げられて欲しいと思う。

問題は私が戻る前に、佑茜ゆうせんに見つかからないかという事だ。

佑茜ゆうせんにもし見つければ命がないかもしれない。無関係な者が側にいることを酷く嫌い、問答無用で処分しないと限らないからだ。

かなりきわどい賭けだとわかつてはいたが、他に方法がなかった。

ガラガラガラという音に、意識が浮上する。

真祥が薄目を開けると薄暗い中に寝かされているようだった。

同時にガタガタとした揺れもある。

「……………」

身じろぎをしようとして、彼は呻いた。

「目が覚めましたか？」

声に導かれて頭上の方へ視線を向けると、彼に背を向けた少年がいた。

「君は……………」

「私は紘首様の従者の耀と申します」

「どうして………… いや、それよりも、どこに向かっているんだ？」

「帝都ですよ」

「………… なに？」

「貴方は死んだことになっているはずですよ。若様から秘密裏に帝都にお運びするよう申し付けられました」

「それは駄目だ。妹が、」

起き上がるうとして再び呻く。

「あまり無茶はしないで下さい。怪我が酷いんですよ。背中傷も塞がっていませんでしたし、私は応急手当てぐらいの知識しかありませんから、無茶をされたら命の保証はできません。それから妹さんの事を気にかけておいですが、彼女は無事保護されました。問題ありません」

「それは本当か？」

「はい」

その言葉に安堵の息をついた。

「怪我は、なかったのか？」

「大丈夫です。多少動揺しておられましたが、目立った傷はありません」

せん。また手荒な真似もされていないと保証いたします」

真祥はその言葉に眉を顰めた。

そこで話は途切れ、ただ馬の地面を蹴る蹄の音と馬車の振動音だけが支配していた。

やがて日が暮れ、馬車を止め野営する事となった。

真祥は耀の肩を借り馬車を下りる。

地面の上に引かれた毛布の上に横たわり、耀が野営するために準備するのを眺めていた。

一日馬車を引いて働きづめだった馬に水をやり、飼葉を与え、丁寧に世話をしてねぎらう。

その後、林の中から小枝や折れた枝などを拾い集め、火打ち金と火打石で火を熾す。

川から水を汲み簡単な食事をこしらえていた。

「美齡のことをなぜ知っている」

焚火を挟んで向かい合う中、真祥は耀に尋ねた。

火にかけて鍋をかき混ぜていた耀は手を止め真祥を見やった。

もちろん、と耀は答える。

「美齡殿を監視していたからです」

監視していたという答えに真祥は目を眇めた。

「監視していた？」

「はい」

「妹が攫われ監禁されるのを、ただ黙って見ていたというのか？」

「若様からその様に指示されておりますので」

「……見捨てたのか？」

真祥の声音は低く非難するものだった。

「若様は、ギリギリまで介入するなどの仰せでした」

「……理由を聞こうか」

真祥のその強いまなざしにも、耀は揺らがなかった。

「若様とて州の内紛に介入する事はできません」

「……そうだった。紘菖様は伯達様のお味方でもなければ、都督の

味方でもない。さっきの事は忘れてくれ」

耀は再び焚き火にかけられた鍋へと視線を戻した。

「貴殿の主は私を帝都に運び、一体何がしたいんだ？」

「存じ上げません」

ピクリと真祥は眉を上げる。

フツと耀は吐息を漏らした。

「直接お聞きになられる方がよいでしょう。私から何を聞かされても、おそらく納得はなさらないでしょうから」

「ああ。……その通りだ」

「ただ言わせて頂けるのでしたら、私にも申し上げる事があります」「なんだ？」

「これから話す事は、全て私の推察になります。その事をお忘れにならないで下さい」

「わかった」

真祥は頷いた。

「おそらく、何らかの刑罰を与えられるとは思われますが、凜翔様が都督を処刑なさることはないでしょう」

「美齡を攫った犯人と言う証人がいるというのにか」

「犯人との繋がりを示す物的証拠が出てくる事と、処刑を選択する以外ないという罪状がなければなりません。凜翔様はどちらが欠けたとしたら、強権を発動し刑を断行するなどという事はなさらないでしょう。そもそも身分剥奪位はなさるかもしれませんが、あの方が処刑などと言う手段を選ぶとは思えません」

「……それで？」

「若様は……貴殿はそれに納得はしないだろうとお考えなのだと思います」

「そこまで知っているのか。……確かに、そうだ」

真祥は頷いた。

「都督は今回の不手際などを考慮すれば、最低でもその任を解かれる事となります。その後どうなるかわかりませんが、官吏としての

身分を剥奪されるということも勿論考えられますが、他州へと飛ばされる更迭人事すらも十分考えられます。そうなつては貴殿には二度と手の届かない存在となってしまう」

「何が言いたいんだ？」

「貴殿に、そのための機会を、との事なのだ」と

「……何故、そんなことを？」

「私には判りかねます。若様は多くを語られませんし、行動や言動から推察した結果に過ぎないので。ですが、若様は情を知る方です。おそらくは誰よりも慈悲深い。誰も見捨てる事ができず、たとえ犯罪者であろうと情けをかけてしまわれる。そしてそれを自覚されている。もし真祥殿や妹君を若様が公然と庇われれば、凛翔様や伯達殿、そして今後の州政としては色々困った事になったと思います。非介入は若様なりのギリギリの妥協点だったのです。ですからその見返りに、せめて可能性を与えるだけでもと、お考えになられたのだと思います」

ふつつと真祥は息を吐いた。

「……そうだな。確かにその通りだ。君の”若様”は、自分の身が危ないと分かっているながら、下っ端役人を見捨てられないお人好しだ」

耀は胡乱気に振り返った。

真祥は唇をゆがめる。

「火事の時、背中を怪我して意識のない俺を担いで、森の中を彷徨った。敵が襲ってくることを覚悟の上で」

「火事、ですか？ 真祥殿は忠告を持ってきてくださった後、帰られたのではなかったのですか？」

「帰ったさ。だが途中で火の手が上がるのに気がつき、引き返した。そして”若様”共々暗殺者に襲われた。知らないか？ あの火事は伯達様の計略だったんだ。その伯達様からの追っ手がかかっているのに、俺がその伯達様の配下の者だと知っていないながら、若君は俺を見捨てなかった」

「貴方とはお会いしなかったと証言されたのは、下手をすれば貴方を追い詰めるだけだというのに、あえてそれを選択したのは、伯達様に累が及ばないようにするためですね？」

「お前達にも話さなかったのだな」

耀はため息をついた。

「先程も申し上げたように、あの方は多くを語りません。語られる言葉の端々やその行動から、我々はそれらを察知し、自力でその答えを見つけられなければならなかったのです。つまりは私の未熟さゆえです」

「厳しいな」

耀はそれには答えなかった。

## 四十四

「君は絃菖しんしやう様を信じておられるのだな」

耀ようは静かに真祥しんしやうを見返した。

「私のためにお側を離れていいのか？ 暗殺されかけたのだから、

側でお守りするべきだろう」

「條じょうと伶れいがおります」

「……君以外にも従者なんていたか？」

「その2人とも何度か顔をあわせておいでのはずです」

「……君とは5度ほど顔を合わせたと思っっているが、他には見ていないぞ」

耀ようは眉を片方上げ心外だといった表情を浮かべた。

「私とは宿舎にご忠告にみえた時以外では顔を合わせてはおりません」

「嘘うそたる！？」

「本当です。他の4度は伶れいと條じょうのどちらかか、もしくはその両方でしょう」

「三つ子なのか？」

「いいえ。ただの兄弟です」

「道理で。よく似ているな」

「……ええ、よく言われます」

耀ようと真祥しんしやうは寄り道などをする事もなく、真つ直ぐ帝都へと向かった。

凛翔りんしやうや二若ふたわかと言う貴人も居らず、勿論それを取り巻く護衛や身の回りの世話をする人員も居らず、二人きりの旅路は早く、行きの半分ほどの日程で帝都へ到着した。

佑茜ゆうせんの宮の中、二若ふたわかの管理している居室の内、最も奥まったところにある部屋へ真祥しんしやうを運び入れた。

この部屋は使用人が寝起きするための房室で、身の回りの世話を



する従者などが使つたためにと、二若ふたわかが佑茜ゆうせんより与えられているのだ。そうして何食わぬ顔で、耀ようは佑茜ゆうせんへ報告をしに執務室へと向かった。

「随分と遅い帰還だな。……何があつた」

佑茜ゆうせんは開口一番そう口にする。耀ようへの労いの言葉などは無かつた。耀ようは真祥しんしょうを連れ帰つた部分だけ伏せ、残り全てのあらましを語り、その最後に二若ふたわかより託された書状の一つを差し出した。

「こちらが若様からの報告書となります」

玉祥ぎよしょうが佑茜ゆうせんに代わりそれを受け取る。

「確かに受け取つたよ。二若ふたわかに怪我はないのだね？」

訊ねるその口調はとても心配げなものだ。

「打ち身、切り傷といった軽症です。無いと申し上げても構わないかと」

耀ようは丁寧ていねいに答えた。

「それは良かった。随分と大変な視察だつたようだね。知らせてくれてありがとう。君も長旅で疲れただろう？ 今日けふは早めに休みなさい。残つた仕事などは、明日以降でいいからね」

安堵あんぷを滲ませ、玉祥ぎよしょうは穏やかに耀ようを労つた。

「ありがとうございます」

礼を述べ耀ようは真祥しんしょうの待つ部屋へと戻つた。

「お疲れ」

真祥しんしょうはそう声をかけた。

思わず声をかけたくなるほど疲れているように見えた。

耀ようは苦笑した。

「それ程、疲れているように、見えますか」

「帝都に戻つて来た時はそこまで感じなかつたが、今は酷く疲れている様に見える。若飛皇子じやくひはそれ程難しい方なのか？」

「……そう、ですね。難しい、と申しますか」

言葉を捜し考え込んだ。

真祥しんしょうは首を捻つた。

「ところで、こんな所に連れ込んで問題はないのか？ 紘菡様も居られないのに見つかったらただでは済まないだろう？」

答えにくい事なのだろうと、真祥は話題を変えた。

「こちらは佑茜様の宮ですが、真祥殿が居られるこの部屋などは若様の管理している居室ですので、見つかる恐れはありません」

耀はホツとしつつ答えた。

「佑茜様……？」

「ああ、若飛皇子殿下のご幼名です。若様方は今でも佑茜様とお呼びしていらっしゃいます。従者である我々もそれに倣っているのです」

「随分と変わっているな」

「……ええ」

気を取り直したように耀は言う。

「若様がお戻りになられるまで、ご不便だとは思いますが、この部屋で過しててください」

「迷惑をかけて済まない」

「背中の傷は、若様を庇つての物でしょうか？ 貴殿が居られなければ、若様は生きておられなかったかも知れません。怪我の手当てなど出来る限りの世話をするのは当然の事です」

言い様に真祥は苦笑してしまった。

「そう言ってもらえると気が楽になる」

「ここには二人だけだと双方に油断があった。

「こんなことだろうと思った」

声をかけられるまで、全く気がついていなかった。

振り返ると部屋の入り口の所で扉に寄りかかり、佑茜が顔をのぞかせていた。

耀は上手くやっていた。

下働きなど宮に働く人間は誰も不審には思っていなかった。

それなのに何故、と二人は動揺してしまった。

さすがに真祥は血の気が引いた。

何故こんな、使用人が使うような房室に、しかも二若ふたわかが管理するその場所にやってきたのか、彼にはまったく見当もつかなかった。

まさか運び込まれたその日のうちに、彼の存在が屋敷の主である佑茜ゆうせんに見つかるなど想定外のことだった。

噂では暗愚の誉れも名高い若飛皇子じゃくひで、この皇子が何をしでかすか、想像するだけで目の前が真っ暗になりそうだった。

これが自分ひとり処罰されるならまだしも、真祥しんしょうにとっては恩人である二若ふたわかまで類が及んでしまうかもしれないと思っただのだ。

## 四十五

佑茜は気だるげに扉の所によりかかり立っていた。

真祥をここまで運んだ耀が、懐から主より預かっていたもう一つの書状を取り出し、それを差し出しながら言った。

「若様より、預かってきた書状です。若様がお戻りになる前に見つけた場合、お渡しするよう申し付けておりました」

真祥はぎよっと目を見張った。

それではまるで、初めから見つかるものを前提として動いているようではないか。

佑茜はちらりと書状に目をやっただけで受け取るうとはしなかった。

「必要ない。何がかかれているか、見当はつく」

「何もかもご存知なんですね」

「何があったかはだいたい知っている。二若が馬鹿を見捨てられるはずがないし、お前が二若を置いて先に戻ってくると言ったら、その目的は一つしかないだろ」

真祥はなるほどと合点がいった。

もしかしたら佑茜はうわさより、ずいぶん頭がいいんじゃないだろうか？

「お前は下がっている。その馬鹿に話がある」

佑茜は偉そうにあごをしゃくって命じた。

耀は素直にその命に従い部屋を出て行く。

一人残された真祥は、はったと睨みつけ身構えた。耀が十分離れた頃を見はかり、佑茜が口を開いた。

「都督にお前の妹を襲撃した者は処刑された」

真祥は初め何を言われたかわからず、目を瞬いた。じわじわとその意味が染み込んでくる。

「なんだって!？」

「凜翔はあれで馬鹿だからな。良くも悪くも素直すぎる」

「あれだけ証人も証拠だつてあつたんだぞ!？」

「トカゲの尻尾きりだな。きちんと取り調べられる前に処刑して、証拠隠滅といつたところだろう。死人に口なしだ」

まさか予想もしていなかった展開だ。

真祥は怒りでめまいがしそうだった。

都督は無罪放免という事になるといつのか。なんと理不尽な事か!

「悔しいか?」

真祥は佑茜の言葉に頷いた。

「それは二若を庇つた時についた傷だといつたな?」

「ああ」

何を言い出すのか、真祥はいぶかしげに答えた。

「襲つてきたやつ顔覚えてるか?」

「もう一度見ればわかるはずだ」

「取引をしないか?」

「なに?」

「お前が二若を襲つてきたやつを見つけ出し、俺の前に連れて来ることができたら、お前を官吏として召抱えてやる」

うまく言葉を飲み込めなくて、真祥は首をひねった。

「官吏になつてあいつを自分の手で破滅させてやればいい。どうだ?」

「一つ聞きたい。何の為に紡苜様を襲つたやつを探す? 代わりに始末する為か」

「そんな事はしない。あれはこの程度の事は自分でどうとでもする」

「だったら、どうして」

「それをお前が知る必要はない。受けるのか受けないのか」

真祥は考え込んだ。

悪い取引ではない。

むしろ願つたりの話だ。

しかし、これが二若の不利に働いたりはしないだろうか。

佑茜の目的が二若の弱みを握る事には言い切れない。

恩人を裏切るような真似は、真祥にはできない。

こいつは二若の敵となるか、味方となるか。

それを見極めなければならぬ。

一方で、佑茜を信じてもいいのではないかという気もしていた。

二若がここへ連れて来させたのはなぜか。

佑茜に見つかるのを見越した行動。

それは取りも直さず、神童と名高い凜翔ではなく、暗愚と名高い佑茜の方を信頼していると言う証左ではないのか。

「答えられないか」

黙り込んだ真祥を冷たく見下ろして佑茜は言った。

「受ける」

真祥はきつぱりと言い切った。

「絃菫様は俺をここへ寄越してくれた。最後の可能性を与えてくれる為だ。俺は絃菫様の信頼するあんたを信じよう」

## 四十六

行きと同じ道筋を逆に辿り帝都へと戻っていく。

顔ぶれの変らない人員に警護の者達。

違ふ点は一歩の行きの居なかつた都督が含まれていることだ。

彼の妻子は後日荷物を纏めてから帝都に上がる事となり、ここには彼一人だけ。

都督には身の回りの世話をする召使一人側におらず、私の従者や凛翔の配下の者達が都督の世話をするはずもなく、己の荷物を運ぶのも身支度を整えるのも、何もかも一人でこなさねばならない。

さり気なく観察していると、都督の手際は非常に悪く、凛翔の配下の者達に邪魔扱いされていたりして、身の置き所がないといった風情であつた。

外部の人間と連絡を取り合い、一行の中に混乱を引き起こすのではないかと警戒していたが、これだけ回りにがちりと監視されている状況で出し抜けるような度胸も知恵もなさそうだ。

帰都につく前に一応は凛翔に警告もしておいたためか、彼の配下の者達も始終誰かが目を配っている。

私の従者である伶と條も可能な限り都督の動向には目を光らせてもいるし、それ程気をもむ必要はなさそうだった。

都督や祭伯達の背後にいた人物には、既に心当たりがある。

いや、その人物以外あり得ないだろうと確信してすらいるが、今のところなら証拠物もなく弾劾など出来ようはずもない。

例え証拠があつたとしても、私ごときではその弾劾の声ごと叩き潰されるのがオチだ。

正直に言えば手の打ち様がない。

今までにもその人物によつて、佑茜がらみで何度か危ない目にはあつてきた。

今回の件もその一環と評してよいはずだ。

だが……そういうわけにもいかないのだろう。

チラリと馬車の中、隣に腰掛けている凜翔を盗み見た。

本来の標的は凜翔だった。

何らかの理由でそれが私へ移っただけで、その事実は変わらない。

母の身分が低い末弟にすら、その手を伸ばしてきた。

神童と名高いその名聲に脅威を感じたか。

今までは凜翔のことを兄の第四王子が庇ってきたのだろうが、それが及ばなくなり始めている。

今回の失敗で、さらになりふり構わない手段にでてくるだろう事が予想され、おそらく宮廷は荒れる。

佑茜の側にいる私も、それに否応なく巻き込まれるはずだ。

ただでさえ頭の痛いことが目白押しだというのに、さらに面倒ごとが大挙してやって来る。

ため息を吐かずにはいられなかった。

帝都まで残り半日ほどと言うところで、最後の休憩を取った。

たったの半日ほどなのだから休憩など取らず、そのまま帝都を目指してもよかったが、そこには皇族専用の休憩施設があったのだ。

食事などを取るのに丁度良い時間であったこともあってそこに立ち寄った。

この休憩施設は、隣接する御料地での狩に使用するために建設されていた。

入浴施設などはもとより、宿泊施設も充実している。

帝都から程近い立地条件などから、毎年皇帝主催で狩猟会が催されている。

私はもとより凜翔も毎年参加している、非常に馴染み深い場所なのだ。

馬車に揺られ続けて体が強張っていた私と凜翔は、連れ立って狩場を散策する事にした。



護衛は少し距離を空けて着かず離れずで付いて来ている。

獲物を追って馬に乗って駆けるその場所を、歩いて進むというのは意外と新鮮な感覚だった。

馬上と徒歩では目に映る景色さえ違っているように感じる。

思っていた以上に木々は高く生い茂り、足元もつと平坦で歩きよい物だと思っていたが、ごつごつと岩などが転がり木の根が出ていたりもしてなかなか歩きにくく、枯れ草や落葉によってフカフカとした足の裏から伝う感触がある。

イガの付いた栗などが無造作に転がっていて、これほど実り豊かな場所だとは初めて知った。

「小動物などもかなりいるんですねえ」

凜翔がしみじみと言う。

「狩では獲物以外視界に入ってもなかなか意識できませんから、確かにそのとおりですね。私はこの森がこれほど実り豊かな場所だと、初めて知りましたよ。改めて考えてみれば当然の事なのですが」

「……そうですね。実り豊かでなければ、獲物となる動物達が増えるはずがありません」

私も凜翔の言葉に同意する。

「知っていますか？ この先に崖があるんですよ」

「存じ上げませんでした」

「私も昔兄上に、克敏兄上に教えていただいたんです。崖際に追い詰めれば仕留め易くなるぞと」

「そういえば、凜翔様は昔から狩がお上手でしたね」

話の成り行きから件の崖があるという方向へ足を向けた。

「兄上のおかげです。若飛兄上や紘菖殿も毎年獲物を仕留めておられました。なにかコツなどがあるのですか？」

仕留める数は多くはないが、無難に獲物をとることは出来ている。それを指しての事だ。

「我々の場合は連携の良さ、でしょうか」

考えながら答える。

「若飛様じやくひと稼祥かしよう、私で、三方向から退路を塞ぎつつ追い詰め仕留めております。幼い頃より側にいる時間が長かったために、阿吽の呼吸ともうしますか、お互いに何を考えているか大体わかるのです」

話していると、木々の向こう側が明るくなっていくのがわかった。

視界を遮っていたその藪を抜けると、広々とした空間に出た。

凜翔りんしょうが言っていた通り、その空間の先は地面が途切れ崖となっている。

どのくらい深いのか判らないが、対岸へ飛んで移るには不可能なほど離れている。

こんな所があったとは知らなかった。

絶景だなと思いい視線を巡らせると、唐突に目の前の光景以外のものが視界に広がった。

## 四十七

木々の開けた場所に出て、辺りを見渡した。

崖は高く切り立っており、所々灌木が生えているが殆ど足がかりとなるところも無く、落ちたらただでは済まないと言うのが一目でわかった。

その目の前の光景に、別の風景が重なるように映し出された。

二重写しのその視界の端を掠めるようにして朱晋しゅしんが立っていた。

私は思わず振り返った。

朱晋しゅしんは隠れていた木立の陰から飛び出し、真まっ直ちぐ崖がけて走りだした。

思わずその動きを目線で追っていくと、その先にはほっそりとした人影が一つあった。

その人影へとわき目も振らず向かっていく朱晋しゅしん。

足音に気がついたのか、こちらに背を向けていたその人が振り返り、そこに朱晋しゅしんは腰に差していた剣を抜き襲い掛かる。

際どい所でその斬激を避け俊敏に距離を取る人物の顔がハッキリと見えた。

その人物の顔を目にした私は驚愕に目を見開いた。

何故なら、その顔は、襲われているその人影は、……私、だった。食い入るようにその光景を見つめる。

”私”も剣を抜き朱晋しゅしんに応戦する。

その応酬に足場とする場が激しく入れ代わり、二人は崖際へとジリジリと移動していった。

互いに致命傷を追わせられず、決定打を入れようと隙を窺いながらの攻防の中、剣を切り結びながら”私”と朱晋しゅしんは一言二言言葉を交わす。

そして不安定な足場に意識を取られた”私”は、不意を突かれ大した抵抗も出来ないで手傷を負わされ、崖下へ落ちていき、私の視

界から消えた。

我を忘れて衝撃的なその光景に息を詰めて見入っていると、両肩を強く捕まれ乱暴に揺さぶられる感覚に現実へ意識が引き戻された。

「……殿！ 紘菖殿！」

その声にハツとして我に返ると、厳しい顔をした凜翔りんしょうが目の前にいた。

「り、んしょ、う、様」

詰めていた息を急に吸った所為で、むせ返りながら言葉を紡いだ。幻は既に消え去り、もう崖に落ちた”私”の姿も、もちろん朱晋しゆしんの姿も見当たらなかった。

始めと同じ様に誰も居ない崖が空しく広がっているだけだった。

「いったいどうなされたんですか。大丈夫ですか？」

「申し訳ありません。考え事を、してありました」

「……考え事？」

凜翔りんしょうは酷く訝しげだ。

「眼の焦点もあってなく、まるで魂が抜けてしまったかのようにでしたよ」

フワツと凜翔りんしょうの身体を心配げな色が覆った。

病気が何かと思われたようだ。

本当に真っ直ぐで優しい皇子だ。佑茜ゆうせんだったら例え心配していたとしても素直に表現したりはせずに、嫌味のひとつも言ってそんな素振りを見せたりしないだろうと、何故かそんな事を考えた。

先程見えたあの光景は、稀に見ることの出来る未来視だ。感情を見ることと違い、滅多に起こりはしないのだが、見た未来が違えられた事はない。

私にとっては近い将来必ず起こる現実のひとつでしかないのだ。

問題はいつ起こることなのか、だ。

私の今の能力ではそれほど先を見ることは出来ない。おそらくは来年以降ということはないだろう。

精々が一月先か二月先か、その位までしか見る事は出来ないはず

だ。

あまり頻度が多い訳ではないので絶対とは言い切れないが、まず間違いはなからう。

しかも私が着ていた衣装は狩りの時に身につける衣装だった。

この近辺で行われる狩といえば、皇帝主催で催される狩猟会しかない。今年の狩猟は半月程の予定だ。つまり後半月で全ての決着が付く。

胸の奥がざわついている。

動揺しているのだと、他人事のように思う。

いつでも覚悟出来ているつもりだったが、それが現実として見せ付けられると、私の覚悟などしたつもりでしか無かったのだと思いきらされてしまった。

自身の死期すら目の当たりにしなければならぬとは、なんと忌まわしい能力だろうか。

今までも何度も命の危険を感じた事はあった。もう駄目だと命を諦めてしまった事もある。

それでも最後の時を目の当たりにするという事は全くの別物だ。

気分の良いものではないが、最後の時まで猶予があるということは救いだと思ふべきだろうか。

何も準備できずに最後の時を迎えるのとは違い、事前に用意周到に整えておく事ができるのだから、良かったと思ふべきだ。

動揺した心を落ち着かせるため、私はそんな風に己に言い聞かせた。

私が今日明日死んだ場合、多方面にわたって混乱をきたすだろう事は想像するまでもない。

国のことは妹がいる為、彼女が上手くやっていくだろうからとあまり心配はしていない。

それどころか私という枷を取り払えるのだから、そちらの方が理があるのではないだろうか。

だが、それ以外にも、私に個人的に雇われている者達などの処遇

の件もある。

耀、條、伶の従者達の身の振り方も考えておかねばならない。

何よりも死んだ私の死体を処分する方法を残しておかねば、どんな問題が噴出するかわかったものではないのだ。

それらを片付けておかねばならないのだから、半月と言う時間は如何にも短いように感じる。

それとも、まだ半月あると考えるべきか。

準備をするのに十分すぎると言える期間ではないが、何とかしなければならぬ。

勿論、朱晋には私に道連れとなって消えてもらう。

黄泉路への連れ合いがアレと言うのは如何にも不満だが、妹達への最後の土産としようじゃないか。

私の口角が上がり冷たい笑みが浮かんだ。

「何でもありません。ご心配おかけして申し訳ありませんでした」

凜翔は不可解そうに首をかしげていた。

## 四十八

宮廷に到着し皇帝への報告を済ませると、凜翔とは別れ佑茜の宮へ戻る事となった。

執務室を出て凜翔と挨拶を交わす。

「後日、御礼に窺います。若飛兄上にお伝えください」

「必ずお伝えいたします」

ちなみに、都督は既にこの場にはない。

皇帝への報告に、都督は同席できなかったのだ。

凜翔の側近と共に別室で待機している。

いや、それとも待機していた、と言うべきか。

彼は皇帝の命で既にそこから連れ出され、しかるべき処罰を受ける事となったはずだ。

皇帝の指示を受け側使いの人間が、私達が部屋を辞する前に出て行ったから、間違いはなかるう。

「今回は大変な目に巻き込んでしまい、申し訳ありません」

「お気遣いなく。身辺にはお気を付け下さいませ」

凜翔が頷き立ち去るのを見届け、私も宮へと足を向けた。

條と伶が先に戻り、帰都を知らせているはずだ。

帰ったばかりだがゆっくりしてもいられない。

旅装を解き佑茜への報告。その後真祥と今後について話し合わねばならない。

気になるのは、無事でいてくれるかという事だ。

佑茜に見つかっては、最悪の場合は命がない。

耀ならば問題ないとは思うが、人の想像の範疇外にあるのが佑茜だ。

何が起こつていても不思議ではない。

無事でいてくれと願いながら、宮へと足を進めていた。

宮に戻ると、従者達をはじめ召使らと、そして真祥が出迎えに出

ていた。

「お帰りなさいませ」

従者の耀が皆を代表して声をかけてきた。

鷹揚に頷き答える。

真祥と目が合うとわずかに笑みが帰り、すぐさま他の召使達同様頭を下げる。

一歩中に入ると、玉祥が満面の笑みで待ち構えていた。

「お帰り。佑茜さまがお待ちだよ」

「ああ。……執務室か？」

並んで廊下を歩きながら問いかけると、違つと首を振られた。

「私室の方。話があるようだね」

背後で皆と一緒に見送っている真祥に目配せして言った。

そうだろう。

あそこに真祥がいたということは、そういう事だ。

匿っているのを佑茜に見つかつて、よく無事でいてくれたものだ。安堵と共に不信感も湧く。

この宮は本当に最低限の人員しかない。

いな、最低限の人間しか、佑茜は入れるのを認めないのだ。

人を寄せ付けたがらず、必要だからと何とかこの人数を維持している。

私の身の回りの世話をするものにしても、3人の従者しか存在しない。

昔はもつと大人数いたのだが、余計な人員が側にあることを嫌つた佑茜によつて排除されたのだ。

排除と言つても国許に戻つたり、不慮の事故などで亡くなった人員の補充を許されなかつたりという理由だが。

玉祥側も似たようなものだ。

貴人としては主である佑茜と、その乳兄弟の玉祥、側付の私といつごく少数人数しかない。

だからその世話よりも、宮を維持するための人員が大半を占める。



下働きや召使らの各々の役割は、他の宮とは比べ物にならないほど厳格に定められ、どこで誰が何をしているか殆どの者が把握している。

一人欠けるだけでも宮が回りにくくなるため、人員の入れ代わり自体も殆どない。

そのくらい人を寄せ付けたがらない佑茜が、何の意味もなく人を側に置くとは思えない。

どんな裏があるか考えたくもないほどだ。ただでさえ精一杯の状況だというのに、これ以上抱えられるか。

内心でブチブチと繰り返す言葉を呟いた。

「佑茜さま。二若が戻りました」

「……入れ」

入り口のところから玉祥が中へ声をかけると、低めた声が返ってきた。

「失礼します」

部屋の主は長椅子にだらしなく寝転がっていた。

ヒラヒラと手を振って前面のいすを指し示す。

横着なその様子に、私も玉祥も今更の事と反応もせず従った。

「ただいま戻りました」

「面白い事があったそうだな」

じろじろと私の全身を眺め、佑茜は面白くもなさそうに言った。

「仰るとおり、大変愉快な目にありましたよ」

「耀と真祥から聞いて、無事に帰って来るか気が気じゃなかったよ。

怪我もなさそうだし、安心したけど」

玉祥のほうは素直に顔を顰めていた。

「心配をかけてすまなかった。一時はどうなるかと思ったが、こうして帰ってこられた」

「犯人は捕まらなかったと聞いたけれど」

「命があっただけ運が良かった」

「火事があって川に飛び込んだらどう？ 無茶をしたね」

玉祥は私が泳げない事を知っている。

だからこそその言葉だ。

いつも泳ごうと誘われても、その都度適当な言い訳を作って逃げていた事を、暗に責められている気がする。

時間を見つけて泳ぎの特訓とか言い出したらと、内心では冷や汗ものだ。

「コイツの運の良さは折り紙つきってことだ」

佑茜は皮肉な口調で言った。

「犯人の見当は付いているのだろうか？ その、目的も」

「……………恐らく、皇太子殿下かと思われます。標的も私ではなく、凛翔様であったのではないかと、推測しております」

「そんな事だろうな」

事も無げに佑茜は言った。

玉祥は嫌そうに顔を顰めていた。

「宮廷はこれから荒れる。警戒だけは怠るなよ」

珍しくも皇子らしい真面目な台詞だ。

「……………」

玉祥と私は居住まいを正し、揃って返事をした。

## 登場人物紹介（前書き）

現在までに出てきた人物のメモです。

作者が忘れないようにと備忘録として書いていたものなので、多少見づらくありますが、ご容赦ください。時間的に余裕が出来たら修正していきます。

諸事情により更新できないのが心苦しいのですが、今しばらくお待ちください。

## 登場人物紹介

一姫<いちひめ>：主人公

普段は二若として生活

二若<ふたわか>（紘草<こうしょう>）：一姫の弟

幼名が二若

三姫<さんひめ>：一姫の妹

普段は一姫として生活

第七皇子佑茜<ゆうせん>（若飛<じゃくひ>）：一姫の上司兼幼

馴染

幼名が佑茜

母は正妃

王都の警備隊の半分を統括

玉祥<ぎよくしょう>（稼祥<かしょう>）：佑茜の部下で一姫の

幼馴染

底抜けのお人よし

幼名が玉祥

第三皇子宗南<そうなん>：佑茜の3番目の兄

王都の警備隊の残りの半分を統括

第四皇子克敏<こくびん>：佑茜の4番目の兄

母：文華（側室）

生真面目なせいで佑茜から多々かわれる  
將軍職

兄弟（佑茜）のことをよく見ている  
劍の腕が立つ

第五皇子書琴くしよきん>：佑茜の5番目の兄

佑茜の地位を狙っている

佑茜を毛嫌いしている

怠惰な皇子で猜疑心が強い

第八王子凜翔くりんしょう>：佑茜の末弟

克敏とは母が同じ

文華妃くぶんかひ>：克敏・凜翔の母

耀くよう>：二若（一姫）の従者

従者3人の長男

伶くれい>：二若（一姫）の従者

足が従者3人の中で最も早い

三男

條くじょう>：二若（一姫）の従者

次男

衢雲<くうん>：第四皇子克敏の側近の1人  
劍の腕が立つ

代英<だいえい>：第四皇子克敏の従者

二若と玉祥の早朝練習に参加する  
負けず嫌い

朱晋<しゅしん>：二若の家臣

第五皇子と謀って二若を陥れようとしている

紅扇宮<こうせんぐう>：第五皇子の宮

テグシカルバ：多民族国家で帝国の最大の敵

都督：視察先の長

崔芝貴<さいしき>：視察先の官吏

視察先の郡で施設長をしている  
能吏

実績が少ない

傳真祥くはくしんしょうく：視察先の官吏

暗殺の忠告

火事と知って宿舎に引き返し、二若（一姫）を庇って怪我、川に飛び込む

祭伯達くさいはくたつく：真祥・崔芝貴の師

傳美齡くはくびれいく：真祥の妹

都督に誘拐される

## 四十九

視察に関連してはあっさりとした報告で終わったが、襲撃時の事には、非常に事細かな報告を求めてきた。

「……それで？」

事の顛末を語り終えた第一声がそれだった。

凛翔りんしょうには話さなかった詳細まで事細かに報告したのだが、それは不十分であったようだ。

「泳げもしないのに、川へ飛び込んだのか？」

嘘をつくなど暗に責められた。

炎から逃げられず、已むに已まれず飛び込んだと言ったのだが、納得していないらしい。

「お前が事後の策を何も取らずに、ただ飛び込むなどという馬鹿な真似をしない事ぐらいは判っている」

確かにそうだ。

真祥しんしょうに川に放り込まれなかったら、恐らくは壁を伝い降りるなり、綱のような物を作るなり、別の手段を講じていた。

川に飛び込むとしても、浮き代わりとなりそうな物を持っておくとか、流されないための仕掛けを作るとか、そういったことは考えただけだ。

「真祥しんしょうに泳げないため他の手段を考えると告げると、問答無用で肩に担がれ、抵抗する間も無く川に飛び込んでおりました」

渋々と認めた。

「……それで、川に飛び込んでどうやって助かった」

「判りません。水面に落下した衝撃で気を失い、次に気がついたときは川岸に居りましたので、どのようにしてそこまで行ったのか、知るのには真祥しんしょうただ一人です」

「その時点で、奴の息の根を止めるなりすべきだったな」

川岸で真祥しんしょうは倒れ意識を失った。私を助けたとはいえ、本来なら



敵側の人間である真祥まじょうを、生かしておく理由はない。息の根を止めず、見捨てることもなく連れて行ったのは間違いだと、そういう意味合いだ。

「申し訳ありません」

「まあいい。取りあえず、あれは俺が預かった。お前はもう忘れる。悪いようにはしない」

「……よろしいのですか？」

私はまだ、真祥まじょうの処遇を願い出てはいない。

無事出迎えに出ていたから、悪いようにはならないだろうと思っていたが、今はまだ保留しているだけだろうと考えていたが、違うのだろうか。

佑茜ゆうせんは頷いた。

「まあまあ、使えそうだ。望み通り、精々こき使ってやるさ」

そこまで言うのであれば、問題はなかるつ。

佑茜ゆうせんはいい加減だったりしても、私と玉祥たまじょうに何かをやると宣言したら、それを違えることは決してしない。

「ありがとうございます」

頭を下げると、不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「お前にしては、随分と悪手を打ったな」

面白くもないと言わんばかりだった。

佑茜ゆうせんに言われずとも、後手に回った拳句拙けんくせつい対応ばかり打ったという自覚はあった。

とても反論できない。

「警備の人員配置を怠る。非常事態に浮つき身の回りの警戒を怠る。無防備に泳げもしない川に飛び込む。命を狙ってきている陣営の者と行動を共にし、まともな抵抗ひとつ出来ずそいつの虜囚ろゆうとなる」

言葉を切った佑茜ゆうせんは、鋭い目線で私を射抜いた。

「一つでも十分命を落としかねん失態だ。お前はそんなに死に急ぎたいか？」

言葉だけではない。佑茜ゆうせんの体を怒りの色が覆った。

失態を責める言葉以上に、その内心が怒りに支配されている。

佑茜ゆうせんの態度と内面が一致しているのは、非常に珍しい。

しかし、怒りの度合いに比べ、声も荒げておらず物に当り散らしてもおらず、怒りの表現方法は非常にささやかなものだ。

それがとても不気味だった。

「軽率な振る舞いであつたと、恥じ入るばかりです」

「ふん。大方、取るに足らぬ相手と侮つたのだらう。慢心だな」

声音をがらりと変え、佑茜ゆうせんは嫌味たらしく言う。

怒りの色は変わらず、しかし平素と同じその様子に、薄ら寒いものを感じた。

「佑茜ゆうせん様、その様に言つては二若ふたわかが可哀想です。なれない人員と行動を共にしていたのですから、二若ふたわかでなくとも失敗を起こすものです」

「ああ。そうだな。二若ふたわかの自由になる人員など、あの頼りない従者どもしか居なかつたのだからな」

「佑茜ゆうせん様！ その様な心無い事をいうものではありません。二若ふたわかが心配だつたと、一言そう仰ればいいのですよ」

玉祥たまけいは精一杯怖い顔を作つて佑茜ゆうせんを窘める。

「当に済んでしまつた事を心配してなんになる」

「でしたら、こう言えば良いのです。『無茶をするな。怪我をしてからでは遅いのだぞ』と」

玉祥たまけいの言葉に、佑茜ゆうせんは嫌そうに顔を背けた。

「君はすぐに無茶をするから、僕達はずつと心配していたんだよ。ただでさえ側に居る人間が少ないのに、耀ようを先に帰してしまつし、何かあつたら危ないのではないかと気が気じゃなかつたんだからね。佑茜ゆうせん様もずつと不機嫌で、まだ戻らないまだ戻らないとブツブツ溢していたんだよ」

「戻らないと溢していたのはお前だらう。俺は仕事が溜まつて片付かないと言つたんだ」

玉祥たまけいはクスツと笑みをこぼし、私に目配せを投げてきた。

「ほらね？」

素直じゃないねと玉祥は小声で呟き、ニコニコと平和な笑顔を浮かべた。

佑茜にはいまだ怒りの色がある。

しかし玉祥の気遣いを、無碍にするような素振りはない。

内心が別のところにあるとしても、彼の言っている通りの事にしてやろう、そう考えているのだ。

こういったやり取りも久しぶりだ。

帰って来たのだなど、妙なところで感慨深く思う。

とらえどころのない佑茜の内面を追いかけ、神経をすり減らす生活。

息苦しいばかりと置いていたが、暫く離れてみて、この重圧は私にとつては必要なものと納得もした。

凜翔と共に行動していた時は、神経をすり減らすような場面は全くなく、警戒心が知らず知らずのうちに薄れてしまっていた。

あれだけの不手際はそれだけが原因ではないが、その警戒心の無さが影響していなかったとはとても思えない。

私を取り巻く環境は、ほんの少しの間でさえ命取りとなりかねないと言つのに、油断を招くなど身の程を知らぬ行為。一人前だなどと思いがりも甚だしいというものだ。

そう、ここが私の原点。

忘れてはならない、私の居場所であり、私を私たらしめた所。

色々思うところはあるけれども、それもあと僅かと思えば愛しく感じた。

視察についての報告等はひと段落がつき、今度は佑茜の執務室へと移動して、私がこちらの現状を訊ねる番となった。

「賊に手傷を負わされたとのことですが、克敏様のお怪我の程はいかがなんでしょうか」

「心配ない。怪我といってもかすり傷のような物だ。とっくに復帰して軍務についている」

「そうでしたか。して、賊の方は」

玉祥が眉を八の字にして情けない表情を浮かべた。

「訊いていると思うのだけれど、白牙の搜索に全力を挙げているんだよ。けど、なかなか尻尾がつかめなくてね」

さもあらん、だ。

私があれば探って全く全容をつかまえる事が出来なかったのだ。そう簡単に手がかりを得ることは出来まい。

「普段えぱり散らすだけで何の役にも立っておらん宗南の手の者が、点数稼ぎとばかりに張り切っている所為で、民とのいざこざが絶えない上に、それらへの陳述が全部回ってきていて仕事にならない。

こちらの管轄にまで横槍を入れてくるから、隊士達もあちらの者達と一触即発の状態だ」

佑茜の心からのぼやきは、とても珍しいことだった。

いつもなら適当に書類仕事を放り出してフラフラしているのに、真面目に机に向かって仕事をしているのは、それだけ処理しなければならぬ書類が多い所為だろう。

私達の元にまで上がってくる書類がそれだけ多いと言うことは、下の混乱はさらに酷いという事に他ならない。

第三皇子宗南は、佑茜と同じ様に王都の警備隊を取り仕切っている。

だが、その配下の人材は酷いもので、仕事はしない上に普段は威

張り散らしているばかりで、街の者から非常に煙たがられているのだ。

佑茜配下の王都の警備隊も、とばっちりで白い目で見られることも多く、私達にとっても頭痛の種であった。

現在は王都の警備隊の制服は、佑茜配下と宗南配下の者では全く別物なので、多少は区別して貰えているのが救いだ。しかし、その役立たず共がいきなり職務を遂行しようとしても、普段何もしていない分際で知識・技術・能力があるはずもなく、街の者達に迷惑をかけるばかりで物の役に立っていないという事だ。

「こんな下らん陳述書に一日目を通すなど、うんざりだ。さつさと代われ」

「二若は旅から戻ったばかりで、少しは休ませて上げませんと」  
苛々として言う佑茜を、玉祥が宥めた。

「いや、大丈夫だ。気を使ってくれてありがとう、玉祥。私一人のんびりなど出来ないし、旅装を解いたらすぐ取り掛かる」

「無理はいけないよ」

「大丈夫。任せてくれ」

心配げに顔を曇らせた玉祥に、大丈夫だと頷いて見せた。

「何でもいいから早くしろ」

対する佑茜は面倒くさそうな様子を隠しもしない。

私と玉祥は目を見合わせ苦笑してしまった。

「それでは後でな」

「急がなくていいからね」

玉祥に見送られ、佑茜の執務室を後にした。

真祥と話をしたかったが、それよりも急いで出さねばならない指示などがある。

幾分申し訳なく思いながらも、そちらを優先し、自室に真っ直ぐ向かった。

部屋では、久しぶりに従者が三人揃い待ち構えていた。

「お戻りをお待ちしておりました」

先に帝都へ戻っていた耀ようが口火を切った

「お前もご苦労だったな」

「とんでもございません」

旅装を脱ぎながら文机へと足を動かした。

脱いだ衣装は傍らに居る伶れいへと手渡し、代わりに渡される室内着へと袖を通す。

「何か問題は？」

これはそういった報告が各所から寄せられているかどうかと云う確認だ。

「現在のところはございません」

耀ようの言葉に頷く。

文机に向かいサラサラと指示を書き付けていきながら、更なる問いを向けた。

「真祥ましょうの怪我はどうだ」

「帝都に戻ってまいりました頃には、日常生活には差し支えない程度に回復しております。それ以降、今がどのような状態かは、わかりかねます」

見つかってしまったから、ということだろう。

「佑茜ゆうせん様はなんと？」

「役に立ちそうだと仰せで、お引取りになりました」

佑茜ゆうせんらしい物言いに、苦笑してしまった。

「若様のご指示通り、匿かくう事叶いませんでした。申し訳ございませんん」

「謝る必要などない。そうなることも十分見越していたのだからな。何があつたんだ？」

「何も……。帝都に戻り真祥ましょう殿を指示された部屋へお通しした直後、佑茜ゆうせん様御自らお出でになられたのです」

「直後、か」

流石にそれは予想外だった。

書き物の手を止め、耀ようを振り返った。

「はい。私が若様を置いて戻ったことに、不審をお覚えになられたようです」

確かに道理だ。

しかしそんな瑣末なことに気がつくなど、佑茜ゆうせきには油断も隙も見せられたものではない。

他にも細々とした報告を聞きながら、手早く指示書を書き上げていった。

耀よゆうから上げられる報告を聞き取った限りでは、帝都を離れていたこの一月の間に、特段変わった事はないようで、そのことに酷く安堵した。

報告を元に書き上げた指示書を伶れいに託し、各人の元へ届けるよう命じて、佑茜ゆうせんの執務室へと戻った。

少しでも休みたいという思いはあれど、実際そんな暢気に構えていられる時間的余裕はない。一刻も早く溜まった書類を片付け、来るべき日のための準備に取り掛からねばならないのだ。

佑茜ゆうせんの部屋に戻る途中に運よく真祥しんしょうと行き会い、僅かばかりではあるが立ち話をする事が出来た。

真祥しんしょうが実際に受けた怪我の程度は見知ってはいないが、怪我の影響を感じさせない身ごなしをしていた。

「お久しぶりです」

折り目正しく頭を垂れるが、身分に差はあれど同じ佑茜ゆうせんに仕える者として、そこまで畏まる必要はないのだ。

「元気そうだな」

「お陰様を持ちまして。……妹のことは聞きました。ありがとうございます」

「礼を言われるようなことは何もしていない」

「絃菫けんじゆ様のお立場を思えば、これ以上ないご助力を頂いたのだと存じ上げております。それどころか、私のことも多大なるご厚情を頂、感謝しても仕切れません」

「……佑茜ゆうせん様に召抱えられたと聞いた」

話を変えるべく切り出すと、苦笑が返ってきた。

「いまだ試験中といったところですよ」

それは初耳であった。

「そうなのか？」



「はい。召抱えていただく上で、条件を頂きました。怪我の回復を待っていましたので、まだその条件を攻略出来ておりません。ですから、いまだ試験中といったところですよ」

「そうか。……私の手はいるか？」

半ば以上、その気もないが助力はあるかと訊ねた。

「いえ。これは、私自身で遣り遂げなければ意味がありません。お気持ちだけ、頂いておきます」

真祥は真っ直ぐ目を見据えたまま、一切の迷いもなく断りを述べた。

その事に、これならば真祥は大丈夫と、私はそう確信がいった。心の片隅に棘のように刺さっていた恐れが一つ、まるで憑き物が落ちるように消え、心が僅かながら軽くなるのがわかった。

「そうか」

「お忙しい所お呼び止めし、申し訳ありません」

「いや。お前が思っていたよりも元氣そうで、よかった」

私のことばに真祥はただ礼をとることで答えた。

そのまま真祥とは別れ、佑茜の執務室へと足早に向かった。

どうやら真祥は、無事に佑茜に気に入られることができたようで、本当によかった。

正直、真祥を佑茜の元に送るといふのは、ほとんど勝ち目のない賭けだった。もしかしたら生きて真祥と会う事は、ないかもしれないとまで覚悟していたのだ。

人嫌いの気がある佑茜は、時折酷く残酷な振る舞いに出る。

見ず知らずの者が宮に現れ、私の手引きだとしてもそれに不快にならないはずがなく、真祥には言えないが問答無用で切り捨てる可能性だつてあった。良くて宮から、否、帝都から追放されるくらいではないかと、そう考えていたのだ。

だからこそ、少しでも真祥が生きる確率を上げるために、耀には私が帰るまで匿って置くように指示したのだし、無駄かもしれないがいざという時の場合を想定して書面も持たせた。

それらの予想を覆して、佑茜の屋敷で真祥の姿を見つけた時は、気が抜けてもう少して座り込んでしまふところだった。

そこまでの危険を冒して佑茜の元へ送り込んだのは、真祥が望む方面では凜翔の力はあてに出来ないと言ふからだ。

彼が真実必要とするものを与えられるのは、佑茜しかなかった。

祭伯達には難しくとも、私の力ならば、真祥を安全な場所に匿う事は容易い。しかしそれだけだ。真祥が望む方面での力添えは、私には不可能なのだ。だからこそ、佑茜を頼るより他なかった。

凜翔が素直で高潔な人柄だということは、短い間ではあったが傍にいてわかった。彼は頭も悪くはないし、剣の腕だつてそこそこある。しかし、非情になる事、言葉の裏に潜む本心を嗅ぎ分けること、そういう人の上に立つ上で必要な裏の部分が、決定的に欠けていた。

一言で言うなら、人を信用しすぎるのだ。

私は、人の上に立つものとして凜翔は不資格だと、はつきりと見限っていた。だからこそ、真祥を佑茜のもとに送り込んだのだ。

同じ理由で、凜翔からこれからも傍に仕えて欲しいと熱烈に勧誘されたが、辞退させてもらったのだ。

凜翔の人柄はとも好ましいが、やはり多少思う所があるつと、佑茜の方が良いと考えたのだ。

佑茜の長く側にいて思い入れもあるし、迷惑をかけられた分迷惑をかけ返すことだつて、躊躇せずに済むからだ。

もうじき私は死出の旅に出る。どうあつても周りに迷惑をかけてしまふ。どうせならば、その時までずっと共にあつた佑茜や玉祥の側にいたいし、私が死ぬことでの迷惑は彼らに取ってもらいたいとも思うのだ。

そんな事をつらつらと考えていた。

しかし……佑茜は、どういつつもりで私を凜翔に貸し出されたのだらうか？

今までも何度も何度も自問自答していたが、どれほど考えても答

えは出なかった。

あの前後の出来事を思い返しても、不審なところはなかった……ように思う。

第五皇子の宮に侵入した時、宮の者に見つかったのは拙かったとは思うが、それが原因だとはどうしても思えない。

凜翔の視察に同行することが決まったのはそれよりも前なのだから、あれは無関係と考えるべき事象だ。

そうになると、本当に訳がわからない。

佑茜ゆうせんとは付き合いが長いが、いまだ私には何を考えているのか読めなかった。

並み居る皇子達の中で、私にとってはもっとも不可解な皇子だった。

私は懐にしまっていた飾り布を取り出し、じつと眺めた。

成り行きで、この飾り布の持ち主のことは後回しにしていたが、最優先で解決しなければならぬ。

他にも解決しなければならぬ問題が山積みで、頭が痛いことばかりだ。

足早に進みながら、難しい顔で考え込んでいた。

その姿を窓の外から見ている者がいることに、私は全く気がつかなかった。

執務机の上には、予想していた通り書類が積みあがっていた。

しかし、その量自体は、思っていたほどではなかった。

「二若の連れてきた真祥は、とても優秀だね。凄く助かったんだよ」  
玉祥は自分の机に向かいながら、人のよい笑顔で言った。

「随分少ないとは思ったが、真祥が私の処理すべき書類を片付けてくれたのか？」

「部分的に、だけどね。二若にしか解らない物や、真祥には権限がなくて触れないもの以外、大体片付いている筈だよ」

確か、真祥は州の文官をしていた。

書類仕事は慣れたもの、ということか。

周りを見ると、少し離れた所に未決裁の書類が置かれていた。

私がいつも決裁待ちの書類を置く場所で、玉祥はそこは使わない。暫く私はいなかったのだから、それを置いたのは真祥と考えるべきだろう。近寄り、置かれていた書類を一枚取り上げ、中に目を通していた。

玉祥の担当部分が、警備隊員達から上がってくる報告書や予算申請などの取りまとめ及び対応だとしたら、私の担当部分は市井の者達から上がってきた嘆願書や陳述書の処理となっている。

暴力事件などの被害届などは警備隊が一旦受理し、その調査結果などが上がってくるので、陳述書などには含まれてはいない。

純粹に市民達の苦情であったり、こうして欲しいという要望などばかりだった。

だが、その分面倒なものでもある。

何処その商人が不正に値を吊り上げている、処分してほしいなどという訴えがあったとして、それを鵜呑みにしてはならない。

商売敵が難癖つけて、その証人の妨害をしようとしていないとも限ら無いのだ。

かと言って偽りだからと放置してよいものでもない。

何が嘘で、何が真実なのか。

私はそれを見極め、適切な処置を施していくのが務めだ。

人のよい（騙され易いともいう）玉祥には不向きな仕事だ。

逆に玉祥が処理している、警備隊の上げてきた罪状調査に対し加えるべき刑罰への決定など、つつい処分が甘くなりすぎる私には向かない。

優しく人のよい玉祥は、ただそれだけのものではない。

玉祥の優しさは厳格な厳しさすら兼ね備え、公平さと情の絶妙な釣り合いは、私には真似出来ないものだ。凄いと見習わざるを得ない点だ。

だから役割分担に異論はないのだが、そうなると逆に私がいなくなった後のことが気がかりでならない。

真祥が処理した書類はほぼ問題の無い出来であった。この帝都特有の事情などを勘案して部分的に修正すれば良い。

私の机の上に積み重ねていた未処理書類などにも目を通していく。それらは私にしか判らない部類の物ばかりで、処理できる物はすべて処理されているようだった。

慣れない環境でありながらこれだけの物が出来ると言うのは能力がある証拠だ。

こうして考えると、真祥が佑茜の下に来たことは天の采配のようにならなく感じる。

私がいなくなれば玉祥が代わって書類などを全て処理しなくてはならなくなくなるどころだ。

普通ならばそれで問題はない。警備隊の対応できる範囲などたかが知れているし、無難に処理するだろう事は目に見えていた。だが、普通ではない場合にはかなり不安が残ってしまう。人を陥れたり、自分自身だけが上手い汁を吸うために有利になるよう働きかけたり、そういった好ましくぬ陳情を、人の良い玉祥では見破る事が難しい。

やり口が決まっているのならば対応のしようもあるのだが、架空請求など不正の手口はそれこそ千差万別だ。

書類が正しいからと何もかも処理してはならないのだが、玉祥は人を疑う事が出来ないらしく、今までにも何度と無く許可しかけた事がある。

それを思うと仕事を放り出して逝く事が不安で仕方が無い。しかし真祥がいれば、私に代わりそれらを正しく処理していつてくれるだろう。

狙ったつもりは無かったが、その皮肉なめぐり合わせに私は苦笑せざるを得なかった。

間違はなく私は近い将来いなくなる。

”あれ”を見れば否定のしようがない。運がいいのか悪いのか微妙だ。

知りたくなかったかと言えば、事前準備が出来る事を考えれば否と答えるが、自分の死期をハッキリ突きつけられるのは、気分が悪いものではない。

気分の悪さを度外視すれば、私にとっては良い事には違いない。

祖国のため、佑茜や玉祥の今後の為に、できる限りの事をしてあげる。それも良い事の一つに数え上げる事だ。

玉祥は人が良すぎた変な事に巻き込まれそうな上に、佑茜を止める人間だつて必要だ。

真祥ならば私が抜けたその穴を補ってくれるだろう。

本当に上手くできている。

真祥の事はまるで私がいなくなるための事前準備のようではないか。

そんな事を思い、少しだけ寂しくなった。

やらねばならない諸々について、優先順位を付ける事からはじめた。

勿論全て片付けてから逝きたいとは思えど、現実問題として時間が足りない。

ならば優先順位をつけて片付けていくしかなかろう。

また、優先順位は高くとも時間内に解決できそうに無く、その分他の順位の低い物に労力を振り分けた方が良い物、労力を振り分けるのではなく最悪の場合を想定して準備をして置くべき物、優先順位は低くとも手間のかからない物はなるべく片付けるといった事も考慮に入れての作業割り振りだ。

最優先かつ重要なことは、玉印の行方を探ること。祖国の命運がかかっているのだからこれは譲れない。

しかしそれを持っているであろう相手が白牙では、見つけれられる可能性はかなり低い。

簡単に見つかるのならば、手の内の者を白牙という集団へもつと楽に潜入させることが出来た筈だ。しかし白牙という集団に手の者を潜入させるどころか、その組織の一端すら掴めなかったのだ。だから玉印を取り戻す事は、望み薄だと言うのは判りきっている。なのでこれについては代替案を用意しておくこととする。

次はこの飾り布を使った人物の正体。

だが……、私はこれを放置することとした。

命が残り僅かと判っていないければ、何をおいても探ったと思う。

だが、その人物がちよっかいをかけてきてもあと最大一月少々の時間耐えればよい。例え女と知られているのだとしても、それを明らかにされる前に私が死んでしまえば関係の無いことだ。私の死体もきちんと始末すれば、それが公になるなどという事はありえない。

ある意味禍根を残すものだと理解もしているが、他にも労力を割

かねばならない事が山積みの状態では、かかずらっている余裕はありはしなかった。

飾り布の次に優先されるのは、朱晋しゅしんについてだ。

折角の機会なのだから、彼には私の道連れとなってもらう。ついでに第五皇子にもお付き合い願うとして、そのための工作をしておかねばならない。

そのためには二人の動向を探り、私にとって都合のよい行動を取ってもらおう。

この二つの件だけで私の動かせる人員は手一杯になるだろう。

殆どは個人的に契約している者達ばかりだ。

彼らのような優秀な人材は貴重で、私の死と共に失うのは痛い損失であるし、彼らを路頭に迷わすことも気が引ける。

私が死んだ後に彼らが希望すれば、妹に召抱えてもらえるよう手を打っておくつもりだ。

他にも用意しておかねばならない書類や、準備して置かなければならない物品もある。

基本的にはこの宮でふんぞり返って指示を出すだけではあるが、彼等のもたらす情報を能動的に判断しそして新たに指示を出したり、書類を用意したりとすべきことは多い。

その上、私の後を任せられるよう、かつ、周りに気が付かれない様に、真祥しんしょうへ仕事を引き継いで置かなければならない。

毎日深夜までかけて机にかじりつき、寸暇を惜しんで仕事をこなす事となった。

佑茜ゆうせんの部下としての仕事や、祖国から送られてくる決済すべき書類など通常の処理に加え、視察に行っていた間に溜まっていた分、そして白牙捕獲騒動による始末書の作成等々があり、処理しても処理しても終りが見えないような状況だったのだ。

私が死んだ後に混乱を招かないための準備をせねばならず、ただでさえ時間がない状況だというのに、白牙関連の仕事までが増大していて、私の手に負えなくなってきた。



手が回らないと言う理由をつけて、真祥しんしょうに無理矢理私の仕事を手  
伝わせる口実にはなったのだが、逆に真祥しんしょうに手伝わせている事を理  
由に、時間的余裕はあるはずだと言いがかりを付けられ、更に佑茜ゆうせん  
に剣の特訓を受ける事となってしまうのだ。

早朝さうしやうの玉祥ぎやくしやうとの練習は今まで通りで、代英だいえいが参加するようにはな  
ったがすべき事を変えることではない。

しかし佑茜ゆうせんはその早朝練習だけでは不十分と言い、夕刻の日が少  
し翳り始めた頃に直々に手ほどきを受ける事となったのだ。

だが、連日ギリギリの睡眠時間で動いている私には、その特訓に  
体が付いてこなくなってきた。

目の下の隈は日に日に濃くなり、疲労は蓄積されていくばかりで、  
体が鉛のように重かった。

万全の状態であっても佑茜ゆうせんには手も足も出ないと言うのに、その  
様な状態でまともについていける筈も無く、無様に打ち据えられ防  
戦一方だった。

「どうした。そんなことでは守れる物も守れんぞ」  
「くっ」

言葉と共に振り下ろされる佑茜ゆうせんの重い一撃を真正面から受け止め、  
押し切られそうになる中それをギリギリの所で踏みとどまって受け  
流した。だが受け流した私自身にあまりにも余裕が無く、勢い余っ  
て体勢を崩してしまった。

そこへ受け流した筈の佑茜ゆうせんの剣がすぐさま斬りあがってきて、柄  
頭が顔面へと迫った。

私は酷く体勢を崩していたため、それを防御する暇など無かった。  
咄嗟に剣から片手を離し、その空いたほうの腕で顔面を盾にして  
顔面への直撃を防いだが、ただ直撃を防いだけで勢いは全く殺す  
事ができず、弾き飛ばされ地面にもんどりうつて転がった。

すぐさま立ち上がるべく身を起こしたが、眼前に切っ先を突きつ  
けられて動けなくなった。

「一回死亡、だな」

佑茜は無表情で告げる。

「帝都を離れている間、鍛錬を怠っていただろう。以前と比べて鈍りすぎだ」

「返す言葉もございません」

「そんな状態で油断を招くなど、お前はそんなに死にたいのか？」

部下がそんな情けない事だと、俺の顔が潰れるのだと……」

くどくどと佑茜は嫌味交じりの説教を述べていた。

私はただそれを頂垂れて聞いているしかなかった。

何故こんな事になっているかと言つと、視察時に襲撃されて真祥が居なかつたら危なかつたのだと告げてしまったせいだ。

けしからんと、強制的に特訓させられる事となつたのだ。

そんな時間的余裕の無い私は、勿論抵抗した。

「しかし、未だ白牙も捕まっておりますし、かの騒動の為に書類も山積みになっております」

尤もらしい私のその言葉は、あっさりと却下された。

「お前は真祥に手伝わせているだろう。訓練を受ける程度の時間はある筈だ」

そう返されると反論の余地もなく、結果、稽古という名の扱きを受ける事となつたのだ。

特訓が開始されてから既に一刻ほどの時間が経とうとしていた。

体力温存して逃げの一手を打ち続けていたのだが、相手をしている佑茜の体力は化け物級で、軽く汗をかいた程度でしかないというのに、反面私のほうは足元がフラフラで、手に力が入らず構えているだけで大変な状態だった。

まともに打ち合える筈もなく、あっさり吹き飛ばされてしまったのだ。そのあまりの衝撃に腕はしびれていた。

言い訳にしかないが、せめて白牙関連の仕事が無ければもう少し睡眠も取れるし、精神的にも体力的にも負担は軽く、ここまで一方的に打ち込まれるなんて事も無かつた筈なのだ。

あと僅かのことと理解していても、これから一月ほどの激務を思

い気が遠くなりそうだった。

心のそこから忌々しい白牙め。

奴が黄泉路へやって来たら、その時はこの恨み、全部ぶつけてイ  
ビリ倒してやる。

八つ当たり気味な恨みつらみを募らせていた。

そもそも奴の、白牙のせいで私は非常に迷惑をこらむっているの  
だから、その位の嫌がらせは許される筈だ。

あつという間に時間は流れ、後数日で皇帝主催の狩猟会が開催される。

寸暇を惜しんで私が死んだ後の後始末を手配していったおかげで、大方の処理は済ませることが出来た。

だが、肝心の物が、まだ手に入ってはこない。

白牙が奪っていった、玉印だ。

祖国にとつて最も危険なそれが、いまだ野放しになったままだ。

帝都の治安を護る警備隊が総動員で搜索しているが、手がかり一つ得られていない。警備隊が上げてくる、全ての報告書を手に入れることの出来る立場というのは、こういう時に有利だ。

佑茜配下の警備隊の者達が見つけれれば、そこから偽物にすり替えこつそり懐にしまいこむことは難しくは無いだろうとも考えていた。だが、彼らも白牙の搜索に力を入れているが、そちらでも進展は全く無かった。玉印搜索に手の者達を動かせない現状では、その立場がとて有難く感じたのだが、白牙が予想に違わず厄介な相手だと判つただけで意味はなかった。

時間ばかりが無意味に過ぎていくなか、焦りが湧き上がってくるが、必死になって飲み込んだ。

焦りはただ判断力を曇らせ、能率を落とすだけと身を持って知っている。

無いものはない。

発見が間に会わず、そして私が亡き後に公になった最悪の場合に備えてはある。万が一の場合に使うようと、幾つかの書面を妹の下へ送つておいた。

主犯が私であり、他の者は逆らえなかったのだと客観的に納得の行く、その証拠品だ。

全て私に責任があり、妹や祖国はあくまでも被害者でしかないの

だと判断させるためだ。

妹ならばそれを使って上手く乗り切ってくれと信じている。

祖国が帝国に吸収されたり、王家の姫である妹が人質として皇帝の後宮に入れられたりする程度で、事態の收拾を図ることができるだろう。

私がいなくなった後の混乱を最小限に留める為の努力しか出来な  
いというのも、もどかしい物だ。

悔いはある。

遣り残したのも沢山あるし、もっとやっておきたかった事もあ  
る。

だが、それには圧倒的に時間が足りない。

あまりに忙しすぎ、そして人手が足りなさ過ぎて、飾り布の持ち  
主を見つげ出すこともままならなかった。

私亡き後の後始末に奔走していなければ、見つけ出すことは出来  
たかもしれないが……言ってもしょうがないだろう。

どうせ、私は身代わりという事実ごと居なくなるのだ。

例え女であると相手に知られていようが、それは”私”が居なけ  
れば何の意味もない情報でしかない。

本当に私が女と知っていたのか、何を思っこの飾り布を寄越し  
たのか、髪飾りを何故届けたのか、聞きたい事は山ほどある。

もし私の秘密を知っていたのなら、それだけの能力のある相手  
で、可能ならありとあらゆる手段を講じて仲間内に引き入れたい  
位だ。

どうあっても仲間を引き込めない人間ならば、抹殺するかその危  
険性を妹へ通知する位しかかったが、酷く中途半端状態で放り出し  
ていかなければならない。

私が居なくとも、妹達は自力で乗り越える。そう思えど、やはり  
心配は尽きなかった。

不思議な事に、もっと死への恐怖で焦燥すると思っていたのだが、  
心は逆に静まっていた。

日一日と近づいているというのに、覚悟が少しずつ固まり落ち着いていくかのようだった。

時間が足りないことへの焦りはあっても、死への恐怖とは違う。避けようの無い事実だからなのか、死という物を他人事に感じているのか、自分自身でも不思議なほど心は凧いでいた。

間に合わないかとも思ったが……。

”彼ら”は随分頑張ってくれたようだ。私は手元の報告書に目を通し、口角が上がるのを押え切れなかった。

全て指示通りとのその報告が書かれたそれに蜀台の火を移し、陶器の容器へ落とす。

その中で報告書が完全に燃え尽きるのを確かに見届けた。

朱晋しゆしんを死へと追い落とすための裏工作。彼が処分したはずの裏切りや不正の証拠をそれとなく復元し戻しておいたのだ。

これで明々後日に迫った狩猟会の為の最後の仕上げに入る事ができる。

これで心残りとなる物は玉印の行方だけだ。流石にはじめから諦めていた事だから動揺はしていない。

最悪の事態に備えて、私一人に罪を被せるための証拠品を残してはあるが、かなり不安ではある。だが、そのときに私はもうこの世には居ないのだ。どう事態が推移するか読みきれない部分だが、妹がどうにかする事を期待するとしよう。

やれるだけのことはした。私は十六年という短い生涯ではあるが、全力で駆け抜けてきた。全く悔いがないとはいえないが、まずは満足できる人生だったのではないだろうか。

あと気にすべき事は私の死体の隠蔽方法について、従者達へどういい含めるかという事ぐらいだ。

だが、彼らは私の能力を知らない。

明々後日の命と急に聞かされ、納得する筈がない。

行く末を変え様と無理な行動に出ないとも限らない上に、計画を滅茶苦茶にされる可能性がある事も問題だ。

だが、”私の死体”という変えようの無い現実があれば、彼らは十分良い様に計らってくれる。そう期待しても大丈夫な程度には鍛えてきたつもりだ。

私の死は彼らに隠匿したまま、あの時刻に崖下にて待機するよう指示を出しておけば、彼らはもう手出しできない。

色々裏工作も必要な上に、あまり側にいられて気が付かれても困る。

そこまでは期待通り動いてもらえるように、書面で指示を出すとして、後は何が必要だろうか。

従者達への指示書をしたためながら、不足はないかと思考を巡らせていた。

思考に没頭するあまり、周りへの警戒がおろそかになっていたのだ。

普段なら決してありえない失態だ。

例え考え事をしていても常に気を張り詰め、寝ていたとしても僅かな気配で飛び起きるようにしていると云うのに、今は大丈夫だと油断していた。

明日は移動等で時間が取れないだろうと、従者達へ明後日行われる狩猟会の指示を書いていた。

どうあってもこれだけは失敗するわけには行かない。私は念入りに計画を練った。

従者達にはその仕上げという最も重要な役を頼まなければならない。私の死体を隠すという最も重要なこの役を振られたと知ったら、彼らは大反発をするだろう事が目に見えていた。下手をすれば彼らが私の計画を邪魔をする側に回る可能性が高い。

そうならないためにギリギリまで秘しておかねばならない役回りだ。

どうやってこれを渡すのが一番良いだろうか、私はそればかりを考えていた。

思考に集中しすぎてそれに気が付くのに遅れてしまった。ゾワツと悪寒が走り、反射的に椅子から転がり落ちた。

すぐ直前まで私がいた場所を、間一髪のところまで空気を裂いて光る物が横切った。

床の上を転がりながら次の攻撃を避けつつ、体勢を整えるべく襲撃者から距離をとった。

立ち上がりながら懐に隠し持っていた短剣を取り出す。書き物机を背に、黒尽くめの男が密やかに立っていた。

蝋燭の橙色の光に照らされたその姿は不気味であった。

そしてその手にはテラテラと濡れたように光る短剣が握られている。

得物はともに短剣。

条件は五分。

だが、相手は動揺もなくこちらを窺っている。

人を呼ぶために背を向けたら最後だと、緊迫して向き直った。



私はあと少しの命だ。

だが、それまでは無事に過せる筈と、根拠も無く思っていたようだ。暗殺者などいつものことだと言つのに、無意識に警戒を怠ってしまった。こんな直前まで存在に気が付かないなんて、油断のしすぎだ。舌打ちしたい気分だった。

相対している男は冷徹な殺意だけを身にまとっていた。

一切の気負いもなく、ただ事務的な冷たさだけがあった。

強いと直感的に感じた。恐らく佑茜程ではないと思うが、私や玉祥では敵う相手ではない。

互いに力量を測りあうかのように長いこと睨み合っていたように感じたが、実際はほんの瞬きほどの時間だった。

黒尽くめの男は私に向かって一歩踏み出し、手にした短剣を突き出してくる。

鋭いその突きを、手にしていた短剣でどうにか受け止め、弾く。

弾いた短刀がまるで、意志を持っているかのように舞い戻ってきて、私はそれを必死で防いだ。

こちらが反撃する暇もなく、鋭い連続攻撃が続く。一瞬の油断が命取りになりそうなそれに、私は齒軋りしたくなった。

肌を僅かに掠るだけで、恐らく助からないだろう。

間近で見れば一目瞭然で、男の握る短刀には何かが塗られていた。何か、など一つしかない。

毒だ。

その毒が何か私には判らないが、刃物がかするだけで致命傷となりかねない。

そして腕は明らかに黒尽くめのほうが上だった。

私は攻撃を防ぐのが精一杯で、どんどんと追い込まれていった。

壁際まで追い詰められてはお終いだと、すばやく室内に目を走らせる。

長椅子の上に無造作にほうられている上着が目に入った。

私は追い込まれている態を装って長椅子に向かう。

黒尽くめの短刀をいなし、僅かなその隙に上着を手に取る。

短刀を手にしている腕に叩きつけ、その動きを妨げた。

動きが鈍ったその瞬間、男めがけて自分の手にしている短刀を繰り出した。

男は手にしていた短刀を投げ捨て、巻きついていた上着を振りほどく。

そして男の空いていた片方の手が私のがら空きとなった胸元めがけて伸びてきた。

勢いが乗っていた攻撃を止めそれを防ぐ事はできない。

私はとっさに身体を捻ってそれを避けた。

男は短刀をもう一本隠し持っていたのだ。

完全にそれをよけ切ることはできずに、利き腕の上腕をザックリと切り裂かれた。

手にしていた上着を男の眼前に投げつけ、距離をとった。

短くも激しい攻防に息が切れていたが、それ以上に急激な悪寒が体中を巡っていく。

油断した。

短刀は一本きりだと思ったのが甘かった。

しかもご丁寧に予備にまで毒を塗りたくっているなんて。

私は舌打ちする思いだった。

男は息の根を止めるべく踏み出してきた。

私はなす術もなく、胸に受けた激しい衝撃に意識を刈り取られた。

突然起きた激しい物音に、何事が起きたのかと従者達はすぐさま駆けつけた。

「若様！ 何事ですか？」

「ご無事ですか！？」

手に手に己の武器を携え、足音も高く駆けつけたのだ。

変事が起きているのであれば、侵入者の意識を自分達に向けさせる主である二若の助けとなるためであつたし、人がこれから駆けつけるのだと見せつけ襲撃を諦めさせるといふ目的もあつた。

全ては二若の助かる確率を少しでも上げるためだけの行動だつた。犯人を捕まえたりその裏に繋がる人物を特定する事などは二の次なのだつた。

そうやって駆けつけた従者達が見たのは、荒れた室内に事切れた黒尽くめの男だけだつた。

本来ならば部屋にいるはずの彼らの主の姿はなかつたのだ。

黒尽くめの男は頸動脈に太く長い針が刺っており、他に外傷らしい外傷はないのに、血が床の上に落ちていた。

尋常な事態ではないとすぐさま判断し、従者達の内の一人がすぐさま主の上司、つまり宮の主である佑茜に報告に走つた。従者達だけでは力不足だとすぐさま見て取つたのだ。

力不足ならば他に助力を請わねばならない。この場合それに相応しい相手は、佑茜以外にありえなかつた。いずれこれが主を不利な事態に追いやるのだとしても、今現在は佑茜の力がどうしても必要な場面なのだそう判断したためだつた。

「佑茜様にご報告する」

「……、わかつた。耀、気をつけるよ」

「俺と伶は先に付近を搜索している」

残つた二人は近辺を探つた。他に襲撃してきた者の仲間がいる可

能力がある中、酷く緊張しながらの搜索だった。だがそれでも、佑茜に報告する任よりは、かなり気の楽な作業だった。

二若の部屋を出て真っ直ぐに佑茜の居室に向かった耀は、緊張に顔を強張らせながらその部屋に入った。

寝入っている筈の宮の主である佑茜は、鋭い眼光でもって耀を迎え入れた。

召使に手伝わせ、既に寝巻きから普通の服に着替え終わる所であった。

「怪我をしたのか」

抑揚のないその声音に、耀は冷や汗をかいた。

耀には誰のことを指しているのかすぐさま理解した。彼の主である二若は怪我をし身動きできないから、自ら報告する代わりに従者を遣わしたのかと、佑茜は言っているのだ。

一拍だけ答えにつまりすぐさま意を決して口を開いた。

「室内には襲撃者と思われる男の遺体があるのみで、若様のお姿が見当たりませんでした」

それだけを聞き、佑茜はすぐさま身を翻して部屋を出て行った。

「お前は搜索に戻れ」

「は、はい」

追いかけてようとした耀は、機先を制するようなその台詞に辛うじて返事を返した。

報告を受けた佑茜はすぐさま搜索隊を組織し、二若の行方を捜したがその姿は見つからなかった。

明け方になり、行方不明であった二若は自力で宮に戻ってきた。

搜索隊に加わっていた従者達は知らせを受け、急ぎ戻ってきた。

従者達が見たものは、荒れたままの部屋の中、長椅子にグツタリと身を持たせかけている二若の姿だった。

「若様！」

「いったい何があったのですか!？」

「お怪我はありませんか」

従者達は口々に声をかけた。

搜索隊の指揮を執っていた佑茜も息を切らせて駆けつけてくる。

その頃には耀が二若の腕の傷を治療し、譲と伶は着替えのためにバタバタと走り回っていた。

佑茜は二若の姿にニコリともせず厳しい表情のまま詰問した。

「どういうことだ？」

低いその声に、従者達は身をすくませた。

「賊に教われました。一人は倒したのですが、多勢に無勢。逃げる

のが精一杯でした」

二若はかすれ声で言った。

「ほう。その賊はどうした」

「何とか撒いて戻ってきた次第です」

佑茜はそれを信じた様子ではなかったが、よく休むよう言い置いて部屋を出て行った。

従者達はほつと息をつく。

二若はその後姿をジツとみていた。

二若の部屋を後にした佑茜は真祥を呼び出した。

「絃菫様はどうでした？ 怪我は？」

他の者と同じ様に搜索に参加していた真祥は、息せき切って尋ねた。

佑茜からギロリと険しい眼差しを向けられ、真祥は口を閉ざした。

いつになく不機嫌なその様子に、真祥はそれ以上訊ねる事ができなかつたのだ。

「お前はそのままアレの動きを見張れ。何をしているか逐一報告しろ」

「……なんだって？」

真祥は佑茜の命令が信じられずに聞き返した。

「見張れ、といった」

「それは絃菖いんしやう様を、ですよね？ 何でなのかと聞いていいですか？」  
絶対零度の眼差しに、真祥まじやうは口を閉ざした。疑問も反論も許さな  
いといった佑茜ゆうせんの様子に、渋々頷いたのだ。

「わかりましたよ。御心のままに」

真祥まじやうはふと気が付いた、というように疑問を出した。

「ところで、稼祥かじやう様にはお知らせしないでよいのですか」

「必要ない」

「ですが、」

「知らせようものなら、あいつは自分の婚礼を放り出して戻ってく  
る。今はまだあいつが戻ってこなければならぬような事態ではな  
い。だから放っておけ」

「後で知らされたら、幾ら稼祥かじやう様でもお怒りになりますよ」

真祥まじやうの指摘しじやくに対する佑茜ゆうせんの答えはなかった。

## 五十七

怪我の手当てが終わり、二若<sup>ふたわか</sup>は寝台に横たわり休んでいた。

ほぼ一晚中探し回っていた宮の者も、手が空いている者は皆同じ様にひと時の休息を取っていて、もともと閑散としている宮は何時にも増して静まり返っていた。

そこに騒々しい一団がやってきた。

仕事中の者はおもわず手を休め、休んでいた者は驚きに飛び起きた。

対応に出たのは宮で働く召使達の中でも比較的位の高い男だった。「一体、どういった御用でしょうか。若飛<sup>じゃくひ</sup>殿下は未だお休みになられておられますので、お静かに願います」

昨夜から未明にかけての騒動で、何があつたかなどすっかり知れ渡っていた。

当然のように宮の主が休んでいることもまた、殆どの者が知っているはずだった。

うつけと呼ばれていようと、佑茜<sup>ゆうせん</sup>は皇子であり、粗略に扱ってよい相手ではないのだと、男は暗に主張していた。

「若飛<sup>じゃくひ</sup>殿下に御用でしたら、時を改めてください」

男の台詞を否定するかのようになり、一団の中から一人が進み出た。

「そこをどかぬか」

「書琴<sup>しよきん</sup>殿下……」

男は進み出た人物を目にして不可解そうに眉を寄せた。

書琴<sup>しよきん</sup>は謀反の疑いありと、皇帝の命で拘束されているはずだった。たかだか召使でしかない男であってもそれを知っているくらいなのに、何故出歩いているのかと疑問に思ったためだった。

書琴<sup>しよきん</sup>の背後には官吏達が控えており、男は彼らにどういうことかと目線で問いかけた。

官吏達は苦く顔を顰めるばかりで、何もいわなかった。

中には書琴しよきんに耳打ちして今は引くべきだと諭しているような姿もあつた。

どうやら官吏達にとつても不本意な事態であるらしい。

男は酷く困惑してしまつた。

書琴しよきんの訪れを無視する権限は、彼にはなかつた為だ。

主からは休み起きるまで構うなと命じられて上、その側近ふたわがである玉祥たまけいは婚礼の為に里帰り中で、もう一人の側近である二若ふたわがは怪我をして臥せつている。

指示を仰ぐべきものが誰一人いない上に、緊急事態だからと主の言いつけを破るには男の身分は些か低すぎた。

間が悪いことに、佑茜ゆうせんに進言する事が出来るはずの二若ふたわがの従者達は、朝方までの騒動の片付けなどをするために宮を離れている。

一人だけ残っているのは、新参者の真祥しんしょうという者なのだが、男は真祥しんしょうを信用していなかった。

男にしてみれば真祥しんしょうは胡散臭いことこの上なく、二若ふたわがが紹介して宮に仕えだしたという事も、男の不審をあおる結果となつていた。

二若ふたわがはともしつかりしているとは言え、男からすればまだまだ子供である。

主らと離れ一人視察に行かされ、そこで真祥しんしょうに言いように騙されたに違いない、と男は考えていたので、真祥しんしょうの力を借りるといふのは論外であつた。

書琴しよきんという皇子は遙か彼方上の人間ではあるが、己の主と比べれば下と言ひ切れる相手でもあつた。

皇帝や皇太子など、主より目上の者の命ならば詮索することなく通したのだから、書琴しよきんは同じ皇子ではあるが母の身分が低くその上怠惰で官職にもまともについていない駄目皇子である。

これが他の兄の例えば第四皇子であれば、母の身分は低くともその働き振りなどから通しただらうと思われる。

もしくは主でさえも無視できないような高官であつたならば、当然の事ながら皇子という身分はあれど主の許しなく通すつもり



はなかつた。

男の主は宮に許しなく人が踏み入るのを良しとしない人間でもある。

困惑する思いはあれど、男は身命を掛けて書琴のおとないを阻止しようという意思を込めて、書琴に相對していた。

書琴は身分低い男の決意を敏感に感じ取ったのか、不愉快そうに鼻を鳴らした。

「残念ながら用があるのは若飛じゃない」

意外そうに男は書琴を見返した。

「謀反人のところに案内せよ」

書琴は轟然と言い放った。

「絃菫様を襲った痴れ者でしたら、未だ行方がわかっておりません。死んだ者の死体は既に衛士にお引渡ししてあります。こちらには謀反人と呼ばれるものはありません」

「謀反人ならいるではないか」

「ですから……」

「若飛の側近である、絃菫だ。案内せよ」

「絃菫様は謀反人などではありません。襲われた被害者です。それを……」

「よかるう。お前のような者にも判る様、説明してやる。此度の騒動は、全て絃菫の企てである。私を謀り陥れた謀反人を捕らえにきたのだ。判ったのならそこをどけ」

「佑茜ではなく二若に用だと言われれば、男にはそれを拒否することとは難しかった。」

「しかし、二若は男にとって直接の主ではないが、主の大事な側近である。」

「二若もまた、男にとってはお護りすべき相手であった。頑として道を開けず、その前に立ち塞がり続けた。」

「そなたも謀反人の仲間と判断するが、良いのか？」

「絃菫様は謀反など企てるようなお方ではありません」

「それほど頑迷に信じるといふのであれば、当人に直接聞くがいいだろう。それとも、通すと拙い事情でもあるといふのか？」

男は返す言葉なく口を閉ざした。

その様子に気を良くした書琴しよきんは、男の横をすり抜け宮の中へと足を踏み入れた。

渋々といった様子で、男は二若ふたわかの部屋へと先に立つて向かった。

男は二若ふたわかの部屋の前で立ち止まり、室内に向かい声をかけた。

「お休みの所申し訳ありません。お客様がおみえになつておられます」

男が言い終わる前に、書琴しょきんは強引に立ち入ってしまった。

その後続く官吏達は非礼を恥じ入るかのように目を伏せ男の前を通過していく。

惘然としてそれを見送つた男は、最後に部屋へと踏み入つた。

その時真祥しんしょうは、主に命じられた通り、二若ふたわかの側に潜み監視していた。

事の顛末を近くで直接見聞きするべく、官吏達の中に紛れ込んだ。

「お客様とは、書琴しょきん様であらせられましたか。御用とあればこちらから参じましたものを、いかがなさいましたか」

二若ふたわかのその問いかけに、書琴しょきんは人の悪い笑みでもつて答えた。

「余裕にしていられるのもこれまでよ。そなたを捕らえにきたのだ」  
意外そうに眉を跳ね上げ、二若ふたわかは心外だといった様子で口を開いた。

「随分と不穏な事を仰るのですね。一体何故私が裁かれねばならないのでしょうか」

「身に覚えがないと？ 戯言を。そなたが此度の帝国転覆を企んだ事は判つておる。私を陥れ帝国を混沌に陥れようというのである。！」

「もしや、殿下の宮から持ち出されたと言う、玉印の事で詮議に見えたのでしょうか。白牙なる者の戯言と思ひ思考の彼方へ打ちやつておりましたが、何故私に？」

二若ふたわかは書琴しょきんが玉印の件で皇帝に詮議されている事を知っていながら、それを知らぬ振りで言つた。

書琴はギリツと悔しげに奥歯をかみ締めた。

「私ではない。全てはそなたが企んだ事であろう。真実の咎人を陛下の御前に引つ立て、私は自身の無実を証明するのだ」

二若は困ったように首をかしげた。

「私にはとんと身に覚えがありませんが、何故私が犯人だと仰るのですか？」

「あの玉印の真の持ち主はそなただからだ。あれを寄越したそなたの家臣からしかと聞いた」

二若は難しげに眉を顰めた。

「玉印は本当に存在していたのですか……。わたしは白牙なる者の出任せなのだとばかり思っておりましたが、思い違いをしていたのですね」

「っ！　そ、そうだ！」

官吏達も半ば困惑して2人のやり取りを見ていた。

疑惑の主である書琴が、玉印が存在していた事を正式に認めたまめだった。

皇帝の命で書琴を調べてはいたが、玉印が有るか無いかなど盗人の発言しかなく、本当はそのような物は存在しないのではないかという思いを抱いてもいた。

それゆえどこかだらけた空気の中で取調べをしており、また相手が皇帝の実の子息という事もあり、半ば位は民へ調査していると見せ掛けているだけだとすら考えていた節があった。

それなのに、皇子自ら玉印はあったと、一番の容疑者である書琴がそう断言したのだ。

官吏達が動揺するのは当然の事態であった。

「しかし、それが何故私のものと言う事になるのですか？」

「あの玉印は、朱晋が私の元へ持ち込んだ物だ。そなたが隠し持っていたといつて、どうすべきだろうかと相談に参ったのだ。そなたは帝国の情報をテグシカルバに売り、見返りに確たる地位を得る腹積もりであるのだとか」

「随分と酷い言い掛かりではありませんまいか。私はその様な真似をする理由が有りません」

「理由？ そのような物、一つしかなくろつ。今の若飛じゃくひの側近という地位だけでは満足できなくなり、更なる野心を抱いたからよ。そうであるろつ？ そなたは己の野心のため、自身の弟を弑しその地位を奪つた挙句、まんまと弟に成りすましているのだからな」

「それはどういう意味です」

「そなたは本当は紘菡こくわんの姉である一の姫だと言っているのだ。女の方際で国の王たるを願ひ、それを実行した冷酷な野心家よ」

書琴しよきんのその台詞を耳にした真祥まじやうはそつとその場を離れ、主である佑茜ゆうせんの居室へと足を向けた。

佑茜ゆうせんの居室に踏み入り、真祥まじやうは啞然とした。

部屋で休んでいる筈の主の姿がなかつたのだ。

どこかに隠れているのかと、苛立ちも露に人の隠れられそうな場所を一通り改めた。

隠れられそうな場所など限られており、それほどかからず見終つてしまうと、真祥まじやうは舌打ちして二若ふたわかの部屋へ戻るべく踵を返した。

そこへ部屋の主である佑茜ゆうせんが戻ってきた。

「誰も部屋には近づくなと、申し渡しておいた筈なのだがな」

その皮肉気な声に、部屋から出掛かつていた真祥まじやうは振り返つた。窓を乗り越えて佑茜ゆうせんが入ってくる所だつた。

皇子ともあるろつ人間が、こそ泥のように窓から出入りしている。

その事実じつじに真祥まじやうの眉は気難しく寄せられた。

「こんな時にどちらにいかれているんです」

「お前に答える必要はない。で？」

苦情交じりの言葉をバツサリ切り捨てられ、真祥まじやうはグツと口をつ

ぐんだ。

「書琴しよきん様がいらした」

「知ってる」

くだらない事を言うなといった様子で佑茜ゆうせんは答えた。

「絃菖じゆしやう様を謀反人と指弾し、その正体は女なのだと声高に主張されている。私では絃菖じゆしやう様を庇う事は出来ません。早く書琴しよきん様を止めてください」

「二若ふたわかならばその程度自力で切り抜ける」

「しかし、このままでは……！ 早くお助けください」

「何故」だ？

それまでと雰囲気を異にしたその言葉に違和感を感じ、真祥しんしやうは若飛じゃくひを見返した。

若飛じゃくひの視線に真祥しんしやうは冷や汗をかいた。

真祥しんしやうは若飛じゃくひからは普段より温かみのない眼差しを向けられているが、これほどまでに冷ややかで冷徹な物を見るかのような目を向けられたことはなかった。

今、ここで答えを間違えたら、命はないのだと本能的に悟った。

「絃菫様は、身分あるお方です。小さいとは言え一国の王が、あのようない掛かりを付けられ唯々諾々と従っては、その沽券に関わりません」

真祥はそれだけを言い切り、真つ直ぐ佑茜を見つめ返した。

動揺している事すら悟られてはならないと、真祥は必死になって表情を取り繕っていた。

検分するかのように、ジツとそれを観察していた佑茜の口角がつかと上がり、頷く。

「確かに、道理だな」

その言葉を境に緩んだ空気に、真祥はこっそり息をついた。

その間隙をつくかのように、佑茜の言葉が飛ぶ。

「確か、お前にはアレを見張れと命じてあったように思ったが？」

佑茜の元へ報告に来るといふ事は、監視対象から離れることを意味していた。

それを佑茜は指摘しているのだ。

「申し訳ありません。緊急事態と思い、持ち場を離れておりました」

一礼し、真祥は二若を監視すべく足早に戻った。

佑茜はぶらぶらとした足取りでその後が続く。

書琴達を出迎えた宮の男は、主の姿にホッと表情を弛めた。

佑茜は鷹揚に頷き、仕事に戻るよう身振りだけで指示をして男を追いやった。

男は主の横に立つ真祥に顔を顰めながらも、自分の持ち場に戻っていった。二若の私室前で二人は並んで陣取り、その中の様子を窺った。

私室の中では、未だ書琴が二若を攻め立てていた。

書琴の連れてきた官吏は、ややうんざりといった雰囲気を漂わせている。

皇帝の命で書琴しよきんを拘束し取調べをしている彼らには、書琴しよきんのこの行動はただの苦し紛れにしか思えなかったのだ。

それに巻き込まれた二若ふたわかへ僅かばかりの同情の念を抱きつつも、相手は皇子の為そのような事はありえないと一刀の下に切り捨てることも出来ず、仕方なく書琴しよきんに付き合っていたのだ。

かといって、官吏からすれば二若ふたわかとて身分の高いやんことなき人物である。

書琴しよきんの言葉を鵲呑みにして、問答無用で拘束する事が出来る相手ではなかった。

何らかの証拠品や証言が有るのならばともかく、このような言い掛かりで引つ張つていく事は、断じて出来ないのだ。

「ですから、何故わたしが女だということになるのですか」

「お前が本物を弑して成り代わったからと言つておるう！ そうやつて国を手に入れた次は、帝国か？ それともテグシカルバに擦り寄つて、上手い汁を吸おうと言つのであるう？」

「どのような証拠あつてその様な戯言を仰るのか。私は他の誰でもない本物ですし、姉は国で私に代わり政を治めております」

「証拠か？ そのようなもの、そなた自身が証拠であるう。違つと言つのであれば、そなたが男だとこの場にいる全員に証明してみてはどうだ。最も、その様なことできはせぬだろうがな！」

ハハハと嘲りも露に書琴しよきんは嗤つた。

二若ふたわかはため息をつき、肩を落とした。

それを見て取つた書琴しよきんは、それ見たことかと勝ち誇つて背後にいる官吏達を見やる。

「私が男だと、証明すればよろしいのですね」

二若ふたわかのその言葉に、書琴しよきんは出来るものなら好きにしろと言いつた。寝台の上に身を起こしていた二若ふたわかは、掛け布を押しやり帯を解き夜着の前身ふたわかごろを開いた。

二若ふたわかは肌着など身につけず素肌の上から夜着を纏っていたため、裸の胸が公衆の面前に晒された。



止めなければと身を乗り出していた真祥は、そのまっ平らな胸を目にして驚愕を浮かべた。

女だと言い張っていた書琴も、啞然としてそれを見つめている。

成り行きを黙ってみていた官吏達は、やはりといった様子で眉を顰めた。

「なんだと!？」

二若は書琴の驚きに片方の眉を上げ、いった。

「納得していただけましたか？」

「そんな……、そんなはずはない……!」

「まだ足りぬと仰るのでしたら、下のほうもお目に掛けますか？」

皮肉気な二若のその言い様に、書琴の背後に控えていた官吏の中で年かさの者が進み出て、首を振った。

「その必要はございません。紘菖様が男性だと皆納得いたしました。御怪我をされたばかりで御休みの所お邪魔しまして、申し訳なく思

います」

「貴公らにしてみれば致し方のないことだと理解しておりますゆえ、気に病まないでいただきたい」

「寛容なお言葉ありがとうございます」

「これにて私の疑いは晴れたと、思つて良いのでしょうか？」

「勿論でございます。お騒がせし申し訳ありませんでした。ささ、書琴殿下これでお気が済まれましたでしょう。どうぞお戻りくださ

い

その官吏に半ば引つ立てられるようにして、書琴は連れて行かれた。書琴は諦め悪く、そんなはずは無いと誰にもなく訴えていたが、

その言葉をまともに受け取る者はいなかった。

佑茜と真祥は、書琴一行が戻る際に姿を見られると面倒だと、早々にその場を立ち去っていた。

「どついつ、事だ？ 紘菡様は……」

佑茜の居室に戻り、真祥は言いかけたが、途中で口を閉ざした。

「どつした？」 二若 が、何だと言う？」

佑茜が真祥と連れ立って二若の部屋へ足を伸ばしたのも、その反応をつぶさに見届けるため。そう、彼は気が付いてしまった。

いっそ楽しげと評してもよい主の様子に、真祥は再び冷や汗が噴出してくるのを感じた。

佑茜は強張った表情の真祥をただ観察している。

ある種の確信を持った声音で、佑茜は真祥に問うた。

「お前は、いったい何を見た？」

口の中が緊張で乾ききっていたが、真祥は言葉を搾り出した。ここで偽りを口にすれば命はないと、佑茜の眼差しは真祥に、そう思わせた。

最初に感じたのは息が上手くすえないような息苦しさだった。そして身体は熱いのに凍えるほど寒く、体が鉛のように重い。

あの時、てつきり死んだものと思ったのに、私はまだ生きているようだ。

そうだ、死ぬはずがない。死ぬことなどありえないのだ。

私はまだあの崖で、朱晋と向かい合ってすらいない。

私が見たものは、いずれ起こる現実でしかない。それが未来であろうと、すでに私の中では一つの過去の形となって存在している。

例えばどんな事があるうと、何をどう足掻こうと、どれほどありえそうにない未来であろうと、過去が変えられないように、私が見た未来もまた変えられないものだ。

だから死ぬ筈などないのだ。

あの襲撃からどれほど経ったのかわからないが、早く動けるようにならないと話にならない。

少なくとも狩猟会までには、ある程度は回復させておかないと、ろくな抵抗ひとつできず殺される事になる。

幾らなんでもそれは駄目だ。そのような事承服できるはずがない。自分を殺す朱晋に、一太刀なりとも手傷を負わせる位したい。

くだらない意地だろうが、行く末が変えられないのなら、そのぐらいの死に花を咲かせねば、幾らなんでも自分が惨め過ぎる。

ゼイゼイと荒い息をつきながら、閉ざしていた目蓋を開いた。たったそれだけの事が酷く億劫だった。

目に映ったのは黒い天井、橙色の灯り。

明らかに自室ではなかった。

あれから一体何があったのか、全く想像も出来ない。

グラグラと回る視界に気分が悪くなりながら、頭を横に傾けるのも難しく、目だけを周りにめぐらせた。

そうして判った事は、黒い天井と見えたのは自然の岩だつて事だ。広めの空間となつていて判りにくかつたが、紛れもなく天然の洞窟だつた。

「まだ暫くは眠っていた方がいいですよ」  
ウロウロと視界を巡らせている私に、低く柔らかな声をかけられた。

視界の中にはその姿はなく、意思の力を総動員して声の方に顔を向けた。

すると、穏やかな雰囲気、中年と青年の中間ぐらい年齢の男が、地べたに座つてこちらを見ていた。

黒尽くめの仲間だろうかと最初に考えた。

だが、すぐにそれは違ふと思ひ直した。

男には敵意は全くなかつたのだ。

強いて言つのならば、好奇心や興味といった感情しか見て取れなかつた。

グラグラゆるる視界では、それだけ見て取るのもかなり消耗した。

「双葉さん、私は怪しいものではありませんよ。そうですね、強いて言つのならイチの師匠という存在です」

それで全てわかるだろう、男はそういう様子だつた。

この場合、双葉というのが私の名前ということか。

私をここに連れてきたのはこの男なのか。助けたのはこの男なのか。口ぶりからは違ふのではないかと思わせた。

仲間がいて、そいつが私を助け連れて来たのではないか。そう思わせた。そしてその仲間の名前がイチという者。

だが私はイチという者が判らない。

もしかしてイチというものがあの黒尽くめのことなのだろうかとも、僅かに考えた。だが私を殺しに来た者が手当てをして、なおかつ看病などする理由がない。

そんなはずはなかるうとその可能性を排除した。

「急いで治療し解毒しましたが、当分まともに動けないと思います。

命が助かっただけましと思ってくださいよ」

男はのほほんと告げた。

悪寒に身体を震わせながら、荒い息で訊ねようとしたのだが、言葉にならなかった。

今はいつなのか、此処はどこなのか、宮殿は遠いのか、聞くべきこと、すべき事は山ほどあったが、私の意識は再び暗闇のそこに沈んでいった。

「師匠、双葉はどうだ？」

洞窟内に入ってきた若い男は声を潜めてたずねた。

「先程一度意識が戻りました。峠は越したと見ていいでしょう」

男は弟子に向かい柔らかくそう告げた。

「ありがとうございます」

ホツとした様子で若い男は師に礼を述べた。

「あなたが私を頼るなんて、よほど大切な相手なのでしょう。ああ、彼女の素性を尋ねているではありませんよ。もちろん、イチ、君の事も。ただ、そういう大切な相手がいるのなら、あまり危険な事に首を突っ込まないようにと言いたいです。泣かせたくはないでしょう」

イチと呼ばれた若い男は、師の言葉に苦笑した。

「さて、役目は終わったようなので、私は行きます」

座り込んでいた男が立ち上がったので、イチは洞窟の入り口まで見送りに出た。

「私は、君には穏やかに暮らして欲しいと思っています。それは師として、また君の養い親としての願いです。それを忘れないでください」

別れ際のその言葉に、イチは何も答えず、ただ頭を深々と下げた。微笑で男はそれを受け入れ、立ち去っていった。

イチはその姿が見えなくなるまで、ずっとその場に留まり見送った。

揺ら揺らとした中、目を覚ますと誰かに背負われていた。短い頭髪から洞窟であった男とは違う別の人間だと判る。洞窟であった人間の言っていたイチと言う奴だろうか。

「目が覚めたのか？ 一姫いちひめ」  
私を正確な名前で呼ぶ。

まさか、と息を飲んだ。

「二若ふたわかか」

舌が張り付きそれは声にならなかった。  
毒の影響が抜けきれていなかったのだ。  
身体には酷い悪寒があり、未だ熱も高い。

意識は朦朧として、すぐにも再び眠りに落ちていきそうだった。

「ああ」  
声にならなかったその問いに、私を背負う男はこたえた。  
何故、今頃現れる。お前は何がしたい？

私は困惑しながら思った。  
本物の二若ふたわかならば、この疑問は余すところなく伝わったはずだが、  
答えなかった。

「身体が辛いことは判ってるが、しばらく辛抱してくれ」  
とだけ言った。

それきり黙りこみ、黙々と森の中を進んでいく。  
辺りは薄暗く、夜明け前の時間のようだった。東の空がうつすらと明るくなり始めている。

そうやって背負われたままかなりの距離を移動した。私には自分がどのあたりにいるのか、見当もつかない。宮殿近辺の地理に疎くなどはないが、ただの森の中では風景はあまりにも似通り、それがどの森なのか判断できるはずがなかった。

背負われたまますと揺られ続け、気分はどんどん悪くなってい

き、地面の上に降ろされた時は半ば以上意識が飛んでいた。

私に一言二言言葉をかけ、二若立ち去つていくのだが、彼が何を言ったのか聞き取ることは出来なかった。

一人その場に取り残され、地面の上に横たわったままどれほど経っただろうか。

どうにか状況が把握できるほど回復した頃には、夜明け前の薄明かりで照らされていた世界が、まぶしい光に覆われその全貌をはっきりと見せていた。

木々が作る影の角度から日が昇ってからかなりの時が経っている事がわかる。

直に太陽は中天にさしかかろうとするころだろう。

サワサワと水音もして近くに川があることも知った。

ぐるりと目だけを動かして周りを眺める。

片側は森で、その反対側は切り立った崖だ。

崖側に顔を向けた。

私から少しはなれると大小の石が転がっている。

サワサワとその先から水音も聞こえてくる事から、川を挟んだ向

こう側に崖があるのだらうと判断した。

”崖”

私はヒヤリとした。

あれからどれくらい時間が経った。

皇帝主催の狩猟会は、何時行われる。

脳裏に浮かんだ一つの答え。

崖の上が賑やかになってきた。

人がいるのだ。

ハツハツハと細かな息をつきながら、腕の力だけで無理を押しして上体を持ち上げる。

頭上は木々に覆われ、今私のいる場所からは、崖の上を仰ぎ見る事はできない。

私が横たわっていたのは、柔らかな下生えのある場所だ。



腹ばいのまま崖に向かい這って進んだ。

極僅かに移動するだけで、ひどく息が切れる。冷や汗なのか脂汗なのかよく判らない汗が噴出してくる。

どうにか木々の切れ間から頭上を仰ぎ見れる場所に来て、私は息を飲んだ。

崖の上に人が立っていた。

私の服を着て、私と同じ顔をした、人間。

逃げろ、と声を上げるが、擦れた音となって殆ど言葉にならなかつた。

”あれ”は、私だと思つたのだ。

以前見た光景が思い出された。

”私”の背後へ朱晋しゅしんが駆け寄り、不意をついて切りかかる。

二度三度と切り結び、”私”は崖下へ落ちていく。

そんな事になるために、私はお前の身代わりを務めていたのではない。

だからどうか。逃げてくれと、全身全霊で願つた。

こちらを見下ろしていた二若ふたわかは、ハツとして後ろを振り返る。

暫しその姿が消え、再び私の視界の中に現れた。

ジリジリと崖へと追い詰められていく。

そして私の見ている目の前で、足を踏み外したのか崖下へと転落した。

視界を遮る木々のせいで、どうやって落ちたのか最後まで確認できなかつた。

あれほど高い切り立った崖から落ちて、無事ではいるはずがない。

嗚呼、と声なく嘆いた。

久しく流した事のなかつた涙があふれてくる。

無理をして動いた上に今の出来事で体から力が抜けていった。

指一本動かせそうになかつた。

パチパチという木の爆ぜる音に、私は再び意識を取り戻した。

既に当りは暗くなっており、焚き火がつけられている。パチパチというのは、この火によつて燃やされる木の爆ぜる音のようだ。

焚き火の明かりで、逆に周囲が暗くなってしまい、周りかどの様な場所かよく見えなかった。

体の下にはごつごつとした地面の感触と、頬をなでる風から、天幕などもない屋外なのは間違いない。

チクチクしたさわり心地の、厚い布が体の下に敷かれている。どうやら体の上にもそれは乗っていて、すっぽりと包まれているようだった。

そして頭は暖かく弾力のあるものの上にある。

何だこれとは訝しく思った瞬間、その正体に思い至った。

膝枕。

出したその答えに、思わず身を強張らせた。

帝国に来てからは女とばれないよう、必要最低限しか私は体に触れさせたことがない。人との接触になれていないのだ。その反応は、半ば以上反射的なものだった。

顔の前に手が下りてくる。

指先にかなり強烈な匂いの丸薬が挟まれていた。

「解毒薬だ」

膝枕の主はそういい、丸薬を押し込んできた。

あまりの苦さに反射的に吐き出しそうになった。すばやく口を押さえられ、竹筒を口元にあてがわれた。流し込まれた水でそれを飲み下す。

口の端からこぼれた水が、顎を伝ってそいつの衣装を濡らすのが、気にとめた様子はなかった。

横を向いていた身体を仰向けにして見上げる。

「ふた、わ、か……」

私のかすれた声に、本物の二若ふたわかは頷きを返した。

「ど、して……?」

あの崖から落ちて、何故こんな風に平然としている。

私には理解できなかった。

その私と同じ顔をした相手を見つめた。ニツと口の端がつりあがる。

「あのくらの崖、俺には大した事はない。それに……あそこで何があるか、手がかりもあつたからな」

どうということだと眉根が寄る。

二若ふたわかは懐から、一枚の紙を取り出し、ヒラヒラと私の目の前でそれを振った。

その紙には見覚えがあつた。

刺客に襲われる直前まで、私が従者達へとしたためていた物だ。

そういうことか、と納得した。

私の力を正しく理解している二若ふたわかなら、あの紙の内容で十分察することが出来るだろう。

「死ぬつもりだったのか?」

それは静かな問いだった。

紙を見れば判るだろうに何を言うのか。

「……そう、か」

私は何も答えなかったが、二若ふたわかは納得したらしい。

「私は、何故、助かった? 胸を刺されたらどう?」

水分を取って、声が随分と滑らかに出るようになった。

気になっていた事を尋ねた。

本来なら今がどういう状況か、後始末はどうなったか、聞くべきことは山ほどあるが、あの時に見た状況の通りなら、基本的には私の狙い通りの展開となつているはずで、ただ事態が動いていくのを待つだけですべき事はないはずだ。

危急ですべき事考えるべき事のない、という状況に、私は自分の

欲求を満足させることを、良しとしてしまった。

多分、すべき事よりも、したい事を優先したのは、生まれて初めてではないだろうか。

そんな小さなことが、私は嬉しかった。

二若は懐から何かを取り出した。

「三姫に、感謝しろ」

そう言いながら、取り出した何かを開いて見せた。

布に包まれたそれは、見覚えのある品で、バラバラに壊れた女物の髪飾りだった。

お守り代わりにいつも服の下で身につけていた、それだった。

三姫からの、大事な、大事な預かり物だった。

「これが短刀を受け止めたか」

私は感慨深く呟いた。

「そつだ。こんなことも、あるんだな……」

暫し言葉が途切れた。

サラリと二若の手が頭に触れる。

結われていない髪を梳いていく。

荒れた手だった。

私の手とは違って、荒れてそしてとても硬そうな皮膚だ。

「ごつごつと節くれ立ち、随分と苦労したのだから、察する事ができた。」

私は国に戻ると、寝込んでいる（と言うことになっている）三姫の振りをすることが度々あった。

荒れた手をしていては入れ代わりがばれてしまうと、手にだけはとても気を配っていたから、貴婦人のように滑らかな手付きをしている。

自分のその手と比べると、違いが一目瞭然だった。

二若はどうやって、この十年を一人生きてきたのかと、そんなことを思った。

フウツと私は大きな息をついた。

僅かに会話しただけというのに、酷く疲れた。

朝の状態と比べ、体調が劇的に良くなった様な感じはない。

これは元の状態に戻るまで、時間がかかりそうだと感じた。

体が自由にならないというのは酷くもどかしく、本来なら私は死んでいるはずだった事を思えば、これは万倍もましな状況なものにも拘らず不満な点を見つけてくる己を、人間とは際限なく欲を抱く生き物らしいと、自嘲せずに入られなかった。

「お前の、用件は何だ？」

息が乱れそうになるのを押さえ、たずねた。

二若は片眉を上げた見下ろしてくる。

「宮殿に私を助けに忍んで来たのではないのだろう。あんな場面に遭遇して、それ処ではなかったのだろうが、私に何か用があったのだろうか？」

私の問いになかなか答ええない。

膝の上に乗っている私の頭をなで、髪を梳き、黙り込んでいる。

そんな二若をただ見つめた。

「会いたかったから……と、言ったら信じるか」

待った果てのその答えに、私は鼻を鳴らした。

「愚か者。信じるはずがなかるう」

その断言に、二若は肩を竦めた。

私は未だ体調が悪く、このような謎賭けのような問答をするような気分にはなれない。

イラつきながら見つめ続けた。

「俺の用件は急ぎじゃない。一姫が回復してからにするぞ」

「そうか」

「……なあ、聞かないのか？」

何をとは言わない。

「聞かずともおおよそは想像がつく。が、今はそれらに考えを及ぼすほどの、余裕がない。もう少し体調がましになって、頭もハツキりしたら、その時はきっちり聞かせてもらおうぞ」

そう言えば、二若はひっそりと笑みを見せた。

「お前こそ腹は立たないのか」

「立つと思うか？」

「……いいや。だが、仮にも”お前”が死んだんだ。恨み言の一つくらい言いたくなくても、不思議はないだろう？」

二若は私の言葉に即答で持って返してきた。

「むしろ願ったりだ」

半ば以上予想していたその返答に、ため息をつかずにはいられなかった。

しばし沈黙が落ちた。

私は話で少し疲れてしまっていたし、二若は何か悩んでいるようだった。

髪を梳いていた手が止まり、額を覆うようにして指が目蓋に触れた。

「見えない”のか？」

目が見えないという意味ではない。

私は瞬間的に、後ろめたい思いがこみ上げた。

「ああ。……今は殆ど何も見えない。三姫も、同じ事を言っている」

「そう、か」

二若の身に様々な色が浮かび、そして消えていった。

意識を凝らして集中して見るのは難しく、それらがどんな感情が見極める事は出来なかった。

私が二若に偽りを口にする事はない。

悪意という声なき声を聞き続けている彼には、何の意味もないからだ。

人の中に合って、その絶え間なく聞こえるその大小様々な悪意に、

疲弊している二若ふたわかには、例え相手を思う嘘でも彼を傷つける事にかならないと、私は知っている。

私達は、それを知っているのだ。

昔、幼い頃、傷ついた色をまとう二若ふたわかを私は見続けていた。三姫さんひめはその嘆きを聞き続けていた。

三人の中で、最も辛いその能力を持つ二若ふたわかへ、私達は譬え自らが不利になると、相手に憎まれる内容であろうと、絶対に偽りは口にするまいと誓ったのだ。

目蓋に触れていたその手をどけて、体の向きを変える際に乱れてしまった上掛けを直してくれた。

「まだ寝ている。毒は体から抜け切ってはいない。これ以上は体に響く」

話は終わりだと、暗に訴えてくる。

意識を保てないほどではないが、絶え間ない悪寒と吐き気が交互にやってきて、熱もまだ下がりきっていない状態だった。

自覚できるだけで、それだけの不調を体が訴えている。

聞きたい事や確認したい事は、まだ山ほどあった。

だが二若ふたわかは私のその不満など聞こえているはずなのに、聞き入れる様子は全くなかった。

体力的にも無駄な問答を出来るほど余裕はなく、しびしびと私は目を閉じたのだった。

眠ろうと意識せずとも、目をつぶり体の力を抜いていると、意識はすぐさま遠ざかっていった。

## 六十四

揺ら揺らとした感覚に目を覚ませば、二若ふたわかに背負われて川沿いを進んでいた。

あたりは薄暗く、まだ日の出前のようだ。

「この川は天曼河に注ぎ込む支流の一つ。川沿いに南東へ向かえば、今日中には天曼河にぶつかる」

天曼河は西から東へと流れる大河だ。

帝都の北西で大きく蛇行し、帝都の西から南へと回り込むようにして流れ、帝都の南からまっすぐ東へと向かう。

そっち方面には何があっただろうか、私は記憶を探った

二若ふたわかが落ちた崖のある狩場は、帝都から見て南東に位置する。

そこから南東へ向かう場合を考えた時に、真つ先に思い浮かんだのが真祥マホシの故郷である、視察先だ。天曼河を下って東に向かえば、視察先につながる街道へ出られる。その街道を南に向かって進めば、一週間ほどで到着する。

逆に北に向かえば、帝都から東西南北に伸びた大街道の一つ、東大街道へ出る。

わざわざ大街道に出るためならば、はじめから北へ向かうべきで、それはありえない。南に向かう大街道へ出るのであれば、西に向かうべきで、これもまたありえない。

その支街道から南へ向かわずに、そのまままっすぐ東へ川沿いを行けば、海だ。

南へ向かえば、視察先の更に先は未開と言われるほど深い森が広がっている。だがそこは、開墾者と同じくらい、帝都を追われた犯罪者の多く住まう土地と聞く。

もしかそこへ向かっているのだろうか？

それとも海に出るつもりなのか？

いや、それ以上に、このまま川を下っていては、私ふたわか(二若)の捜



索隊とかち合わないとも限らない。

クククと二若ふたわかが笑った。

「この川は、あの崖のあった沢とは違う」

笑みを含んだその声音に、私はいささかムツとした。

「そうなのか？」

「当然。一姫いちひめと合流して即行で離れたさ。ちゃんと指示通りにね。着ていた服も流した。見つかる可能性は低いだろう」

「……」

「この辺は地形の関係か、幾つもの沢が流れているんだ。崖から落ちた俺が流されていたとして、どこの支流を通るか搜索隊は見当もつかないはずだ。当然のことながら人員は分断して探し回る事になる。わざわざ無関係な川の方までは足を伸ばしてくる事はないだろう」

「ここは禁足地なんだぞ。なぜそんな事をしっている」

「見つからなきゃいいんだよ。ここは薬草なんかも豊富で、皆こっそり入ってるんだ」

「阿呆。危険をわざわざ冒してえげな」

私は呆れるやら腹が立つやら複雑だった。

「人の事を言えた義理か」

二若ふたわかの言葉に、反論できなかった。

私は何度も危ない橋をわたって来た。二若ふたわかがそれを知っていると考えられないが、少なくとも今回の企みに関して言えば、その危ない橋の極地で、それを責められたら反論できようはずもなかった。

「一姫いちひめは船酔いはするか？」

「……なぜ？」

「船に乗る」

「海に出るのか」

「いいや。三姫さんひめのここに行くんだよ」

「……はあ！？ お前、何を言っている！ 方向が逆だろう！」  
私は二若ふたわかの頭がどうかなってしまっただのかと思った。

祖国は、向かっている方角とはまるつきり逆方面だ。

帝都から出る西大街道を進み、途中から北上しなくてはならない。こんな南東に向かつていては、見当違いにも程があった。

「だから、船で行くんだよ」

「客船か？　しかしあれらは帝都から西へはあまり行かないだろう？」

「違う。輸送船。荷物代わりに労働力を対価にして、隅っこに乘せてもらうんだよ。これでかなりの距離が稼げる」

民間輸送船があるのは知識としては知っている。

外観をみたこともある。

中も一応は取締りで立ち入った事があるから見知っている。

人の寝起きするような余裕は全くなかった。

軍艦でも、兵士達が寝起きする場所はとられていたが、輸送船にはそういった部屋はなかった。

どこも荷物だらけで、よく沈まない物だと毎度感心していたものだ。

……あれに、乗り込む？

私は全く想像もできなかった。

## 六十五

青臭さに息が詰まりそうだった。

右を向いても農作物、左を向いても農作物。

私は農作物の間にできた隙間に押し込まれていた。

ちなみに私の体の下には、大きな木箱があり、そこにも何かの作物が詰められている。

それらから漂う青臭い香りに辟易していた。

二若は宣言どおり天曼河に出ると、更に下ってそこそこ大きな街へ出た。

そこで輸送船と交渉し、こうして乗り込んでしまったのだ。

かくして私は作物と共に船倉の主となったのだ。

毒は中々体から抜けてはくれず、寝たり起きたりの生活だった。

普通ならば伝染病などを恐れ、私のような者に乗せるとは思えなかったが、二若は上手く説明していた。

お陰で更に環境の悪い、魚などの海産物の詰められた船倉に押し込められないで済んだ。

あちらは青臭くはない代わりに、磯臭くて湿っぽくかつ生臭いらしい。

……そんなところに押し込められては、良くなるものも良くなるものか。

私達と同様に、船倉に乗せてもらっている客達は、昼間は船の仕事をしていて、あまり住環境に興味が無いのではないだろうか。

寝るだけの間我慢するなら、そこでも構わないと誰かが言っていた。

決して臭いだなどと文句は言わない。

まかり間違って、魚のほうの船倉に入れられてたまるものか。

川面の揺れに絶えず揺られ続け、毒による発熱で目が回っているのか、船の揺れで目が回っているように感じているのか、さっぱり

わからない。

要するに、絶不調だった。

その体調不良の病人に、寄ると触るとちよっかいをかけてくる輩がいるのが問題だった。

「双葉ー、野鳥が取れたぞ！ 今晩はこれで焼き鳥だ。精をつけて早く元気になれよ」

断りも無く生きたままの鳥を手に、男が船倉に入ってきた。

はじめこそ驚いたが、既にこの程度では動じなくなった。

「立派な鳥……。どうやって捕まえたのですか？」

おっとりと私は答えた。

「そうだろう！ 投げ縄の要領で……。こうやってとつ捕まえたんだ。旨そうだろう!? 双葉には一番栄養のある場所を食わせてやるからな。楽しみにしておけよ」

いうだけ言つて男は出て行つた。

バタバタと鳥が暴れて、抜け落ちた羽が飛んでくる。

青臭い中に鳥臭い香りまでもが加わつた。

その事に私はうんざりのため息をついてしまった。

この船に乗る際に、私と二若ふたわかは兄妹いぢひめと言う事にした。

そして互いの名前を一と双葉と言う偽名をつけた。

あまりにかけ離れた名前では、とつさの時に反応できない可能性があるということと、馬鹿正直ふたわかに二若いぢひめや一姫の名を使うわけにはいかなかった。

私が妹と言うのが気に入らないが、自由の利かない体で我俣も言えず、そういう事となったのだ。

そして私達は妹（私）の病を治す名医を尋ねて旅をしているという設定となった。

幼い頃から体が弱く、心の臓に欠陥のある妹（私）を、噂で聞いた名医に見てもらつたために、危険を犯して旅をする事になった。

伝染病ではないためうつる心配は無いからと、船長をはじめ船員達に甚く同情され、環境のよい(?) 船倉を宛がわれ占有する事と

なつたのだ。

船に乗る前と乗った直後の、二若ふたわかと問答だ。

街に入る前、私は藪の中で一人二若ふたわかの戻るのを待っていた。

街に入るための準備をするため、二若ふたわかはどこかへ消えた。

背負われて移動する間に熱が上がった私は、ただ二若ふたわかの帰りを待っているしかなかった。

戻ってきた二若ふたわかの手には、街の娘が着るような衣装があった。

『これから船に乗る。一姫いちひめはちゃんと女の振りをしろよ。間違っても、いつも通りの口調で話すな』

『言われぬでも判っている。私とて女らしく振舞うくらい出来る』

二若ふたわかは、私を疑わしげに見やり、その用意してきた衣装を手渡してきた。

なれない女物の衣装に四苦八苦しながら、私はそれに着替えた。

そうして兄妹の振りで船に乗り込み、船倉で二人きりになるなり、

二若ふたわかは苦情を口にした。

『お前、いくらなんでもやりすぎだろう』

『何がだ。ちゃんと女らしく振舞っただろう』

『だからやり過ぎだっていつてるんだ。あれじゃどこの深窓の令嬢かって感じじゃないか』

『船長とのやり取りを言っているのか？』

『当たり前だろうが』

『何がおかしい。普通の女の振りをしたただけだ』

『あんな、淑やかで上品な街娘はいない！』

私はムツと口をひん曲げた。

『何を言う。あれが普通の女の仕草のはずだ。礼儀作法で習ったとおりの振る舞いをしたぞ』

二若ふたわかは頭を抱えた。

『……普通は、礼儀作法なんて習わん』

私は逆に絶句してしまった。

『そうなのか？』

『お前だつて街で女達を見たことはあるだろう？ 礼儀作法どおりに振舞つていたか？』

どうだつただろうかと、私は記憶を辿つた。

確かに言葉遣いは碎けていた…… ような気はする。

『子供の頃の口調は覚えていないのか？ あれでいいはずだが』

『覚えてるわけがなからう。無理を言つな。……じゃあ、これでどうだ。』  
【ねえ、喉が渴いてしまつたわ。水を取つてきてくださらない？】

『どこの商売女だ！』

『商売女？ 茶屋の娘の事か？ まあなんでもいい。とにかく私は喉が渴いた。水を取つてくれ』  
『ん』

荷物にあつた竹筒を受け取り、私はそれで喉を潤した。

『もつとましな態度は出来ないのか？』

『面倒なやつだな。』  
【なにやつてるんだい！ さつさと失せな！』  
とかか？』

『威勢がよすぎる。どこでそんなのを覚えてくるんだ』

『帝都でこういう女はよく見るぞ。では、』  
【ホホホホ、そのような愚かな真似を見抜けぬと思つておいですか？ 片腹痛い！ 出直してらっしやいー！』

『それ、三姫さんひめか……』

『ああ。国で重臣達をそう叱り付けていた』

『どれも病人ばくはない。こう、はにかむとか、恥らうとか、そういう控えめなやつはないのかよ』

私はニヤリと笑つた。

『【そのように見つめられては、わたくし……（ポツと頬を染め顔を逸らす）』

『……できるんじゃないか』

『任せておけ。人見知りする恥ずかしがりやの深窓のお姫様は、大

得意だ。国で寝込んでいる事になって三姫さんひめの振りをするために、様々な貴族のお姫様方を観察・研究した成果だ。だがこれではお姫様らしくてだめだろう?」

『まあ、な。ああ、そうかよ。最初のが一番それっぽいじゃないか……仕方ない。家に閉じこもりきりで、厳しく躰けられた世間知らずのお嬢さんでいく』

二若ふたわかはそう諦めたようにいった。

私は、二若ふたわかに世間知らずと評されたのが、なによりも腹立たしかった。

確かに私は民の暮らしを数字でしか知らない。報告書の中でしか知らない。任務で僅かにのぞき見る範囲でしか知らない。

国政と、宮殿の中と、その権力闘争だけが私の世界だ。

確かに世間知らずなのだろう。だが、くだらない自尊心かもしれないが、弟にそう評されるのは、無性に腹立たしかった。

二若ふたわかに言われるまま、哀れな病人を演じていると、船の者達は総じて親切だった。

思い思いに見舞っては、差し入れをしてくれる程度には、回りから受け入れられていた。

二若ふたわかの振りをしていた頃にはついぞ見たことのない、やに下がった顔さえなければ、まずまずの環境といえるかもしれない。

側でにらみを利かせている二若ふたわかがいるために、身に危険を感じないが、あのやに下がった顔を見るたびに鳥肌立つのだ。

周りから女だと知られているのも落ち着かなく、早く船から下りたくて仕方がなかった。

## 六十六

天井から幾人もの人間が行き来している足音がしていた。賑やかな声も一緒になつて運ばれてくる。

雑談をしている声、ふざけ合っている声、それらを叱咤する別の声。

てんでバラバラな動きだが、キビキビとした軍隊の動きとはまるで違うそれなのに、つつがなく川を遡っていつているのが不思議だった。

輸送船が運ぶ物品は知っている。

その数量や金額など、利益に関することはかなり詳しいだろう。

彼らの運ぶ物品の及ぼす影響や、その品の流れていく先について、おそらくはこの船の人間の誰よりも詳しいはずだ。

だが、私は彼らの暮らしを知らなかった。

こんなに活気があり、自由な空気が流れている物だとは知らなかった。

二若ふたわかが世間知らずだと評するわけだと、妙なところで納得してしまった。

こういつた世界の中で、二若ふたわかは暮らしてきたのだなと私はそんな事を思った。

「気分はどうだ？」

二若ふたわかが様子を見に戻ってきた。

「臭い。これでは休めん」

「仕方ないさ。二・三日の辛抱だ。……それよりも、何かあったか？」

「何かとは何だ」

「何か悩んでいるように見える」

「大したことではない」

私はそう言ったが、二若ふたわかはジッと話し出すのを待っていた。



「民の世界と、私の暮らしてきた世界はあまりに違う。お前がどの面下げて私の代わりをしていたのかと思つたまでだ」

「なんだ。そんな事か。お前の衣装を着て宮殿に紛れ込めば、誰も疑わなかつたぜ」

「本当か？」

「……まあな。だが流石にお前の衣装はきつかった」

その言葉にムツと眉をしかめた。

「当たり前だ。私はお前と違って女だぞ」

「女の癖に無茶をし過ぎだつてこと」

「それをお前が言うのか？」

当て擦りのように言えば、心外だといわんばかりに眉を跳ね上げた。

「当然だろう？」

そう、当然だ。

私はすぐその意味に思い至り苦く思う。

二若は、祖国ふたわかが嫌いだ。

私を身代わりに帝国に差し出した、家臣達を含め祖国を恨んでいる。

あの時はまだ二若ふたわかを死なせる訳にはいかなかった。

だから私は死ぬかもしれないと知つて、帝国へと旅立ったのだ。

例えば私が命を落としたとしても、二若ふたわかさえいれば祖国を存続させることは出来る。

二若ふたわかの本当の身分はなくなるうとも、父の隠し子がいたとでも言えれば周りは納得する筈だった。

否、納得させる筈だった。

父が死んだばかりの頃、時の皇帝は暴力の限りを尽くしていた。

気に入らないと言つて官吏の首をはね、献上品がつまらなかつたと言つては出入りの商人をその家毎潰し、数多の貴族や民が次々と殺されていった。

その皇帝より人質として若君を寄越せといわれた家臣達は、万が

一の場合を考えてその身代わりとして私を差し出したのだ。

二若は最後までそれに反対して自分を連れて行けと抵抗していた。けどその願いは聞き入れられず、祖国に失望した二若は幼い身の上でありながら国を飛び出し、行方をくらました。

帝国に着いて慣れない男子としての生活をしていた私は、その報せに驚き倒れそうになったものだ。

以来十年。

二若からは一切の音沙汰もなく、生きているのか死んでいるのかも判らない状態だった。

前皇帝が亡くなられた時も、現皇帝が位に就き帝国内が落ち着きを取り戻してきても、二若は戻っては来なかった。

生きていてくれていると信じてはいたが、二若に王としての責務を負わせるということは、既に考えていなかった。

自由に生きてくれれば、私や妹の三姫では考える事も出来ない自由を生きてくれれば、それで良いと思っただのだ。

だから私は、二若としての私と、王女としての私の両方を闇に葬ろうと考えていたのだ。

祖国はいずれ国としての形を失うだろう。正当な後継者がいないのだから仕方のないことだ。

帝国に吞まれるのか、近隣国に吞まれるのか、それは判らないが緩やかな王朝の死が待っていた。

私と三姫は、それで良いのだと、穏やかなその終焉を既に受け入れていた。そして混乱など起きないように、その為の準備もほぼ終えた。後は”二若”という王を葬り去るだけだった。

いつかは無理が来るこの身代わりを続けていたのは、いずれ来る終りを演出するために他なかった。

跡取りの王を公的に殺す、ただそのためだけに機会を待っていただけだ。

私自身を本当に殺す予定ではなかったが、あの予知を見てそれでも良いと、自分自身を諦めたのは私だ。

だから行方をくらし続けにいた弟を詰るのは筋が違つ。

二若ふたわかは私達がそうやって、国の為に生きる事を良しとしないのだから、言い掛かりでしかないのだ。

「……悪い。言い過ぎた。一姫いちひめだって好きで無茶をしていたわけじゃないつてのは知ってる」

「構わない。お前の言う事は事実でしかないからな」

「だから！ 何でお前はそう……」

もどかしげな複雑な色を二若ふたわかは纏まとつた。

「仕方がなかるう。それが私の性分だ」

私の言葉に二若ふたわかは大きなため息をついた。

「知ってる。……それよりも、口調が戻ってるぞ」

「あ……。ごめんなさい。気をつけますわ」

口元に手を当てて、おっとり笑顔を浮かべ答えた。

二若ふたわかは額ぬかに手を当て天を仰いだ。

「ぜひそうしてくれ」

## 六十七

「もうじき祁輿につく」

祁輿は天曼河の川沿いにある港の一つで、帝都の東大街道と交差する関所の役割も持っている。

「荷揚げ荷降しがあるんだが……」

みなまで言われずとも、二若ふたわかの言いたい事はわかった。

「臨検か」

その通りだと二若ふたわかは頷いた。

祁輿は佑茜ゆうせんの管轄にはないが、帝都からほど近い地理的条件もあり、何度か取り締まりの手伝いに借り出されたことがあった。

「口調が戻ってるぞ」

「失礼いたしました。臨検の対象となるのは、密輸品を運んでいる船や、武器など不法な品を扱っているものばかりです。ある程度以上の確証が取れなければ、踏み入ってくる事ありません。こちらのように普通の荷を扱っている船は対象外です。案ずる事はありません」

「それが水上封鎖しての、全船を対象にした臨検を行っているようだ。祁輿の役人達の能力はどう見る？」

「祁輿の警備隊は任務に忠実でいらっしやいます。賄賂などはあまり通じないかと思われませんが……」

帝都へ至る東側にある最後の砦の役割もあり、祁輿の官吏はかなり優秀な人間が揃っている。

配下の警備兵達もそれなりに粒ぞろいだ。

勿論、中には金で買収可能な者もいるが、基本的にはそういう手段をとるのが難しい集団だ。

「なら、“二若”ふたわかの面は、祁輿の者達のどれくらいに割れている」

「全員が見知っておられるでしょう」

私は祁輿の役人の顔と名前は全て承知しているし、その逆もまた

然り。

手足となる警備兵達も、何度も面通ししていて私の顔ぐらいは覚えていないはずだ。

佑茜配下ゆうせんとなつていて帝都の警備隊とは、何度も合同捜査を経験している上に、当然私もそれに参加している。

人手が足りない時、こちらから人員を何度も出しているし、逆に人手が足りない時は祁輿から借り受けたりもしていた。

そういう意味では交流が深く、また佑茜配下ゆうせんの警備隊の人材が祁輿へ幾人も引き抜かれてもいて、私の顔を知らないはずがないのだ。しかし解せないのは、何故全船臨検などという、効率の悪い真似をしているのかだ。

真つ先に思い浮かぶのは、“二若”ふたわかの暗殺騒動だが、帝国は属国の王が一人殺されたくらいで、このような大げさな振る舞いをする必要はないほど、懐は狭くない。

これが皇子の一人だったとしても、おそらくは皇太子や中枢に食い込んでいる重要な皇子でなければ、ありえない話なのだ。

それとも、宮殿に賊が忍び込まれた事実が問題なのだろうか。

白牙の騒動が収束しきつていない中で、再び宮殿に賊が忍び込み、暴れていった。

進入経路や逃走経路の洗い出しをするためにも、犯人を捕まえねばならないと、意気込んでいるのだろうか。

宮殿には皇帝が坐す。

もし万一の事態となつては、それこそ大問題だ。だからその可能性も多少は考えられなくもないが、宮殿で私が襲われてから、それなりの時間も経過している。

賊が川を使って逃げたのだとしても、疾うに逃げおおせたはずと、臨検は終わつてなければおかしい頃合だ。

何のための臨検かと、私は首を傾げてしまった。

つい自分の考えに没頭してしまつたが、そもそも二若ふたわかからの返答がなく、理由をあれこれと考える傍ら弟を窺うと、ゴソゴソと何か

をしていた。

「……何をしたらっしやるの？」

「何って、変装」

「今さらそのような真似をすれば、船の者たちに不審に思われますよ。臨検の前に船を下りる算段をする方が、賢明ではありませんか」  
「無理。ま、不審に思われない程度で、“二若”<sup>ふたわか</sup>の顔の面影をなくせばいいだろ」

「そのような都合の良い……」

「人は、意外と見ているようで見ていないものだ。ちょっとした事で、印象は変わる。それに船の人間には、あえて俺を印象付けない見た目を心がけてもいた。バレやしないよ」

あっさりとした言いようながら、随分と慎重なものだ。

それだけ自信があるということでもあり、そういう配慮が必要な暮らしをしてきたという事でもある。

どうい生活をしてきたのだろうか、私はそんな事が気になっ

た。  
「双葉はあまり皆と顔をあわせていないし、多少印象が変わっても不審には思われないはずだ。安心しろ」

「……ええ」

<sup>ふたわか</sup>二若は自分の変装をした後、私の見た目もいじった。

鏡がないためにどの様な雰囲気となっているのか私には判らなかつたが、<sup>ふたわか</sup>二若は満足げに頷いていた。

私に判るのは、<sup>ふたわか</sup>二若の印象がそれ程変わったようには見えない、というぐらいだ。

「本当に大丈夫なのですか？」

「お前は目が異様にいいから直ぐ判るだろうけど、普通はそこまで見ていないし、見えない」

「……そのような事はないと思いますわ。わたくしはごく普通です」  
「本当だ。事実、俺はこの手でずっと色んな奴の目をくらませてきた」

頭が痛くなるような事を、二若は堂々と言い切った。

「どこの犯罪者ですか……。ですがお話はよくわかりました。国に戻った暁には、軍や警備の者達の教育をしないおす事を考えるとします。貴方のような真似を、他の方が取っていないとは思えません」

「政か。くだらない」

と、二若は吐き捨てるように言った。

私は心外だと二若を見やった。

「王とは民あつてのもの。貴方がなんと思おうとも、民のためにこそあるのが、わたくしの存在意義であり生きる意味なのです」

「……知っている」

二若は苦々しげに答えた。

バタバタと足音が入り乱れ、甲板の上が俄かに騒がしくなった。一定の間隔でゆれていた船は、不規則な動きをしている。

岸に着いたという感じではなく、船に直接横付けしようとしているのだろうか。

相手の船の起こす波によって、このように不規則にゆれているのではないだろうか。

二若ふたわかの言っていた臨検がとうとう始まったようだ。

その二若ふたわかは変装を終えると、作業へと戻ってしまっていたため、この場には私一人しか居ない。

胸の奥がざわついていっているような感覚だ。

これが犯罪者の気持ちというものだろうか。

私がこの臨検の捜査対象である可能性は捨てきれない。

犯罪など犯してはならず、やましい事など何もないと胸を張って言えるが、見つかつてはならない後ろ暗い理由はある。

戦場とはまた違った、冷たい緊張感があった。

数多の命に対する責任とその重圧にはくらぶべくもないが、自分の命がかかっているという点は共通している。

心の弱い者にはこの緊張感は耐え難いものである。

兵や警備の者を前にして、行動がおかしな物となる者が出るといふのも頷ける。

だからこそ部下達はそういう不審者を見出す事に力点を置いたのだと、私は身をもって理解した。

一生知りえるはずのない感情であったが、これも良い経験だろう。心中複雑な思いはあるが……。

だが一つ新たに判った事がある。

この緊張感の中、平然としていられる者はどうしようもない部類という事だ。



そういつた者は手強いと、実感としても知識としても知っていたが、その理由がわかった。

平然としている者は、そうでない者に比べ確信であり、常習犯である可能性が高い。

緊張感を覚えない程、それに慣れ切ってしまう程繰り返して感覚が麻痺しているか、もしくはそもそも犯罪という意識がないかと考えられる。

これはどうしようもないと断じても良いはずだ。

そして表向きは平然を装える者も、それだけ心が強くまた覚悟を決めているということでもあり、手強くて当然というものだ。

課すべき刑の重さも、その辺りを考慮せねばなるまい。

国に戻ったら、その辺りの方を一度見直してみるか。

退屈にあかせてつらつらとそんな事を考えていた。

船の揺れは一度収まり、甲板をも静まり返っていた。

その状態がしばし続き、今度は軍靴の様な重い幾つもの足音と共に、再び船が大きく揺れた。

横付けされた船から乗り移ってきたのだろう。

さてどうなる事かと、船倉に横たわったまま他人事のように考えた。

そこへ二若ふたわかが戻ってきた。

「双葉ふたば、全員甲板に集合するよう命令が出た」

私は頷き身を起こした。

こついつた臨検では当然の対応だ。

相変わらず祁輿の者達はやる事が確実だ。

停船・横付け・乗り込みと、実に手際が良い。

久しぶりに体を起こすと、それだけで眩暈がした。なるべく動かずにそれをやり過ごす。

「無理はするな」

二若ふたわかのその声は心配げなものだった。

「大丈夫です。……行きますよ」

眩暈が治まりそう私は答えた。

立ちあがるうとした私を制し、二若は私を抱え上げた。

幼い頃は別として、そのような扱いを受けたのは初めてだ。

怪我をしたりして背負われた事は数知れないが、貴族のお嬢様のように抱え上げられるなどという事は全くなかった。

不安定なその体勢に、私は反射的に二若へしがみ付いた。

「そう。しっかりと掴まっている」

ニヤ付いて二若は言う。

そのまま船倉を出て行った。

「自分で歩けます。降ろして下さりませ」

女言葉はやんわりとしか主張できず、もどかしい。

普段ならば降ろせと高圧的に命じれば事足りるのだ。

「病弱なお嬢様なんだから、当たり前のような顔をしているよ」

悔しさに歯噛みする私に向け、二若はそういった。

もつともすぎて反論できなかった。

甲板に出ると明るさに目が眩んだ。

「……これで全員か」

「はい。お疑いなら船内を確認してください」

船長と誰かがそう会話をするのが聞こえた。

「いや……。そっちの女は随分具合が悪そうだが、病気か？」

「そうです。心の臓の病だとかで、高名なお医者先生に診て貰おうと兄妹で旅をしてるんです。人に移る病ではありませんよ」

船長の弁明じみたその説明に、他の船員や乗客らからもそうだと同意の聲が上がった。

「お前の演技は随分上手くいつているようだな」

小声で二若は私にささやいた。

それは随分と楽しげな声音で、わたしはコツソリと二若を振り上げた。

私とて好きで女の振りをしているわけではないのだ。

そんな私達の方へ、カツカツと足音が近づいてくる。

腹立たしさを抓る事だけで収め、私は目を瞬かせた。

強い日差しに真っ白に染め上げられていた視界は、徐々に形を取り始めていた。

ようやくこの日差しに目が慣れてきたようだ。

足音のする方へと顔を向けた。

すると思いがけないほど近くにその姿を認め、反射的に体をのけぞらせた。

すかさず二若<sup>ふたわか</sup>が体勢を崩した私を支える。

「驚かせたか。済まない」

「いいえ。こちらこそ。妹はこの通り病弱ですと家に籠りきりで、あまり人に慣れていないものですから」

二若<sup>ふたわか</sup>はシレッとそんな弁解を述べている。

私もその通りだと頷いた。

節目がちだった目を上げて、相手の顔を真っ直ぐ見つめ……。

控えめな微笑を浮かべた。

内心ではそんな暢気に微笑んでいられるような状態ではなかった。その相手は、かつて佑茜<sup>ゆうせん</sup>配下で働いていた、元部下の一人だった。

## 六十九

私は恥じ入った振りをして顔を俯けた。

嫌になるほど視線を感じていた。

まさか正体に気づかれたのか？

「どうした？ 何かあったのか？」

少し離れた場所から声がかかった。

やはり不信感を覚えるほどに私を観察していたという事か。

元部下は顔を声のした方へ向けそれに応えた。

「めつたにないようなお嬢様がいたから、珍しくてよ」

それに脱力してしまいそうだったが、同時に怒りが湧き起こりもした。

お前、人の顔を忘れたのか？ 上司としてよく顔を合わせていたのに、なぜ気が付かない。お前は警吏失格だぞ。

と、内心で罵りの声が溢れていた。

もし気づいたのならば、私よりも先に二若へ不審の目を向けていなければおかしいのだから、ああいう反応であつても矛盾してはいない。

勿論元部下のそれがただの演技である可能性もある。

私の顔に不信感を覚え観察していて、それを誤魔化すためにそういった、という可能性だつて十分考えられる。

これが私に向けて強烈な不信感を抱いていればハッキリと目に見えるのだが、漠然とした不信感となると色として現れず、そうなる判断できるのは相手の言動のみしかない。

色として感情を見ることが出来なくなり始めてからは、相手の顔を窺う癖が付いたが、それは逆に自分自身を混乱させる原因ともなった。

私がそうであるように、人は必ずしも心と同じ表情を浮かべてはいないのだ。

表情や言葉尻なども駆け引きの手段であり、技術でもある。

言動から見抜くというのは、存外難しいということだ。

元部下は気づいていて、ああいう的外れな発言をするのは私に対して油断を誘うためとも取れるし、本当に気づいていなくて思ったままに振舞っただけとも取れる。

どっちでもありそうであり、判断は付かなかった。

……まあ、こういう客船でもない船に良家の子女つばいのが乗っていれば、それは違和感を感じるだろうことも、ああいう発言も至極まともなものも理解はしている。

二若曰く、私の女の振りは良家の子女そのものという事だし……。胸の内に腹立たしさが更に湧き出てくる。

どうしてここで普通の一般人の女の振りが出来ないのかと、自身に対する苛立ちだった。

そうすれば面倒事は少なくて済んだはずだ。

一般人に扮するなど予定外で、そういった準備をしてこなかったと言つのはただの怠慢としか思えない。

今後のためにもここを乗り切れれば、一般人の立ち居振る舞いとつのも研究せねばならないと、心に刻み込んだ。

だが、それはともかくとして、今はここを乗り切る事を最優先に考えねばなるまい。

「ほー、お嬢様？ どれどれ？」

元部下の言葉に興味を覚えたのか、声をかけてきた相手も側にやっつて来た。

まあ、私でも同じように不審に思い確認しようとはするだろう。

軽い言動はしていても、やはりこの連中は、締めるべきところはきっちりしている。

寄ってきた相手の顔に特に見覚えはなかったが、面白がるような探るような目を向けてきた。

約二歩分の程よいと言われる近さで立ち止まり、ジックリと観察してくるその目を受けて、私は女性らしくおっとりとした慎ましや

かな微笑を相手に返した。

元部下のように近すぎて恥じ入って俯くと言う手段がどれなかったのだから仕方がない。

貴方方の疑惑になぞ何も気づいていませんよと、そういう能天気な女性を演出したつもりだが効果の程はどうだろうか。

普段ならば真っ直ぐ強い眼差しで見返すところだが、それは女性らしい振る舞いとはいえない。

礼法の師より叩き込まれた控えめな眼差しが正しい姿であろう。

だが、そうやって慎ましやかな女性という行動をするのは、演技とはわかっていても中々抵抗があるものだった。恥ずかしいと言い換えてもいい。

知り合いには絶対に見られたくない姿だなと、そんな事が脳裏を過ぎる。

なんであの時兄妹を演じるのを了承してしまったのか。兄弟という設定にしておけば、こんな恥ずかしい真似をしなくて済んだのだと、己の浅はかさが酷く恨めしかった。

私の微笑を受け、そいつは何が面白いのか口笛を鳴らした。

困惑してただ見返してしまふ。

ここで口笛を吹くほど楽しい展開があったらどうか。

内心で嫌な焦りが溢れ、自分の取った行動を思い返していた。

どう考えても普通の女性らしい振る舞いをしただけ、であるはず

……だ。一体、どこがおかしかったのか？

そいつは私の困惑など知らぬ気に、元部下に向かって口を開いた。

「真性のお嬢様じゃないか。珍しい。何だってこんな場所に？」

私や元部下が答えるよりも早く、二若が口を開いた。

「俺達は、妹の病を治療してくれる医師を訪ねるための旅をしています」

「病？」

「移るものではありません。妹は昔から心の臓が悪いんですよ」

その通りだと私は二若の言葉にただ頷いた。

「あまり無理もさせられず、ずっと家で過ごしていたためか世間知らずに育ってしまった……。浮世離れしているのは気にしないでやってください」

私は恥じ入った振りで顔を俯けた。

不自然ではない行動だし、そうさせるために二若はああいったのだろう。それは理解している。理解してはいるのだが、恥ずかしい真似をさせるなど、心の内で弟に抗議しておいた。

しげしげと物珍しげに私をみていた警吏の一人が口を開いた。

「本当に世間ずれしていなさそうなお嬢様だな。こんな子にせひとも……」「ああつと」……だ」

途中で二若ふたわかが大きな声を出したため、よく聞こえなかった。

私はどうしたのかと見上げた。

二若ふたわかは口を開いた警吏を険しい目で睨んでいた。

「どうし、」

「大変だー、顔色が悪くなってる。ちょっと休まないと駄目だな」私の言葉を遮り、二若ふたわかは棒読みな台詞でそういった。

「何を……」

戸惑う私を船の縁へと強引に運んでいく。

警吏達は追っては来なかった。

日陰になる場所に私を安置すると、二若ふたわかは警吏の方へと戻っていた。つた。

深刻な顔をして二若ふたわか達は私抜きで話を進めている。

一体何が起きているのか？

全く展開が読めず、付いていけなかった。

腹の底の読み合いは私の本職だと言うのに、その私に判らないやり取りをしているとは、こいつ等は一体どういう頭脳をしているのだ！？

内心で焦りが生まれた。

暫く話し込んだ後、警吏達は私の方へとやって来た。

目の前にしゃがみ、視線を合わせて話しはじめた。

「体調が悪いところ無理をさせて悪い。確認させてもらうが、構わないか？」

「はい。何なりとお聞き下さい」

「君は医者に診てもらったためにお兄さんと旅をしているんだね？」



「その通りです」

「心臓の病気で、人に移るものではない」

「はい」

幾つかの通り一遍の質問をされ、それにふたわか二若と打ち合わせ通りの答えを返していく。

「よくわかった。ありがとう」

質問に満足したのか、納得してくれたのかは定かではないが、元部下はそういった。

どことなく和やかな空気が漂っていた。

「本当に、淑やかで優雅なお嬢様だなあ。こんな品のある女の子なんて、色町の遊女でもお目にかかったことがないぞ」

何気なくそういった。

私は首を傾げてしまった。

ユウジヨが何を指すのかわからなかったのだ。

「色町……？ わたくしは足を踏み入れた事はございませんが、美しい歌や踊りで殿方をもてなすと言う、あの色町の事でしょうか？」

「そう、その色町」

つまり、そのユウジヨ達ということから、色町の女性達のことを指すのだろう。

ユウジヨが、色町で働く女性の総称とは知らなかった。

ユウジヨの、ジヨは女としても、ユウはどの様な字を当てるのか？  
勇敢の勇とかだろうか。

世間に疎いとひどく突きつけられた私だが、それでも色町のこと  
は知っている。

富と人の集まる場であり、欲望が渦巻く街であるからだ。

当然比例するように各種犯罪が多く発生する。小さな揉め事は日  
常茶飯事だ。

嚴重警戒区域であり、大掛かりな摘発を何度も行った。

小さな揉め事や犯罪の摘発は玉祥側の管轄であり、基本的には私  
と関係はないのだが、それでも各種陰謀の調査結果などから係わる

事がないわけではない。

摘発に慣れない人間がいると邪魔だと、現場に足を踏み入る事は殆どないのだが、逃走させないよう外回りを固めるのに人員を指揮したりと、色町に出向いた事は何度かある。

摘発が終わった後の検分や、下手人の尋問などで現場に行く事だつてあつた。

故に、ある程度以上は色町というものを知っていたが、そんな事はおくびにも出せない。

「大勢の集まる場所であり、子供や女性には危険と言われております。そこを闊歩できるのは立派な殿方だけなのだ……。そこで殿方をもてなす女性方は、勇気も教養もある立派な職業婦人ですね。私の様な無教養なものとは比べようがありません」

あまりよく知っていると思わせるのは拙いと、正しいながら曖昧な表現でそう私は告げた。

「……………」

私の言葉に対する反応がなく、顔を上げて訝しげに見やると、彼等は啞然とした表情を浮かべていた。

何でだ！？

私は逆に驚いてしまった。

間違つた事は何も言っていないはずだ。

ふたわか二若を振り上げば、微苦笑していた。

よく判らないが、よほど頓珍漢な事をいつたらしい。

「あの……………」

私は声をかけた。

元部下は、首を振りつつため息を付いた。

もう一人の警吏はニヤツと口の端を持ち上げる。

そこはかたなく馬鹿にされているような気がする。

わけが判らないだけに、ひどく腹立たしい。

警吏達が下船し、輸送船は再び動き出した。

その頃はまた船倉へ戻されていたため直には見ていないが、臨検は無事終わったようだった。

夜になり仕事を終えた二若は私にささやいた。

「明日、船を下りる」

半ば予想していたが、一応尋ねた。

「湖旦まで行くのではないのですか？」

現状ならば国に戻ろうとするならば、湖旦まで船で移動し、そこから馬などで北上すると言うのが最も合理的で経済的な道程だった。だが明日降りるとなると、今の位置から考えて瑞徐という港が候補となる。

そこから徒歩か馬となると、一旦南下して西大街道へ出て西進し、玉祥の故郷手前（北へ向かう）にある支街道を北上する事になる。回り道ではあるが、確実性を期すのならば、そちらを選択するのも一つの手法だ。

私の言葉に二若は頷いた。

「そのつもりだったが、念の為」

「あの臨検はやはり何か裏があったのですね」

警吏たちの様子では行方不明の“紘菖”を探しているという雰囲気はなかった。

不審者を探しているのだとしても、帝国に弓引く大逆賊を炙り出そうといった熱意はなかった。その割には全船停止しての臨検だなんて大掛かりな事をしている。

私には別の思惑があるような気がしたのだ。

あの警吏達は私を嫌に観察していた。

輸送船に乗っている女が珍しいと言う事はなかる。私に条件に合致する何らかの要素があり、それを探られたのだと思われる。

だが、その条件が何で、何故疑いが晴れたのかは謎だ。

二若<sup>ふたわか</sup>が賄賂を渡して……という素振りも多分なかった。やり取りの全てを知るわけではなく、また私に理解できないやり取りもありどうにも納得できない部分があったが、どうにか疑いは晴らせたらしい。

「ああ。俺達を探していると云う様子はない。だが……」  
「だが、なんでしよう?」

「あいつ等の目的は、宮殿を襲撃した者またはその関係者を追っているのは間違いない」

私は二若<sup>ふたわか</sup>の言葉に眉根を寄せた。

「時期的に見て、また臨検の規模から見て、理由としては妥当なところだろう。つまりそういう”名目”で”誰か”を探しているという事だな?」

その誰かと言うのは、かなりの高確率で私達である可能性があるということだ。そう、二若<sup>ふたわか</sup>はいいたいのだろう。

二若<sup>ふたわか</sup>は相手の心の声を聞ける。だが、あくまでも悪意ある思惑しか聞けない。

疑いと悪意は決して同質ではなく、二若<sup>ふたわか</sup>にもハッキリと判断できないのだろう。

「察しのいい事で。……条件と違っていたために目溢しされたようなものだな。大丈夫とは思うが念の為道を変える」

二若<sup>ふたわか</sup>の判断は妥当な線だろうと、私は同意を返した。  
「船長にはなんと?」

「話を通してある。湖旦までとハッキリ言っていたわけじゃないから、特に疑ってはいないようだった」

「そうか」  
「ところで、口調が戻っている」

その指摘に口元を押えた。

「これは失礼いたしました。わたくしとした事が」

ホホホと笑顔を載せて言えば、二若<sup>ふたわか</sup>は重いため息を付いた。

ため息を付きたくなる気持ちは理解できるが、あからさまな態度

を取らなくてもよいではないか。

輸送船は昼過ぎに港へ入港し、荷揚げ荷降ろしを二若ふたわかがこなした後に私達は下船した。

この瑞徐という港は、天曼河へ別の糸鳥という川が合流する水路の交差点となっている。

糸鳥という川はあまり大きくはないが、中級の船でもなんとか通れる深さがあった。

そのため海から天曼河を遡ってきてそのまま天曼河の上流へ向かう船、方角を変えて進路を糸鳥川の上流に取る船、糸鳥から天曼河を経て海へ向かう船、糸鳥川を下ってきて天曼河に合流後天曼河を更に遡る船と、目的も行き先も様々な船が多数行きかっていた。

船の往来が激しいと言う事は、それだけ物と人の流れも大きいと言う事だ。

私達が下船する事を不審に思うものはいなかった。

船員や他の乗客等に見送られ和やかに彼等と別れた。

未だ体調の優れない私は二若ふたわかに背負われての移動となった。

毒が抜けるのに随分とかかるものだ。

医術に精通していないため判断が付かないのだが、これが普通なのだろうか。

弟の足手まといという現状に、どうしても気が重くなる。

街を抜けた二若ふたわかは糸鳥川を徒歩で遡り始めた。

糸鳥川を遡ると方角としては北上する形となる。わたしはてつきり南下して西大街道に出るのだと思っていたのだが、どうやら違うらしい。

「方向が随分と違わないか？」

「もう二・三日上流に、船では行けない小さな支流があるんだ。そっちを辿って行くと、国の南東辺りまでいけるんだ」

「そんな川があるのか？」

「地図には載っていない小さな河川だから、お前は知らないはずだ。国まで伸びているわけでもないからな」

裏道、のようなものか。

こういった知られざる道を使い、裏の世界の者達は役人の目をかいくぐっているのだろう。

ある種興味深い世界ではあるが、私がそれを実際につかうとなると、しかも裏の世界の者達と同様役人達の目をかいくぐる目的でそれを行うのだと思うと、かなり複雑な心境であった。

しかしながら、私は言いたい。

お前、どこからそんな知識を仕入れているんだ。

子供一人の力で生き抜いてきたのだから、想像を絶する苦勞があったと思う。私や三姫とはまた違った辛酸を舐めてきたのだろう。

そのくらい想像は容易い。

だが、こんな後ろ暗い知識ばかり深めるような生活とはどんな物なのか。

出来る事ならば真つ当に生きていたのであつて欲しいとは思うが、どうやらそれは無理な願いのような気がしていた。

「背負われたまま運ばれるというのは、存外疲れるものだった。同じ体勢でしがみ付いていなければならず、体の各所が強張っていた。」

それ以上に、人を一人背負って歩き続けていた二若ふたわかの負担は、更に大きなものであっただろう。だが疲労の色など見せず、二若ふたわかは涼しい顔をしている。

日が沈むと、二若ふたわかは少し開けた場所で足を止め、そこで火を熾し野営の準備を始めた。持参していた厚めの布を地面にひき、その上に私を横たえ、手際よく準備していく。

私はそんな二若ふたわかをただ見ていた。

川から酌んだ水で持参してきた小麦粉を練り、それを木の枝に巻きつけ火で炙る。

暫くすると香ばしい香りが漂いだした。

火に当たる位置や角度を変えて、二若ふたわかはその小麦粉を練ったものを満遍なく炙っていく。

「こんなものかな」

ほんのり焦げ目の付いたそれを私に差し出した。

「いい香りだな」

「食べた事あるか？」

「初めてだ」

「庶民の旅には欠かせない代物だ。ちょっと味気ないが我慢しろよ」

「行軍で粗食には慣れている」

「行軍って……味は二の次で、重要なのは量と栄養だけって代物のことだろ？ それは粗食じゃなくて、ただの不味い飯だ。アレは別に粗食じゃねえし」

「そうなのか？」

「ま、あれが平気なら、これぐらいは大丈夫だろ」

そういうものかと聞き流し、私はそれに齧り付いた。

「なかなか美味しいな。香ばしくサクサクした歯応えが良い」

半分ほど食べ、残りは二若ふたわかに渡した。それ以上は食べられなかったのだ。

船でも船に乗る前でも、体調不良であまり食べられなかったから、私わたしが残した事を二若ふたわかは驚いていない。

食べ終えた後は、二若ふたわかが持参した薬草などで薬を調合する。

出来たての臭い丸薬を手渡され、吐きそうになりながらそれを飲み下した。早くもとの調子を取り戻したいから拒否はしないが、二若ふたわかの作る薬は心底不味かった。

薬を飲み込むのに精神力を使い果たし、敷物の上でぐったりとしていた。

しばしの沈黙の後に、二若ふたわかは躊躇いがちに口を開いた。

「なあ」

声をかけてきただけで二若ふたわかは先を続けようとせず、目で先を促すとようやく話を切り出した。

よほど言い難い事らしい。

一体なんだ？

「……いちひめ  
一姫は夫婦の営みについて、どの程度の知識があるんだ？」

二若ふたわかの問いに心持驚いた。

「子作りについて知識があるかという事か」

そう聞き返せば二若ふたわかは目に見えて怯んだ。

「お、おう」

「馬鹿にするな。私とて夜の営みぐらい知っている」

「具体的には？」

「一つの褥で肌を合わせて寝るのだろう」

「まあ……そうだな。間違っていないが、もっとこつ具体的に」

「睦みあいの事を聞きたいのか」

「そう。その睦みあい……って、んな言葉をよく知っていたな」

「宮殿では、時にとんでもない場所で睦みあっている輩が居る。私



が知らない方がおかしい」

「じゃあ、そういう行為は知っているんだな？」

「当然だ。素肌をあらわにして互いになであうのだろう」

「……え？」

ふたわか

二若は啞然と言った表情となった。

「子作りの方法を知っているんだよな？ 胡風こふうに教わったんだよな

？」

こふう

胡風という二若の口にした名に、胸がわずかに痛んだ。

彼女は私達三つ子の乳母であり、私と共に帝都へ来てくれた人物の内の一人だった。私に女子として全ての教育を施したのは、胡風こふうであるといつても良いだろう。

「胡風こふうは十歳の時に私を庇って死んだ。そういつた教育は受けていない」

「じゃあ、閨中図画とか見たとかか？」

「閨中図画とは何だ？」

「お嬢様方の性教育用教本だ」

私は流石に呆れてしまった。

「あのな、私がそんなものを持っていたら可笑しいだろう？」

私は”男”なのに、”女”の読む教本など手に入れていたら、疑いを招くだけだ。

「普通は男同士で卑猥な会話になるものだが、そういつた経験は？」

「ない。若飛皇子じゃくひの前で、否、稼祥かじょうの前でそういつた卑猥な会話をしてはならないという暗黙の掟がある。命が惜しいと誰一人として、そういつた話題は出さないな」

成程など、二若ふたわかは大きく頷いた。

「つまり、全然知らないって事だな」

「……疎い方だろう」

私は渋々と頷いた。

これはかなり根の深い問題だった。

昔、僅かに目を放した隙に、佑茜ゆうせんが宮を抜け出し城下の街に出て

しまった。それを追って私と玉祥もまた宮を抜けた。

あと少少で追いつくという時に、私と玉祥は変質者に遭遇してしまったのだ。身形の良い子供が余り治安のよろしくない場所をウロウロしていれば、人攫いやそういつた良からぬ輩に行き当たるのは、ある意味当然の結末といえよう。

子供二人の抵抗など大したものではなく、玉祥は私だけでもと必死になって逃がしてくれた。だがその結果、玉祥は変質者に捕らわれの身となってしまった。

一人逃げおおせた私は必死になって佑茜を探し出し、玉祥を助けてくれと泣いて縋った。

佑茜を連れて急いで玉祥の元へ戻ると、玉祥は男に手籠めにされかけていた。

それを目にした時の佑茜の怒りは凄まじいものだった。

激怒した佑茜はその男を半死半生になるまで痛めつけ、私と玉祥は怒り狂う佑茜を震えながらただ見ているしかなかった。

私達を襲おうとしたその男の行く末がどうなったのか、私は未だに聞けずにいる。その位深く激しい怒りだったのだ。

今思い返すと、武術訓練が厳しくそして防御が主体となった内容となったのは、その時からではなかっただろうか。

以来、玉祥の前で、つまり佑茜や私の前で性的な話題に触れるものは居ない。佑茜の逆鱗に触れかねないと知っているためだ。

佑茜のそれはもう徹底していて、庭園の片隅や空いている室で不埒な行動をしていると見るやいなや、即座に乱入して宮廷からたたき出してしまふ勢いだった。

玉祥が嫌な気分になる前に、その危険を徹底的に排除して回っているのだ。

しかしながら、それは玉祥のいない場所での事で、私はそれに巻き込まれ何度それを目撃する羽目になったことか。

「あのな、若飛皇子は庭園などで睦みあっている男女を見かければ、即座に乱入してそのような不届き者は宮殿から叩き出す程だ。側に

いる私が疎くなっても不思議ではないだろう」

「へえ……」

「お陰で側にいる私も睦みあっていた男女の、あられもない姿を何度も目撃する羽目になった事か」

「あられもない姿で済んでいるのか……。不思議なんだが、それでどうして睦みあうなんて言葉を知ってるんだ」

「どこでもいいだろう」

「凄く気になる」

私はため息を付いた。

「若飛皇子じゃくひ以外の宮へ侵入したことが何度かある。その際に、下働き達が口にしていた」

「それを耳にして覚えたと……道理で偏って……」

ブツブツと二若ふたわかは零し、最後の方はよく聞き取れなかった。

船を下りてから数日が経ったある日、いつも通り野営をしていると、二若ふたわかがふと顔をあげた。

厳しい顔で森の奥を睨んでいる。

「どうした」

私は同じように森へ目をやり小さな声で尋ねた。

二若ふたわかはそれに答えず、無言で火の始末を始めた。

よほど拙い事態になっているらしい。

私は肘について身を起こした。

「何が、」

「しっ」

言葉を遮り音を立てるなど目顔で知らせる。

二若ふたわかは森の一点を険しい表情で睨み据えるようにしていた。

意識は完全にそちらを向いているのに、手は荷物をまとめ撤収の準備をしていく。

荷物を何時ものように背中にくくりつけ、無言のまま身を起こしかけていた私を抱き上げた。

耳元で聞こえるか聞こえないかの声量で二若ふたわかは告げる。

「追っ手だ」

耳を済ませるが不振な物音など何も聞こえなかった。

気のせいではないのかと目線で訴える。

首を横に振りそれを否定した。

「一昨日程前からおかしな気配はしていた。気のせいかと思ったが……」

「こんなところに、どうやって……」

「判らないが、確実に近づいてきている。完全に痕跡を消したつもりだったが、見落としている点があったようだ」

抜かったなと二若ふたわかはごちている。

追っ手とは、どういうことだ。

私は死んだという事になっっているのではなかったか。

それとも、私の追っ手ではなく、コイツ自身が何者かにおわれているのか。

川沿いに行くとはいえ、私達は道なき道をかき分けて進んでいる。その後を追おうとするならば、何か目印でもなければ不可能だ。

とすると……。

私はジツトリと二若ふたわかを見上げた。

「追われているのは、お前か」

ヒソヒソと可能な限り声を潜め言葉を発した。

「おい、人聞きの悪い事を、」

「私達の後を辿っているのは、恐らく犬だ」

二若ふたわかの文句を遮り言うと、二若ふたわかは真面目な表情で私に向き合った。

「どういう事だ」

「まだ試験的な取り組みゆえ数は限られているのだが、軍内部では追跡用の犬を飼育している。その管轄が克敏皇子だ。出張ってきているのが軍となると、私を追っているとは考えにくい。お前、軍を敵にまわすような、どんなヤバイ真似をした」

たかが属国の王一人が行方不明だからと、軍が出張ってまで搜索などしない。たとえしたとしても、あの狩場を探す程度だ。こんな山中にまで足を伸ばしているはずがなかった。

私に心当たりがないとなれば、おのずと二若ふたわかが原因と考えられる。答えるときつく見据えていると二若ふたわかは視線を逸らしたが、二若ふたわかは口を閉ざして私の言葉に答えようとしなかった。

「……」

どうやら何があっても言いたくないらしい。

頑なな雰囲気から、私はそれを察した。

仕方がないと話題を変えるべく口を開いた。今ここで問い詰めるのは得策ではない。最も優先されるのはここをどう切り抜けるかだ。「私達の匂いを辿ってきているとなると、どうやって撒くかだな」

より強いにおいを発生させて犬の鼻をかく乱するか？

一時はそれで誤魔化せるかもしれないが、その後、体や衣装に付いたその強烈な匂いを目印にされる恐れもある。

手間と時間は掛かるが、一所を拠点に複数の匂いの筋を作り、どれが本物の道か判らなくするのがいいか。

犬の通れないような木の枝を伝い、撒くのがいいだろうか。

今の私の体力と残された猶予なども考慮せねばならない。

さて、どうするのが得策か。

そうやって考え込んでいると、二若は横を流れる川へと足を向けた。

「きついかもしれないが、少し我慢しろ」

意図を察し、身を強張らせた。

確かに川へ入ってしまえば、つまり水の中を通れば匂いは辿れなくなるうえに、難しい手間隙などかける必要もない。一番手っ取り早い方法といえるだろう。

だが、私は泳げないのだ。

その上、意識はハッキリしているとはいえ、毒の所為で未だ身体はあまり動かない。川に入るなど自殺行為だった。

おののく私を尻目に、二若は躊躇なく川に足を踏み入れた。ザブザブと小さな水音を立てて川の中に入っていく。

二若が進むにつれて水面はどんどんと上がり、とうとう胸の高さまでできてしまった。

二若は私を抱えていた体勢から、背負うような形へと体勢を変えた。

「首に腕を回して。そう、つかまっているんだ」

紐で胴体部分を縛って繋ぐ。

川岸を振り返りそして水の中へと潜った。

とつさに息を止めるがすぐに苦しくなってしまう。

冷たい水に力が入らず、しがみ付いている腕が離れてしまっていた。

離れかけた私の手を二若ふたわかが押さえる。

腰元でつながれた紐と、その手だけが私の命綱だった。

身体は水に流され、どちらが上でどちらが下なのかもわからない。人の手に自分の命運を託すというのは、存外に気分の良くないものだ。

二若ふたわかを信じていないわけではない。

むしろ奴以上に私を思って行動している馬鹿はいないだろうと確信できるほど、信じている。

だが、それと全てをゆだねられる事は違う。

私と二若ふたわかのように長い間離れて暮らしてきて、互いの実力を知らない間柄だと特にそうだ。

二若ふたわかが私の知識や技術を知らないように、二若ふたわかの技能や実力を知らない。当然、二若ふたわかが川の中へ足手まといをつれて入っていったら、無事わたりきることが出来るかどうかなんて、私に判断できようはずもない。

不安が心を占めた。

それに二若ふたわかは私の為になると思えば、私と三姫さんひめの為になると思えば、私達の大切にしてあるものに手をかける事を厭われない。二若ふたわかにとっては私達の意思や希望は、それ程重要な事ではないのだ。

むしろ私達自身の意思が自分を不幸へと追いやっている、そう考えている節がある。私達の政に対する姿勢への言動から、そういった思惑が透けて見えた。

王として、王族としての、私達の譲れない理念も何もかも、二若ふたわかにとつては邪魔物ではないのだ。

私達へ危害を加えることはない。だが、その信念の違いの所為で、私は二若ふたわかを信じ切る事が出来なかった。

## 七十四

水の中を二若は進んでいく。

体に掛かる水の流れというものを私ははじめて感じた。

それは緩やかな圧力であつたり、痛みを感じるほどの暴力的な力であつたりした。

二若の邪魔にならないよう身動きしないでしがみ付いているだけの私には、上下も前に進めているのかさえも定かではなかった。

水の圧力に身に付けている衣服が引つ張らたりもして、引つ張られていない時も体にまとわり付く布地はまるで拘束具のようで、体の動きを阻害する。よくこの中で足手纏いを連れて動けるものだと感嘆の思いを抱いていた。

二若に背負われるような形でしがみ付いているだけだが、たつたそれだけの事が酷く難しかった。互いを結ぶ細い腰紐が、私のたった一つの命綱だ。

もし泳げたとしても、私には二若と同じことは決して出来ないだろう。私達の間にある基本的な身体能力の差は、歴然としていた。

武を磨き、王としてまた佑茜の副官として一軍を率いて戦場に立ち、いっばしの高位武官であると自負してきた。だがどこまでいってもどれほど努力しても、私の力など偽物でしかないのだと、本物の力には生まれ付いての男には敵わないのだと、理性では判っていても現実として突きつけられると酷く悔しいものだった。

時折水面から顔が出るので、その都度貪るように息を吸い、再び潜水を始める気配に息を止めてと、それをどれほど繰り返しただろうか。

長く水の中にいた所為で体から体温が奪われたのか、足先や指先の感覚が不確かなものになり、水面から顔を出しても満足に息継ぎが出来なくなりはじめていた。

私が苦しいように、二若の負担はそれ以上だろう。



必死になつて耐えていたが上手く息が出来ず、息苦しさは殆ど限界に近づいていた。

脳裏に死という言葉が過ぎる。

私にとつて水中を行くというのは未知の領域だ。

息が出来なければ人は死ぬ。水を大量に飲んで命を落とせば即ち水死だ。

川遊びで流され死んだ子供の遺体、川で殺害された被害者の遺体、今まで私は水死した者達の死体を何体も目にしてきた。

どの遺体も体が白く膨張し、川底の岩などで打ち付けたのが酷く痛んでいた。

骨や内臓まで露出している遺体も珍しくなく、直視に耐えない惨たらしさがあった。

私もそんな水死体の仲間入りをしてしまうのかと、恐怖が胸中を占めた。

胸の中にある恐怖を明確に自覚すると、更に息苦しさは増していった。恐怖によって体に不要な力が入り、息継ぎが更に難しくなつてしまったのだと思う。

必死になつて息を止めていたが、とうとう苦しさに耐え切れなくなり、口の中にあつた空気を吐いてしまった。

その反動で水をしたたかに飲み込んだ。

普通なら入ることのない気管へ水が入り込み、咽返る事でゴボゴボと肺の中に残っていた空気が抜けていった。それに比して水がとめどなく流れ込んでくる。

二若ふたわかの首元に回ししがみ付いていた腕を外し、口元を押えるが手遅れだった。

意識が遠のいていき、もう駄目かと思つたその時、音を立てて顔が水中から出た。

口の中にあつた水を吐き出し、大きく口を開け空気を吸い込もうと努力するが、胸中をかなりの割合で水が満たしていて、上手く息をする事が出来なかつた。

水中にあるよりは多少意識がハッキリしていたが、指一本動かせないほど消耗していた。

二若ふたわかの首元に回っていた腕は二若ふたわかの肩から垂れ下がっているだけだ。

私の腕が滑り落ちていかないのは、未だ二若ふたわかの背にしがみ付いているような体勢でいられるのは、二若ふたわかが私の腕をつかみ支えていたからだ。

強く腕を引かれ、上半身が二若ふたわかの肩に担ぎ上げられた。

「しっかりしろ。吐けるだけ水を吐くんだ」

胃の辺りを肩で圧迫され、私の意志とは無関係に飲み込んだ水が一気に逆流した。

口といわず鼻といわず、大量の水が流れ出ていった。あまりの苦しさに生理的な涙が滲む。

ひとしきり吐き切ると息は先程までよりは遙かに楽に出来るようになった。

肩から降ろされて、二若ふたわかの腕に抱えられるような体勢になり、姿勢的にも楽になった。

腰紐があつて肩に担いだり腕に抱えたりなんて無理だろうに何故だろうと考えたら、いつの間にか腰紐は外されていた。

ぐったりと手足を投げ出し見るともなしに空を見上げれば、二若ふたわかが心配そうに私をのぞき込んでいた。何もいわずに背中をさすってくれている。

頭の中に霞が掛かったようにボンヤリとしていたが、それでも多少は現状に思いをめぐらす余裕は出てきた。

ゲホゲホと私のむせ返る音ばかりがあたりに響いていた。

他はサヤサヤとした水の流れる音だとか、虫の鳴き声が僅かに聞こえるくらいで静まり返っている。

つまり、追っ手がいるとして、ここに目標の人間がいますよと喧伝しているような物だという事だ。

「……っ」

上手く言葉にならず、もどかしげに二若ふたわかを見やる。

「大丈夫追っ手は撒いた。……少なくとも、この近くにはいない」

二若ふたわかの言葉に安堵が広がった。

よくよく見れば、川の兩岸は大きな岩がゴロゴロとしている岩場で、更にその向こうは崖のような状態だった。随分と移動していたらしい。

「悪い、無理をさせた。お前の体調がまだ万全じゃないという事が、頭から抜けていた。……ごめんな」

目を伏せ悔悟の表情で告げる二若ふたわかに、私は緩く首を振った。

足手纏いでしかない私が悪いのだ。自分で泳げれば、体調や体力が戻っていれば、このような無様な結果にはならなかった。

そういいたかったが口を利ける状態ではなかった。

二若ふたわかの手が上がり、そつと目元を覆った。

「眠れ。無理をして意識を保っていなくてもいい。場所柄的に暫くは川からは上がれないが、ここからは川の中を潜って行くこともない。俺に任せてお前は安心して眠れ」

## 七十五

ガサガサと下生えを掻き分け近づいて来る気配に、條は顔を上げて目を向けた。

耀はその視線に応え、片手を上げ合図をした。

かがみこんだ体勢であった條は体を起こし、大きく伸びをした。ずっと腰を曲げた姿勢でいたため、体の節々が痛み條は顔を顰めた。

耀が側まで来るのを待ち、條は口を開いた。

「宮の様子は？ 佑茜様はどうしている？」

「若様が討たれたというのに、静かなものだ。朱晋を捕縛処刑することでお茶を濁すつもりだろう」

「主君殺しの汚名を着せて、全ての責は朱晋に押し付けるといふ事か。間違っちゃいないが、ウチの反発など痛くも痒くもないという態度が透けて見える」

「そうなるよう、若様があらかじめ準備していたのだろう」

條は耀の言葉に頷いた。

「最近の若様の動きを思い返せば、そうだろうな。崖から転落したのもわざとならば、無事でいてくださると思うが……。もし何らかの思惑あって姿を隠されたならば、何かしら俺達に指示を残されると思うと、な」

條は横手を向き、ここにはない景色を見据えるかのように、遠い眼差しとなった。

「あの崖から転落されたのでは、若様とて無事ではすまない。早く見つけて差し上げねば」

條の言葉に、主が転落した険しく高い崖を脳裏に描き、耀は力強く頷いた。

「そうだ。なんとしても、佑茜様よりも早く発見し、そして隠匿しなければならぬ」

「やっぱり何かしているのか？」

意外さは欠片も見せず、條は顔をしかめた。それに淡々と感情の籠らない声音で答える。

「官吏達に言わせると、腹心の部下を亡くした苛立ち解消に、狩で憂さを晴らしているそうだ」

「つまり、佑茜さまも若様を搜索していると、そういう事か」  
條の出した結論に耀は頷いた。

「しかも克敏様の下で飼育されている軍用犬を数頭強奪してまでだ。真祥殿をどこぞへ派遣して、なにやら色々動かれている。急がねば不味い」

「そのこと、伶にはもう言ったのか？」

「ここへ来る前に寄って、先に話して来た。佑茜様の動きもあるし、姫様にご報告し対策を取って頂く為に、伶は国に急ぎ戻る事になった」

「そうだな。事が事だから報告を他の人間に任せることは出来ないし、そういうのは伶が一番適している」

「伶が戻ってくるまでに収束させられればいいが……」  
ため息交じりの耀の言葉に條は苦笑した。

## 七十六

顔に光が差し、閉じた目蓋の上からも眩しさを覚え、意識が揺り動かされた。

眩しさに煩わしさを感じ、半ば無意識で腕を上げそれを遮る。

常ならなんとも思わないその行動に、思わぬ痛みが走りまどろみの中にあつた意識が急激に覚醒した。

身じろぐと、体の節々が痛む。

痛みはあつても動けなくは無いが、無視できるほど小さな痛みでもなかつた。

閉ざされていた目を開き、眩しさに目を細めた。

ハッキリとしない視界の中、目の前にかざした腕が目に入った。

腕には真つ白な包帯が巻かれており、これが最初に感じた痛みの原因かと思いつた。

明るさに目が慣れてくると、周りの様子がわかるようになった。

街や村にあるような集会所のような場所で、雨風は凌げるがそれだけといった板間の部屋に私は寝かされていた。

家具らしい家具は無く、床の上にじかに寝具が敷かれ、そこに横たわっているようだ。

側面すべてが開放可能な引き戸のような造りとなっていて、その内の一箇所だけ僅かに開いて、そこから光が差し込んでいた。

差し込んでいる光がちょうど私の顔に掛かるようになっていて、それが原因で眩しさを覚えたらしい。

室内はもとより、部屋の外にも人の気配は無かつた。

さわさわとした木々のせせらぎや、鳥の高い鳴き声が時折聞こえてくるくらいで静まり返っている。

建物がある事を思えば無人とは思えないから、建物から離れれば人は居るのだろうが、建物すぐ側には人は居そうにない。

寝具の上で体を起こすと、体の節々が痛みという悲鳴を上げたが、

他は何の問題もなく動いた。

特に背中が痛んだが、これは薄い寝具と固い床のせいであらう。体が強張っているためだろう。

他はどうなっているのかと全身を検分した。怪我は多かったが、その全てが適切な治療を施されているようだった。

しかも怪我といっても軽い打ち身擦り傷といった程度で、数は多くて全身に酷い痛みがあるような錯覚を起こさせるが、怪我の規模としては全く大したことはない。

倦怠感が残っているくらいで毒の影響もほぼ消えている。

私は自分の状態と周りの様子をそう見て取った。

一通りの確認が終わり、二若はどこに居るのかと考えた。

この場所に運び入れて手当てを施したのは奴であろう。私には見覚えのない場所ではあるが、こうして休んでいられるという事は危険の無い、もしくは危険の少ない所であるという事だ。

だから姿が見えずとも心配はしていなかったが、アレから一体何があつたのか話を聞きたかつた。

このままここで二若が戻ってくるのを待つか、ここから出て誰かを捕まえて聞くか、どうするべきだろうか。

私の置かれた状況が分からない上に、外に居る者達に私の存在を知らされていない可能性も考えれば、大人しく待つ方が無難であると理解していたが、外に出てみたいという誘惑は強かつた。

大人しく待つか、外に出て探るか結論が出る前に、思考が中断させられた。

キシ、キシという微かに床の軋む音がかなり近い場所から聞こえてきたのだ。

密やかなその物音は確実にすぐ側まで近づいてきている。問題はその足音がかなり近くで発生するまで、その人物の気配に気付かなかつたという事にある。

どこぞの暗殺者や密偵張りの隠密ぶりに、不審を覚え身構えたのだ。

隙間が開いている引き戸までやってくると、足音は止まった。

引き戸の立て付けは良いようにも見えないが、隙間の開いていたその戸は音も無く引きあけられた。

緊張して見つめる先に、ヒョイと二若ふたわかが姿を見せた。

「なんだ、起きていたのか」

ノホホンとしたその言いように、私は瞬間的にとても腹がたつた。「何だとはなんだ。くたばっていて欲しかったか？」

「何でいきなり不機嫌なんだ？ 一人でほったらかしにしておいたのを怒っているのか？」

「私は子供ではない。不愉快な物言いを止めよ」

「はいはい。気分はどうだ？」

「多少だるさは残っているが、吐き気も無く問題はない。……世話をかけたな」

二若ふたわかは私の言葉に肩をすくめた。

「気にするな」

「腹は減っていないか？ 体力がかなり落ちているはずだから、食べられそうなら少しでも口にしたらほうがいいんだが」

「そんな事よりも、ここがどこで、あれから何があったか、それを聞きたい」

「ここか？ ここはまだ帝国領だ。お前が気絶してから、あのまま森の中をうろつき回ってたらやばいと思って、比較的近いこの村に運んだんだ」

「まだ、と言う事は国境近くか。……となると、檜西か聞筈あたりの村か」

大よその地理などを思い出して尋ねた。

祖国の町や村の位置関係は全て把握している。自国ではなくとも関係の深い国境近辺ならば、大よそ把握していた。

どこを歩いていたのか判らないが、方向や進んだ距離なんかや、帝国領内の国境付近という条件もつければ、答えは限られてくる。

どうだ？ と見やれば、二若ふたわかは困ったように口を閉ざした。



なんだと言つのか？

「どつちだ。それともどちらでもないのか。ハッキリしないか」

「まあ、その辺だ」

「その辺？ 嫌に濁すんだな。私には言いにくい事情でも……ああ、  
そついう事が」

言いかけて気が付いた。

隣国の”王”には言いにくい事情がある。

つまり、公には伏せられている村である、と。

確かに口には出来ないだろう。

本来ならここによる予定も無かつたのではなからうか。だが、川で私が溺れかけて、治療だとか療養だとか、濡れた衣服を変える必要もあつただろう。どうしようもなくなつてこの村に助けを求めたならば私は聞くべきではない。

「判つた。これ以上、私は聞かぬ」

言えば二若ふたわかはホツとしたように笑顔を浮かべた。

「すまん。それよりも腹は減つてないか？ 体調がいいなら食事にしようぜ」

その時クルルルと私の腹が鳴つた。

二若ふたわかと顔を見合せて、苦笑してしまつた。

「……そつしよう」

敷布の上で身を起こし、ボウツと外を眺めていた。

体調はほぼ元通りだが念の為に休んでいるところとして療養している。

療養だとかは、半ばただの口実で、外部との接点を持たせないための方便だ。

ここが政府から離れた隠れ里というのならば、“私”はそれを極力知らない方が良い。

恩のある村とはいえ、必要ならば、そしてそれが有効ならば、私は村の事を躊躇なく利用するだろう。

非道なその選択をする自分を蔑みはしても、それに後悔することは無い。

私はそういう己を知っているから、二若の思惑通り知らないことを選んだ。

知らなければ、私がこの村を利用し、そして害する事はないからだ。

執政者としては間違った判断なのだろうが、それでいいと思っていた。

そこまで私は人の心を忘れて生きていくたくはない。

二若曰く、ここは私の国ではないこともその大きな理由だ。

外を出歩かず、あまり体に負担をかけないよう安静にし、手慰みな書類仕事も無く、私は時間をもてあましていた。

片付けねばならない案件、処理しなければならぬ問題、決裁しなければならぬ書類それらが何一つ無く、考えなければならぬ事案も情報不足で結論は出せないし、この余暇を利用して体を鍛えようにも安静中ではそれも無理。

睡眠を取るうにも、眠りすぎたのか一向に眠れない。

すべき事、できる事がないというのは、なんと言う苦痛だ。

いつも山積みの問題対応に文字通り寝る間も惜しんで動き続けたから、こんな時どうすればよいのかわからない。

あまりの手持ち無沙汰に苛立ちが湧き上がりそうだが、外を眺めて何とか気持ちを静めていた。

そんな私の耳にギシギシと床を踏みしめる音が届いた。

大きな音ではないがだいたい離れたところから聞こえる。当然の事だが二若の足音ではない。奴の足音は常識はずれなほど密やかで、この私でもごく近くまで近づかれないと気付けないほどだ。

二若以外のものがここにやってくるのは、私が目覚めてからは初めてのことだ。

一体何者だろうか。こんな風に存在を明らかにして近づいてきて、本職の暗殺者とは思いにくないが、油断は禁物だと気を引き締める。

服の下に隠し持っていた短刀を確認し、警戒しながら次の動きを待った。

二若を訪ねてきたのならよい。だが、今ここに居るのは私だけで、二若は不在だ。もし二若がいない時を狙ってあえてやって来たのだとしたら。

自分の体が十全ではない事を私はしっかりと認識している。体感的にはほぼ普段どおり動けそうだが、過信は禁物だ。

常の三割ほど動ければ上出来と思っておいたほうがよい。

ただでさえ私の武術の腕は頼りないのだから、可能な限り相手の油断を誘い、事を有利に運ばなければならぬ。

警戒はしていてもそれを相手に見せず、悟らせず、無害と思わせる。

情報を吐き出せるだけ出させて、そこから対応を考えるべきだろう。

待ち構える私の前に姿を見せたのは、若い娘だった。

筋肉だるまの馬鹿か、腕の足りない若造かと身構えていた私には、若い娘という意外な姿に僅かに驚いた。だが、そんな思いは胸のうちにしめ、努めてボンヤリとした眼差しを向けた。

若い娘の刺客がないわけではないし、若い娘の工作員だって少ないながらもいる。私のように女であるうと軍務についている人間だっているのだ。若い娘だからと油断してよい理由にはならない。見た目から侮りを誘引するのを思えば、慎重にして過ぎる事はない。

その娘は落ち着き無く辺りに目を彷徨させた後、戸惑ったように口を開いた。

「あの、イチは……？」

「ここには居ない」

見たままの答えを返しながらも、これが演技ならばたいしたものだと考えていた。

「そ、そうね。実は双葉さんに直接聞きたいことがあって」

「聞きたいこと？」

私は目を眇めそうになるのを取り繕った。

彼女は私の反応には気付かず、それどころか私のほうをあまり見ようとせず、言葉をつむぐ。

私の事を探りにきたのならば、反応を観察する事も込みでなければ意味が無い。何がしたいのか私には理解しがたい反応だった。

「イチと双葉さんって、どういう関係なの」

「……何だと？」

私は自分の耳で聞いた言葉が信じがたく、聞き返した。

こんな意味の無い問いは初めてで、面食らってしまったのだ。

私と二若は顔が似ている。瓜二つといっても良いほどだ。

誰が見ても血のつながりを確信するはずで、一緒にいて兄弟以外に見られたことなど未だかつて無い。

もしかや盲目なのか？

それにしても目の見えないものの動きではないような気がする。

私が不信感いっぱい注視していると、彷徨っていたその視線が定まり、私を真っ直ぐ見つめてきた。

「双葉さんは、イチのお姉さんか妹さん、ね？」

「ああ」

私が頷くと、彼女は大きく息を吸い込み、ガバツと頭を下げた。

「あたしにイチをください!!!」

突拍子も無いその台詞に、私は目が点になった。

……何だってえ？

「イチが自由を好んでいるのは知っています。一箇所に落ち着くことの出来ない人だつて。あたし、そんなイチが好きなんです。ずっとずっと、イチだけを見てきた。彼と一緒に生きて行きたいんです」「奴を好いていて、夫婦になりたい、ということか？」

脈絡の無い言葉の洪水に戸惑いつつも、娘の言葉を要約して訊ねた。

「め、夫婦だなんて……」

娘は顔を赤くして俯いた。

「どうやら違っていたらしい。さて、そうとなるとどういう意味だろうか。」

「好いているから、養子に欲しい……という意味だったか？」

何か更に意味合いがずれてしまっていると思うが、他に思い浮かばず自信なくそう訊ねた。

「えっ、違う。いえ、違わないんだけど！」

娘はしどろもどろに言葉をつむぐ。

あちこちに視線が彷徨い、手を意味も無く上下し、外部にいるものへ何らかの合図でも送っているのか？

外の気配を探るが、誰かが潜んでいる様子は無い。

私には意味がサツパリわからなかった。

「あのあの、夫婦になれば嬉しいなつていうか、そうなるのが理想なんです。でも、イチつて放浪癖があるでしょう！？ 結婚して一所に留まるなんて無理だし、自分の気持ちを抑えてまで側に留めておきたくないわ。えっと、だから、なんていえばいいんだろう」「娘は天を仰いでウンウンと唸り始めた。

「よく判らんが、奴をくれと言われてもやれぬぞ」

「あたしじゃ駄目なんですか」

天を仰いでいた顔を戻して、生真面目に問うてきた。

「私に奴の所有権はない。身内であつても本人の意思を無視して譲つてやるわけにはいくまい」

人を物のようにやり取りする輩はいるが、私はそれを嫌悪している。ましてや対象が身内となれば、認められるはずは無かつた。

「あたしのような人間は、イチの嫁とは認めてもらえないんですか」  
「……一族に嫁いでくると、そういう意味だったのか？」

「嫁ぐだなんて、そんな大それたことを望んでいるんじゃないんです。ただ、イチの家族の一人として認めて欲しいなつて、それだつて随分な事を言つていると思うし！ えつと、そう！ 何処を放浪していてもいいから、あたしがイチの帰る場所でありたいんです。いつでも帰つて来たら心から落ち着けるような、そんな場所で、…子供といつしよに待つていたいなつて」

「こ、子供!？」

「ええ。イチに子育てなんて無理だろうし、一所に落ち着いて家庭を持つなんてありえないでしょうから、あたしは一人で生んで一人で育てるつもりです。村の中にはそういう女の人は何人もいるし、あたしにだつて不可能ではないと思うんです」

最後の方は殆ど耳を素通りしていった。

ただ、この娘が二若ふたわかと恋仲にあり、そして子を持つような間柄なのだという事ぐらいしか頭に入らなかつた。

突然思いもよらない話題を持ち出され、私は言葉が無かつた。

二若ふたわかの子供。一族の血を引く子供。次代の王たる子供！ 全ての前提が根本から崩れ去つていくような衝撃だつた。

だが、それよりも何よりも、私の中では怒りが勝つていた。

怒りを抱くことこそ言いがかりのようなものであるとも理解している。それでも、どうしても膨れ上がる怒りを抑えられなかつた。

私を、私たちの国を、私と三姫さんひめを、二若ふたわかは裏切つていたので。

自由に生き、何者にも縛られず生きて行つてくれれば、それだけでよいという思いは紛れもなく本心だ。

だがそれでも、子を儲けていて何の知らせもなく、そしてそれを

隠そうという行動は裏切りとしか感じられなかった。

他の誰が裏切ろうと、二若ふたわかだけは裏切らないと思っていた。

力にたとえなれずとも、私や三姫さんひめを思っているだろうと、私たちの信賴を裏切る真似はすまいと信じていた。

私と三姫さんひめはそれがどうしても必要ならば、互いを切り捨てる事を躊躇しないし、それが自分自身であつても同じ事だ。国のためならば互いを裏切り、自分自身さえ裏切る事があると、私達は知っている。

二若ふたわかだけは国がどうなろうと私達の身を案じ、それに否を唱えてくれる。二若ふたわかだけは私達を想ってくれるのだと、たとえ側には居らずともその存在に支えられ心が救われてきたのだ。その信賴を裏切るような行いが、許せなかった。



## 七十九

バタバタと騒々しい足音を響かせて、二若が姿を見せた。

「香麗！ お前、」

香麗と呼ばれた娘はギクリと肩を揺らして二若を見上げた。

「あ、の。御免なさい。どうしても双葉さんと話がしたくて、その……」

「話は後で聞く。とりあえず、」

二若は途中で言葉を切り、身をかわした。

二若がそれまで立っていた場所を短刀が通過して、ダンツと鈍い音を立てて引き戸に突き刺さった。

香麗と二若の目が同時に私のほうへと向けられた。短刀は、私が服の下に隠し持っていたものだった。それを本気の力で投げつけたのだ。

二人が見守る中、私は敷布の上からゆらりと立ち上がった。

「ふ、双葉さん……？」

香麗の言葉を無視して私は二若に殴りかかった。

「さて！ 何を聞いたのかは知らないけど、誤解だ！」

「黙れ。我らに伏せて勝手に子を作るなど、なんて真似をした！

この愚か者が！！」

私の繰り出す拳や蹴りを避け、二若は後ずさる。

それを追いながら、戸に突き立ったままの短刀を抜いた。

短い得物というのは慣れていないが、扱えなくはない。短刀を構えて向き直れば、困惑していた二若の表情が引き締まった。

二若が構えを取るのを待たず、切りかかる。動きの鈍い私の攻撃など、奴には物の数ではないようで、あっさりと避けてしまう。

振り下ろした私の手の下をかいくぐりながら、短刀を握る手をつかみ武器を取り上げようと動く。

それは私の予想内の行動だった。

足を踏み出し二若の片足を力いっぱい踏みつけると同時に、掴まれている腕を曲げて肘で奴の鳩尾を打った。二若は慌てて私から距離をとった。

「ちよ、待て。子供って」

本気で焦った表情で問うてきた。

「言い訳など聞かぬ。その腐った根性を叩きのめしてくれ」

殺す気などはなかった。ただ、本気で痛めつけてやるつもりだった。

短刀で切りつけると見せかけて殴り飛ばし、反撃されないことをいい事に蹴りつけてと、力いっぱい暴れた。

「いきなりこんなに動いたら不味いつて！ 双葉、後でいくらでも殴られてやるから、落ち着けよ！！」

「喧しい！ 父親となったのなら、何故子供を何よりも優先しない！ 私達に構っている場合ではないだろう！！ こちらに連絡を入れないというのは、仕方がない。理解はしてやる。だが、それならばお父様が我等を導いてくださったように、お前が付きっ切りで子を導いてやらねばならないだろう！」

「だから、何なんだよ、その子供ってのは！？」

「まだ言うか！！ 裏切り者！」

流石に息が上がる。

久しぶりに体を動かしたためだ。

これ程までに鈍っているとは思わなかった。体が重くて思った動きが出来ない。

私に良い様に殴られ、そして蹴られているというのに、二若は一度も私に手をあげようとはしない。怪我をさせないように取り押さえようと手を伸ばしてくるが、それだけだ。

二若はそういう奴だと、私は知っている。知った上で攻撃しているのだ。

これだけ攻撃し続けているのに、二若は大して痛手を受けているようにはみえない。肩で息をしている私と違い、涼しい顔をしてい

る。

頑丈さも、体力も、腕力も、何もかも適わない。

同じ顔立ち、同じような体格、なのにどうしてこうも違う。

私のなりたかった姿、私の欲しかった力、それがあれば叶えられ選択する事の出来た将来があった。力がなくて、体力が足りなくて、この手のひらから零れ落ちた幾つもの命のことまで思い出してしまい、悔しくてならなかった。

そうだ。わたしは二若になりたかった。偽者などではない、本物となりたかったのだ。

息が切れて足元がふらつく。

怒りに我を忘れて、大降りを繰り返してしまったためだ。私は相手に攻撃させて、身を守りつつ相手の隙をうかがい勝利をもぎ取る。こんな風に己から攻撃を繰り返すなど、常ならばありえない行動だ。そんなことにすら気付けないなんて、どうやら私は、二若とあってから随分と気が緩んでいるようだ。安心できる相手だからと、無条件で甘えてしまっているのだ。

動きの鈍くなった私は、二若の手に捕らえられた。

短刀を持つ手を押えられて、一本ずつ指を引き剥がすようにして取り上げられてしまった。

「このっ、放せ！」

「落ち着け。また体調が悪くなるだろう」

「煩い！ 黙って殴られている！！」

「体調がよくなったら幾らでも殴られてやるから、頼むから今は落ち着いてくれ」

痲癩を起こしている子供のような私を、二若は必死に宥める。

それがまた酷く悔しくて、自分自身が情けなくなった。

「香麗が何を言ったかは知らないけど、子供なんていない。俺はお前達を裏切っただけなんかいらない。判るだろう？」

嘘を言っているかどうか、私なら”見れば”判るだろうと二若は暗に告げてきた。

そうだ。

確かに見える。

二若が今私に向けているその感情は、強いその想いは嘘をいつているような色をしていない。

目で見て確認してしまっただのだから、それは間違いがなかった。

私は暴れるのを止めた。

「香麗、お前は双葉に何を言ったんだ？」

啞然としてやり取りを見ていた香麗に、二若はそう問いかけた。

「え、と。イチが好きだって話しか……」

「本当に？」

「ええ。イチの帰る場所でありたいとは言ったけど、それだけ」

「子供の話は？」

「子供と貴方の帰りを待っていたと言ったわ」

「成程ね。……双葉、香麗は子供がいるって言ったんじゃない、

将来、”子供が出来たら”の話をしていたんだ」

「今現座、”居る”という事ではないのか？ 一緒に待っていると

言っただぞ」

私の言葉に香麗が首を振った。

「居ません！ 欲しいのは事実だけど、イチはあたしを相手にもし

てくれないし、それ以前の問題っていうか、その、全部あたしの希

望なんです」

「……そうか」

なにやら釈然としないが、私は頷いた。

香麗を連れて二若は出て行った。

そこでどういった話し合いがもたれたのか、私には知る由もないが、以降は二若の代わりに香麗が私の元に入入りする事が多くなつた。

食事を運んできたり、着替えを持ってきたり、体を拭くための湯を運んだりとまめまめしく動いてくれている。顔を出す度に村での話題を零してく。だれそれが恋仲となつている相手と派手な喧嘩をした、だれそれが収穫した作物を売りに行こうとして馬車に乗せたが、荷の重さに車軸が折れてしまったといった、たわいのない話だが、香麗が出入りするようになって、二若はあまり顔を見せなくなつた。

香麗が姿を見せる前にもどことなく忙しそうにしていたし、村で受け入れてもらう代わりに、何らかの代償を払っているのではないだろうか。

二若にこの借りはいずれ返さねばなるまい。

しかし、普通ならばこういった場合の礼といえば金銭か、地位とというのが順当なところだ。

奴が私から金を受け取って喜ぶとは到底思えない。地位など論外であろう。

となれば、他に返せるものはなんだろうか。何らかの便宜を図つてやるとしても、奴の行動範囲も知らぬではそれも難しい。

二若はあと数日で村を出ると明言している。借りの返し方などは国についてから考えると、村を出るまでの間に少しでも体力を取り戻すために大人しくしておかねばなるまい。

「ねえ、双葉さん」

香麗が奇妙な顔で声をかけてきた。

「……なんだ」

「大人しく、安静にしていた方がいいんじゃない？」

「何を言う。奴に言われた通り、大人しく、堂に、籠っておるではないか」

息継ぎの合間合間にそう答えた。

「普通は、大人しくしていると云われれば、剣を振り回したりしないものよ」

「自身を、縛る普通など、知る必要は、ない」

適度なところで動きを止め、香麗に向き直った。

「体調を崩さぬよう、加減はしておる。案ずる事はない」

「もう。イチに言うわよ」

「構わぬ。好きにせよ」

香麗はため息をついた。

「それより、何用だ？ 食事時にはまだ間があるはずだ」

「少し話がしたくて」

言い難そうに香麗は口ごもった。

私は無言で続きを促した。

「この間、イチの子が欲しいといったでしょう？」

私は頷いた。

「あの後に、イチと話し合ったの。イチはただダメだの一点張りで、ちつともあたしの話を聞いてくれない。イチに責任を押し付ける気はないって言っているのだけど、それでも首を縦に振ってくれないのよ。双葉<sup>ふたば</sup>さんはその理由を知っている？ 何であたしはダメなの？」

「私は奴の言葉が正しいと考えている」

「どうして？」

「そなたでは、奴の子は育てられぬからだ」

「そんなことはない！ 村では一人で子を産んで育てている女は何人もいるもの」

苦笑してしまった。

そついう事が言いたいのではないのだ。

「我々の一族の子は、一族にしか到底育てられぬのだ」

「……あたしに身分がないのが問題って事？」

「違う」

「嘘！ 双葉ふたばさんがすっごく高い身分の人だって事ぐらいわかる。

平民の血が混じったら困るとか思ってるんでしょ！？」

「身分の問題がないとはいわぬ。しかし、それ一点で反対などせぬ」

私は断言した。

「問題は奴の子なのだ。そなたに一族の子を理解することは出来ぬ。子を正しく導く事はできぬ。必ずもてあまし不幸な運命をたどろう。それを看過する事は出来ぬのだ」

「そんなことはないわ！」

香麗はそう反論してきた。

確かに香麗ならば母として、子を受け入れる事ができるかもしれない。

だが、周りは？

香麗が子を庇えば庇うほど母子は周囲から孤立し、そこにいられなくなるだろう。

なぜなら二若ふたわかの子は、異端の子であるからだ。

異端の存在がどれほど忌み嫌われるか、私とて知っている。

体に障害を持って生まれてきた子供、通常より知能が低い子供、見えないものを見るといふ子供。そういった異端と見做される子供達が、集落の中でどの様な扱いを受けるか、私は何度もそれを目の当たりにしてきた。

彼等は人の輪の中から弾かれ、蔑まれていた。食事を満足に与えられず、世話も焼いてもらえず、乞食の様ななりをしている子も少なくなかった。

二若ふたわかの子は、それらの子供達以上の異端の存在だ。

守るものなければどうなるかなど、火を見るより明らかだ。私達とて、父という存在と、国家という庇護がなければどの様な運命を辿っていたかわからない。

つまりはそういう事だ。国家の庇護下にないのであれば、二若ふたわかの庇護下になければ、とても育てられない。

二若ふたわかの子は隠していた思いを暴き、己では見えぬものをそこにあるかのように話し、そしてここにはない遠い出来事を見てきたように語るだろう。殆ど化け物のような力だ。何も知らない者は、その子を恐れ迫害するだろう。

そんな子でも香麗は我が子として受け入れ大切にできる可能性がある。しかしそうではない可能性も同程度以上にある。周囲は確実に受け入れないはずだ。もしかしたらその力の有用性に付き、子を道具のように扱うかもしれない。

そしていつか私や三姫さんひめとの繋がりに気づくものが出てくるかもしれない。王家の最大の秘め事が白日の下に晒されるかもしれないのだ。

「もし、奴がそなたと共に生きていくというのならば、何も言うこととはない。だがそなた一人で奴の子を育てるというのであれば、決して認める事はできない。万一そういった事態となれば、そなたから子を引き取り私が育てる」

「そんな！ 横暴だわ」

「何と言われようと、それは変えられない」

「二葉さんちよっとおかしいんじゃないの!？」

私とて、己の主張が世間的に非常識であろう事は重々認識している。それでもこれは譲ることの出来ないものなのだ。

「罵るなら幾らでも罵るがよい。それで気が済むのであれば、幾らでも甘んじよう。だが、私はこの意思を変えるつもりはない」

断言すると、今まで出た一番強い眼差しが返ってきた。

「……話にならないわ。そこまで言うのなら、理由があるんでしょ  
うね」

「ある。しかし語る事はできぬ。どうしても知りたくば、イチに直接聞くがよい。私からそなたには何一つ語らぬゆえ」

「っ、そうするわ!」



香麗は立ち上がり、荒々しい足音を立てて出いく。

途中引き戸のところで足を止めて振り返った。

「双葉さん、大人しく”安静”にしてなさいよ」

「……努力しよう。もう、あまり此処には立ち寄るな」

香麗は眉を跳ね上げた。

「迷惑ってこと？」

「違う。そなたはこの村について、私に語りすぎている。なぜ”イチ”が人を遠ざけていたか、しかと考えた事はあるか？」

「え……」

香麗は戸惑ったように見返してきた。

「私に、この村の者と接触させないためだ。この村を私から守るためだ」

こちらに体ごと向き直り、真剣な表情を向けてきた。

「この村にとつて、私は必ずしも良きものではない。無論、悪しき者となりたいと願っているわけではない。それでも私はそれが必要となれば、その選択を排除することはない。この村をしかと知らねば、私が村に対して悪しき存在になりようもなかるう？ だからこそ、イチは私にこの村を見せないようにしていたのだ。だから私にあまり構ってくれるな。私に、この村の事を教えてくれるな」

「……。いいえ。関わる事は止めないわ。だって知ってもらわないと、双葉さんを知らないで、何も始まらないでしょう？」

「私がこの村に災いを招いたらどうするつもりだ」

香麗は笑顔を浮かべた。

「本当に悪いものを招き寄せるような人はね、そんな事をわざわざ口にしたりはしないものよ。双葉さんがそんな事をするはずがないわ」

「だから、」

「仮にそうだったとしても、それは双葉さんにとつてもどうしようもない場面だったって事よ。あたし達が何をどうあがいても同じでしょう。だからいいのよ」

そんな簡単な話ではないと、口をついて出そうになった。  
答えない私に笑いかけて、香麗は今度こそ立ち去っていった。

薄暗闇の中、香麗が食事を手にやってきた。

「夕餉には少しばかり早くないか？」

「ええ。今晚は火を使えないから、早めに用意することになったのよ」

私は最初、何らかの儀式があるのだろうと考えた。

火を使わないというのはあまり聞いた事はないが、地域地域で様々な仕来りなどがあり、そういったものの一種なのだと判断したためだ。

「判った。灯りも付けてはならないのか」

「不便だと思うけど、我慢してね。万一灯りを見つけられたら危険だから」

……灯りを見られたら、危険？

つまり、何らかの理由で敵対している相手があり、それらから身を隠すために、灯りを付けない＝火を使えないということか。

「その話、詳しく聞かせてもらいたい」

香麗は戸惑いつつも、私の求めに応じて話し始めた。

彼女の話しぶりは、順を追って理路整然とは行かなかつたのだが、適宜質問しつつ大よその事を聞き終えた。香麗自身の私情や根拠の無い推論なども含まれていて、全体を把握するのに手間取ってしまった。

要約すると、村のありようについて問題が出ている、という事だ。私が睨んだとおり、この村は隠れ里といったものであった。いわばこの村が小さな国なのだ。村人達は共同体を構成して、互いに金を出し合い村のためにそれを使っている。

通常ならば役人がいて、彼等が税を集め王がそれをどの様に采配するか決めるのだが、この村から国に税を納めていない。そのため国から目を付けられている。

村の中だけで完結していて、他と接点がなければ国も気付かなかつただろうし、大目に見てもらえたかもしれない。

だが近隣の村と農作物を売買したり、それなりに経済活動を行っている。すると当然国も村の存在に気がつく。

近隣の村も税を納めていないこの村の人々に対して、良い目を向ける事はなからう。

ある意味当然の帰結だ。

しかしながら、今までは村の所在地が不明なために、強硬な手段に出られたことはなかったらしい。

村の場所を探るためと、村人を捕縛するために中規模な行軍が行われる事となった。

その対応のために、二若は忙しくしていたらしい。

といつても、各種罫を仕掛けたり、雑用のようなものであったそうだが。

そして今夜、その行軍が実行される。

事前の策が走行して、軍が人員を配置させている場所は、村からだいぶ離れた場所であるそうだ。

男衆は迎え撃つために村を出払っており、残っているのは女子供ばかりである。万一を考えて、火を使わないようにしている。灯りから場所を割り出されないためだそうだ。

聴き終えて私は真つ先に罫だろうと、そう考えた。

二若を偵察などに使えば直ぐにでも判りそうなものだが、奴が受け持っていたのは雑用だ。相手側とある程度接触していなければ、例え二若とて気づく事はあるまい。

香麗の知らない事情や、直接見聞きしているわけでもない私の判断だから、間違っている可能性はある。

だが、どう考えてもおかしい。

村の場所がわからないから、と香麗は言うが、私ならば密偵を使い、確実に村の場所を把握してから行動に移す。

このような案件の場合、あやふやな情報だけで軍を動かしたりな

どしない。

ならば、なぜあさつての場所に軍を展開させるのか。

答えは一つしかない。軍隊が囿である問い事だ。

村の中の厄介な相手を引き付けておき、その間に抵抗する術のない女子供を拘束して、それを人質として男衆の投降を促す。

おそらく作戦としてはそんな所だろう。

単純な作だが、効果的だ。特に軍を囿に使うなど、それが取りうる手段の一つとわかっていても、費用面や村を襲う本隊へ割り振る人員に限られるという欠点から、二の足を踏む方法でもある。

私の記憶では、この地方を統括する役人は、あまり有能ではない。こういった大胆な策を取りそうにない人物だが、配下にそれを現できる人物がいるのかもしれない。

逆に私の考えすぎで、香麗の言う通りなのかもしれない。

もし私の考えが正しいのならば、何か対策を講じておかねばなるまい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0639k/>

---

偽りの王

2011年12月11日10時47分発行